

にゅう た ぱる
新 田 原 遺 跡

せ と ぐち
瀬 戸 口 遺 跡

くら ぞの
藏園地下式横穴墓

1986. 3

新富町教育委員会

序

この度、新富町では、これまでに町内で発掘調査された遺跡の調査報告書をまとめることになりました。

これら遺跡の中には、旧石器時代から縄文時代早期に亘る集石遺構の発見された瀬戸口遺跡をはじめ、弥生時代後期の集落跡である新田原遺跡や古墳時代の墓制の一つである地下式横穴墓がはじめて一ヶ瀬川を越えることが確認された蔵園遺跡があり、各々に学術的に貴重な資料を得ることが出来、あわせて私ども町民にとりましても遠く先人の生活や文化をうかがいしる貴重な資料を得ることになりました。

これもひとえに厳寒の中、調査に従事されました作業員の方々及び調査員の諸先生方のお骨折と、県教育庁文化課の御指導、調査の機会をいただきました畠地所有者の方々の御理解と御協力のたまものと深謝する次第であります。

この報告書が広く、学術の参考資料となり、文化財保護の一助となれば幸いです。

昭和61年3月

新富町教育委員会

教育長 小田幸一

目 次

- | | |
|-------------------|-----------|
| 1 . 新田原遺跡..... | 1 ~ 116 |
| 2 . 瀬戸口遺跡..... | 121 ~ 200 |
| 3 . 蔵園地下式横穴墓..... | 201 ~ 205 |



新 田 原 遺 跡

例　　言

1. 本報告は、木村喜一・増永美義・国田実氏所有畠地土壤転換工事に伴う事前調査の報告書である。
2. 本遺跡は、「新富町の埋蔵文化財—遺跡詳細分布調査報告書」(1982 新富町教育委員会)では、新田原A遺跡（遺跡番号1008）として登録されているが、本報告にさいして、新田原遺跡と改めた。
3. 遺物の整理は有田辰美・石川悦雄が担当し、金丸琴路・菊野悦子・清水玲子・日野美智子・藤丸美代子・増田恵子・溝口フサ子・渡辺祥子が援助した。
4. 遺物の実測は石川の他、荒武望恵・金丸・竹島典江・日野・増田が行ない、石器の実測には荒木慶子があたった。遺溝のトレスは石川が担当し、遺物のトレスは荒木・田原・日野・増田・石川が行った。写真撮影・焼付は石川が行った。
5. 本書の執筆は、第1章を松原富美彦が行い、その他を石川が担当した。編集は石川が行った。
6. 本書で使用した方位は磁北で、レベルは海拔高であるが、一部調査の不手際により、仮Oを使用した。
7. 出土した遺物は新富町教育委員会で保管している。
8. 本報告書が刊行されるにあたっては、県文化課・埋蔵文化財センターの諸氏に多大の援助をいただいた。

目 次

第1章 発掘の経緯

(1) 経 緯.....	1
(2) 調査体制.....	1

第2章 環 境

(1) 地理的環境.....	2
(2) 歴史的環境.....	2

第3章 遺 構

(1) 遺構の概要.....	5
(2) 住居址.....	5
(3) 土 壤（貯藏穴）.....	23

第4章 遺 物

(1) 土 器.....	27
(2) 石 器.....	70

第5章 考 察

.....	71
-------	----

挿図目次

第2章 環 境	
第1図	3
第3章 遺 構	
第2図 遺構配図(1/500)	7 ~ 8
第3図 1号住居址 (1/40)	9
第4図 2号住居址 (1/50)	10
第5図 3号住居址 (1/50)	11
第6図 4号住居址 (1/80)	12
第7図 5号住居址 (1/80)	13
第8図 6号住居址 (1/80)	15
第9図 7号住居址 (1/40)	16
第10図 8号住居址 (1/40)	18
第11図 9号住居址 (1/80)	19
第12図 10号住居址 (1/80)	21
第13図 11号住居址 (1/40)	22
第14図 12号住居址 (1/40)	24
第15図 1号土壤・2号土壤 (1/30)	25
第16図 3号土壤・4号土壤 (1/30)	26
第4章 遺 物	
第17図 1号住居址出土土器 (1/4)	28
第18図 2号住居址出土土器 (1/4)	30
第19図 3号住居址出土土器 (1/4)	33
第20図 4号住居址出土土器① (1/4)	34
第21図 4号住居址出土土器② (1/4)	36
第22図 4号住居址出土土器③ (1/4)	38
第23図 4号住居址出土土器④ (1/4)	40
第24図 4号住居址出土土器⑤ (1/4)	42

第25図	4号住居址出土土器⑥(1/4)	43
	5号住居址出土土器 (1/4)	
第26図	6号住居址出土土器①(1/4)	45
第27図	6号住居址出土土器②(1/4)	47
第28図	6号住居址出土土器③(1/4)	48
第29図	6号住居址出土土器④(1/4)	50
第30図	6号住居址出土土器⑤(1/4)	52
第31図	6号住居址出土土器⑥(1/4)	54
第32図	6号住居址出土土器⑦(1/4)	56
第33図	6号住居址出土土器⑧(1/4)	58
第34図	6号住居址出土土器⑨(1/4)	60
第35図	6号住居址出土土器⑩(1/4)	62
第36図	6号住居址出土土器⑪(1/4)	64
	7号住居址出土土器 (1/4)	
	8号住居址出土土器 (1/4)	
	9号住居址出土土器 (1/4)	
第37図	9号住居址出土土器 (1/4)	66
第38図	土 壤 出土土器 (1/4)	68
第39図	石 器 (1/3, 1/2)	69
第5章 考 察		
第40図	突出壁と主柱穴の対応関係	79
第41図	中央ピットと主柱穴の位置関係	81
第42図	壁際の小ピット	82

図版目次

- 図版1 1号・2号3号住居址、3号・4号土壤
- 図版2 (1) 遺跡全景(東から)
(2) 4号・5号・6号住居址(東から)
- 図版3 (1) 4号・5号・6号住居址(西から)
(2) 4号住居址
- 図版4 4号住居址埋土層位
- 図版5 (1) 5号住居址(南東から)
(2) 6号住居址(北西から)
- 図版6 (1) 6号住居址(南東から)
(2) 6号住居址住居内土壤I(左) 土壤II(右)(北東から)
- 図版7 6号住居址埋土層位
- 図版8 (1) 6号住居址土壤I層位
(2) 7号住居址(東から)
- 図版9 (1) 7号住居址壁際ピット(北から)
(2) 9号住居址(西から)
- 図版10 (1) 9号住居址“花弁部”
(2) 10号住居址(東から)
- 図版11 (1) 11号住居址(北から)
(2) 12号住居址(東から)
- 図版12 1号・2号住居址出土土器
- 図版13 (1) 2号住居址出土土器
(2) 3号住居址出土土器
- 図版14 3号・4号住居址出土土器
- 図版15 4号住居址出土土器
- 図版16 4号住居址出土土器
- 図版17 4号住居址出土土器
- 図版18 4号・5号住居址出土土器

- 図版19 6号住居址出土土器
- 図版20 6号住居址出土土器
- 図版21 6号住居址出土土器
- 図版22 6号住居址出土土器
- 図版23 6号住居址出土土器
- 図版24 6号住居址出土土器
- 図版25 6号住居址出土土器
- 図版26 6号住居址出土土器
- 図版27 6号住居址出土土器
- 図版28 6号住居址出土土器
- 図版29 7号・8号・9号住居址出土土器
- 図版30 9号住居址・1号・3号土壤出土土器
- 図版31 4号土壤出土土器、磨製石鎌・打製石鎌・台石
- 図版32 磨製石斧、4号・5号・6号住居址出土フレイク・チップ

第1章 発掘の経緯

1. 経緯

1981年11月、病害虫等による作物障害を防止するため、重機を使用した土壤転換工事を行なっていた畑地所有者木村喜一氏より土器発見の届出が町教育委員会に行なわれた。町教委による現地確認により多数の土器片および住居址状遺溝が確認され、ただちに工事中止を要請し、県教育委員会に報告した。それをうけた県文化課では、岩永哲夫氏を現地に派遣し、その結果、発掘調査が必要と判断されたので、1981年12月7日から12月25日まで、第1次調査を実施した。さらに、隣接した増永美義・国田実両氏所有の畑地においても土壤改良工事を予定されていたため、遺物の散布状況を調査した結果、同様に多数の土器片を採集したため、1982年2月1日から3月31日まで第2次調査を、1983年1月31日から2月25日まで第3次調査を実施した。

2. 調査体制

調査主体	新富町教育委員会	
事務局	教育長	高松昌波
	社会教育課長	新名正坦
"	課長補佐	山本繁幸
文化財係	松原富美彦	
調査員(1次調査)	有田辰美 (現新富町社会教育課)	
(2次・3次調査)	山中悦雄	(県文化課・総合博物館)
(3次調査)	面高哲郎 (県文化課)	

発掘調査にあたっては、主に遺構の実測に、以下の諸氏の援助をうけた。

桑畠亮・高橋加奈子(現姓永友)・日野美智子・藤丸美代子・増田恵子・渡辺祥子 又、県文化課の諸氏にも協力いただいた。

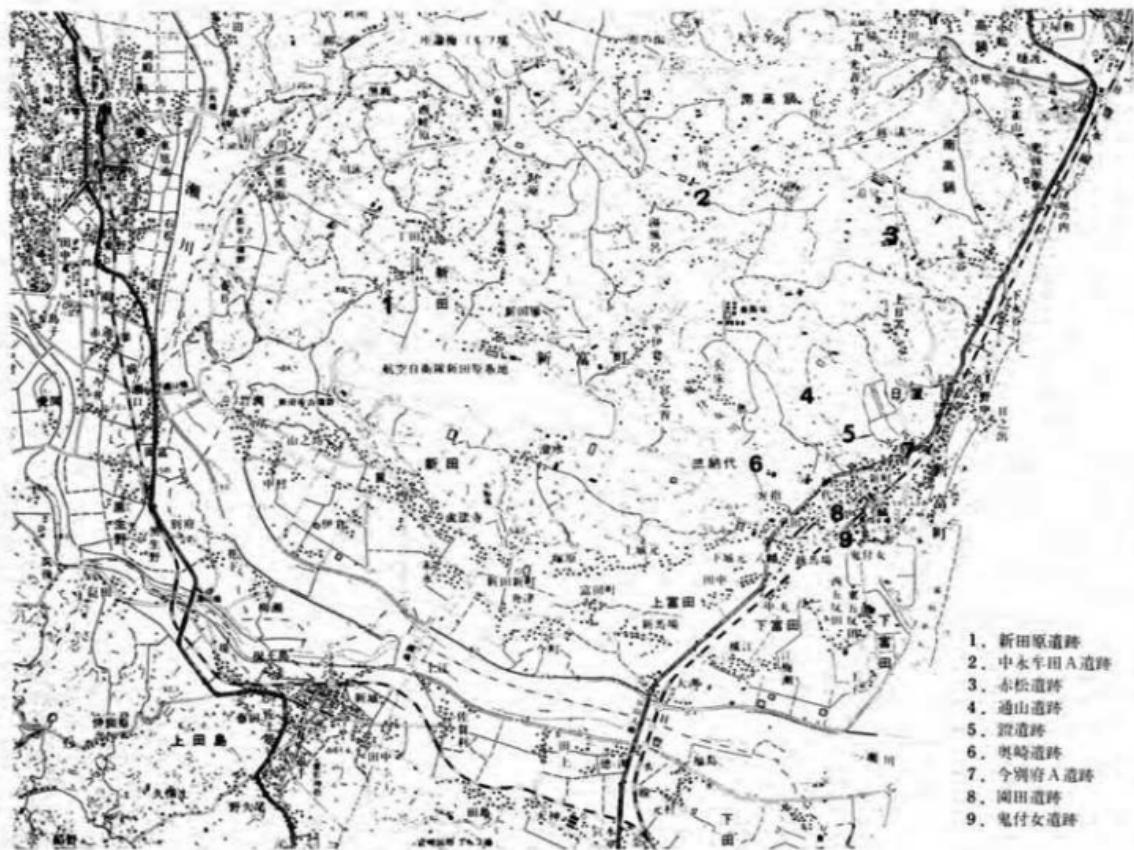
第2章 環 境

1. 地理的環境（第1図）

新田原遺跡は新富町大字新田字新田原にある。流路は短かいが宮崎県屈指の大河、一つ瀬川が大きく湾曲して東へとその流れを変える地点の東、標高70~75mの台地縁辺上に立地している。遺跡は畠地となっており、東側には航空自衛隊新田原基地が広がっている。ここは、宮崎平野の地形区分では新田原面にあたり、遺跡付近では大小の開析谷が刻まれて、台地を断片化しつつある。遺跡の西端はすぐに、一つ瀬川に合流する藤山川が刻んだ大きな開析谷に面している。遺跡と基地のあいだにも、そこから派生した浅い小開析谷がのび、新田原A遺跡付近は開析谷にかこまれて、あたかも、主台地から切りはなされた、小台地の状況を呈している。この小開析谷には、台地上にはまれな水田が經營されている。

2. 歴史的環境（第1図）

新富町周辺の歴史的解明は、弥生時代に限らず遅れている。現在その端緒についたばかりである。とほしい弥生時代資料から、不充分ながら、弥生時代の歴史的環境を略述してみよう。新富町の弥生時代は海から始まっている。知られている唯一の弥生前期資料は、今別府A遺跡出土の板付式壺2個体で、県内の弥生土器のうちでも最古の部類に属している。この遺跡は宮崎市の椎遺跡と同様に第四砂丘列上に立地し、おそらく、後背湿地をその經營の源としていたことだろう。中期には、鎧遺跡が知られている。今別府遺跡の西およそ600m、標高58mの台地縁辺上に立地し、竪穴住居址2軒、V字溝などが調査され、中期前半に比定される。鎧遺跡の北西およそ700mの台地縁辺に、ほぼ同時期の土器が採集された通山遺跡がある。前期後半から中期前半の時期に、海岸寄りで、沖積地に面した台地縁辺上に小集落が営なまれる現象は、高鍋町持田中尾遺跡にもその例が知られているが、この現象は2つの解釈が可能である。1つは、前期末から中期にかけて、沖積地の開発が一段落し、台地縁辺部にも開発の手がのびるようになったと解釈することで、これは、砂丘上あるいは沖積地で、中期中葉から後期まで、連続と集落が維持されていることを考えれば、きわめてまともな解釈で



第1図 弥生時代遺跡分布図（1/7万）

1. 新田原道跡
2. 中水车田 A 道跡
3. 赤松道跡
4. 通山道跡
5. 游道跡
6. 奥崎道跡
7. 今別府 A 道跡
8. 闇田道跡
9. 鬼付女道跡

ある。もう一つは、沖積地に、前期末から中期前半の遺跡が、現時点では希薄であること、さらに、台地縁辺上の集落にはV字溝が存在することに注目し、沖積地の集團が一時的に台地にあがり、何らかの緊張に対処したとする考えである。いわば中期緊張説で、V字溝の存在を重視すれば、きわめて魅力的であるが、V字溝で集落を守らねばならない“敵”的性格も含めて、今後とも検討の余地があろう。中期の中葉から後葉になると、沖積地では砂丘上に、園田、鬼付女の両遺跡が知られている。ここは、今別府遺跡からおよそ1,500m南の砂丘上で、この一帯の砂丘上には前期から、地点はちがえ、継続して集落がいとなまれたことがうかがい知れる。後期にはいると、台地上には、中永牟田A遺跡などが知られている。この時期の遺跡は、中期の台地上のそれよりは、内陸部にはいるのが特徴で、開発がさらに台地の奥にまで進んだことを示している。後期以降、台地上の遺跡の展開はまさに爆発的であるが、その内容を検討すれば、集落の継続期間が、せいぜい土器型式で1~2型式と短かく、住居址等の切り合いもほとんどなく、良くいえば、土地に執着心がない。台地上の生産性が低劣で集落の維持が非常に困難であったのか、あるいは、経営基盤が以然台地下の低地であり、台地上に執着心をもやす必要がなかったのか、その解釈は多様であるが、新田原遺跡はまさにこのような状況のもとに営なまれた。

註

1. 新富町教育委員会 「新富町の埋蔵文化財—遺跡詳細分布調査報告書」 1982
2. 石川悦雄 「宮崎平野における弥生土器編年試案—素描(Mr. II)」
『宮崎考古』 1983
3. 森貞次郎 「10 宮崎県 檀遺跡」『日本農耕文化の生成』 1961
4. 新富町教育委員会 「鎧遺跡—新富町文化財調査報告書第2集」 1983
5. 註1に同じ
6. 高鍋町教育委員会 「持田中尾遺跡発掘調査概要報告書」 1982
7. 註1に同じ
8. 註1に同じ
9. 註1に同じ

第3章 遺構

(1) 遺構の概要 (第2図)

第1次調査で3軒の住居址と4つの土壙(貯蔵穴)、第2次調査で3軒の住居址、第3次調査では6軒の住居址が検出された。12軒の住居址と4つの土壙は、発堀した限りでは1～6号住居址と1～4号土壙からなる南西のグループと7～12号住居址から構成されるグループの2地区に別れている。

(2) 住居址

1号住居址 (第3図、図版1)

1号住居址は $3.5 \times 3.8\text{m}$ の隅丸方形住居址で、2つの柱穴を持つ。遺構の深さは検出面から、北側ではおよそ20cmだが、住居址のはば中央から南にかけては40cmほどと一段おちている。住居址北東隅から下城式甕が、底部を欠くかほぼ一個体分出土した。その他、中央から南にかけて土器片が集中していた。

2号住居址 (第4図、図版1)

2号住居址は $4.5 \times 5.5\text{m}$ の方形住居址で南に長さ1m20cm、幅50cm程の張り出し部がある。長軸方向に2つの柱穴をもつ。柱穴の間隔は2m30cmである。住居址の深さは30cmほどでほとんど平坦である。

3号住居址 (第5図、図版1)

3号住居址は西端にある $5\text{m} \times 5\text{m} 70\text{cm}$ の規模の方形住居址で、北辺のはば中央に長さ、幅とも60cmほどの突出部が内側にむかってのびている。検出面から床面までの深さはおよそ50cmあるが、中央部はゆるやかに深くなっている。北辺の西半分は削平されている。遺物はほぼ全面から出土するがまとまったものは無い。土器の外には床面から磨製石器やチップなどが出土している。

4号住居址（第6図、図版2・3・4）

4号住居址は、発堀区の南西端にある最大径9m40cmを計る大型の円形住居址で、その南端は牧草地として削平されている。深さは検出面から50~60cmあり、中央に向かってゆるやかに深くなる。埋土は9層に分層される。第1層は黒褐色の耕作土、第2層は淡黒褐色土、3層は黒褐色土、4層は黑色土、5層は褐色土、6層は黒褐色土、7層は6層に赤ホヤ細粒が混じる。この6層と7層に大部分の土器が含まれていた。8層は5層よりは暗い褐色土、9層は褐色土に黄褐色ブロックが混じる土で貼床と考えられる層である。9層下に住居址を堀込んだ黄褐色土層がある。住居址の西から北にかけて約4分の1ほどの範囲に幅およそ80cmのベッド状造構が巡る。また、北から東にかけての壁際にはほぼ2m40cmの間隔で幅70cmから1m、長さ1m20cmから1m80cm、高さ20cm程の高まり3本が、壁から内側に向かって突き出している。柱穴は14本あるが、P1・P2、P3・P4、P5・P6、P7・P8、P9・P10はそれぞれどちらかが建て替えられた時の柱穴と考えられるので主柱穴は7本である。また、浅い中央ピットの東端に2本(P13・P14)の柱穴が認められる。これらの柱穴は70cm程の深さがある。P1~P6は3本の突出部と対応関係にある。遺物は主に6層と床面直上の7層から出土した。両者の土器に時期差は認められない。注意すべきものに、T字に肥厚した口縁部に凹線を施した瀬戸内系土器と、7層及び9層から出土した磨製石器を作ったとみられるフレイクとチップがある。

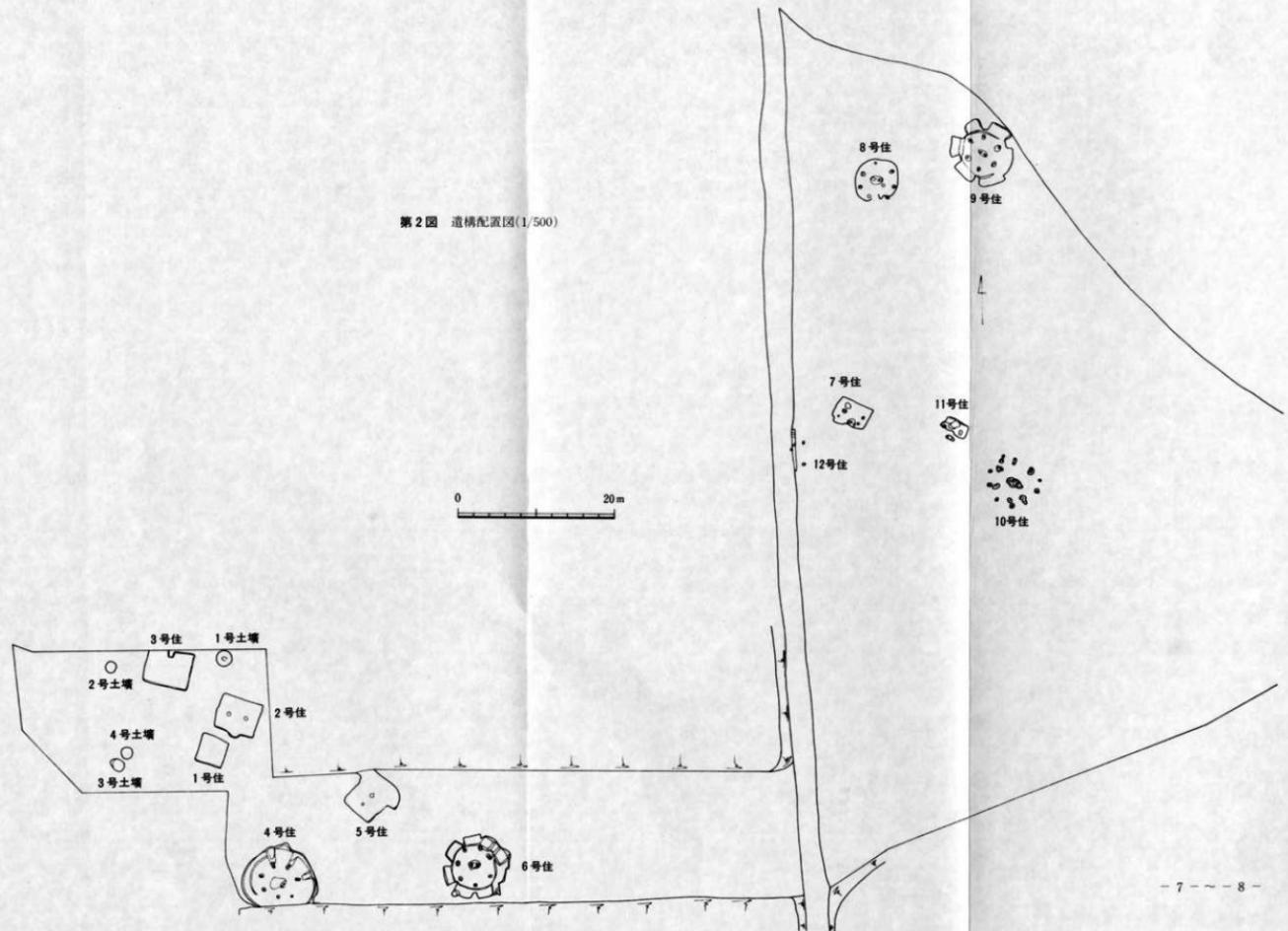
5号住居址（第7図、図版2・3・5）

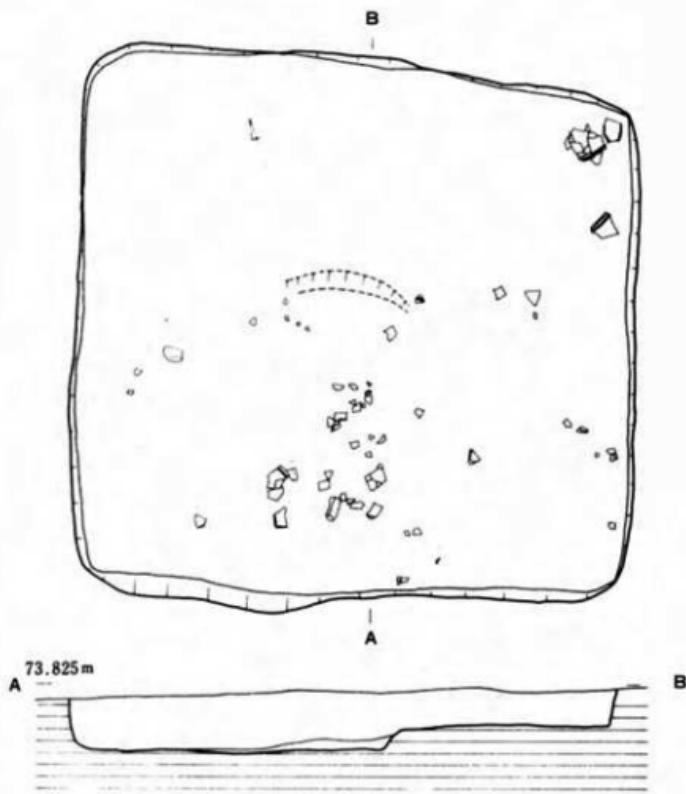
5号住居址は4号住居址の北東9mの位置にある変形の住居址で長軸方向に長さ5m60cm、短軸方向に4m40cmの大きさをもつ。南半は隅丸方形を呈しているが北半は両側に1mほどの袖状の突出部がある。北西の突出部は削平されている。検出面から床面までの深さはおよそ20cm。埋土はほぼ淡黒褐色の單一層で、部分的に赤ホヤが混じる。柱穴は2本、長軸方向に並ぶ。遺物の出土量は少ないが、磨製石器のチップが、数は少ないものの床面全体に散らばっていたほか、敲打状態のまま捨てられた磨製石斧の未製破損品が1点と下城式甕など若干の土器片が床面から出土した。

6号住居址（第8図、図版2・3・5・6・7・8）

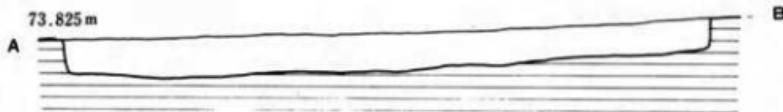
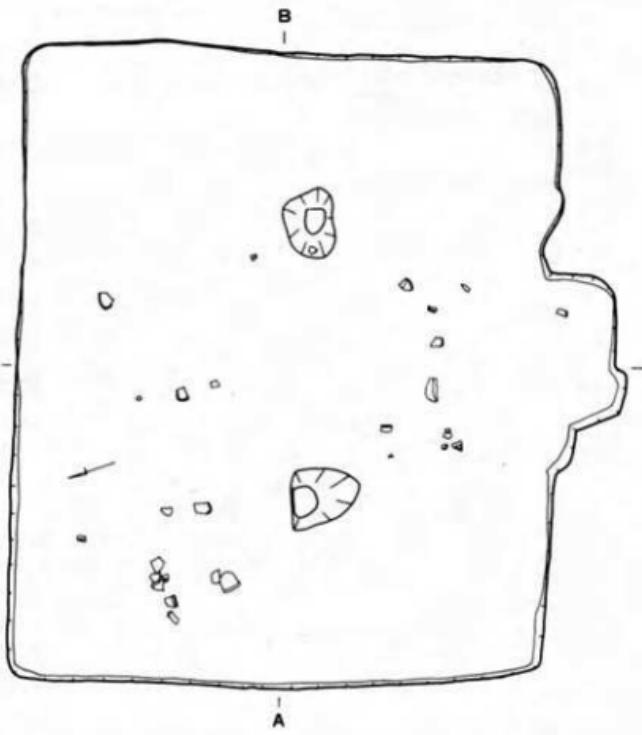
6号住居址は5号住居址の南東約8mの位置にある。検出面での形状が複雑に入り組んでいたため、突出部それぞれに土層を残し観察したが切り合いがなく、“花弁状住居址”であ

第2図 造構配図(1/500)

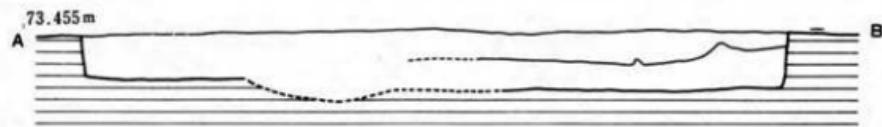
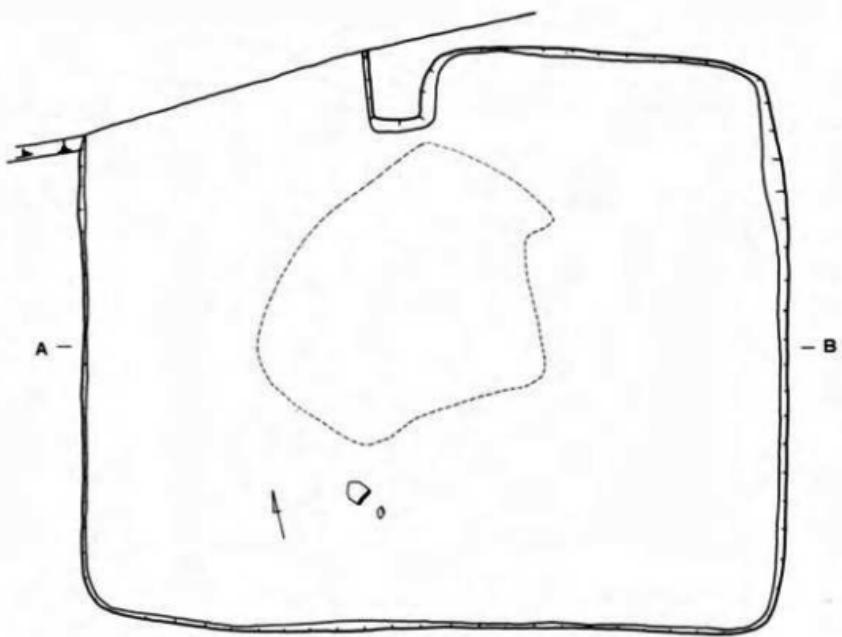




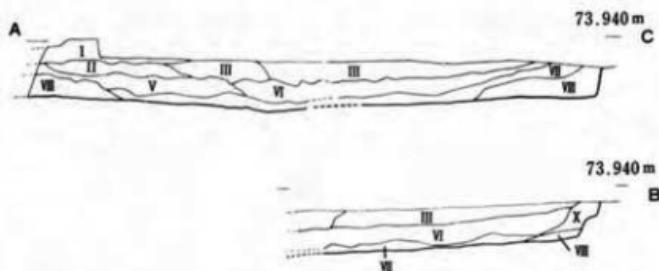
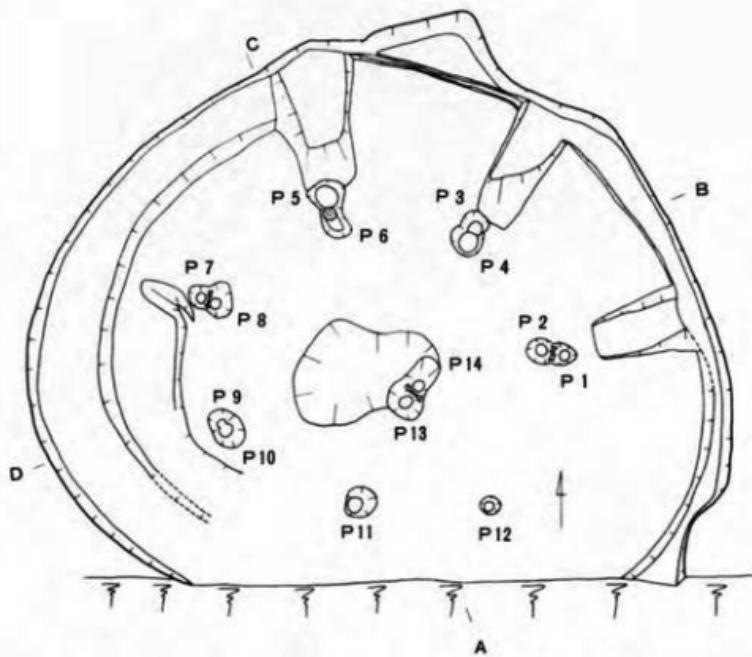
第3図 1号住居址(1/40)



第4図 2号住居址(1/50)



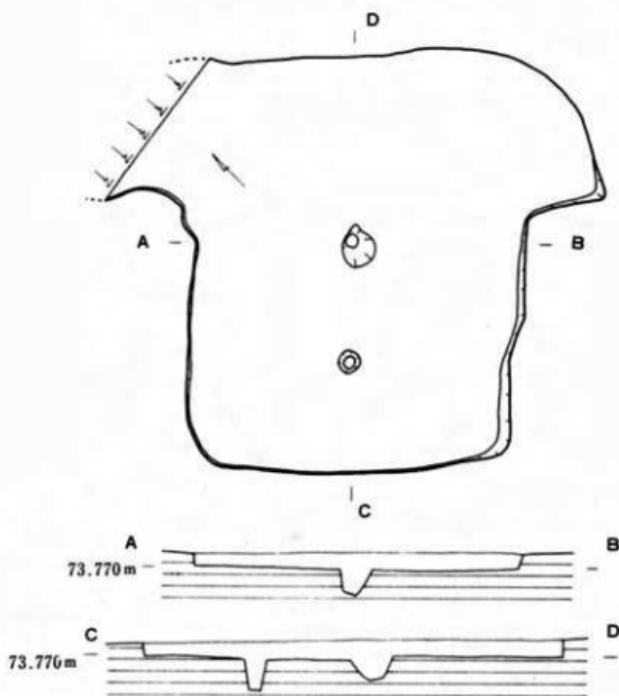
第5図 3号住居址(1/50)



層位

- | | |
|--------------|--------------------------|
| I層：黒褐色土(耕作土) | VII層：黒褐色土 |
| II層：淡黒褐色土 | VIII層：VI層に赤ホヤ細粒が混る |
| III層：黒褐色土 | V層：V層より暗い褐色土 |
| IV層：濃黒褐色土 | IX層：褐色土に黄褐色ブロックが混る(貼床か?) |
| V層：褐色土 | X層：砂質黒褐色土 |

第6図 4号住居址(1/80)

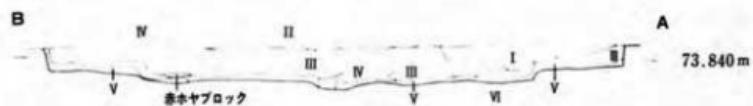
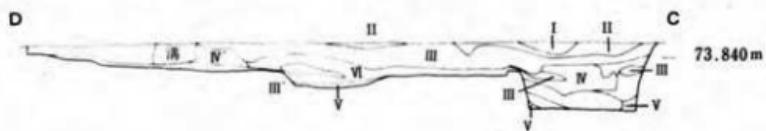
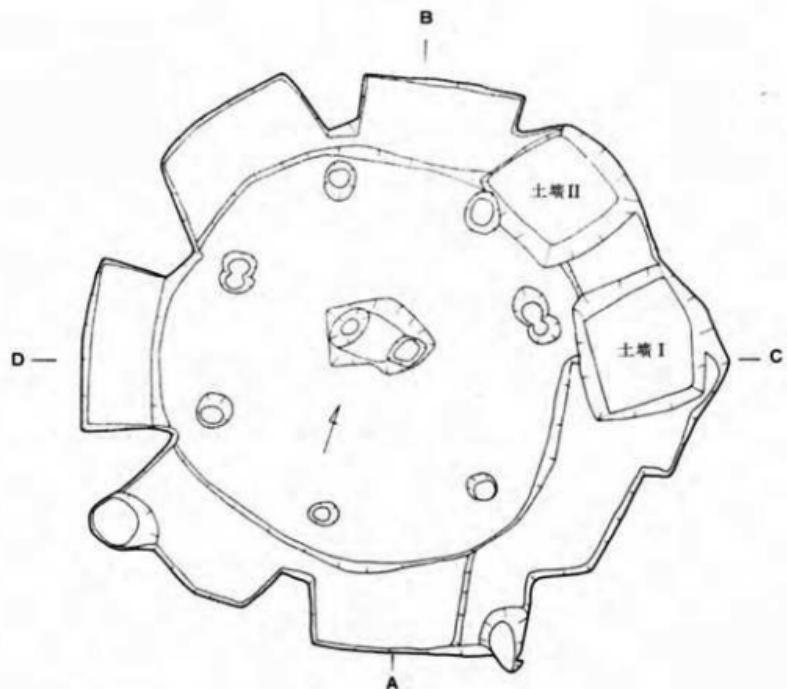


第7図 5号住居址(1/80)

ることを確認した。この住居址は最大径8m40cmの大型住居址である。深さは検出面から50cm内外で中央部に向かってゆるやかに深くなる。埋土は5層に分層される。第1層は暗褐色土、2層は明褐色土に赤ホヤ粒を含む層、3層は1層より黒い暗褐色土層で土器が多く含む層である。4層は粘質のある明るい褐色土、5層は4層よりもさらに粘質の多い明褐色土層である。住居址の外縁から内側に向けて地山を掘り残した壁が6本突出しそれによって区画された部分は1段高くベッド状になっている。このベッド状の部分は、幅1mから1m20cm、長さ2mから2m20cmの規模を持っていて、中央部床面より10cmから20cmほど高くなっている。中央部床面にある11のピットは、この突出壁に対応した位置に掘られている。住居址の中央部には20cmほど深い中央ピットがあり、その東西端にはさらに2つのピットが掘られている。中央部床面の外側を巡るピット間の距離はおよそ2m前後ある。ピットの深さは60cmから70cmほど。住居址の北東には、壁面に添って2つの土壤が掘られている。1号土壠は1m80cm四方の規模があり、深さは60cmある。2号土壠は1m60cm×1m70cmの規模で深さはおよそ60cmである。1号土壠は土層観察により住居址との切り合いは認められず、第4層が連続して土壠内に見られたためこの住居址に伴うものであると判断された。2号土壠はセクションにかかるなかったため確実に伴うものと断言できないが、住居址検出時にはまだ姿を現していなかったことを主な根拠に、さらに1号土壠とほぼ同規模であること、住居址の壁面に添うこと、2つの土壠の間のベッドが柱穴と対応してあたかも突出壁状になることなどから、これも伴うものであると考えてほばまちがいないと思われる。遺物は主として3層の全面にわたって検出された。この中には、瀬戸内系土器であるT字に肥厚した口縁部に凹線の施された壺の口縁部破片がある。又、床面からは大型の甕や磨製石斧、磨製石鎌、それに磨製石鎌を作成したフレイクやチップが多く出土した。

7号住居址（第9図、図版8・9）

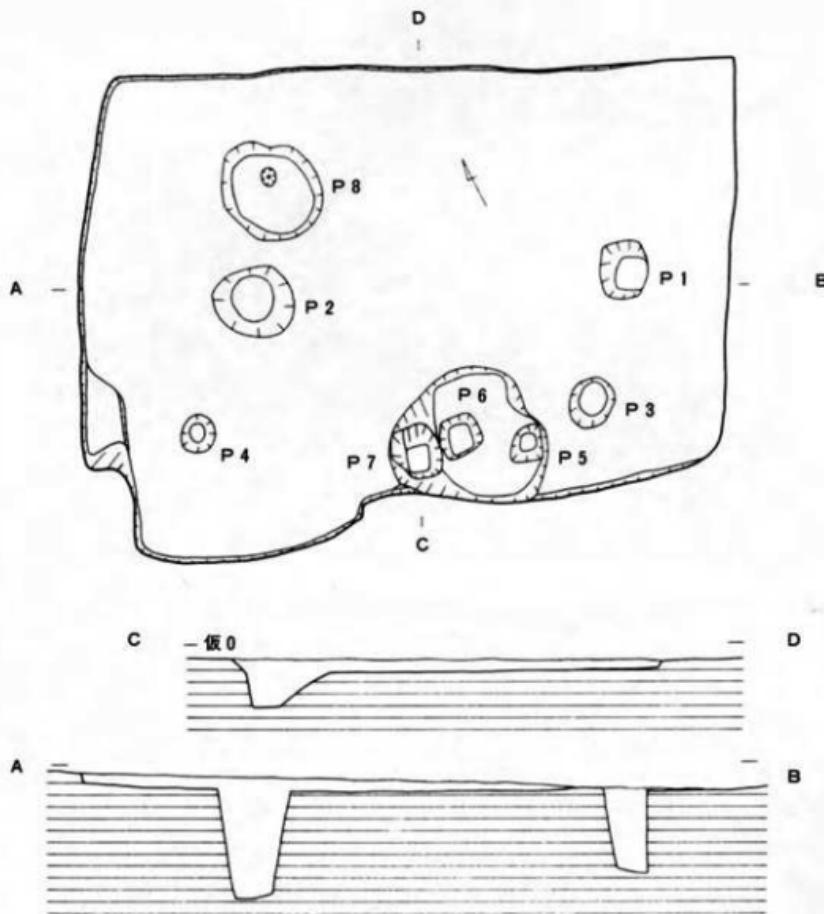
7号住居址は、1～6号住居址のある地区から道路を挟んで30mほど北東に位置する、2m90cm×4m30cmの規模をもつ方形住居址である。その南辺では、壁ぎわのピット西側が若干張り出し気味である。P1・P2の2つの主柱穴は住居址の中央にあり、2m50cmほどの間隔をもって長軸方向に並んでいる。主柱穴から80～90cm南には、P3・P4の2つのピットがやはり長軸方向に並んでいる。南壁際には1m×90cmほどの不整円形ピットがほりこまれており、その中に壁に沿って3つの方形柱穴がほらされている。住居址の残りは悪く、検出面から床面までの深さは6cm内外であり、特に東壁はほとんど残っていない。P2の北側に



層位

- I 層：暗褐色土
- II 層：アカホヤ粒を含む明褐色土
- III 層：I 層より暗い暗褐色土
- IV 層：粘質のある明褐色土(貼床?)
- V 層：粘質の多い明褐色土

第8図 6号住居址(1/80)



第9図 7号住居址(1/40)

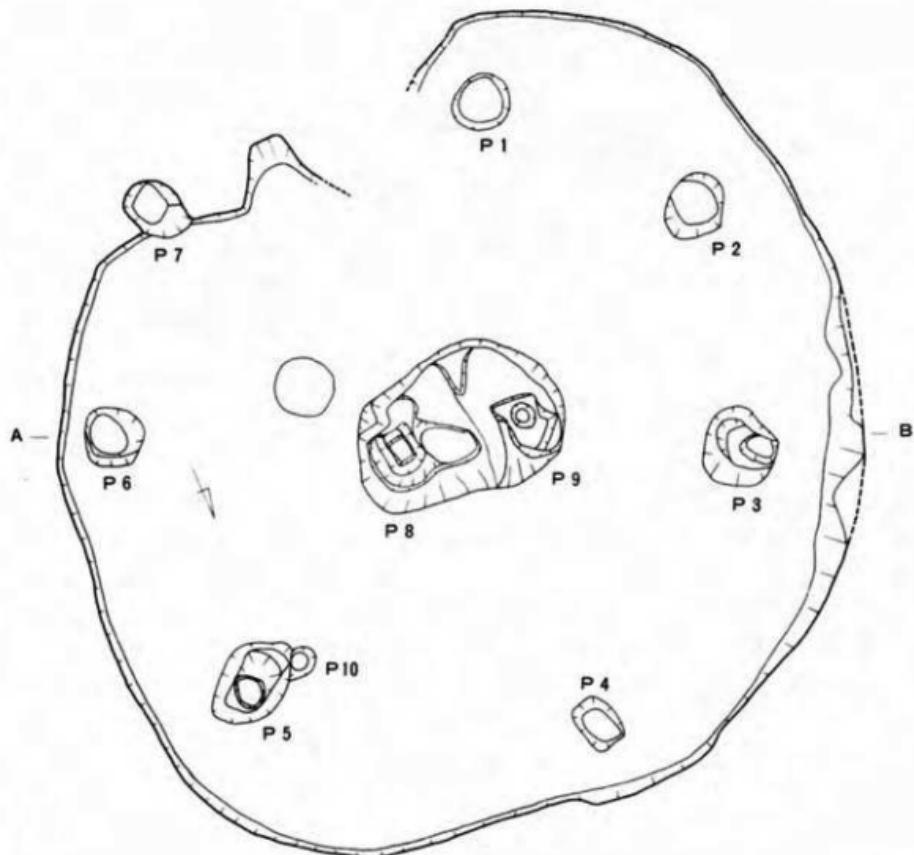
は、径60cm、深さ2~6cmほどの浅いピットP 8があり、その中にさらに径10cmほどの浅いピットが掘られている。このP 8の底面は、焼けており炭化物も認められた。主柱穴のうちP 2は上部径約55cm、底部径約25cm、深さ70cmほどの円形を呈し、P 1は上部が40cm×30cmの方形、底部が20cm四方、深さ55cmほどの方形を呈している柱穴である。壁際ピット中のP 5・6・7も方形を呈しているが^a、深さ10~50cmと主柱穴よりは幾分浅めである。遺物の出土量は少ないが^b、南壁際ピットの北側で緑泥片岩のチップが検出され、住居址西半分に下城式甕などの土器片が見られた。

8号住居址（第10図）

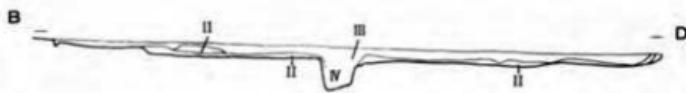
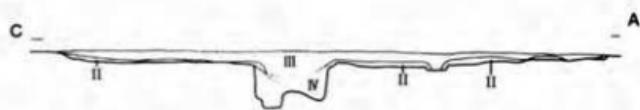
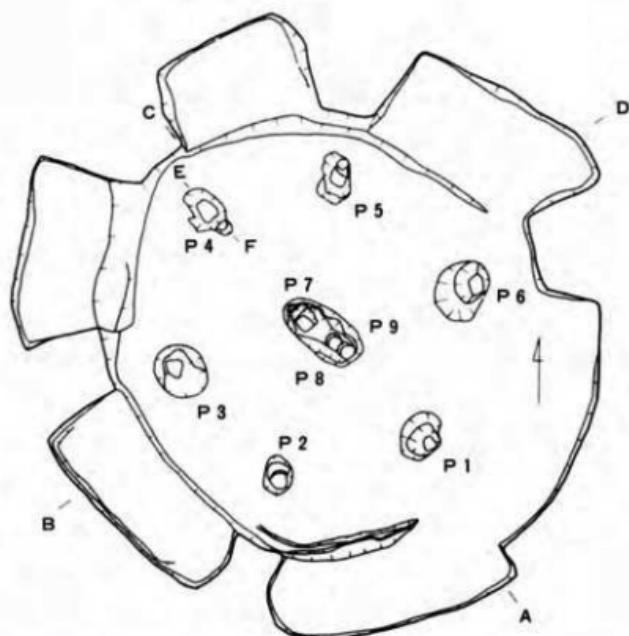
8号住居址は9号住居址とともに調査区北端にある、径約5m50cmの不整円形住居址である。遺構の残りはわるく、検出面から床面までの深さは全体に10cm内外で、なかでも南壁は内側に入り込みながら消えている。10個ある柱穴のうち壁面に沿って深さ65~80cmほどの柱穴7本が1m60cmから2m40cmほどの間隔をもって掘られている。そのうちP 7は現状では壁の外側に位置しており、あるいはこの外側に消失した壁面があり南壁外側がベッド状遺構になる可能性もある。住居址の中央に1m×1m40cmほどの楕円形の中央ピットがあり、そのなかにP 8、P 9が80cmほどの間隔をもって東西にならんでいる。P 8はその上部が25cm×30cm、下部が15cm×15cmの方形柱穴で深さは床面から約50cmある。P 8の南東およそ80cmの床面には径約40cmの焼土面が存在した。遺物は少ない。P 6の周辺から甕の破片が^c、P 2の周辺から川原石と若干の土器片が出土したのみである。

9号住居址（第11図、図版9・10）

9号住居址は8号住居址の東6m、調査区の北東隅にある径約8mの大形花弁状住居址である。内側へ突出した6つの壁によって区切られ、幅1m20cm、長さ2m40cmから3mほどの6つの張り出し部のうち5つは、床面より10cmほど高くベッド状になっていて、南北にある張り出し部分は壁面に溝がある。ベッド状遺構は検出面より5cmほど低くなっている。住居址床面には、突出壁に対応して70~80cmの深さを持つ6つの柱穴が掘られている。中央部には60cm×1m20cmほどの長楕円形中央ピットがあり、その中には50cmから60cmの深さのP 7~P 9がさらにはりこまれていて、これらの柱穴は、P 1、P 6と一直線に並んでいる。埋土は7層に分層できる。第1層は住居址をほりこんだ基盤層である黄褐色粘質土層、2層は褐色土に1層である黄褐色粘質土がブロック状に混じる層で、柱穴で切れることを考えれ



第10図 8号住居址(1/40)



層位

I層：黄褐色粘質土(基盤層)

II層：褐色土+黄褐色粘質土ブロック(貼床?)

III層：濃黒褐色土層

IV層：II層より黄褐色ブロックが多い

V層：黄褐色ブロック+褐色砂質層

VI層：黄褐色ブロック+ややよごれた褐色層

VII層：VI層より堅く粒子が細かい層

P 4 土層図(1/80)

第11図 9号住居址(1/80)

ば、あるいは貼床として敷かれた層の可能性がある。3層は黒褐色土層で本来の住居址埋土とおもわれる。4層は2層より黄褐色粘質土ブロックが多く見られる層、5層は褐色砂質層に1層である黄褐色粘質土ブロックが混じる層で、柱穴内だけにしか見られないため、柱を固定した土だと思われる。6層は黄褐色粘質土ブロックに、やや汚れた色土が混じる層で柱穴痕と考えられる。7層は深すぎてはっきりと確認できなかったが6層より堅く粒子も細かな土であった。

10号住居址（第12図、図版10）

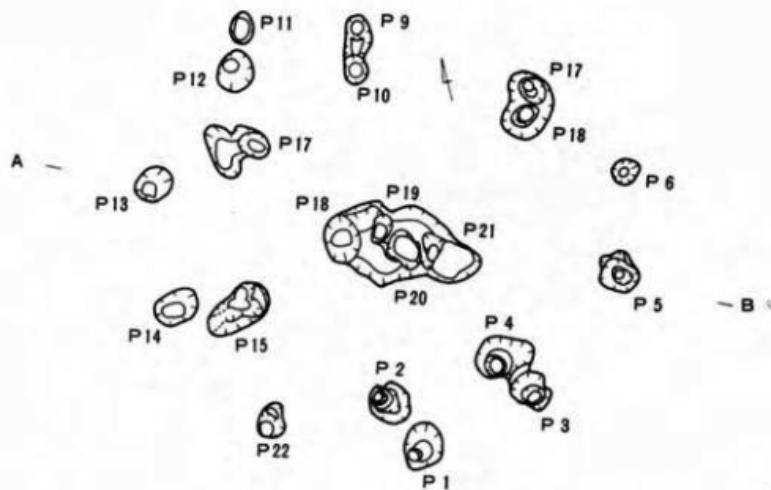
10号住居址は調査区東端に位置する住居址で、すでに削平が進んでおり、壁はなく柱穴と床面の一部が確認されたのみである。柱穴間の最大径は6m70cmを測り、住居址の推定径は9m前後になるものと考えられる。22個の柱穴は、2m10cm×1m10cmの不整精円形の中央ピット内にP18～P21と4つ、他の18個のピットはそれを中心にして円形にめぐらしている。主柱穴はおよそ1m60cmから2m50cmの間隔をもって掘られているP1・P2、P3・P4、P5、P7・P8、P9・P10、P11・P12、P13、P14・P15、P22の15本9つと考えられ、少なくとも一度は建て替えが行われたと思われる。P5、P13と中央ピット中のP18～P21は一直線に並んでいる。

11号住居址（第13図、図版11）

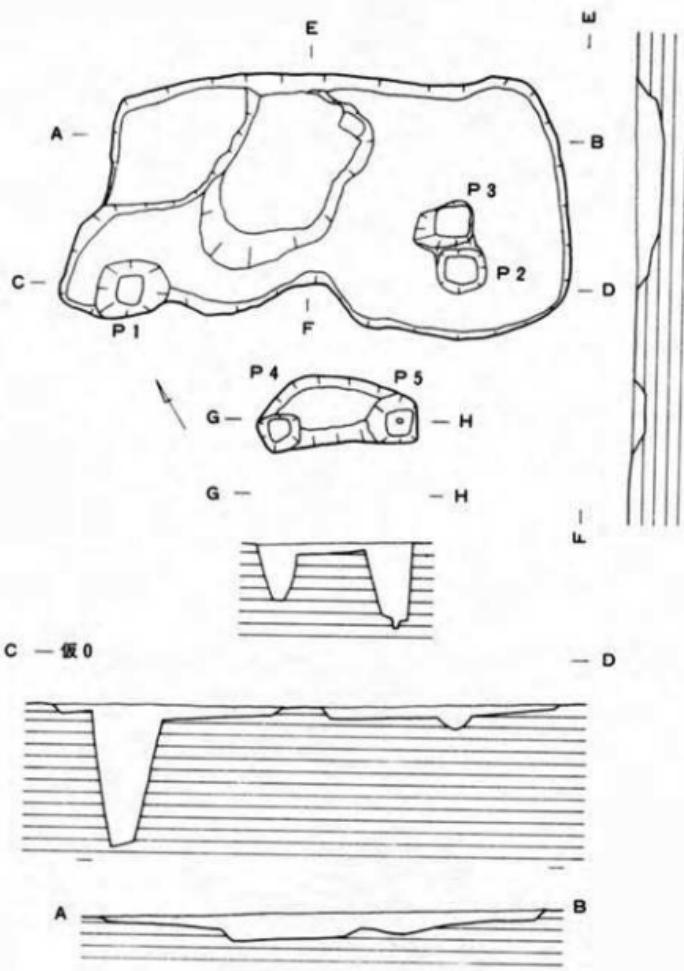
11号住居址は7号住居址と10号住居址の中間に位置している。約3m×1m70cmほどの不整方形をしており南壁西側にP1、東にP2、P3の3つの柱穴が存在する。住居址中央には80cm×1m10cmほどの不整円形ピットがあり、その北端は北壁に接している。ピットの西側、北西隅には80cm四方の不整円形のベッド状造構がある。この土壤から30cmほど離れて小ピットがあり、その東西端にはP4、P5の2つの柱穴がある。現状はこのように土壤の南側に小ピットが付属した形をしているが、検出面から床面までの深さが、南側で5cm程度、北側で10cm前後と浅く、かなりの削平を受けていると考えられ、おそらく、小土壤は住居址の南壁際の小ピットで、小土壤と土壤の間はベッド状造構になるものと考えられる。そうであれば、11号住居址はおよそ2m50cm×3mの方形住居址になるものと思われる。

12号住居址（第14図、図版11）

12号住居址は、11号住居址のおよそ4m50cm西に位置している。第3次調査区の畑と道路



第12図 10号住居址(1/80)



第13図 11号住居址(1/40)

の間にのこった20cmほどの畦に、わずかにその一部が残っている。北半にはゆるやかに落ち込むピットが認められ、また畦の東側の畑部分には、床面はのこっていないが、2m60cmの間隔で2つの浅い柱穴が認められた。このため12号住居址は、5m20cm×aの2つもしくは4つの柱穴を持つ方形住居址の可能性が高い。

(3) 土 壤 (貯蔵穴)

1次調査で検出された4基の土壤は、その袋状にたちあがる形態からいわゆる貯蔵穴と呼ばれるものである。1号・2号土壤は3号住居址の東西に、3号・4号土壤は1号住居址の南北およそ8mのところに50cmほどの間隔で並んで掘られている。

1号土壤 (第15図)

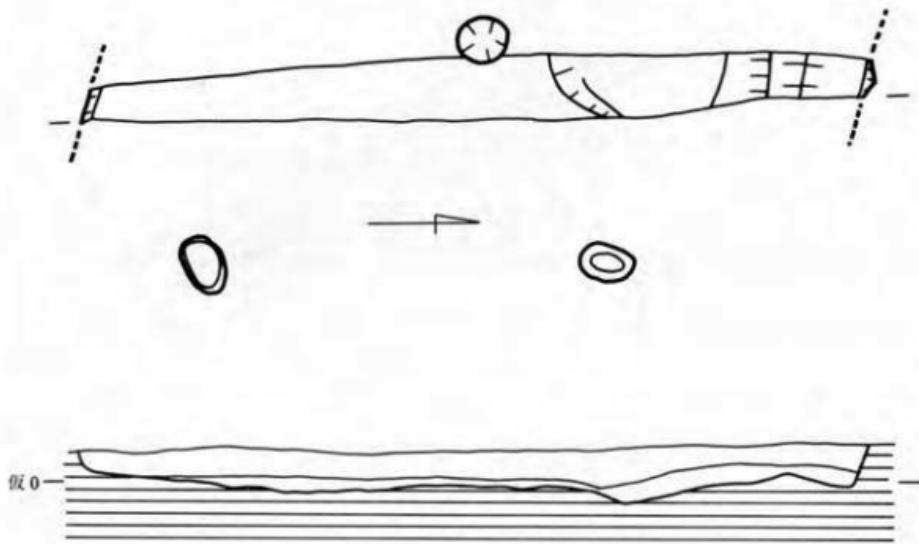
1号土壤は、径が1m30cm×2mのほぼ円形をした、深さ約40cmの土壤で、底面中央部に径75cmの円形小ピットがある。埋土は黒褐色土の単一層で、長頸壺の胴部破片と下城式甕の口縁部が出土した。

2号土壤 (第15図)

2号土壤は、径が1m30cm×1m40cmで深さが60cmほどの、ほぼ円形をした土壤である。埋土は黒褐色土の単一層であった。

3号土壤 (第16図)

3号土壤は、上部径が1m30cm、底部径1m50cm×1m75cmの楕円形をした土壤で、深さはおよそ1m20cmを測る。壁は底部からすぐにゆるく内傾しており袋状を呈している。埋土は4層に分層できた。1層は暗黒褐色土層で炭化物を含む。又、赤ホヤ塊を部分的に含んでいる。2層よりはしまりのない土層である。2層は明褐色土層で、その上面は硬く、明瞭に1層と区分される。3層は、2層よりも硬い。4層は3層よりも硬い。4層の中央部がもりあがっているので、土壤の肩は、現状よりも狭いものであったと推定される。遺物は高坏片、下城式甕が出土している。

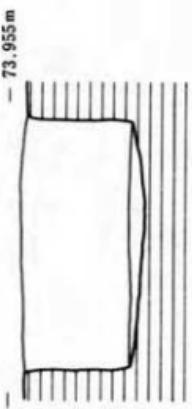


第14図 12号住居址(1/40)

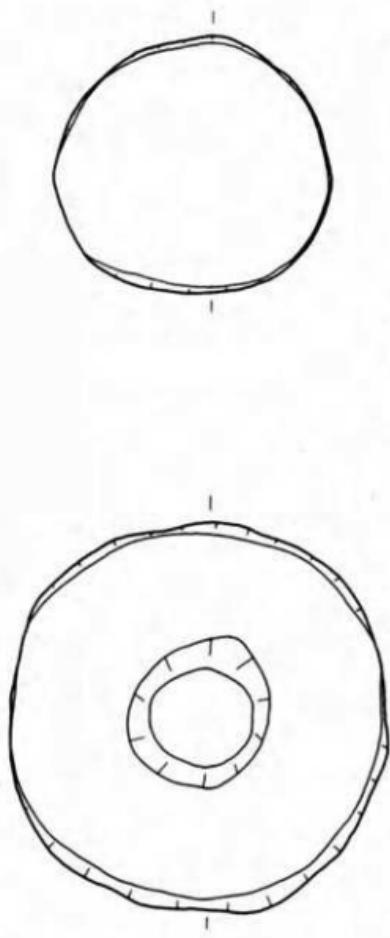
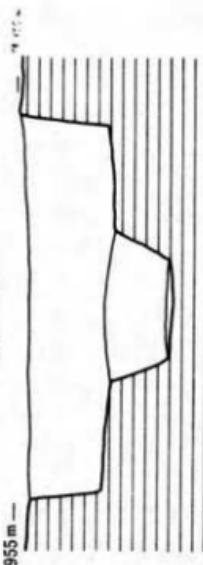
4号土壤 (第16図)

4号土壤は、現状で上部径が $1\text{m}30\text{cm} \times 1\text{m}60\text{cm}$ の楕円形、下部径が $1\text{m}65\text{cm} \times 1\text{m}80\text{cm}$ の円形を呈した土壤で、深さはおよそ1m。壁上部が内湾し袋状を呈している。埋土はほぼ黒褐色の単一層に近いが、かろうじて5層に分層した。1層は暗黒褐色土層、2層、4層は黒褐色土層でほとんど区別がつかない。5層は4層より若干堅く、明るい黒褐色土層である。5層の中央部が円錐状に盛りあがっているので、本来の土壤の肩はもっとすばまたものだったと推定される。遺物は高坏片、下城式瓦片などが出土した。

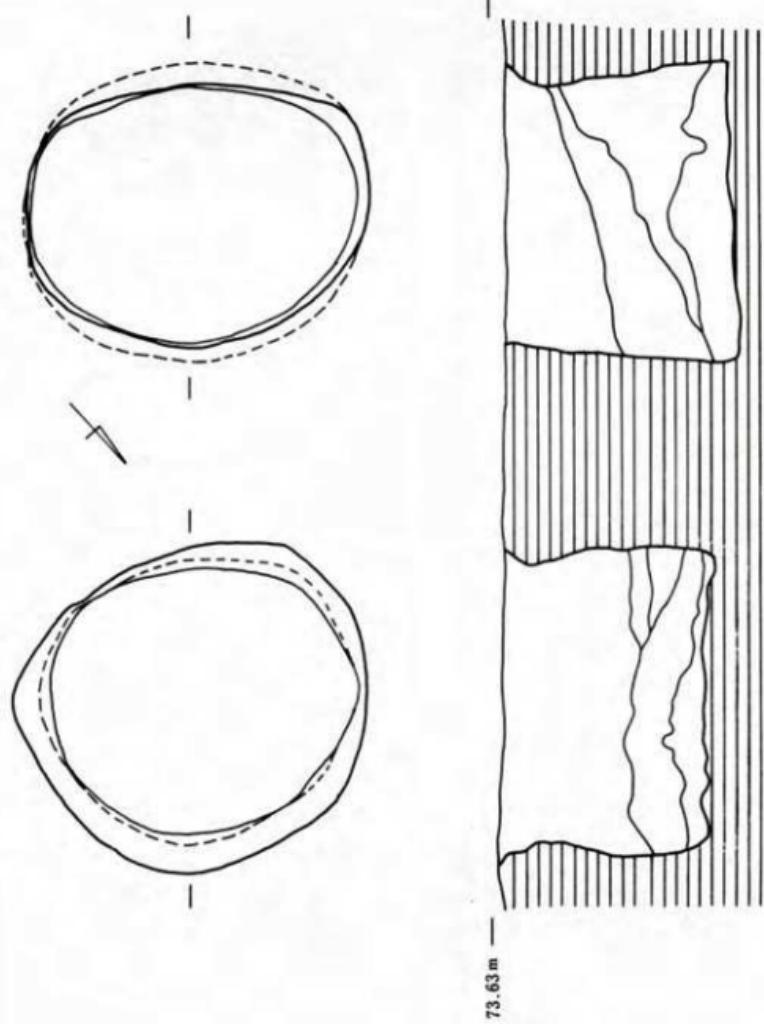
2号土壤(1/30)



第15圖 1号土壤(1/30)



第16圖 4号土壠(1/30) 3号土壠(1/30)



第4章 遺物

(1) 土器

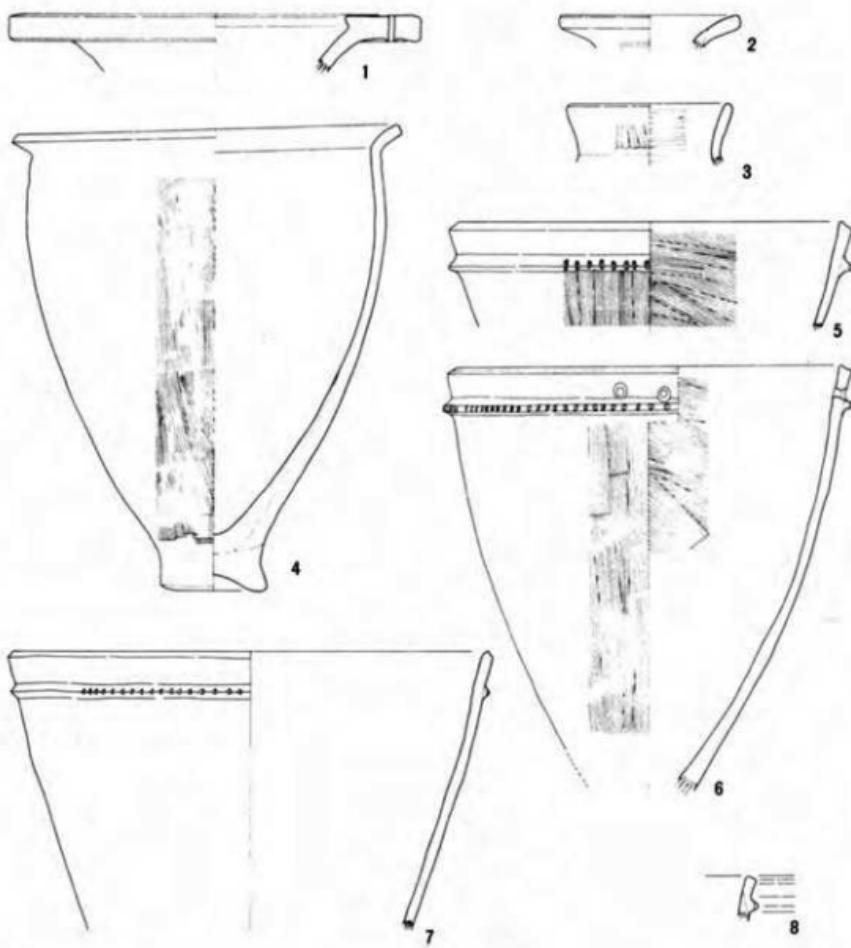
1号住居址（第17図、図版12）

実測可能な土器としては、壺3点、甕5点の計8点が出土した。1は鋤先状を呈した壺の口縁部で、鋤先の部分に上から下へ穿孔がある。口縁の推定径は27cmほどのものである。調整はナデを主体とする。色調は褐色を呈し、焼成は堅い。保存も良好で遺存は約3%ほどである。

2は口径12cmほどの小型壺口縁部。3は口径11cmほどのやはり小型の短頸壺の口縁部で、内外ともヘラミガキが施こされている。5～8は下城式甕で、5は推定復元径27cm、外傾する口縁の口唇部は内くぼみで、外さがりになる。口縁部下2.5cmのところにある一条の突帯には、押圧だかするといきザミが施こされている。突帯上部はヨコナデ、下部は細かなタテハケ目、内面は、左あがりのハケ目が施こされる。外面には、炭化物が厚く付着している。胎土は、砂粒をあまり含まないが、数mm径の小石がみられる。色調は淡灰褐色～淡黒灰色を呈している。焼成は堅い。保存は良好で、遺存は約4%ほどである。

6は底部を欠くが、全体の約3%ほど遺存した甕で、径は27cm、器高は底部をのぞき約29cmある。外傾しながらのびた口縁部、その口唇部は内くぼみ状で、外に低い。口縁下2.5cmほどのところに一条の押圧だかするといきザミ目突帯がめぐり、突帯と口縁の間に3cmの間隔で2つの穿孔がみとめられる。この穿孔は両側からなされている。調整は、突帯上は口唇部までヨコナデ、突帯下部はタテ方向の細かなハケ目が施こされている。内面は、口縁部1cmほどはヨコナデ、その下胴中位まで左あがりのハケ目、その下底部まではていねいなおさえナデである。胎土は細かく、焼成も堅い。色は淡黄褐色から褐色を呈し、胴下半部は、二次的に火をうけたのか赤変して、剥離がみとめられる。器表全体に炭化物が厚く付着している。

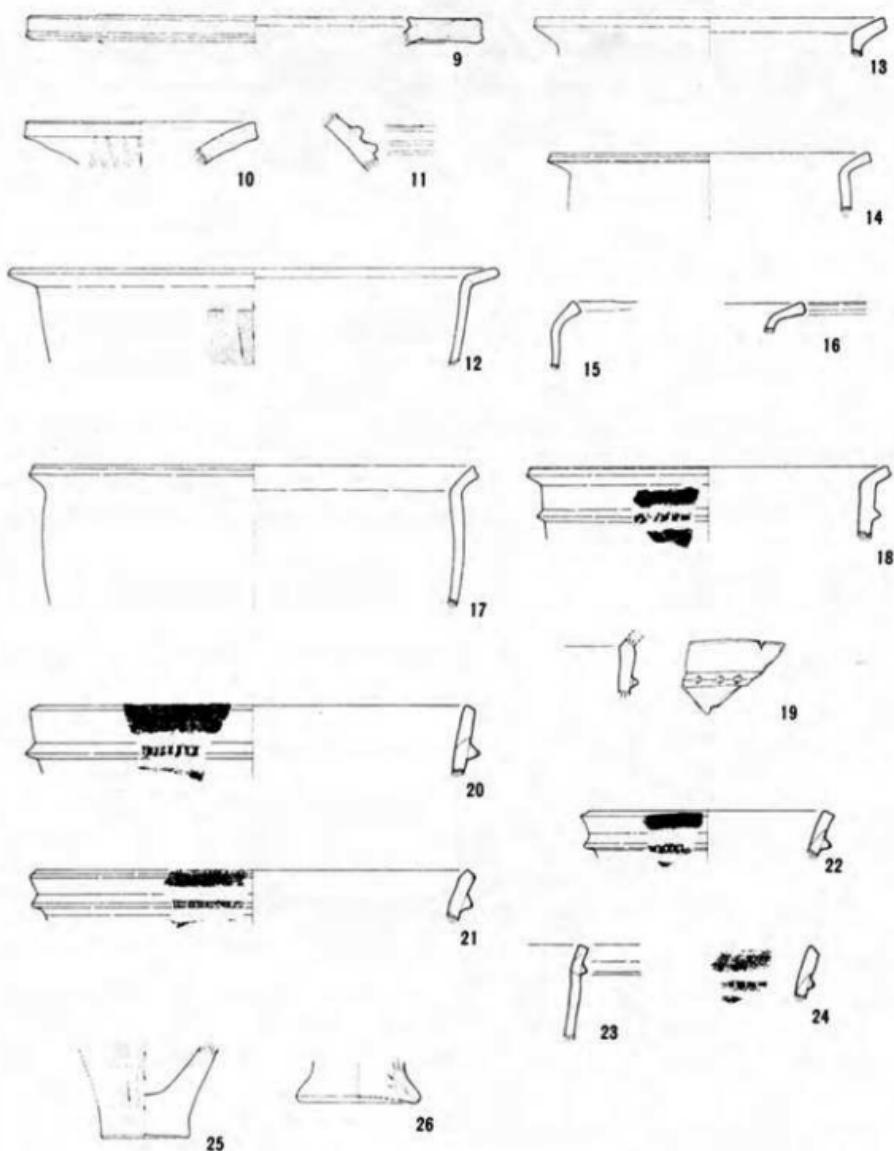
7はほぼまっすぐに外傾する胴上位の破片で、全体の約3%ほどの遺存であるが、推定口径は32cmほどと思われる。口唇部は丸く、外側では内くぼみを呈し、外へ低い。口縁下2cmのところにある一条の突帯には、するといきザミ目が切られている。調整はヨコナデ、ナデを主体とする。胎土は1～2mm大の砂粒を多く含み、焼成は堅い。色調は淡褐色を呈している。



第17図 1号住居址出土土器(1/4)

2号住居址（第17図の4、第18図、図版12・13）

壺3点、甕15点が実測可能な土器であった。9は鋤先口縁をもつ壺の口縁部片で、口縁部はまだ水平であり、口唇部もまだたれさがっていない。淡黒褐色を呈し、焼成は堅い。保存は良好だが、遺存は約3%ほどである。調整はヨコナデである。12は中型の甕で推定径32cmほど、胴部のふくらみはなく、口縁はあかりぎみで、くの字化の方向へむかっている。口唇部は丸い。調整は、外面タテハケ目、内面ナデが施こされ、外面全体にススが付着している。胎土は砂粒が多く含み、色調は淡黄褐色を呈している。焼成は堅い。遺存は約3%ほどである。13はくの字にもちあがった口縁をもつ甕の破片で、遺存は約3%と少ない。口縁はまだ稜線をもつていて、口縁上面も水平である。口唇部は内くぼみになっている。調整は内外面ともナデが施こされている。色調は淡黄褐色で焼成はやや軟かい。14、17はくの字化した口縁をもつが稜線はいぜんしっかりと認められる。口唇部は内くぼみを呈している。4はほぼ完形に復元できた甕で、最大径はくの字化した口縁部にあり、26cmを測る。胴部最大径は、胴上位にあるが、口縁近くでわずかにすばまっている。底部はあげ底で高台状を呈している。器高は31cm。口唇部は平坦である。調整は、外面タテハケ目で内面はていねいなナデが施こされる。内面下半部はユビでおさえナデされ、爪の痕跡が残っている。色調は淡赤褐色を呈し、胎土は1~3mm大の砂粒を多く含んでいる。焼成は堅い。18、19はいわゆる中溝式の甕で、くの字口縁下に一条のキザミ目突帯がめぐっている。18は遺存約3%と小破片で復元径も確実なものではないが、推定径24cmを測る。口縁端部は内くぼみを呈し、口縁は水平だがくの字状にもちあがっている。胴上部と口縁の接合部は内外ともしっかりと稜線がみとめられる。口縁下2cmのところにめぐる一条の突帯は、断面三角形をなし、キザミ目が施こされる。このキザミ目は、上下に粘土のはみだしがみられるため、押圧したことがわかるが、するどくキザミ目の角度も一定しているため、例えば、ハケ目原体の角などでおしつけたあと、ひいたことが考えられる。胴部はふくらみをもたず、まっすぐ底部につづくものと推定される。調整は全面ヨコナデで、器表にはススが付着している。胎土は1mm以下の微砂粒を含み、色調は淡黄褐色を呈している。焼成は堅い。20~24は下城式甕の破片で、20は推定口径、29.5cmを測り、器壁はまっすぐに外反している。口唇部は若干内くぼみを呈し、外に低い。口縁下3cmのところに一条めぐる断面三角の突帯には、するどい押圧キザミが施こされている。調整は、風化のため、よくわからないが、外面ナデ、内面荒いハケ目と思われる。胎土は1mm大の砂粒を含み、色調は明赤褐色を呈している。焼成はやや軟らかい。21はやはり小破片で径の推定も不確実だが、約29cmほどの径と推定される。口唇部に上下同時に押圧したあと切っ



第18図 2号住居址出土土器(1/4)

たとみられるするどいキザミ目が施こされている。調整は、内外ともヨコナデである。胎土には数mmの大の小石を含み、焼成は堅い。色調は褐色を呈している。25・26は甕の底部で、25は下城式の底部、26はくの字口縁甕の底部と思われる。

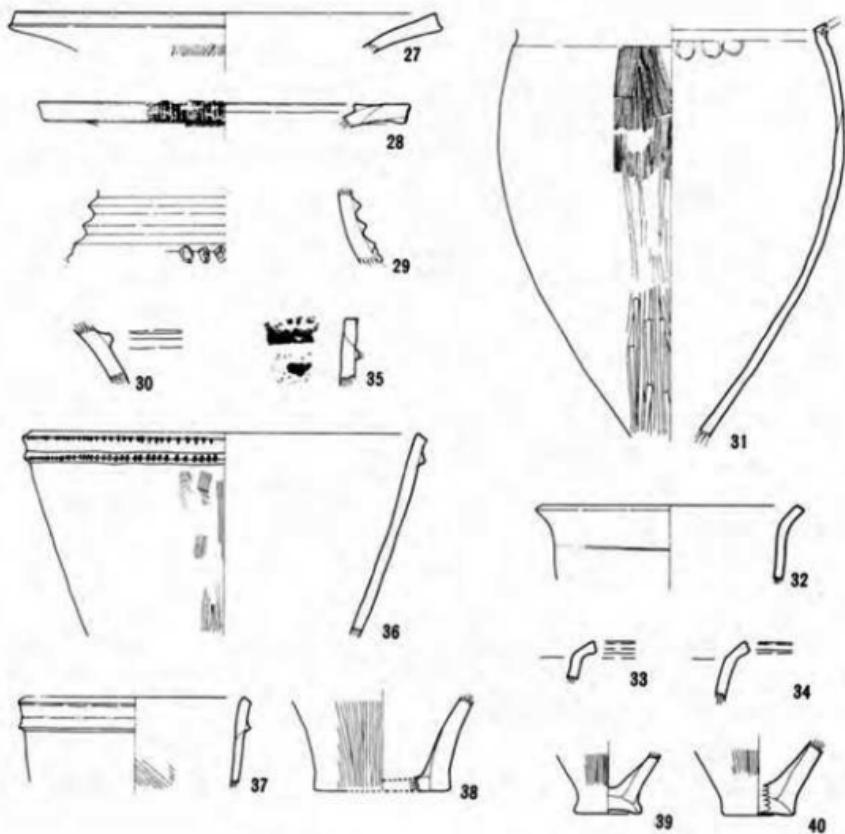
3号住居址（第19図、図版13-14）

壺4点、甕10点が出土した。28は鋤先状を呈する口縁部片で、鋤先は、やや内くぼみ状を呈するようになり、下端は下にたれきる。口唇部平坦面は、右あがりにナナメになり、押圧キザミが施こされる。このキザミの中には、ハケ目が残っており、ハケ目原体による押圧キザミと思われる。遺存は殆どほどの小破片で推定径は不確実ながら24.5cmを測る。色調は淡黒褐色で焼成は堅い。29は壺の頸部で現状では3本の断面三角形の平行突帯がめぐり、一番下の突帯下に梢円で中央部をキザミながら押しつけた貼付浮文がほぼ1cm間隔で施こされている。調整は、内外ともにヨコナデ。胎土は1mm大の砂粒を若干含み、焼成は堅い。31は床面上から出土した口縁部と、底部を欠く甕のはば残った破片で、器壁は薄く、しっかりした造りをしている。器形は、胴部の上から約三分の二部分が最大径で約23cmを測る。口縁近くはすばまっており、胴部がふくらむ形になる。口縁は欠失しているが、胴に対してほぼ直角にするどく曲っており、稜線も明瞭である。口縁はくの字に右上方にのびると思われるが、あるいはその端部はねあがり状口縁をなしているかもしれない。調整は、胴上部は細かなタテハケ目、胴中位から下は、タテヘラミガキ、あるいはていねいなユビナデと思われ、上部のハケ目に暗文状にのびている。内面はていねいなナデ調整される。器壁下半部は、オレンジ色に変色しており、二次的に火をうけた可能性がある。器表上半部と内面下半部にススが付着している。焼成は、堅緻で、色調は淡黄褐色を呈している。32、33、34はくの字口縁を持つ甕の口縁部で、32は胴上部に一条の沈線が施こされるが、閉じていない。口縁部の稜線はほとんど認められず、くの字化が進んでいる。35、36、37は下城式の甕である。36は推定径26cm、胴部からまっすぐに外傾している口縁部である。口唇部は内くぼみで外に低い。口縁下2cmの位置に一条の突帯がめぐっており、口唇部端と上下同時にするどいキザミ目が施こされている。調整は、タテハケ目のあとナデるが、ハケ目がわずかに残っている。内側はナデ調整される。色調は淡黄褐色を呈し、外面には厚く炭化物が付着している。37は外傾度のゆるい、推定口径15cmほどの小型の甕で口縁下2cmの位置に一条の三角突帯がめぐっており、キザミ目は施こされない。色調は淡灰褐色を呈し、焼成も堅い。38、39、40は甕の底部で、38は平底で、底部内面も広く平たい形状をしている。調整はタテハケ目のち軽くナデられ

ており、内面は、ユビのタテナデである。その器形から下城式壺の底部と思われる。39、40はくの字型の底部と思われ、39はあげ底を呈し、高台状になっている。40もわずかにあげ底を呈している。

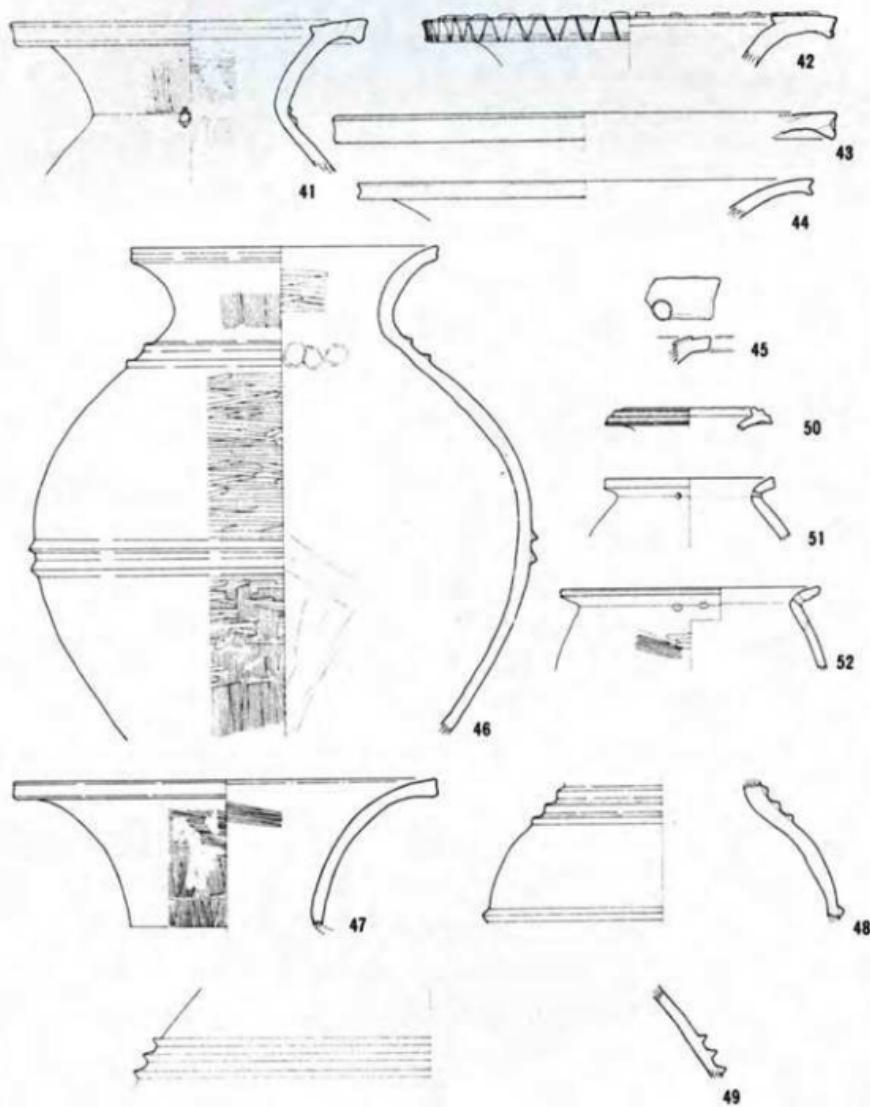
4号住居址（第20～25図、図版14～18）

4号住居址からは実測可能なものとして壺18点、高杯1点、甕48点が出土した。41、42、43は鋤先状口縁をもつ壺で、41は口径23.5cmを測る。頭部は、胴上半部からすぐに外反し境には稜がみられる。鋤先口縁部はやや外あがりで、口縁端下部はたれさがる。頭部と胴部の境には梢円形浮文が貼付けられている。これは残りから計算すれば、最大で8個しか貼付けられていないと思われる。外面の調整は、口縁部はヨコナデ、頭部はタテハケ目、胴上半部はナデ、内面の調整は、頭部はヨコハケ目、胴上半部はユビナデである。胎土は1～5mm大の砂粒小石を含むが、砂粒は多くない。焼成はやや軟らかく、色調は明赤褐色を呈している。42はたれ下がって拡張された口唇部に、連続山形文が刻まれており、口縁上部には1.5～2cm間隔で径1.3cmほどの円形浮文がはりつけられている。鋤先部のナデツケは不充分であり、調整はヨコナデ、ナデを主体としている。胎土は1mmから5mm大の砂粒、小石を含み、色調は明赤褐色を呈している。焼成は風化のためか、やや軟めである。小破片だが45にも、円形浮文がみられる。46は胴下半部から底部を欠く現器高33cm、口径20.5cm、胴部径34cmを測る壺で、内くぼみを呈する。口唇部は垂直をなしている。肩部からゆるく外湾した口頭部と、大きく張った球形状の胴部が特徴的で、肩上部と、胴部中央に2条ずつの断面三角形突帯がめぐっている。口縁部内外面はヨコナデ、頭部はタテハケ目、突帯周囲はヨコナデ、胴上半部はヨコ方向へラミガキ、胴下半部は、タテハケ目の後まばらにヨコ方向のヘラミガキが施されている。内部の調整は、頭部はヨコヘラミガキ、肩部に指おさえがみられ、胴上半部はヨコ方向のナデ、下半部はていねいなナデである。胎土は、1mm大の砂粒を多く含み、焼成は堅い。色調は、外面淡黄褐色、内面淡黒色を呈している。44、47は口縁部が大きく朝顔状にひらく壺で、47は遺存約3/4、口頭部の高さは10cm、口径28.3cmを測る。肩部以下は欠失しているが、一坦棱をもち、広がる肩になると思われる。48は壺の胴部から肩部にかけての約3/4残った破片で、肩に三条、胴中位に現存で一条の断面三角突帯がめぐっている。胎土は1mm大の砂粒を多く含み、焼成は堅い。胴部最大径は推定24cmを測る。50は住居址埋土Ⅲ層から出土した壺あるいは甕の約1/2の破片で、T字に肥厚した口縁端面に三条の凹線がめぐっている。復元推定口径は11cmを測る。胎土は、砂粒をほとんど含まない精製された粘



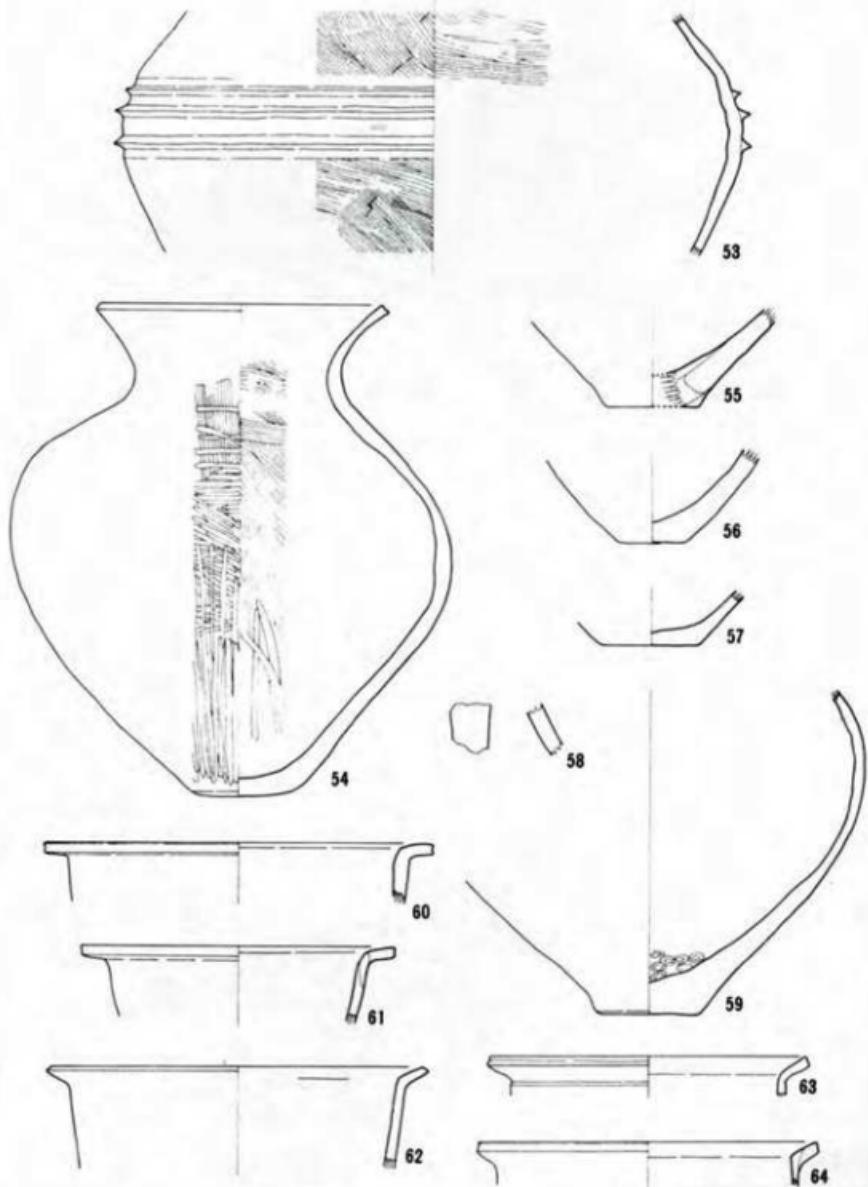
第19図 3号住居址出土土器(1/4)

土で、焼成も堅い。保存も良好である。調整はヨコナデである。色調は淡赤褐色を呈しており、口縁部には丹彩された痕跡が認められる。51、52は無頸壺で、埋土第V層から出土した。両者とも肩部と、くの字に外反した口縁部の境に穿孔があるのが特徴で、推定口径は、51が11.4cm、52が17.4cmを測る。53は大型壺の胴中位部の約 $\frac{1}{4}$ 程度遺存した破片で、推定胴部径51.4cmを測る。3本の突帯はするどい断面三角形を呈している。最上位の突帯の一部には布



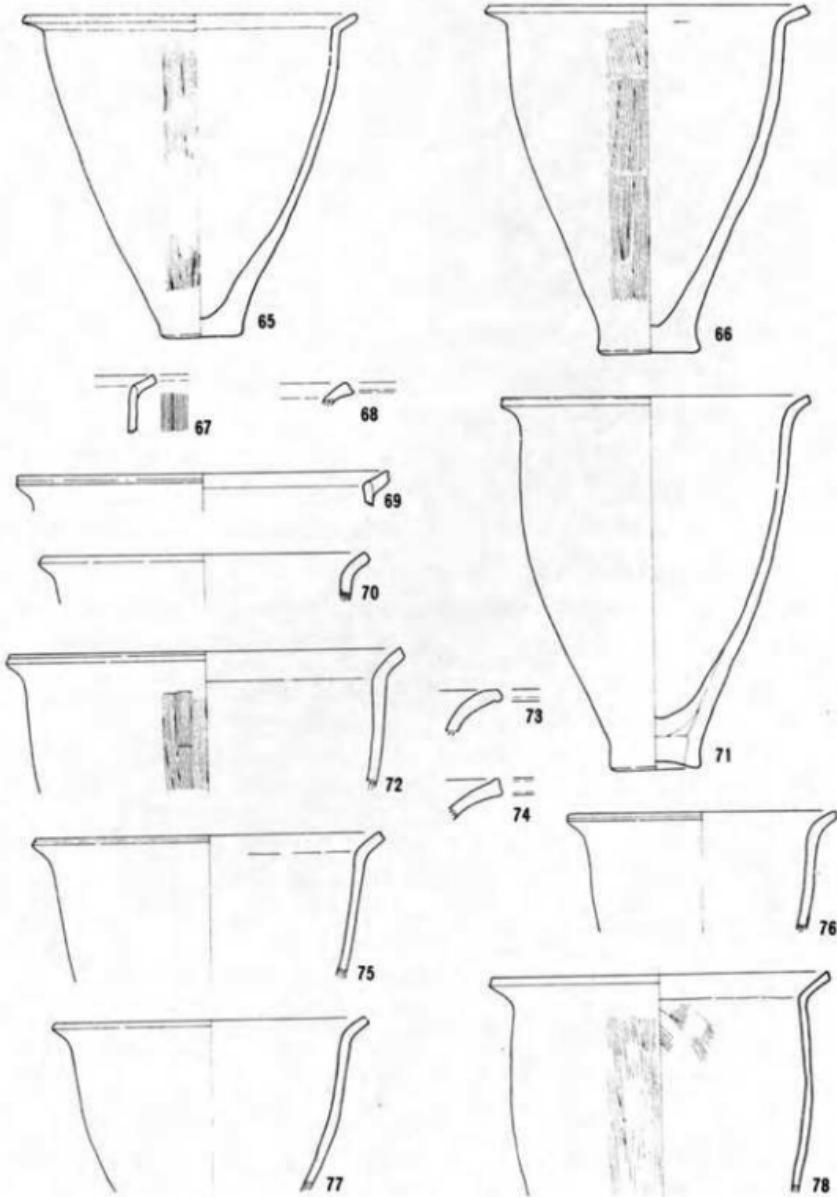
第20図 4号住居址出土土器①(1/4)

とみられる圧痕が認められる。突帯の上下に7本/1.4cmほどの間隔で荒く施こされているタテハケ目は、1次調整で突帯貼付時にその周囲をヨコナデされるが、突帯間にわずかにハケ目が残存している。胴下位に施こされている10本/1.2cmほどの細めの左あがり斜めハケ目は、その後に施こされ、太いハケ目を切っている。胴内部は、上部については太いヨコハケののちナデ消すが、一部ハケ目が残存する。胴中位から下位にかけては、ていねいなユビナデが施こされている。胎土は1mm大の砂粒が多く含み、まれに5mm大の小石が含まれている。色調は淡黄褐色を呈し、焼成は堅い。**54**はほぼ完形に復元できた数少ない壺の一つで、その出土層位は、VI層からVII層にわたっている。口径20.5cm、胴部最大径29cm、器高33cmを測る。肩のはった胴部に、頭部からカーブして外反する口縁部をもち、底部はほぼまっすぐ外反し胴部へ移行する。底部は、突レンズ状を呈している。器面調整は、口縁部はヨコナデ、頭部から肩にかけてはタテハケ目が施こされ、それを、ヨコ方向のヘラミガキが暗文状に切っている。胴中位はヨコ方向のヘラミガキ。胴下位はタテ方向のヘラミガキが施こされ、一部は胴中位まで暗文状にのびている。内面は、頭部はヨコハケで一部ナデ消され、胴上位はヨコハケ目。胴下位はハケ目、ナデ、ヘラミガキが混在している。底部外面は、磨かれており、一面に黒斑が認められる。**58**は4号住居址唯一の高杯片で、脚部の透し部分と思われる2.5cm×3cmほどの小破片である。両端が透し面なのでその間隔は2.4cmほどである。**60～90**は中小型の甕の破片である。**60**、**61**はL字に近い口縁形を呈し、口唇部はくぼんでいる。口縁の接合部は、内外とも明瞭な稜をなしていない。色調は两者とも淡黄褐色を呈している。**62**は埋土第VI層から出土した。推定復元口径は25cmを測り、口縁と胴部の接合には棱線はみられない。口唇部は丸みをおびており、平坦面は左あがりになる。調整は外面ともヨコナデ、ナデである。外面全面にススが付着している。胎土は1mm大の砂粒が多く含み、色調は淡黄褐色を呈する。焼成は堅く、保存は器壁のはくらくが一部で認められる。**64**は推定口径25cmを測る。くの字にもちあがった口縁部は内側では稜をもつが、外側に稜をもたない。調整は内外ともヨコナデである。**65**はほぼ完形に復元できた数少ない甕の一つで、埋土の上下層全面にわたって出土し、第VI層、VII層にも検出された。口径22cm、胴部径19.8cm、器高21.8cmの大きさをもつ。胴部との接合部は内外とも明瞭な棱線をもち、口縁上端面も平坦である。口唇部は、隅丸状でくぼみはみられない。胴部のふくらみはなく、胴部最大径は口縁との接合部にある。底部はすぼまっており、明瞭に底部を形づくっている。底は平底で、わずかに突レンズ状になる。外面の調整は、口縁部ヨコナデ、胴部はタテハケ目だが、ナデ消される部分もある。ハケ目の単位は不明確だが、1本1mmの割合である。底部はヨコナデ調整される。胴上半部



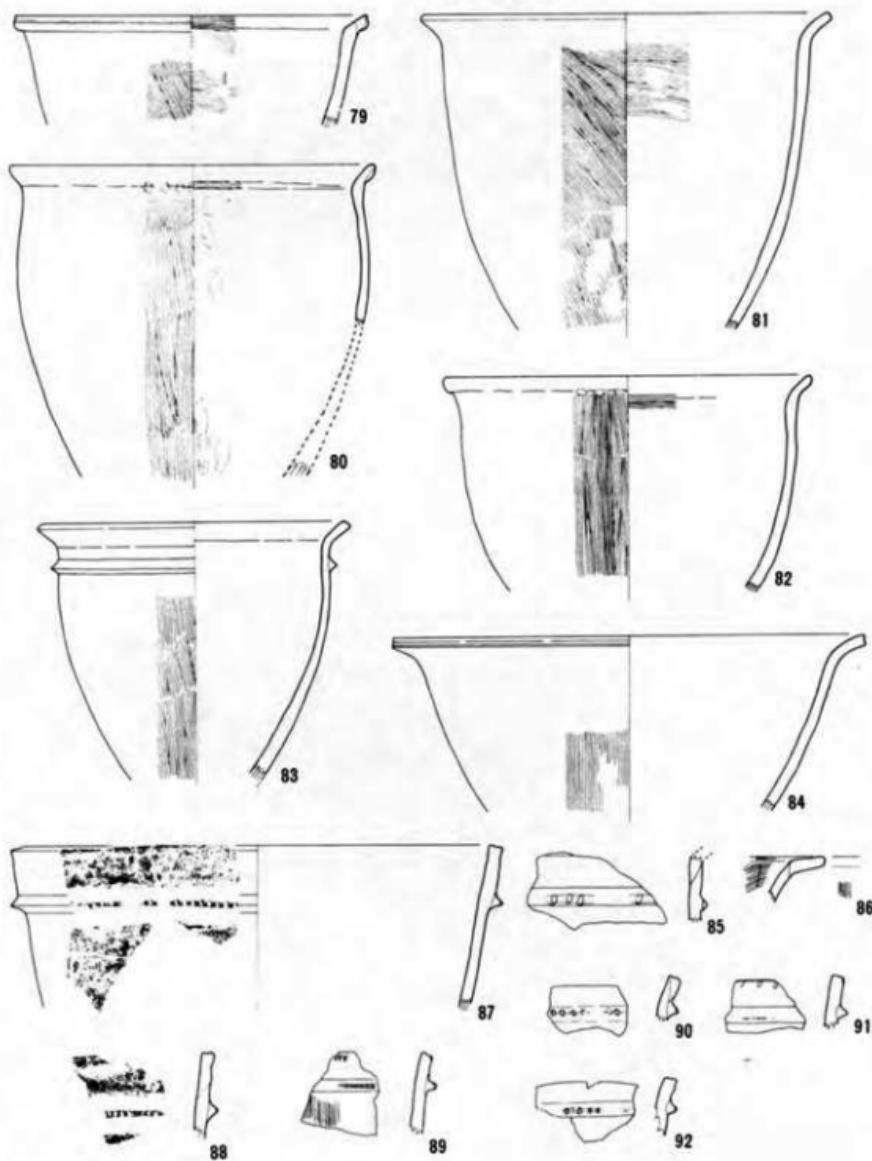
第21図 4号住居出土土器②(1/4)

から口縁外面にかけてススが付着している。胴下半部は、二次的に火をうけたのか風化が著しい。内面の調整は、口縁上面はヨコナデ、胴部はていねいなナデが施こされる。胴下半部には黒班がみられる。胎土は1~5mm大の砂粒、小石を含み、焼成は堅い。色調は淡赤褐色から淡黒褐色であり、内面は淡赤褐色を呈している。66は第V層、VII層をはじめ、埋土各層から出土しほぼ完形に復元された甕である。口径は21.5cm、胴部最大径18.6cm、器高23.5cm、底部径6.8cmを測る。胴部と口縁部の接合面はゆるやかにカーブしており、棱線は明瞭でない。胴部はふくらみをもたず、最大径は口縁部との接合部にある。胴部は底部近くですばまっていて、底部はわずかに外に張り出している。底面は平坦である。調整は、口縁内外はヨコナデ、口縁と胴部の内面の境にはヨコハケ目が一部残っており、胴内面のユビによるていねいなナデ以前に、ヨコハケが施こされたものとみられる。外面は荒いタテハケ目で、その間隔は2~3mmを測る。底部はヨコナデと思われるが、胴下半部の風化が激しく、判然としない。風化は、赤変している部分もあり、二次的に火をうけたためと思われる。口縁外面から胴上半部にかけてススの付着がみられる。胎土は1mm大の砂粒を多く含み、焼成は堅い。色調は淡黄褐色を呈している。68は埋土第VI層から出土した甕小破片で、くの字に外反した短かい肥厚口縁部が特徴である。口唇部はくぼみ、内側に高い。69は褐色土層出土で、第VII層にも同一個体と思われる破片が認められた。くの字にもちあがった口縁部の唇部は、くぼみ状を呈している。71はほぼ完形に復元できた甕の一つで、褐色土層とVI層、VII層に出土した。口径20.7cm、胴部径18.2cm、底部径6.1cm、器高25.4cmを測る。口縁部は、胴上部からゆるやかに短かく外反する。内外に棱線は認められない。口唇部は、わずかにくぼむがほぼ平坦で、内傾する。胴部はふくらみをもたず、ゆるやかに底部につづき、底を形成する。底部はあげ底を呈し、厚い。内外とも口縁部はヨコナデされ、胴部はていねいにナデされる。底は指頭でナデられている。胎土は1mm大の砂粒を多く含み、焼成も堅い。色調は淡黄褐色を呈し、胴下半部はやや風化がみられる。78は全周の約半分ほど遺存した甕で、P2、P4などから出土した。推定径は22.8cm。幾分はった胴部の最大径は20.1cmを測る。胴上部は内湾し、口縁部はくの字を呈しており、やや長く延びている。内面の口縁と胴部の接合部は明瞭な棱を形成している。口縁内外の調整はヨコナデ、胴部外面上部はタテハケののちナデ消すが、ハケが完全には消されてない。胴下半部は、浅いタテハケ目が施こされている。胴部内面上部は、左あがりの斜行ハケ目を施したあとナデ消すが、一部ナデ消されずに残存する。胴下半部は、ナデ調整されている。胎土は1mm以下の細砂粒を多く含み、焼成は堅い。色調は明赤褐色を呈している。79は遺存約3%ほどの小破片で、推定口径は不確実だが、23.5cmを測



第22図 4号住居出土土器③(1/4)

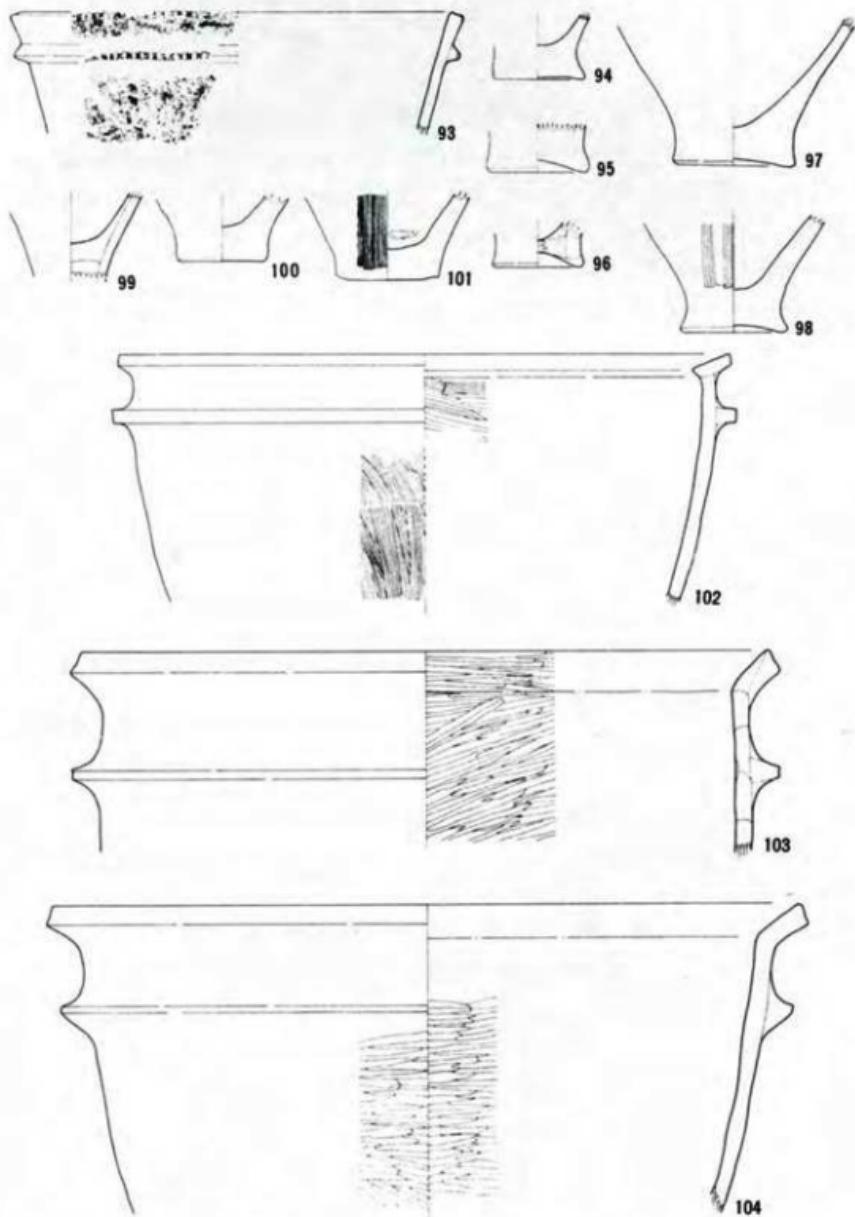
る。短かく外反した口縁部上面は平坦で、口唇部は肥厚し、端部はくぼんでいる。胴部と口縁の接合面はしっかりと棱線を形成している。胴部はふくらみをもたず、ほぼまっすぐに外傾している。口縁部外面と胴上部はヨコナデ、その下部は、左あがりの斜行ハケ目調整される。内面は、口縁部から胴上半部にかけては、ヨコハケ目で、部分的にナデ消される。その下部はナデ調整される。胎土は1mm大の砂粒を多く含み、焼成は堅い。色調は淡黄褐色を呈し、胴部にススの付着がみられる。80は褐色土層からの出土で、全周の約3/4ほど遺存していた。推定復元口径は24.5cm、胴部径は23.5cmを測る。若干ふくらんだ胴部からゆるく内湾し、口縁部との境はすばまっている。そこからゆるく外反した口縁部は外側に肥厚している。口縁部の内外面はヨコナデされ、胴部表面はタテハケ目が施こされている。肥厚した口縁の下面は、指頭おさえにより形成されている。内面は、ヨコハケ目のちナデられており、胴部と口縁部の境に5mmほどの幅で、ハケ目が残存している。胴部調整はていねいなナデ調整である。胴下半部表面は赤変風化しており、二次的に火をうけた痕跡がある。口縁部と胴下半部にススの付着がみられる。胎土は1mm大の砂粒を多く含み、焼成は堅い。淡黄褐色から淡黒褐色の色調を呈している。81は褐色土層からの出土が多く、全周の約3/4ほどの遺存がある。推定口径は27.5cm、ふくらみのない胴部の最大径は口縁下にあり、24.7cmを測る。胴部はそのままゆるく内湾して底部へと続く。口縁部は胴部からゆるく外反しており、棱線はみられない。口唇部は隅丸を呈している。外面調整は、口縁部ヨコナデ、胴部は左あがりの斜行ハケ目が施こされる。内面調整は口縁部ヨコナデ、胴上半部はヨコハケ目、下半部は風化していく定かではない。胎土は1mm大の破片を多く含み、色調は淡黄褐色を呈している。焼成はやや軟かい。器表には、部分的にススが付着している。83は褐色土層やⅦ層から出土した約3/4の遺存度をもつ甕で、口径は21cm、胴部径19cmを測る。胴部は若干はりぎみで、ゆるく外反する口縁部へと続く、口縁端面は隅丸を呈し、内傾している。口縁下3cmのところに断面三角形の突帯が一条めぐっている。口縁と胴部の境はわずかに棱をもっている。口縁部の内外から突帯下部までヨコナデが施こされ、その下位はタテハケ目調整される。胴部内面はていねいなナデである。胎土は1mm大の砂粒を多く含み、焼成は堅い。色調は淡黄褐色から淡赤褐色を呈している。85はいわゆる中溝式甕の胴上部で外反する口縁を欠いた小破片である。口縁下3.5cmの位置に、押圧キザミ目が施こされた一条の断面三角突帯がめぐっている。色調は淡黄褐色を呈し、焼成は軟質である。87~93は下城式甕の口縁部である。87は埋土褐色土から第Ⅶ層にかけて出土した。推定復元口径は33cmを測り、胴部から口縁部にかけてはまっすぐに外傾する。口唇部は内側に高くくぼんでいる。口縁下4cmの位置に一条のするどい



第23図 4号住居出土土器④(1/4)

第4章 遺物

断面三角突帯がめぐり、この突帯の下端と胴部との接合は一部不充分な部分がある。突帯には、するどい押圧キザミが施こされている。胴部の器壁は突帯を境にして、上方が厚くなっている。外面の調整は、口縁から突帯上部まで、ヨコハケののちヨコナデされており、突帯下部は細かなタテハケが施こされる。内面は、ヨコハケののちそれをナデ消している。⁸⁹は第Ⅶ層出土の小破片で、ゆるやかに外傾した胴部が突帯上でさらにわずかに外反する。口縁下2cmの位置にある一条の突帯上と、口縁外端には、上下同時に小さなキザミ目が施こされている。口唇部はくぼみを呈し、内側に高い。口縁外面と内面はヨコナデ調整され、突帯下はタテハケ目が施こされている。⁹¹は第Ⅵ層の出土。口縁外端に浅い押圧キザミが施こされるが、突帯上にキザミ目があるかは、欠失しているため定かでない。⁹²は第Ⅵ層出土で、突帯上部は外反している。⁹³はP1中から出土した約36の遺存度をもつ小破片で、推定口径30cmを測る。胴部から口縁部までほぼまっすぐに外傾している。口縁下3cmの位置にある一条の三角突帯と、口唇部外端には、上下同時に押圧だかするどいキザミ目が施こされている。このキザミ目の内側には、ハケ目と同一条痕が認められ、また、キザミの角度もすべて同一角なので、キザミの原体は、ハケ目原体を使用しているものと思われる。口縁部はヨコナデされ、突帯下はタテハケ目が施こされている。内面はナデられる。器表には炭化物が厚く付着している。胎土は微砂粒と、数mm大小の小石を含み、焼成はやや軟らかい。色調は明褐色を呈している。⁹⁴～¹⁰¹は甕の底部である。⁹⁶は⁷¹と類似した甕の底部と思われ、P12から出土した。厚いあげ底を呈している。¹⁰²～¹⁰⁵は大型甕の口縁部と底部である。¹⁰²は褐色土層から出土した。遺存は全体の3分の1で、口径は40.5cm、胴部最大径は、突帯をふくめて41.5cmを測る。外あがりになる口縁部は胴部上端に貼りつけられており、その内端は突出している。口縁下4cmの位置にある突帯は、台形状を呈しているが、断面観察によれば、最初、断面長方形の粘土帯をはりつけたのち、そのすそに粘土を充填していることがわかる。そのため、口縁部と突帯はU字形を呈している。口唇部、突帯端部ともくぼみはなく平坦面をなしている。調整は口縁部はヨコナデ、胴部の一次調整はタテハケ目が施こされ、突帯貼付後にその周辺をヨコナデするが、突帯下にはタテハケ目が遺残する。突帯より下位では、さらに二次的に左あがりハケ目が施こされ、胴中位に残る一次調整のタテハケ目を切っている。胴部内面上部は、ヨコおよび左あがりのハケ目が施こされ、それより下位では、タテおよび左あがり方向にユビナデされている。胎土は1mm大小の砂粒を多く含み、焼成は堅い。色調は淡黄褐色を呈し、口縁部から突帯にかけて大きな黒斑が認められる。¹⁰³は約36ほど遺存した口縁部片で、推定口径47cmを測る。外反した口縁部は胴上端に接合されている。口唇部は内側に高く、端

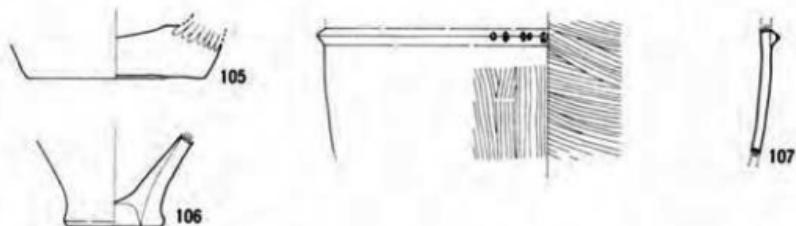


第24図 4号住居出土土器⑤(1/4)

部はくぼんでいる。口縁下8.5cmの位置にあるすそ広がりの台形突帯は、最初に、台形の粘土帯を器壁にはりつけたあとその上下を粘土で充填したものである。突帯の端部はくぼみを呈している。調整は、外面ヨコナデ、内面ヨコ方向のヘラミガキである。胎土は1mm大の砂粒を多く含み、焼成は軟調である。色調は、外面明赤褐色、内面淡黒色を呈している。104は全周の約3/6ほどの破片で、推定口径は50.5cmを測る。くの字に外反する口縁部は、胴上端から連続している。口縁下7cmの位置にある突帯は、大きくえひろがりになり、その端部にわずかに平坦面をのこすものの、ほぼ三角形を呈している。調整は風化が著しいが、口縁から突帯にかけてはヨコナデ、突帯下位はヨコヘラミガキ、内面もヨコヘラミガキが施こされている。胎土は1mm大の砂粒を多く含み、焼成も堅い。色調は淡赤褐色を呈している。

5号住居址（第25図、図版18）

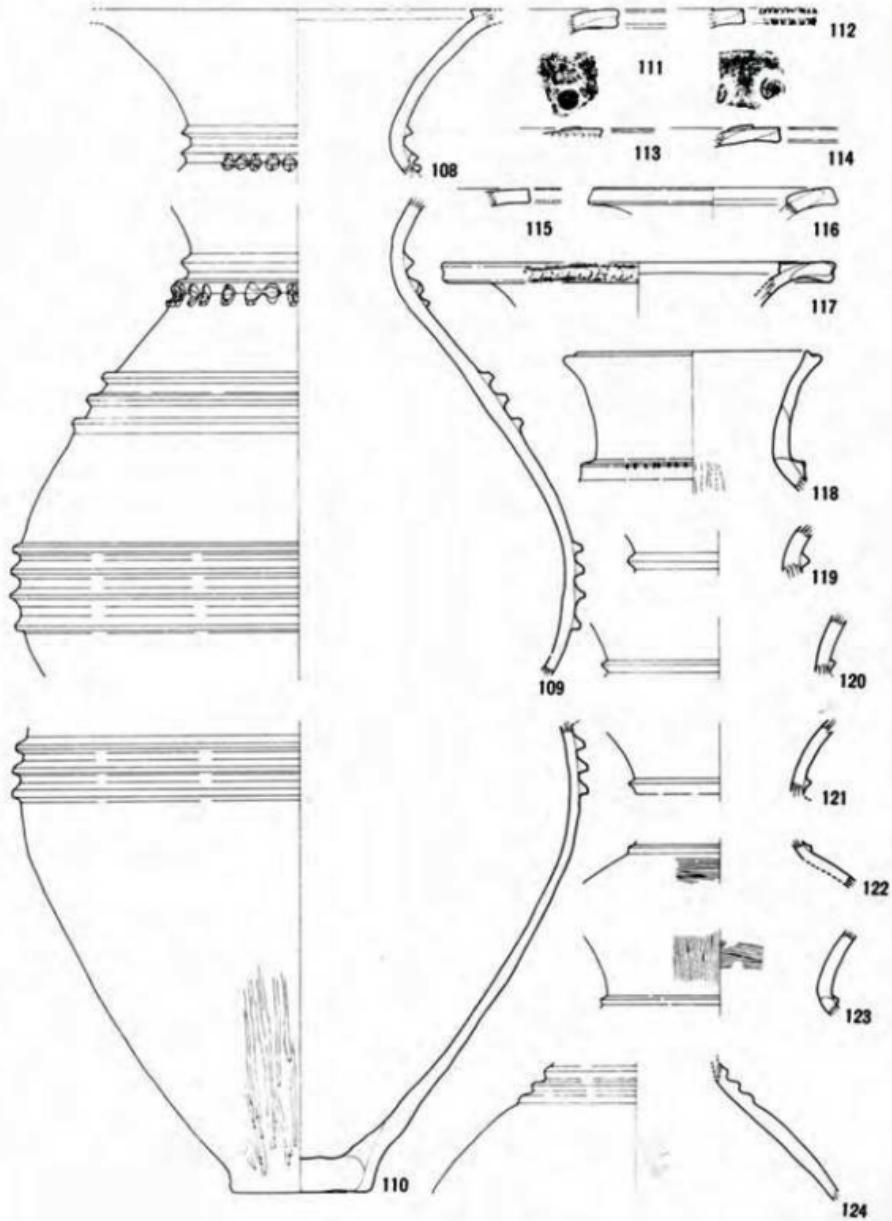
土器は2点しか出土しなかった。いずれも床面出土である。107は口縁部と胴下半部以下を欠くが、器形の特徴から中溝式の甕と思われる。破片の大きさは全周の約3/6ほどだが、胴部径は30cmほどと推定される。一条めぐっている突帯には、比較的するどいキザミ目が施こされているが、その上下に粘土のもりあがりがみられるため、押圧キザミと思われる。突帯の上下はナデ調整され、その下位には浅いが荒いタテハケ目が施こされている。胴部内面の調整はヨコハケ目である。胎土は1mm以下の細砂粒を多く含み、焼成は軟調である。色調は淡黄褐色を呈している。106は甕の底部で、外反した平底が特徴である。胎土は1mm大の砂粒を多く含み、焼成は堅い。色調は外面淡黄褐色、内面淡黒色を呈する。



第25図 4号住居出土土器⑥(1/4)
5号住居出土土器

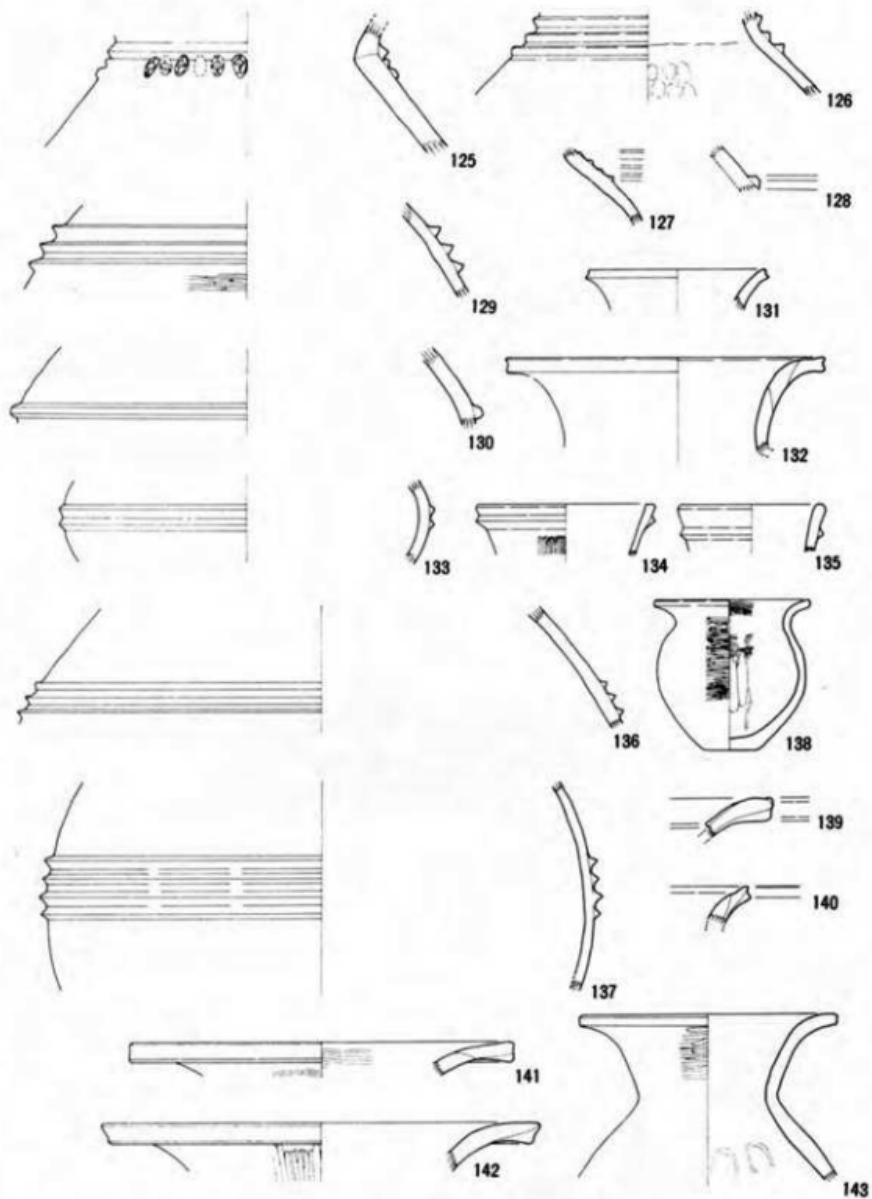
6号住居址（第26～36図、図版19～28）

6号住居址からは、実測可能なものは壺57個体、高杯1個体、甕92個体が出土した。108は口縁端部を欠失した鋤先状口縁をもつ壺の口頭部で、全周約4分の3程度残存している。頭部径は、14.5cmを測る。頭部には、たんせいな三角突帯が2条めぐり、突帯下に約1cmの間隔で楕円形浮文が貼りついており、その中央をヘラ状工具でナデつけている。突帯の周囲はヨコナデ、口縁部はタテ方向のこまかかなハケ目が施こされ、口縁内側はヨコハケののちナデ、頭部は指頭によるおさえナデ調整される。胎土は1mm～5mm大の砂粒、小石を含み、焼成は堅い。色調は淡黄褐色を呈している。109、110は直接接合しないものの、同一個体と思われるもので、第二II層、III層から出土している。頭部突帯から底部までの高さはおよそ50cm、胴部最大径は38cmを測る。胴部最大径は中位にあり、上下にゆるやかに内湾していて、長胴でナデ肩の壺である。頭部はゆるやかに外反し、そこにはたんせいな三角突帯が2条めぐっている。下段の突帯下に1.5cm間隔で楕円浮文が貼りつけられており、その中央をヘラ先状のものでナデツケている。内面調整はていねいなナデ調整で、外面口頭部はていねいなナデ、突帯はツマミヨコナデ、肩部はていねいなナデとミガキ、胴部突帯はツマミナデされるが、突帯間にはヨコミガキがはいる。肩部・胴部突帯とも、ナデつけは部分的に不充分である。胴部突帯下はヨコ方向にミガかれる。胴下半部はていねいにナデられるが、底部近くは、さらに粗略なタテミガキが施こされている。胎土は5mm大の小石も含んでおり、焼成は堅い。色調は褐色を基調に黒褐色・黄褐色がまじっている。内面は淡黄褐色を呈している。112は口唇部に一条の凹線とその上下に羽状キザミが施こされている。114、115は住居内土壤Iから出土した。两者とも小破片で、口唇部はくぼみを呈し、下側が若干外に張り出している。114の口縁上面には、2cmの間隔で径1.7cm高さ2mmの円形浮文が貼りつけられている。117は約4分の3ほど遺存した口縁部で、鋤先状を呈している。推定復元径は26.4cmを測る。口縁端部は、粘土はりつけにより下へたれさがりぎみに肥厚しており、口唇部には、刺突列点文が施こされる。胎土は1mm以下の砂粒をわずかに含み、焼成は堅い。色調は黄褐色から淡褐色を呈している。調整は全面ヨコナデされる。口縁端部には黒班がみられる。118は推定口径17.3cmを測る。口頭部のひらきの弱い壺で、口唇部は大きくくぼんでおり、頭部に一条のキザミ目の施こされた三角突帯がめぐる。119は約4分の3ほど遺存した壺の肩から頭部で、推定頭部径19cmを測る。なで肩の胴上部からすぐに頭部が外反していて、その変換点に三角突帯が一条めぐっている。それの下部に接し1.5cmほどの間隔をもって、楕円浮文が貼付けられている。この貼付け方法は、丸い粘土を親指と人差し指でつまみながら貼りつけ、さらにヘラ状工具でヨコ方向に中央部をおさえ

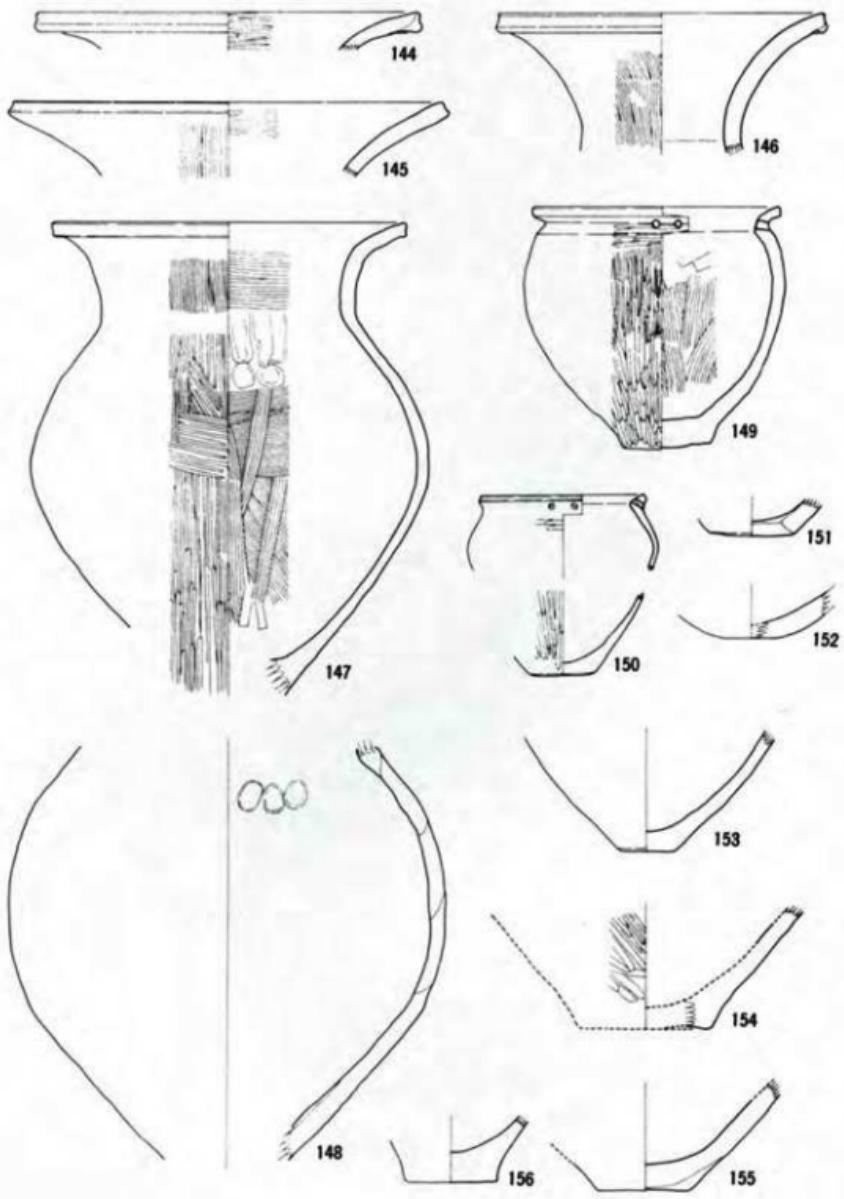


第26図 6号住居出土器①(1/4)

つけてゆく。126は肩から頸部にかけて3条の三角突帯をもち、127は矮少化した4条の三角突帯を肩部にもつ。130は胴部中位の破片で、1条の台形突帯をもつ。133は $\frac{1}{2}$ ほどの小破片で、褐色土層から出土した。かなり胴の平べいにはる壺の胴中位で、2条の三角突帯がめぐっている。134、135は長頭壺の口縁部で、両者とも口縁下1cm～2cmの位置に1条の三角突帯がめぐっている。135は褐色土層出土で、遺存は全周の約 $\frac{1}{4}$ ほど、推定口径は10cmを測る。全面ナデ調整されており、胎土は細かい。色調は淡黄褐色を呈し、焼成も堅い。136は褐色土層出土。肩部に三条の三角突帯がめぐっている。137は胴中位に4条の三角突帯がめぐった大型壺の破片で、推定胴部径38cmを測る。突帯部はヨコナデ、胴上位はタテナデ、下位はミガキが施こされ、内面上位はタテナデ、下位はヨコナデ調整される。褐色土層出土。138は張出し部のベッド床面ピット中から出土した。完形に復元できた小型壺である。口径10.5cm、胴部最大径10cm、器高10.3cmを測る。口唇部は隅丸で、底部は径3.5cmを測る。器表は頸部から胴中位まで、タテハケ目のうちヨコヘラミガキが施こされ、部分的にハケ目が残る。胴下半部から底部にかけては、単位の不明瞭なミガキ調整される。内面口縁部は、ヨコハケのうち部分的にナデ消される。肩部はヨコハケのうちナデ、中位から底部にかけて指頭によるタテナデが施こされる。胴中位には5cm×3cmほどの黒班がみられる。胎土は砂粒をあまり含まないが、2～3mm角の小石が若干混入する。焼成は堅く、色調は褐色を呈している。139は湾曲した口縁部が鋤先状を呈している。142は褐色土層や第Ⅷ層から出土した大きく開く口縁部で、推定口径29.5cmを測る。口唇部はくばみを呈し、下端部が上端より内側にある。頸部はタテヘラミガキが施こされている。色調は淡赤褐色を呈している。143は肩部から口縁部にかけての約 $\frac{1}{2}$ 強の破片で、ナデ肩そして、頸部からすぐ外反する口縁部をもつ。口径はいびつだがおよそ18.5cmほど。頸部径は9.4cmを測る。口縁部はヨコナデ、頸部から胴部はヨコヘラミガキ調整される。内面頸部はていねいなヨコ方向のナデ、肩部には指頭押圧ナデが施こされ、指痕が残る。144は約 $\frac{1}{2}$ 遺存した朝顔状に開く壺の口縁部で、推定復元径25.8cmを測る。口縁器表はヨコナデ、内面はヨコヘラミガキが施こされる。褐色土層出土。145は田層出土。やはり朝顔状に開く口縁部で、風化が著しく調整は判然としないが、内面ヨコハケ目、外面タテハケ目と思われる。147は褐色土層から出土した底部を欠く壺で、口径24.5cm、胴部最大径24.6cmを測る。なで肩で、最大径は胴中位にある。頸部はゆるく外反したあと、口縁部で急に外反する。口唇部は内くばみを呈し、平坦面は垂直に近い。口縁部はヨコナデ、頸部はタテハケ目が施こされる。胴上半部はタテハケのあとヘラミガキされるが、ハケ目は完全にミガキ消されない。胴中位は左あがりハケ目のあとヨコ方向にヘラミガキされる。胴下半部はタテハケ目

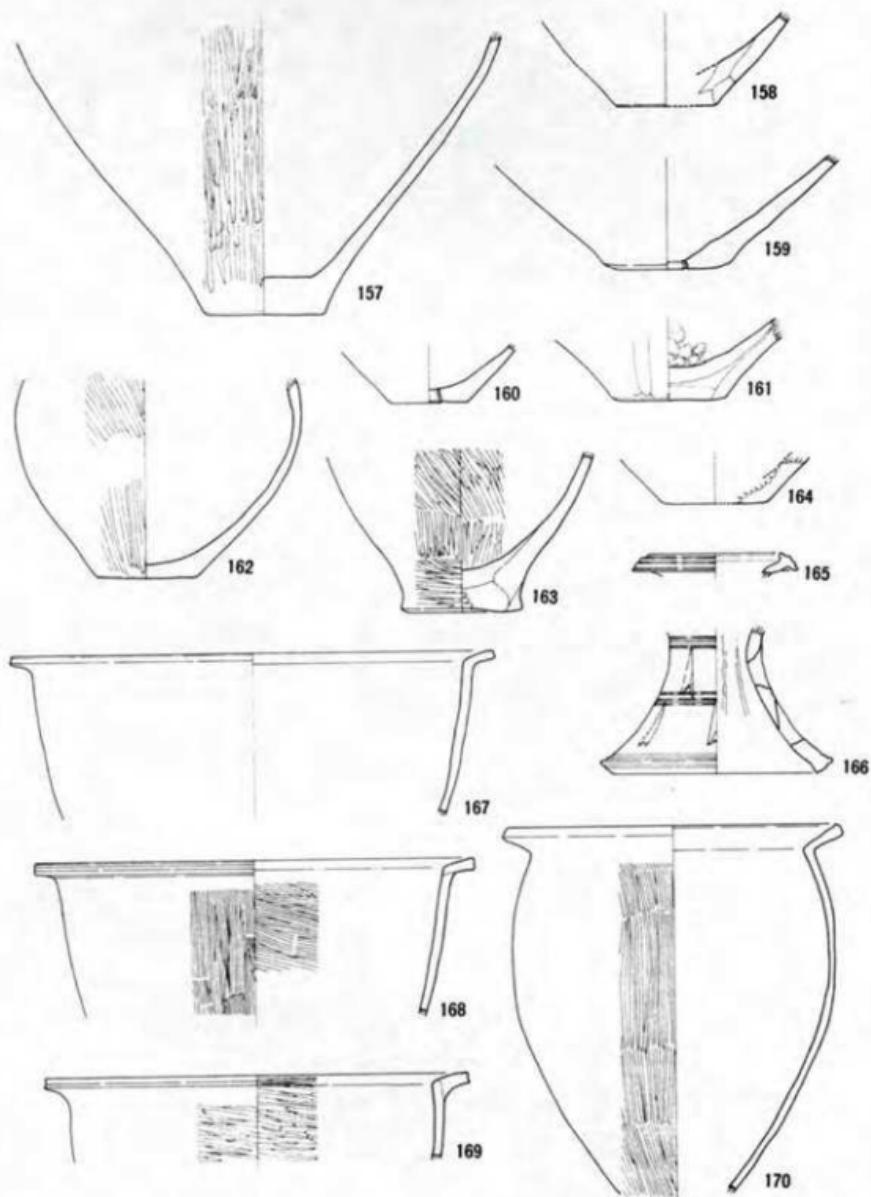


第27図 6号住居出土土器②(1/4)



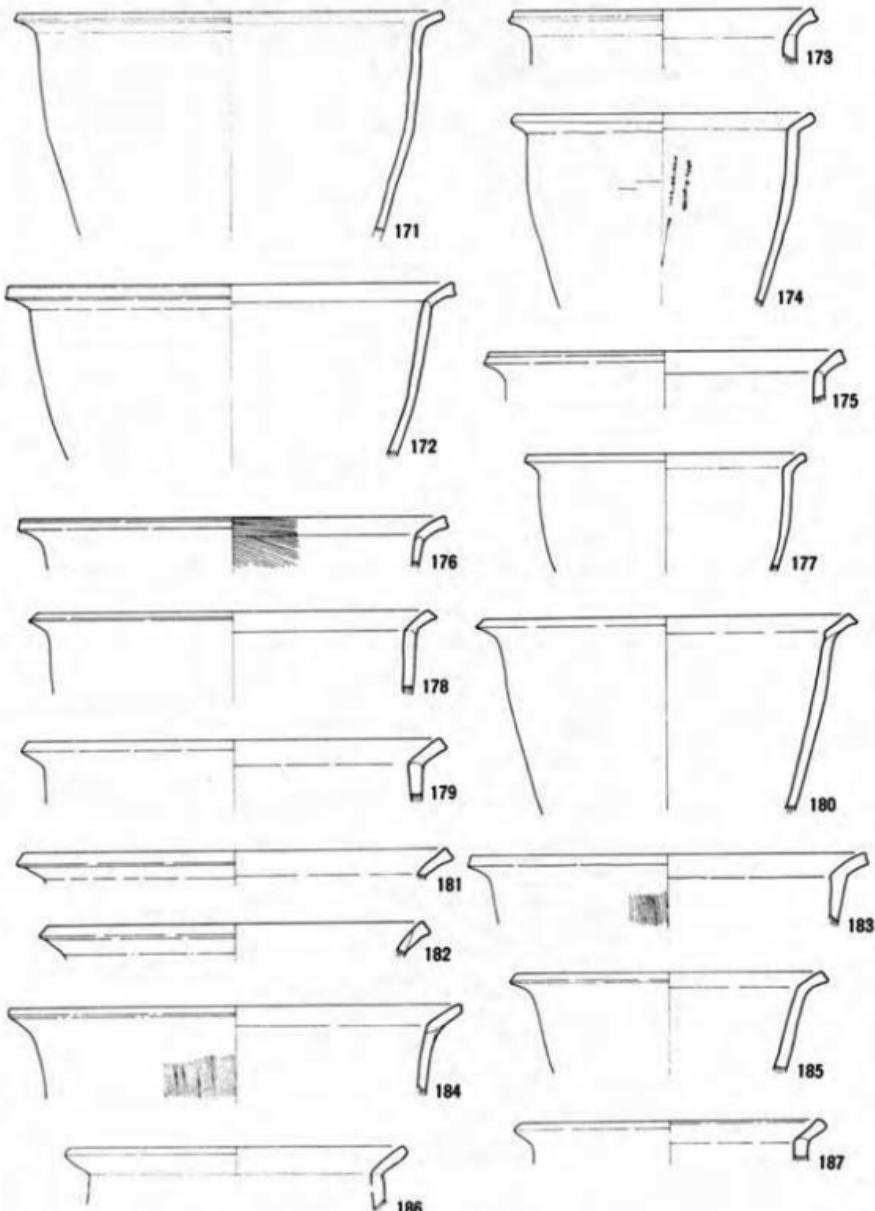
第28図 6号住居址出土土器③(1/4)

のあと、タテ方向にハケ目の凸部だけにヘラミガキされる。内面は、頭部ヨコハケ目、肩部、指おさえナデされ、指の幅でくぼみがみられる。胴中位は、ヨコハケののち部分的にタテハケ目が施こされ、胴下半部から底部にかけて、タテハケ目が施こされる。**148**は完形に復元できた無頭壺である。口径は16.6cm、胴部最大径は17.5cm、底部径5.9cm、器高16.4cmを測る。口縁部はくの字状にたちあがっており、胴部と口縁部の境には、1.5cm間隔で径5mmの穴が2つずつ2対対向して穿孔されている。穿孔は外から内へなされている。胴部は丸く、最大径は中位から若干上にある。底面は平底を呈するがデコボコがみられる。口縁部はヨコナデ、胴部から底部までタテハケののちタテヘラミガキが施こされ、内面の調整は、胴上半部においてハケ目原体状のものでナデ調整され、原体の外かく線が圧痕として認められる。下半部はタテハケ目、底部はナデが施こされる。**150**は底部と胴上半部から口縁部が直接には接合しないが、同一個体と思われる小型の無頭壺である。口径は11.2cm、胴部最大径は12.8cmを測る。最大径は胴上位にある。内傾した胴上半部にほぼ直交した口縁部の上面は平坦で、内面の縁はしっかりとっている。口唇部は、わずかにくぼみを呈している。胴と口縁の境に、1.5cmの間隔で2個2対の穴が穿かれている。穿孔は、内から外へなされている。口縁部の調整は、指のツマミナデ、胴外面はナデられており、部分的にヨコ方向のヘラミガキがはいる。内面はナデ調整である。胴下半部はタテ方向のヘラミガキが施こされている。胎土は1mm大の砂粒を含み、焼成は堅い。色調は淡褐色を呈するが、かなりの部分が黒斑で占められている。**151**は大型壺の胴下半部から底部にかけての約3%遺存した破片で、褐色土から出土した。突帯をもつ壺になると推定される。**163**は住居址内土塙IIから出土した壺の底部である。遺存は%で、底径は8cmを測る。底部はあげ底を呈する。調整は内外ともタテ方向のヘラミガキで、底部外面のみヨコ方向のヘラミガキが施こされる。色調は、内面は黒色を呈するが、外面は淡黄褐色である。焼成は堅い。**165**、**166**は瀬戸内系の土器である。**165**はT字に肥厚した口縁部に三条の凹線が施こされている。壺もしくは甕の破片で、遺存は約3%ほどである。推定口径は11cmを測る。調整は内外ともヨコナデが施こされ、胎土は長石、かっ石を含むが、精製された粘土である。焼成は堅く、色調は淡赤褐色を呈している。褐色土層からの出土で、4号住居址から出土した**50**に非常に近似している。**166**は高环の脚部で、やはり褐色土層から出土した。小破片で、不確実ではあるが、脚裾径は15.5cmを測る。脚つけねに施こされた三本の沈線と中位に施こされた三本の沈線により、脚が二分され、矢羽根透しが二段に施こされる。この透しは、脚内面まで貫通しており、その切断面ははぐくミガキ状を呈しているため、金属器などのするどい刃先であけられた可能性が高い。脚下端部の上面には沈線二条が施こ



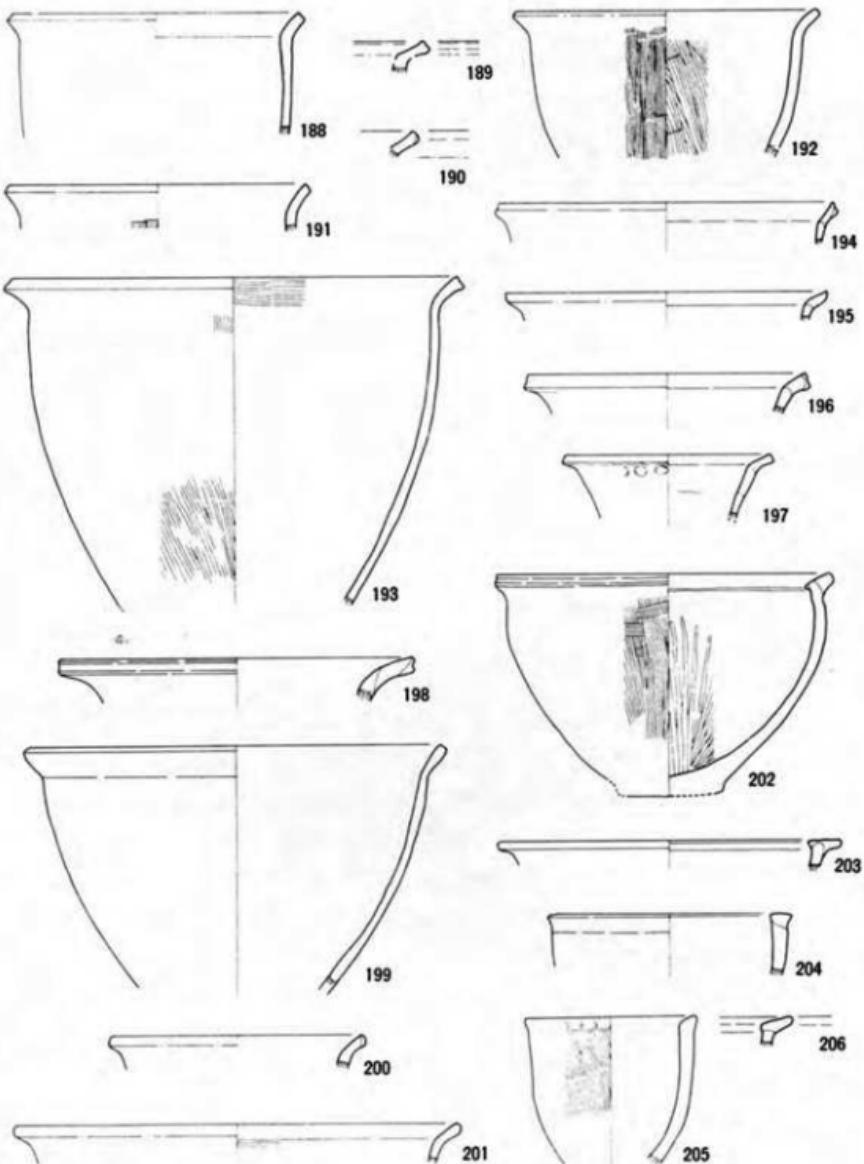
第29図 6号住居址出土土器④(1/4)

され、下面にも一条の凹線があがっている。器表はていねいに磨かれており、裾部はヨコナデ調整される。脚内面は、しばり痕が残り削られてはいない。下半部はヨコナデが施こされている。胎土は長石を含むが細粒であり、粘土も精製されている。焼成は堅い。色調は黄褐色を呈する。¹⁶⁷は約半遺存した甕の口縁部で、推定口径は32.5cmを測る。口縁部は外あがりになり、口唇部はくぼんでいる。胴部は張りがなく、内湾しながら底部へと続いている。口縁部はヨコナデ調整され、胴部はナデられる。内面は指頭によるていねいなナデ調整が施こされる。胎土は1mm大の砂粒を多く含み、焼成は堅い。色調は淡黄褐色を呈する。褐色土層出土。¹⁶⁸も褐色土層から出土した。推定口径は29.5cmを測る。口縁部は、胴上部端の上から接合されており、外あがりを呈する。口唇部はしばんでおり、平坦面はほぼ垂直である。胴部は張りがなく、内湾しながら底部へとつづく。口縁部はヨコナデ、胴表面はタテハケ目、内面は外面より荒いヨコハケ目が施こされている。胎土は1mm大の砂粒を多く含み、焼成は堅い。色調は淡黄~淡黄褐色を呈する。¹⁶⁹は褐色土層中と住居内土壤IIから出土した。遺存は約半ほどで、推定口径は28.4cmを測る。胴上半部はいくぶん内湾しており、口縁部はその上端外側に接合されていて外あがりになる。口唇部はくぼみを呈する。口唇部から口縁下面はヨコナデ、胴表面はヘラミガキ、口縁上面はヨコヘラミガキ、胴内面はヨコハケののちヨコヘラミガキ調整される。胎土は1mm大の砂粒を多く含んでおり、焼成は堅い。色調は淡黄褐色を呈している。¹⁷⁰は褐色土層中より出土した。遺存は約半で、底部を欠く。推定口径は22.7cm、胴部最大径は21.5cmを測る。口縁は胴上端外面から接合されており、くの字状を呈する口縁の口唇部上端はねあがっており、いわゆるはねあがり口縁を呈している。器形に北部九州の影響を強くうけていて、器壁も薄く、他の甕とは一線を画しており、もちこみの可能性もある。口縁はヨコナデされ、胴表面はタテハケ目、内面はナデ調整される。胎土は1mm大の砂粒を多く含み、焼成も堅い。色調は淡黄褐色を呈している。3号住居址出土の³¹と類似している。¹⁷¹は第III層出土の小破片で、推定径は不確実だがおよそ20.7cmを測る。かなりもちあがって傾斜のきつくなった口縁の端部は肥厚し、口唇部はくぼんでいる。調整は、一部風化がみられるが、内外ともヨコナデである。胎土は1mm大の砂粒を多く含み、焼成はやや軟らかい。色調は淡赤褐色を呈する。¹⁷²は褐色土層出土の小破片で、推定復元径は24.2cmを測る。張りがなくまっすぐにおり胴部からもちあがって、くの字になる口縁部がのがる。口唇部はくぼみを呈している。口縁と胴部の境の内側棱線はしっかりしている。全内ヨコナデ調整される。胎土は1mm大の砂粒を含み、焼成は堅い。色調は淡黄褐色を呈する。¹⁷³は黒色土層で、口縁部がかなりもちあがり、口唇部の傾斜も大きい。復元径は27.3cmを測る。



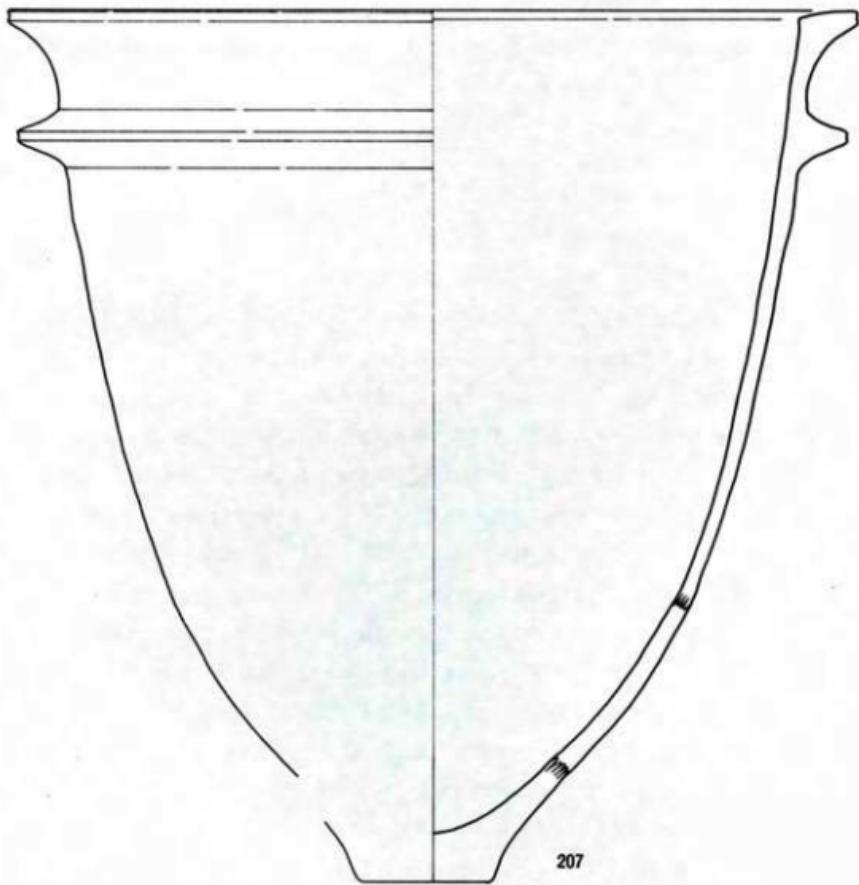
第30図 6号住居址出土土器⑤(1/4)

口縁部からはヨコナデ、胴外面はタテナデされる。胴内面はていねいにおさえナデされる。胎土は1mm大の砂粒を多く含み、焼成は堅い。色調は淡褐色を呈する。¹⁰⁷は第III層出土で、もちあがった口縁の内側が内湾し、つまれていくふんはねあがりを呈している。口唇部は平坦である。推定口径は21cmを測り、内外面ともヨコナデ調整される。胎土は砂粒をあまり含まず、焼成は堅い。色調は淡黄褐色を呈している。¹⁰⁸は第II層から出土した推定口径20.4cmを測る口縁部で、胴部からカーブしてもちあがった口縁部がある。口唇部は平坦で、調整は口縁部ヨコナデ、胴部はタテハケ目である。¹⁰⁹は約%遺存した小型甌で、口径は20.5cmを測る。第II層と褐色土層から出土した。はりのない胴部とゆるく外反した口縁がみられ、口唇部は丸い。調整は口縁はヨコナデ、胴上部は荒いタテハケのあとヨコナデが施こされるが、ハケ目は消されていない。その下部は細かいタテハケ目が施こされる。内面は左あがりの荒いハケ目である。器表にはススが付着している。胎土は1mm大の砂粒を多く含み、焼成は堅い。色調は淡黄褐色を呈している。¹¹⁰は第III層出土の中型甌で、張りのない胴部からゆっくり外反した口縁部につづく。口縁端は肥厚していて口唇部はくぼみを呈する。推定口径は30.8cmを測る。口縁部はヨコナデされ、胴上端は7本/14mmほどのタテハケ目のちナデられる。胴上位はタテハケののちそれをナデ消す。胴下位は、タテハケ目を部分的にナデ消している。内面はヨコハケ目が一部残るが、指によるていねいなナデである。胎土は1mm大の砂粒を多く含み、焼成はやや軟らかい。色調は淡黄褐色を呈している。¹¹¹は住居内土甌Iより出土した。推定口径23cmを測り、若干外傾した胴部に、強く立ちあがった口縁がつく。口縁端は肥厚しており、口唇部のくぼみも大きい。全面ヨコナデ調整される。胎土は1mm大の砂粒を多く含み、焼成も堅い。色調は淡黄褐色を呈し、外表面にはススが付着する。¹¹²は第2層出土。大きく外傾した胴部に、くの字になる口縁部がつく。口縁部と脚部の接合部内面は稜をもつ。推定口径は14.2cmを測る。口縁下面は指頭押圧によってへこんでいる。内外とも指頭によるヨコナデ調整されている。色調は淡褐色を呈し焼成は堅い。¹¹³は甌というよりは鉢に近く、推定口径は28.3cmを測る。ゆるく内湾ぎみにたちあがった胴部から外傾して口縁部が続く。口縁端は肥厚しており、口唇部はほとんど平坦である。調整はナデと思われるが、風化が著しく判然としない。胎土は砂粒をあまり含まず、焼成は堅い。淡黄褐色を呈する。¹¹⁴は約%ほど遺存した鉢で、第II層から出土した。口径は22.6cm、器高15cmを測る。胴上半部は内湾しており、その上端外側に台形口縁が貼りつけられるがナデつけ時に、内面にはり出している。口縁上面はほぼ平坦で、口唇部は若干くぼみを呈する。口縁部の調整はヨコナデで、内側にはみ出した部分のナデつけは不充分である。胴上半部は、ヨコハケののちタテハ



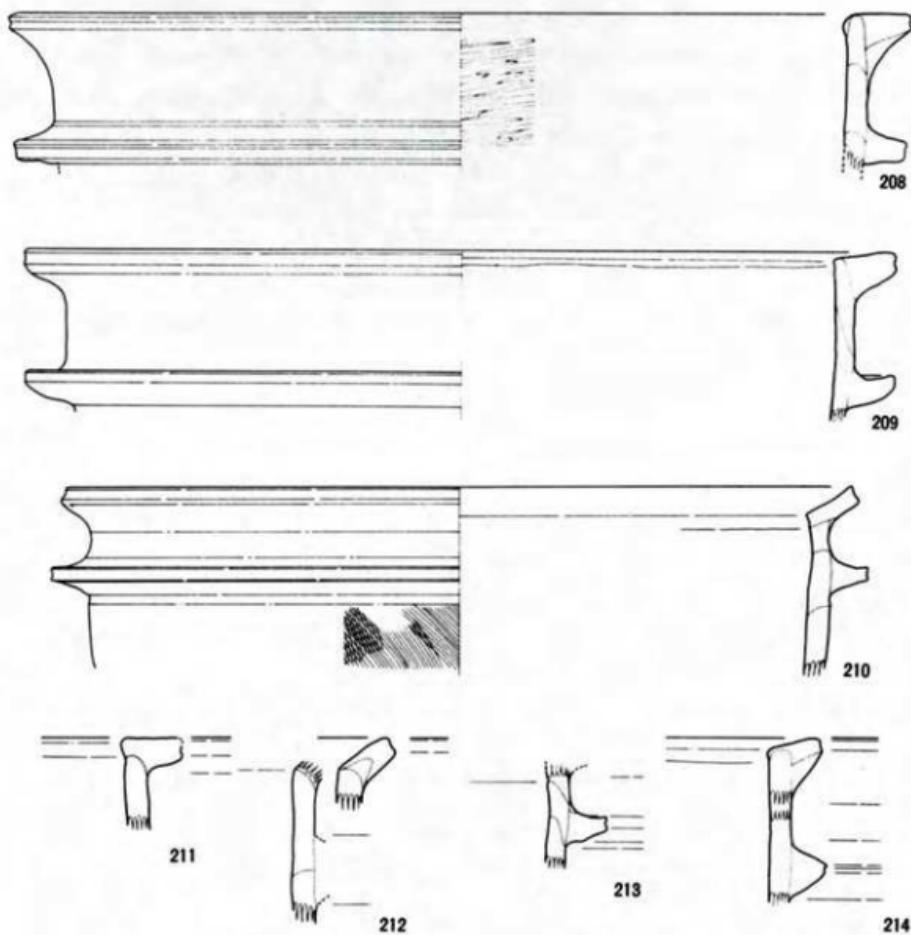
第31図 6号住居址出土土器⑥(1/4)

ケが施こされ、のち部分的にナデ消される。胴中位から底部にかけてタテハケ目が施こされ、部分的にナデ消される。底部は風化しており、調整が判然としない。内面はヨコナデされたあと、胴下位、底部ではタテ方向のヘラミガキが施こされるが、胴上位ではそれが粗になり、暗文状になる。胎土は1mm大の砂粒を多く含み、焼成は堅い。色調は外面淡褐色、内面淡黒色である。²⁰³は第III層から出土した。³⁶ほどの小破片で、推定径は23cmを測る。外傾した胴部の上端部に口縁部がかぶさるように接合されていて、その内端は、内側に突出する。調整はヨコナデで、胎土は1mm大の砂粒を多く含む。焼成は堅く、色調は淡褐色を呈する。²⁰⁴は小型甕の破片で、推定径16.4cmを測る。ほぼ直口した口縁をもち、わずかに外側にはり出している。口唇部から内面にかけてはヨコナデされ、器表は磨かれている。胎土は数mm大の小石を若干含み、焼成は堅い。色調は、淡褐色から黒褐色を呈している。²⁰⁷~²¹⁴は大型甕である。²⁰⁷の胴部と底部は直接接合しないが、同一個体である。口径55.7cm、底部径8.6cmを測り、実測図で復元した器高は58cmほどである。ほぼ半分ほど残った破片は、器表を上にして住居址床面にたおれており、その他の破片は、第III層やP 1中などから出土している。胴部はゆるく外傾しながらのびている。厚い台形状の口縁が、上端外面からかぶさるように貼りつけられていて、その上面はほぼ平坦だが外あがりになっている。口縁下8cmの位置にふ厚い台形状突帯が貼りつけられており、口縁との間はU字形を呈している。口唇部、突帯端部は、U字形にくぼんでいる。胴部は底部近くで急激に内湾し、厚い底部へとつづいている。口縁上面はていねいにナデられ、口唇部はツマミナデ、口縁下面から突帯まではヨコナデが施こされ、突帯下の胴部は、底面までていねいなナデもしくは単位の不明なミガキが施こされる。内面の調整は、上半部ではヨコ方向のミガキ、それより下位ではていねいなナデもしくはミガキが施こされている。胎土は1mm大の砂粒を多く含み、金雲母がみられる。焼成は堅く、色調は内面黒色、外面淡褐色から淡黒褐色を呈し、一部赤変が認められる。突帯から口縁部にかけてスヌの付着が認められ、突帯下面には黒班が認められる。²⁰⁸は推定径60cmを測る。若干内湾ぎみの胴上部に、ふ厚い台形状のL字口縁が貼りついている。口縁部は2cmほどの厚さの粘土帯を胴上端外側に貼りつけたあと、その下部に粘土を充填しているのがわかる。口縁下9cmの位置に台形突帯が一条めぐっている。口唇部と突帯端面は、U字にくぼんでいる。調整は、器表と胴上端はヨコナデ、胴内面はヨコヘラミガキが施こされている。突帯下の胴表面は、ナデ調整である。²⁰⁹は褐色土層中や住居址内土壤II埋土中から出土した。全周の約 $\frac{1}{3}$ の破片で、推定口径58cmを測る。口縁下9cmの位置にある突帯部の径も同一である。まっすぐにたちあがった胴部に、いくぶんもちあがった台形口縁がつく。その上面はおおよ



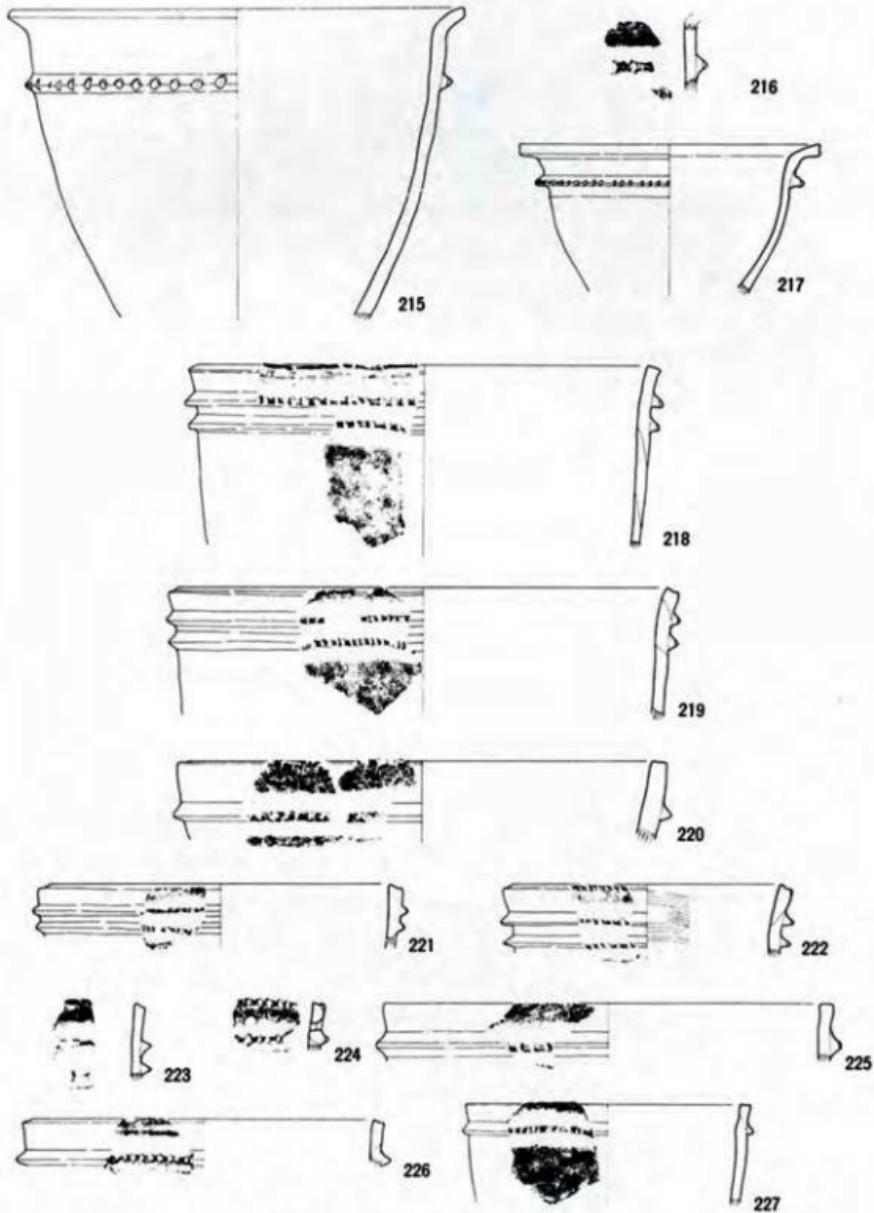
第32図 6号住居址出土土器⑦(1/4)

そ平坦をなし、口唇部はU字にくほんでいる。突帯は上方に湾曲がみられる。その端面はやはりくぼみを呈している。胴部内面は指おさえナデが施こされ、外面はヨコナデされるが、口縁と突帯の接合面胴部は、突帯貼付以前に指おさえナデされている。胴内面は指でナデあげるため指幅でくぼみ、器面にでこぼこを生じている。胎土は1mm～5mm大の砂や小石を含み、金雲母を含んでいるのが特徴である。焼成は堅く、色調は淡赤褐色を呈している。²¹⁰はP1中などから出土した。全周の約 $\frac{1}{3}$ 程度の破片で、推定口径は53cmを測り、口縁下6cmの位置に一条めぐらされた突帯の径は、54.5cmと口径より大きい。胴上端で内傾し、その上に外あがりの口縁が接合されている。口縁部は若干はねあがりを呈し、口唇部はくぼんでいる。口縁下6cmの位置に一条の台形突帯がめぐっている。その端部は、くぼみを呈している。内面から突帯まではヨコナデ調整され、突帯より下位は左あがりのしっかりしたハケ目が施こされている。胎土は1mm～5mm大の砂粒、小石を含み、焼成はやや軟かい。色調は淡黄褐色を呈している。²¹¹は直接には接合しないが、同一個体と思われる胴部と口縁部で、まっすぐにたちあがる胴部と、くの字にまがった口縁が特徴である。口縁の接合は、胴上端面からなされている。器表は全面風化が著しいが、ナデ調整と思われる。焼成はやや軟調で、色調は淡赤褐色を呈している。²¹²、²¹³に類似した破片だが、口縁部と突帯の間隔が狭い。²¹⁴は口縁部と胴部の破片で、直接に接合しないが同一個体と思われる。口縁、突帯とも三角形に近いふ厚いものであるが、口縁部は、まず、直方体の粘土帯を胴上端から端部外側にかけて貼りつけたあと、その下に三角に粘土を充填し、台形突帯としたものである。調整は全面ヨコナデである。胎土は金雲母を含み、焼成は堅い。色調は明赤褐色を呈する。²¹⁵は第III層から出土したいわゆる中溝式の中型甕である。遺存は $\frac{1}{3}$ 強で推定口径30.6cmを測る。胴部はふくらみをもたず、内湾しながら底部へとつづいている。口縁部は、くの字にカーブしながら外反している。口唇部は、若干くぼみを呈する。口縁下5cmの位置に一条の突帯がめぐり、そこに、1.5cmほどの間隔で押圧キザミが施こされる。キザミの中には布痕がみられるので、布をまいた原体で押圧したものと考えられる。突帯から上方は内外面ともヨコナデ、突帯下内面はていねいなナデ、外面はていねいなヨコナデが施こされ、胴部下位では、ていねいなタテナデが施こされている。胎土は1～2mm大の砂粒を含み、焼成は堅い。色調は淡褐色を呈する。²¹⁶も口縁部が欠失しているものの、中溝式甕と思われる破片で、住居内土塙Iから出土した。胴部と口縁の境からおよそ3cm下に、一条の三角突帯がめぐっており、押圧面が方形状を呈していると思われる原体で、押圧キザミが施こされている。突帯上方はヨコナデ、突帯下はタテハケ目が施こされている。内面の調整は、ヨコハケ目及びナデである。²¹⁷は小形



第33图 6号住居址出土土器⑧(1/4)

の突帯表である。約 $\frac{1}{3}$ ほど遺存しており、推定口径は20cmを測る。外傾した胴上部にややもちあがった口縁がつき、その境には、ほとんど棱をもたない。口縁端はいくぶん肥厚し、口唇部は内くぼみを呈するが、その面は垂直である。口縁下2.5cm程の位置に一条の細い突帯があげり、そこに、鋭利なヘラ先で押し切ったキザミが施こされている。内面は風化しているが、外面の突帯から上は、指によるヨコナデ、突帯下は明瞭ではないが、ヨコ方向のヘラ磨きと思われる。胎土は微砂粒を含み、焼成は幾分軟かい。色調は淡褐色を呈し、突帯下に黒班が見られる。**218**～**224**までは下城式の表である。**218**～**223**は**220**を除いて、突帯が二条めぐつている。**218**は約 $\frac{1}{3}$ ほどの遺存で、推定口径31.6cmを測る。ゆるく外傾した胴部は、突帯部からわずかに外反する。口唇部は平坦で、若干外さがりを呈する。口縁下2.5cm、4cmの位置にある二条の突帯は下にさがりぎみで、上下同時にキザミ目が施こされる。このキザミ目の中には、ハケ目がみられ、キザミの角度も均一なため、ハケ目原体を押圧したものと考えられる。口唇部から突帯まではヨコナデが施こされ、それ以下には、細かなタテハケ目調整される。内面は口縁下3cmほどまではヨコナデ、そこから3cmほど下までは左あがりハケ目のあとナデられる。さらにその下位は、タテハケ目が部分的に施こされている。胎土は砂粒をあまり含まないが、数mm～5mmの大い小石が認められる。焼成は堅く、色調は淡黄褐色を呈する。口縁部外面には黒班がみられる。**218**はやや大きめだが、**218**に類似する。**220**は黒色土層出土で、推定口径32.8cmを測る。器壁は比較的厚く、口唇部は若干くぼんでおり、水平に近い。口縁下3.5cmの位置に三角突帯があげり、口唇部外端と、この突帯に上下同時にキザミが施こされている。**225**は第III層出土で、推定径30.3cmを測る。直すぐにたちあがった胴部は、口縁下2.7cmの位置にある突帯から、若干内湾して口縁にいたる。口唇部は水平で平坦面をなす。突帯にはするどいキザミ目が施こされている。外面は風化しているが、ナデ調整と思われる。口縁内面はヨコナデ、その下位は、ヨコハケ目が施こされている。胎土は1mm大の砂粒を多く含み、焼成は軟かい。色調は淡黄褐色を呈する。**226**は第VII層の出土で、約 $\frac{1}{3}$ ほどの小破片であり、確実性に欠くが、推定口径は24.2cmを測る。胴部は直立ぎみで、口唇部はくぼみを呈し、外さがりとなる。口縁下2.5cmの位置に一条の突帯があげり、割に幅広なキザミ目が施こされている。器面調整はヨコナデである。色調は淡褐色を呈し、焼成は幾分もろい。**229**は黒色土層、第III層、第IV層などから出土した。推定口径は32cmを測る。まっすぐに外傾した口縁部で、口唇部はくぼみを呈し、外さがりになる。口縁下2.5cmの位置にある一条の突帯は、端部が丸く、するどい押圧キザミ目が施こされている。口縁部はヨコナデ、突帯の周囲は指のヨコナデ、突帯下は細かなタテハケが施こされる。内面は、左あがりのナナメハケ目のちナ



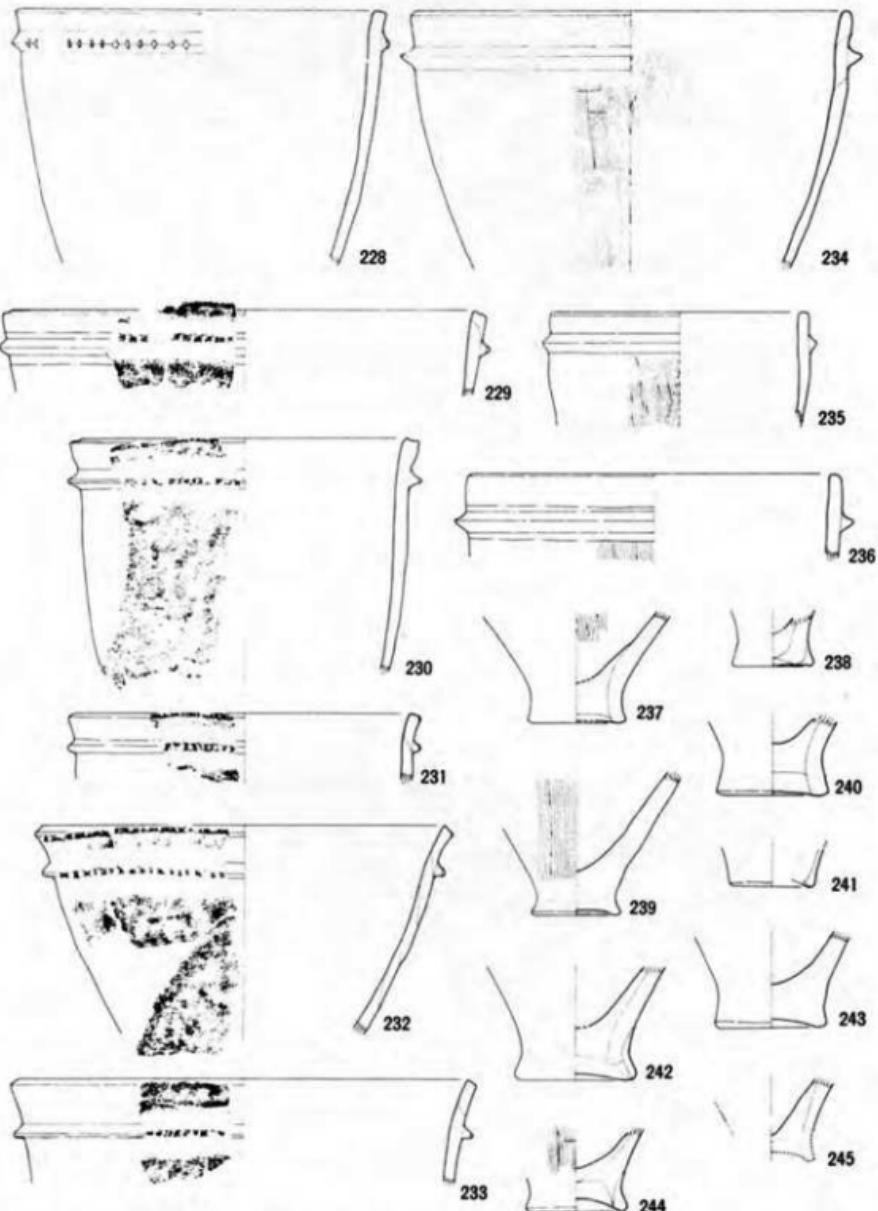
第34图 6号住居址出土土器⑨(1/4)

テ消されている。胎土は砂粒をあまり含まず、焼成は堅い。色調は淡灰褐色を呈する。**230**は推定口径21.1cmを測る。ほぼまっすぐにたちあがった胴部は、口径から3cm下にある突帯の部分からゆるく外反する。口唇部はくぼみを呈し、若干外さがりになる。突帯にはキザミ目が施こされる。口縁外面は、タテハケのあとヨコナデされるが、突帯の接合面にはタテハケ目が残っている。突帯部はヨコナデ、その下位は、細かなタテハケ目が施こされる。内面は上位がていねいなヨコナデ、胴中位から下がていねいなナデ調整される。胴下半部は赤変している。**231**は第III層出土。小破片で不確実だが、推定口径23.5cmを測る。口縁部は突帯部位から外反する。口唇部はほぼ平坦で外さがりを呈する。口縁下2.3cmの位置に一条の突帯がめぐらしく、口唇部外端部と同時にキザミが施こされている。調整はヨコナデである。色調は淡灰褐色を呈する。**232**は第3層やP I中、中央ピットなどから出土した。大きく外傾した胴部が幾分内湾し、突帯部から外反する器形で、甕というよりも鉢に近い。口唇部は若干くぼみ、大きく外さがりとなる。口縁下3cmには一条の突帯がめぐり、太いするどい押圧キザミが施こされている。口唇部外端には、突帯部のそれより細いキザミ目が施こされる。口縁内面から突帯まではヨコナデ、内面はていねいなおさえナデが施こされる。突帯下外面は、ていねいなナデ調整されるが、微細なハケ目の痕跡が認められる。胎土は砂粒をあまり含まず、焼成は堅い。色調は淡赤褐色を呈する。**233**は第III層出土。小破片だが推定口径は30.8cmを測る。口縁部は突帯のところから外反する。口唇部は平坦だが、外さがりになる。口縁下3.5cmの位置に一条の突帯がめぐり、押圧キザミが施こされる。調整は風化ぎみだがナデを主体とする。**234**、**235**はキザミ目の施こされない突帯が一条めぐり、口唇部は丸い。**236**もほぼ同様で、褐色土層から出土した。**237**～**258**までは、甕の底部である。**237**、**239**、**240**、**242**、**243**、**244**、**245**、**246**、**249**～**254**の底部は外反し、あげ底を呈する。**247**、**248**、**253**、**255**、**258**は平底である。**239**は第II層出土。**242**は第III層出土である。

7号住居址（第36図、図版29）

7号住居址から出土した土器は、すべて床面で検出された。

259は朝顔状に大きく開いた壺の口縁部で、頸部は強、口縁は約強ほど遺存している。推定口径は29cm、頸部径は16cmを測る。口唇部は肥厚する。口縁部の調整はヨコナデで、頸部は粗いタテハケ目が施こされる。頸部と肩の境はヨコナデされる。内面はヨコナデと指ナデである。色調は淡赤褐色を呈し、焼成は堅い。**260**は張りのない胴の上端に、外あがりの口縁が接合された甕で、推定口径は27cmを測る。口縁部上面は平坦で、その内端は胴部より内



第35図 6号住居址出土土器⑩(1/4)

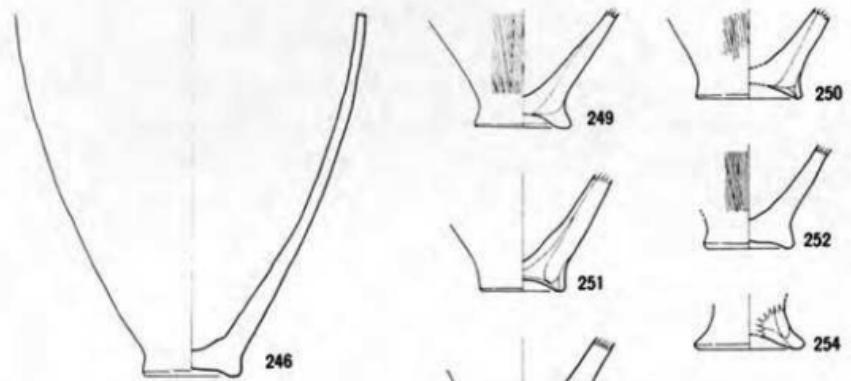
側にはりだしている。口唇部はほとんど平坦で、ほぼ垂直面をなす。口縁部から胴上端の内外はヨコナデ、内面はナデ、外面は浅いが荒いタテハケ目が施こされる。器表全面にススが付着している。胎土は1mm大以下の砂粒を多く含み、焼成は堅い。内面は淡黒褐色、外面は淡黄褐色を呈する。²⁶⁴は下城式壺の小破片で、突帯部から外反した口縁をもつ。口唇部は平坦で、外さがりを呈する。口縁下2.5cmの位置には一条の突帯がめぐり、ここと口唇部外端には、上下同時にするといい押圧キザミが施こされている。口縁から突帯まではヨコナデ、突帯下位ではタテハケ目が施こされる。内面はナデ調整される。外面全面にススが付着する。²⁶⁵は大型壺の突帯部である。

8号住居址（第36図、図版29）

²⁶⁴は住居址床面出土で、9号住居址P6出土の破片と接合した。約3/4弱の遺存で、推定口径は21.5cmを測る。くの字に外反する口縁は、口縁端部が肥厚し、口唇部はくぼみを呈する。調整は、口縁部内外面がヨコナデ、胴部外面は、細かなササラ状の原体でナデ、もしくはタテ方向のミガキをおこなっている。内面はていねいなナデにタテ方向のミガキが暗文状にはいる。胎土は1mm大の砂粒を含み、焼成は堅い。色調は淡黄褐色を呈する。器表にはススが付着する。²⁶⁵は下城式壺で、ほぼ直立する胴部とわずかに外反する口縁部を呈している。口唇部は丸い。口縁下2.5cmの位置に、さがりぎみのキザミ目突帯が一条めぐっている。内面は風化しているが、口縁部外面は突帯部までヨコナデ、突帯下位はタテハケ目が施こされる。推定口径は23.2cmを測る。

9号住居址（第36・37図、図版29・30）

²⁶⁶は住居址P1、P6などから出土した。²⁶⁷ほどの胴部破片である。推定胴部最大径は46.2cmを測り、球形を呈した大型壺と思われる。肩部と胴中位にそれぞれ二条ずつのしつかりした台形突帯がめぐる。突帯に刻まれた押圧キザミは、中にハケ目が残り、また、キザミの角度も均一なため、ハケ目原体で上下同時に刻んだものと思われる。肩部突帯上部は、左あがりあるいはヨコ方向のヘラミガキが施こされ、突帯はヨコナデ調整されている。2つの突帯間は、タテ方向の深いハケ目の上をヨコ方向に磨いてある。胴下半部は、かなり風化しているが、タテハケ目が施こされ、その上をさらに磨いているようである。内面は剥離が著しいが、ナデ調整と思われる。胎土は1~数mm大の砂粒を含み、焼成は風化のためかいくぶんもろい。色調は赤褐色を呈している。²⁶⁸も球形の胴をした壺の小破片で、推定胴径は23cm。



246

247

248

249

251

250

252

254

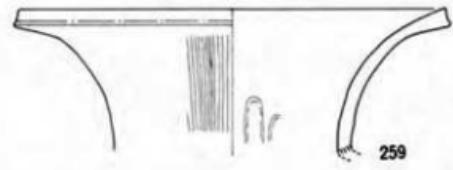
255

253

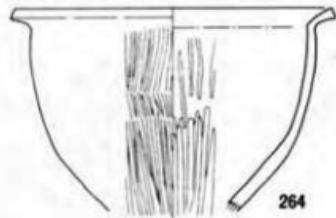
256

257

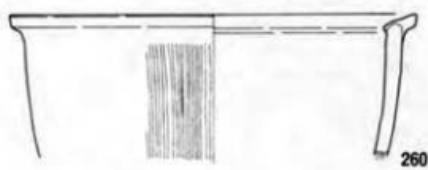
258



259



264



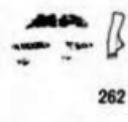
260



265



261



262



263

第36図 6号住居址出土土器①
7号住居址出土土器(259～261, 263)(1/4)
8号住居址出土土器(264・265)
9号住居址出土土器(262)

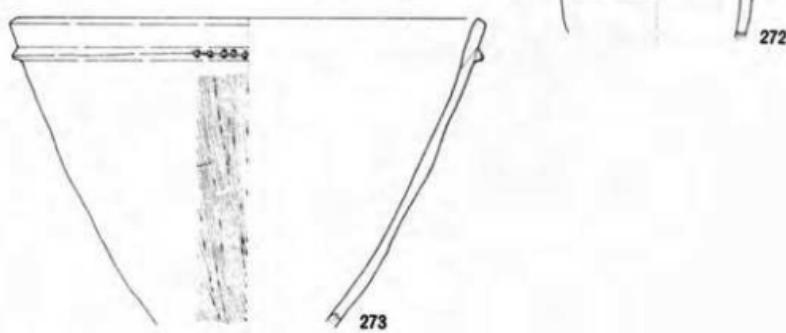
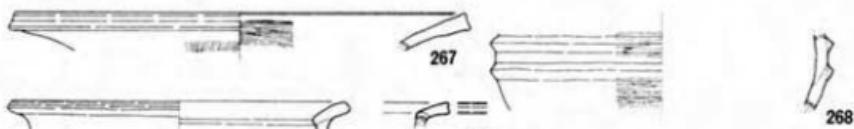
を測る。胸部中位に二条の三角突帯が施こされている。調整は、突帯ではヨコナデ、それ以外ではヨコヘラミガキだが、突帯下位では、ヘラミガキの下にタテハケ目が残っている。²⁸³ P 1 出土の甕で、推定口径22.6cmを測る。張りのない胸部上端から外あがりの口縁がつき、その内端は内側に突出する。口唇部はくぼみぎみで内あがりとなる。調整は風化のため判然としないが、ヨコナデと思われる。胎土は砂粒をあまり含まず、焼成も軟らかい。色調は淡黄褐色を呈している。²⁸⁴ P 6 から出土した甕で、口縁が若干もちあがり、端部もねあがりぎみである。²⁸⁵ P 6 出土で、推定口径18.1cmを測る。くの字に外反した口縁部下2.5cmに一条の突帯がめぐり、そこに押圧キザミが施こされている。口縁部から突帯までは、指のヨコナデ、突帯および胸内面は、ナデと思われる。胎土は1mm以下の細砂粒を含み、焼成はやや軟かい。色調は淡黄褐色を呈し、胸部に黒斑がみられる。この甕は、6号住居址出土の²⁸⁶ に類似している。²⁸⁷ 9号住居址唯一の下城式甕で、P 1 やP 6 などから出土した。口縁部がひずんでいるため、約 $\frac{1}{3}$ という大きな破片にもかかわらず、傾き、径が不確実だが、推定口径は31.6cmを測る。かなり外傾のきつい胸部は、ほとんどまっすぐ口縁までつづいている。口唇部は外さがりを呈し、ほぼ平坦面をなす。口縁下2.5cmの位置には、するどい押圧キザミ目を施こした一条の突帯がめぐっている。口縁部内外は、突帯までヨコナデ、内面胸部はナデ、外面はタテハケ目が施こされている。胎土は1~5mm大の砂粒、小石を含み、焼成は軟調で、色調は淡赤褐色~褐色を呈する。二次的に火をうけたのか赤変がみられる。

1号土壤（第38図、図版30）

²⁷⁴は玉ネギ状を呈する長頸壺と思われ、推定胴部径は21cmを測る。頭部はタテ方向のヘラミガキ、胸部はヨコ方向のヘラミガキが施こされている。内面胸上半部から頭部にかけて、指のナデあげ、胸部はタテ方向のナデ調整される。焼成は堅く、黒褐色か淡褐色を呈している。²⁷⁵は下城式甕の約 $\frac{1}{6}$ ほど遺存した口縁部である。突帯部からゆるく外反した口縁部がみられ、口唇部はくぼんでおり、外さがりを呈している。口縁下3cmの位置に一条の突帯がめぐり、口唇部外端と上下同時に、押圧がかかるといきザミ目が施こされる。口縁部内外はヨコナデ調整され、胸部内面はていねいにナデられる。突帯下位は、タテハケ目が施こされている。色調は褐色を呈しており、焼成は堅い。

3号土壤（第38図、図版30）

²⁷⁶は朝顔状に大きく外する壺の口縁部で、推定口径29.8cmを測る。口縁端が肥厚し、口唇

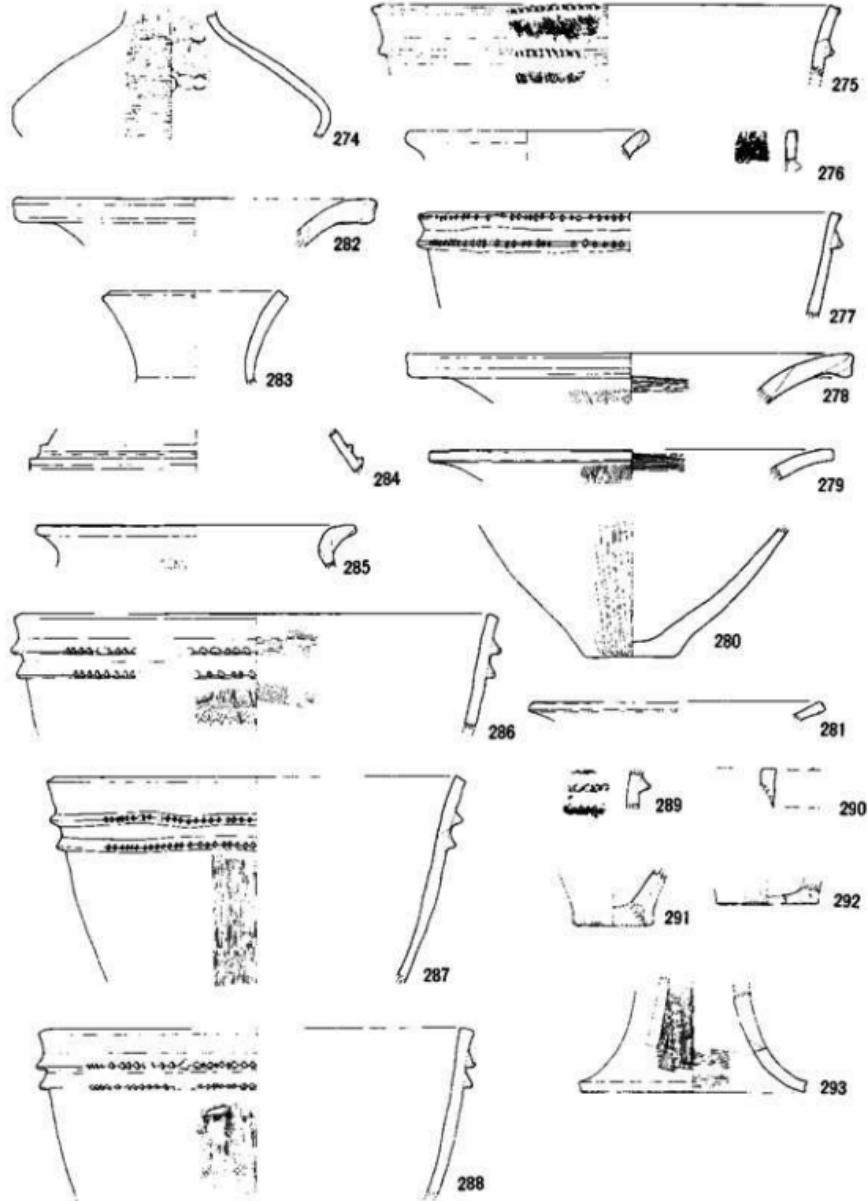


第37圖 9號住居址出土土器(1/4)

部はくぼみを呈するが、面は垂直をなす。口縁部調整はヨコナデ、頭部にタテハケ目が施こされている。内面はヨコハケ目である。**280**は3号、4号土壙出土の破片が接合した。壺の底部で、底径は6cmを測る。内面はていねいにナデられ、外面はタテハケ目が施こされている。**276**、**277**は下城式甕の破片で、**276**は口唇部外端にキザミ目が施こされている。**277**は約3/4遺存した破片で、土壙4の破片とも接合した。復元口径は28.4cmを測る。外傾した胴部にわずかに外反した口縁部がつき、口縁下2cmの位置に一条のするどいキザミ目突帯がめぐっている。口唇部にもキザミが施こされ、上下のキザミは同時に切られている。口縁部はヨコナデされ、突帯下および内面は、ていねいなナデ調整される。焼成は堅く、色調は淡赤褐色を呈している。**283**は数少ない高杯の1例で、これも4号土壙出土の破片と接合する。遺存が全周の3/4弱と小さいため、径の復元は確実ではないが、脚根径は15.2cmを測る。脚には2つの透し穴が認められ、その形状は長方形と推定される。間隔から推定すれば、6穴透しの可能性が高い。外面の調整は細かなタテハケ目で、脚根は指のヨコナデ調整である。脚内面は指のナデ、根部は細かなヨコハケ目が施こされている。胎土は精製された粘土だが、まれに数mm大の小石を含む。焼成は堅く、淡赤褐色を呈している。

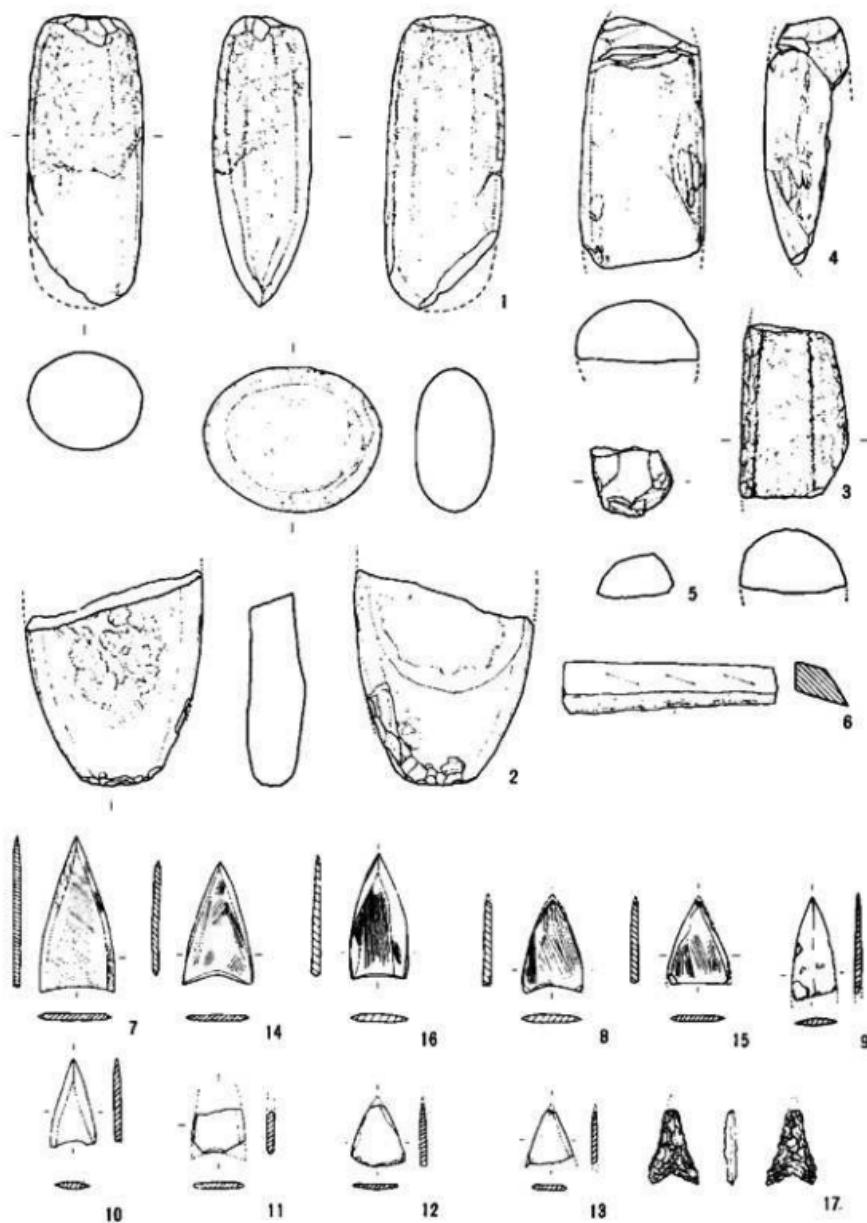
4号土壙（第38図、図版31）

282は**278**と類似した壺の口縁部である。**283**は小型壺の口縁部と、これも3号土壙出土破片と接合した。口径は12.3cmを測り、口唇部はくぼみを呈する。**284**は壺肩部の破片で、二条の三角突帯がめぐっている。この突帯の三角形下面には、黒色顔料がきれいに塗られている。調整はヨコナデである。**286**～**290**は下城式甕で、**286**～**288**の3点は、二条突帯が特徴である。**285**は推定口径32.2cmを測る。口唇部は平坦で外さがりを呈している。口縁下2.5cm、4cmの位置にある二条の突帯には、上下同時にキザミ目が施こされている。口縁部から突帯にかけてはヨコナデ、内面胴部はヨコハケ目のちナデ、突帯下部はタテハケ目調整される。胎土は1mm大の砂粒を含み、焼成は堅い。色調は淡黄褐色を呈する。**287**もほぼ同様の甕で、推定口径28cmを測る。口唇部は内くぼみを呈している。上下2本の突帯のキザミ目は、するどく同時に刻まれている。器表全体にススかけ付着する。**288**も同様の形態をしているが、口唇部は平坦である。二条の突帯はたれさがりぎみで、やはり上下同時に押圧キザミ目が施こされる。内面はナデ、口縁から突帯まではヨコナデ、突帯下位はタテハケ目調整されている。胎土は1～2mm大の砂粒を含み、中には6mm大の小石もある。焼成は良好で、色調は淡褐色を呈している。



第38図 土塙出土土器(1/4)

1号 : 274~276, 294
3号 : 277~281
4号 : 282~293



第39図 石器

- | | |
|--------------|----------------------|
| 1 ~ 6 (1/3) | 4号住居址(1, 2, 14) |
| 7 ~ 17 (1/2) | 5号住居址(3) |
| 2号住居址(7) | 6号住居址(4~6, 9~13, 18) |
| 3号住居址(8) | 4号土壙(14, 15) |

(2) 石器 (第39図、図版31・32)

石器の出土点数は少ない。磨製石斧4点、刷り石1点、砥石1点、台石1点、磨製石鏃10点打製石鏃1点の18点を数えるのみである。石鏃の数点を除いて、ほとんどが欠損品である。他に住居址床面からチップ類多数が出土した。1は4号住居址出土の磨製石斧で、刃部を半欠している。2も4号住居址のP5から出土した石器で、最初、砥石として使用し、欠損後にその裏面を台石として再使用したとみられ敲打面が残っている。さらに、この石自体も敲打具として使用しており、先端に使用痕がみられる。つまり、3通りの用途に使用された石器である。3は5号住居址の床面から出土した石斧の未製品で、敲打段階で破損し放棄されたと考えられる。4、5は磨製石斧の破損品で、4は刃部と身の半分が欠失しており、3片に割れて出土している。5は刃部に近い破片である。6は砥石で、1面だけが使用されている。おそらく欠損品と考えられる。7～16は磨製石鏃である。7は2号住居址、8は3号住居址、9～13は6号住居址出土で、12は第VII層からの出土である。14、15は4号土塙から出土した。9を除いて、練泥片岩製である。17は打製石鏃で、調査区外の縄文時代遺構に伴うものと考えられる。

第5章 考 察

土器について

実測可能な土器およそ300点は、床面上よりも若干上層のもののが多かった。新旧の要素はみられるものの、上層、下層の差はかならずしも時期差を示すものではなかった。ここでは各住居址、土壤出土の土器を一括して、口縁・頸部・肩部・胴部・底部の各要素ごとに形式分類を行い、数少ない完形に近い土器は、それらの複合とする。

(1) 壺

1、口縁I類

鋤先状を呈する口縁をI類とするがさらにA、B、Cの3つに細分する。

A：口縁断面が長方形を呈するもの (1、9)

B：口縁部がたれさがり、糸まき状を呈するもの (28、41、42、43、117)

C：口縁端がもちあがり、鋤先の上下面ともカーブするもの (116)

2、口縁II類

鋤先状を呈さないものでさらにA、B、Cに細分する。

A：口縁が水平になり口唇部が肥厚する。端部は垂直面をなす。 (141、142、144、278、
282)

B：口縁が右あがりで端部は外さがりになる (27、44、145、259、267、279)

C：円形浮文がみられるが、鋤先状口縁にはならないと思われるもの (43、113、114)

3、口縁III類

直口壺に近いが、端部がわずかに外反するもので、頸部に一条、キザミ目突帯がめぐる
(118)

4、口縁IV類

広口帯で外反する短かい口縁と頭部との境に穿孔がほどこされる (51, 52, 149, 150)

5、口縁V類

長頸壺の口縁で、口縁直下に一条の三角突帯がめぐる (134, 135)

6、口縁VI類

T字に肥厚した口唇部に三条の凹線が施こされる (50, 165)

7、頸部I類

頭部と肩部との境に一~二条の三角突帯をもつもので、次の2つに細分できる。

A : 楕円の浮文がみられる (108, 109, 125)

B : " がみられない (119, 120, 121, 122, 123)

8、頸部II類

頭部と肩部の境に三条以上の突帯をもつもので、A, Bに細分される。

A : 楕円浮文がみられる (29)

B : " がみられない (48, 124, 126)

9、頸部III類

頭部と肩部の境には突帯がなく、楕円浮文がみられる (41)

10、頸部IV類

頭部と肩部の境に突帯も浮文もない (46, 54, 143, 147)

11、肩部I類

一~三条の台形突帯がめぐるもの (11, 30, 128, 130, 286)

12、肩部II類

二~三条の三角突帯がめぐるもの (46, 49, 127, 129, 136, 284)

13、脇部Ⅲ類

突帯のないもの (41、54、143、147)

14、脇部Ⅳ類

二～四条の台形突帯がめぐるもの (109、110、256)

15、脇部Ⅴ類

二～四条の三角突帯がめぐるもの (46、48、53、133、137、268)

(2) 脊

腰は口縁から脇部を I～IV類に、底部を I～IV類に分類した。

1、口縁Ⅰ類

L字もしくはくの字口縁をもつもので、A～Iに細分する。

A：口縁がL字もしくはわずかにもちあがるもので口唇部はほぼ垂直をなす
(60、61、167、168、169、171)

B：口縁が脇上部にのる、あるいは脇外側から内側にまたがるもので内面に突出部をもつ (203、206、250、269)

C：口縁端がもちあがり、脇と口縁がするどい棱を持つもので口縁上面はほぼ平坦をなす (13、64、69、79、271)

D：口縁がかなり大きくもちあがるが、脇と口縁の形づくる棱はしっかりしているもの
(12、62、65、172、174、175、176、177、178、180、183、185)

E：D類に近似するが、内面の棱がより不明瞭になるもの

(15、16、32、66、70、71、72、75、76、77、81、191、192、193)

F：D類の口縁に若干はった脇部がつくもの (4、14、17、31、78、170、179、188)

G：かなりはった脇部にはねあがり口縁がつくもの (31、170)

H：断面形はくの字だが、外形はかまぼこ形の口縁をなすもの (80、82)

I：直口口縁をなす小型焼 (204、205)

2、口縁II類

大要をII類とした。

- A : L字口縁を呈するもの (211)
- B : 若干外あがりぎみの口縁を呈する (207、208、209、213、214、263)
- C : 脇上部に口縁がつき、かなり外あがりになる口縁 (102、210)
- D : 口縁が脇上端からくの字状につくもの (103、104、212)

3、口縁III類

くの字口縁下に突帯をもつもので、3つに細分できる。

- A : ほぼ直立した、キザミ目突帯をもつ脇部が特徴 (18、19、85、107、215、216)
- B : Aに類似するが、小形で丸みをおびているもの (217、222)
- C : Bより口縁がおきぎみで、突帯にキザミ目をもたないもの (83)

4、口縁IV類

直口口縁に突帯の施されたいわゆる下城式の型で4つに細分できる。

- A : 一条のキザミ目突帯がめぐるもの (5、6、7、20、22、87、90、92、25、27、27、28、29、29、233、262、265、273)
- B : 突帯と口唇部に上下同時に施されたキザミ目をもつもの (21、35、36、88、89、93、220、226、231、232、261、275、277)
- C : 上下同時にキザミ目が施された二条の突帯をもつもの (218、219、221、236、237、238)
- D : キザミ目のない一条の突帯をもつもの (37、234、235、236)

5、底部I類

底部が外反しないもの

- A : 底面が平底 (40、65、100、258、291)
- B : " あげ底 (71、95、96、211、231)

6、底部II類

底部が外反するもの

第5章 考 察

A : 底面が平底 (66, 94, 106, 237, 238)

B : わずかにあげ底になるもの (39, 97, 98, 239, 240, 243, 252)

C : あげ底が著しいもの (4, 244, 249, 250, 251)

7、底部III類

脚台状をなす底部

A : ほとんど平底のもの (26)

B : あげ底を呈するもの (254)

8、底部IV類

しっかりした平底を呈し、ほとんど底近くまでタテハケ目が施こされ、色調が暗いもので
いわゆる下城式甌の底部 (25, 38, 101, 238, 253, 256, 297)

(3) 鉢

鉢は数少なく、それぞれが一形式となる。

1、I類

内湾する胴上端の外側にはほとんど直角に口縁がつき、口縁整形時に内面に突出がみられる
もの (202)

2、II類

もちあがった口縁端部が肥厚し、内部の稜はしっかりしているもの (264)

3、III類

外傾した胴部から、ゆるく外反した口縁がつくもの (84)

4、IV類

口縁がかなりたちあがるもの (199)

(4) 高坏

高坏はほとんど出土していないが大きくは 2 つに分類できる

1、I類

おそらくは長方形透しをもつもの (58, 233)

2、II類

沈線と矢羽根透しをもつもの (166)

(5) 土器の時期について

かつて宮崎平野の土器編年試案をまとめた時、新田原 6 号住居址出土の土器を IV a 期とし、後期初頭に比定した。裏の L 字状口縁からくの字口縁へ移行する過渡期であること、瀬戸内中期末の土器が伴うこと等をその根拠としたのだが、整理をしながら、あらためて時期の問題について考えてみても、この時期観に変化はない。

新田原遺跡の土器は、新田の要素がみられるが、それを(古)、(中)、(新)とすれば、(古)、(新)はそれほど多くない。(古)は壺口縁 I 類の断面長方形鋲先口縁で、新しくなると口唇部肥厚がはじまり口縁 II 類となる。又、口縁 II (大腰) A 類の L 字状口縁も古い要素である。大半を占める(中)段階の土器は、鏡のくの字状口縁化あるいはその移行過程、底部平底からあげ底への移行過程、壺口縁部の肥厚化、鋲先の消滅過程、突帯の三角化、多条化、としてとらえられる。このように新田原遺跡出土の土器はまさに、中期から後期への移行過程を示しており、一方では古い中期的要素をひきずりながらも、他方で、新しい要素をあわせもつこの時代の特徴を示している。

(6) 外来系の土器

高坏 II 類、壺口縁 VI 類は瀬戸内地方、なかでも愛媛県を中心とした西部瀬戸内地方に出自をもつ、いわゆる凹線文土器で、整備された岡山平野部の土器編年では前山 II 式から仁伍式にかけて、中期末葉ごろに比定される。壺口縁 I 類 G は、北部九州系の甕で、その特徴から後期初頭に位置づけてよいと考えられる。この両者が共伴することは、九州と瀬戸内の土器編年を整合させるうえで重要なポイントになると思われるし、九州に凹線文土器が流入する時期をさぐるにも役立つとりあわせである。又、瀬戸内系土器の流入が、T 字に肥厚した

口縁部に凹線を施した壺や、矢羽根や三角形の透しをもつ高环にはば限られるという特徴からは、その背後に、あるいは祭祀までもかぶさってくる、瀬戸内系文化の強い影響を考慮する必要があるのかもしれない。

住居址について

住居址について気付いたこと2、3についてのべてみたい。

(1) 住居址の時期

土器の時期について、先に、新旧の要素はみられるものの、総体的には、ほぼ限られた後期初頭に位置づけた。住居址の時期イコール土器の時期とは限らないが、今、土器の時期を住居址の時期と仮定すれば、住居址間に、より古く建てられた、あるいは、より新しく建てていたと考えられる差がわずかにみられるのも事実である。斐口縁I A～F類はほとんどの住居址に見られ、この土器を基準にすれば、土器のみられた住居址は、ある一時期併存していた可能性が高い。しかし、壺口縁I類では1号、2号住(古)>(新)3号、4号、6号住、壺口縁IV類では6号住≥4号住、並肩部では2号、3号、6号住>4号住、斐口縁IV D類では2号、3号住、土壙1、3>4号、6号、7号住、斐口縁IV C類では土壙4が6号住と同じか、わずかに古い要素を持っている。又、斐口縁IV A類では、1号、2号住が古い要素をもち、4号、6号、8号、9号はそれよりもわずかに新しい。底部I類、II類にみるあげ底化の進行から3号、5号住、土壙4≥4号、6号住、斐II類(大斐)にみるくの字化の進行から6号住>4号住、斐III類では2号住≥6号住というように、全体をとおしてみれば、1号住、2号住≥3号住、5号住、1号、2号、3号、4号土壙≥8号住≥6号住、7号住、9号住≥4号住、という関係がかなたつように思われる。

しかし、3号土壙と4号土壙、8号住居と9号住居にみる接合関係から、各住居は、かなりの期間併存していたとみるべきだろう。住居の平面プランからみれば、1号～3号住の方形住居址が、4号、6号、8号、9号住居址の円形もしくは花弁状住居に先行する可能性が高い。

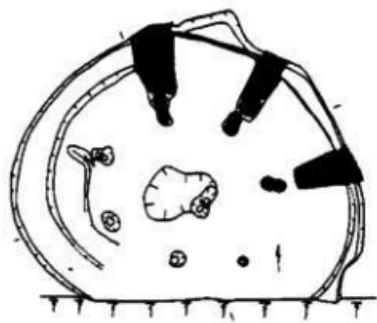
(2) 花弁状住居址の柱穴と突出壁について

4号、6号、9号の花弁状住居址の柱穴は、壁に平行に6本あるいは7本が円形に並んで

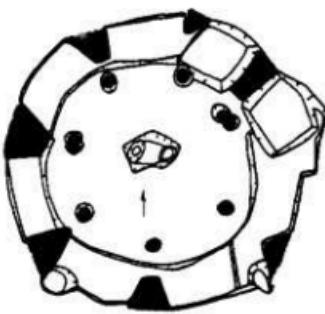
いるが、柱穴の掘られる位置は、突出壁と対応する位置にあることがわかる（第40図）。宮崎市・棠地東遺跡 S A 16²や、鹿児島県鹿屋市・王子遺跡14号住居でも同様な柱穴の配置がみられ、いずれも後期初頭～前葉、花弁状住居出現期にみられる現象である。柱穴がからず突出壁と対応する位置に掘られるという事実は、出現期花弁状住居が、共通した設計思想のもとに建てられたことの反映と考えられる。柱穴と突出壁を対応させることで生じる最大のメリットは、突出壁、柱といった居住空間でのデッドスペースをひとまとめにして、尖効居住空間をより広く確保できることで、それは、花弁部分が、さえぎられるものなしに、柱穴で囲まれた主居住空間と連結されることを意味している。このことは又、突出壁の性格を考える上でも重要である。柱穴と突出壁の間は、ほとんどすきまがないか、あっても、人間がすり抜けられるようなものではない。つまり、そこは使用された空間ではなく、柱、突出壁に加えて両者間の空間もデッドスペースとならざるをえないのである。屋根まで“じゃまもの”として立つ柱をぴったりとつけるからには、それに対応する突出壁も、現状で検出される高さ以上に“じゃまもの”だったのではないかと推論したくなるが、一円の居住空間をさえぎる“じゃまもの”、突出壁すなわち区画壁→間じきりという性格をそこから容易に導き出すことができる。住居を幾つかの小空間に分割する恒常的施設はあまりその例をみないが、間じきり施設のない住居が1フロア住居として使われたとする確かな根拠は何もないわけで、事情に応じて空間を分割して使用したと考える方が理にかなっている。花弁状住居はそれを固定化してしまっただけと考えるのはいきすぎだろうか。さて、間仕切られた空間の性格はというと、従来、柱穴でかこまれた内側の主空間に従属する突出空間と考えられがちであったが、先述のように、柱まで間仕切壁に組みこんでしまえば、両者の関係はもはや主・従というよりも、中央部を回廊として、間じきられた空間が集合している住居ととらえるほうが妥当ではなかろうか。中央ピットに柱を想定すればこの傾向はもっと強くなる。このように考えれば、主たる生活空間プラス祭祠や工房といった特殊用途空間というあり方ではなく、個々の間仕切られた空間こそ、日常の生活空間であると想定できるだろう。

(3) ベッド状遺構について

出現期花弁状住居にベッド状遺構が伴うことはよく知られているが、この用途、系譜の問題はいまだ解決しがたく、ここでも厳密にはとわないことにする。ベッド状遺構が張出し部（花弁部分）にみられること、そして狭いことが、従来この部分を従属性の用途にみる一因となってきたことはいなめないが、先述のように、柱まで間仕切施設と考える立場では、ベッ



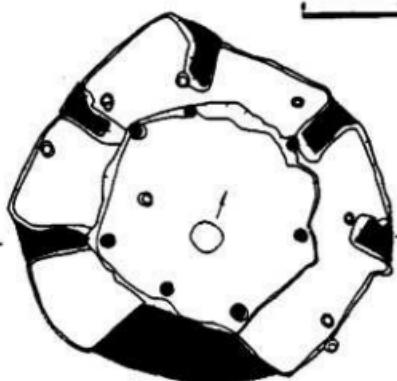
新田原4号住居址



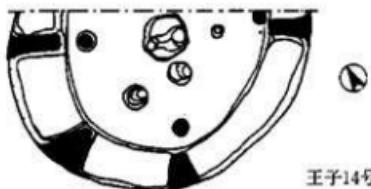
新田原6号住居址



新田原9号住居址



堂地東16号住居址



王子14号住居址

第40図 突出壁と主柱穴の対応関係（縮尺不同）

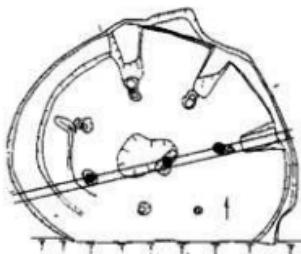
ド状遺構の幅の狭さが不都合なものになる。新田原遺跡にみられるベッド状遺構の高さまでの貼床の痕跡が確実に貼床ならば、生活空間としてのベッド状遺構は存在せず、ただ施行の一過程を示すにすぎないものになる。さてベッド状遺構の形は、よく見れば、その内辺が円の一部ではなく、直線であり、全体としては多角形になるものが存在する（第40図）。その外辺、つまり花弁の外辺も円というよりは多角形を呈しているものが多い。花弁状住居は、基本的には多角形住居としてとらえた方が視覚的にはすっきりする。多角形住居は、例えば、岡山県只波山遺跡にみると、弥生時代中期末から後期にかけての瀬戸内地方にその例を見る事ができるが、これは大型住居に多くしかも単位集落に一軒ほどの割合でみいだされるなど集落内での役割を推測させるものが多い。この視覚的類似は、瀬戸内系土器の流入とあいまって、花弁状住居の基本的な概念がどの地方から影響をうけたのかきわめて示唆的である。…よしんば、総体としての花弁状住居が、弥生時代日向人の手になるにしても。

(4) 中央ピットについて

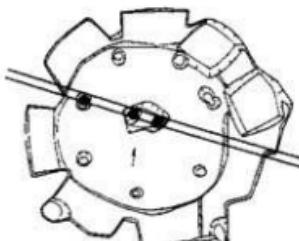
住居の床面中央には、まま、中央ピットがみられ、その中にさらに柱穴が掘られていることが多い。新田原遺跡では、4号、6号、8号、9号、10号にその例がみられ、鹿児島・上子遺跡9号、12号、14号住居址でも知られている。（第41図）その役柄については、炉址、あるいは作業ピットなど諸説があるが、どれも一長一短である。そのうち、中央ピット中に柱穴の見られるものについて考えてみれば、中央ピット内の柱穴は、住居址主柱穴2つと直線的に並ぶものが多いことに気つく。柱穴が縦に（多くは4本）ならぶということは、必然的に、その上端では一本の横木つまり、梁が架けられるという結論を導いてくれる。そして南九州ではその方向は東西であるというのも何らかの理由のあることなのだろう。

(5) 壁際のピットについて

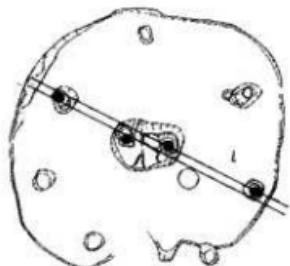
中央ピットとともに、小堅穴住居址に多い壁際ピットも又気になる存在である。特にピット中に柱穴があるものは、新田原遺跡では7号、11号住居址にその例を見ることができるが、王子遺跡でも7号、10号、16号、26号、27号住居址などに同様の例が知られている（第42図）。すべての例で、主柱穴は2つであり、それに平行する形で、壁際ピットも掘られており、王子遺跡26号住居址ではベッド状遺構が途切れ、27号住居址では幅広い突出壁がみられた。このピット内柱穴は2つ対になる例が多いが、それをハシゴ穴と考えればどうであろうか、そうすれば入口は南側がほとんどで、しかも平入りになるのだが。



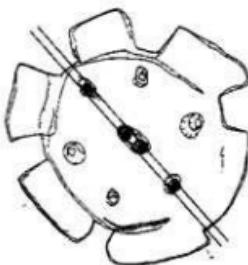
新田原4号住居址



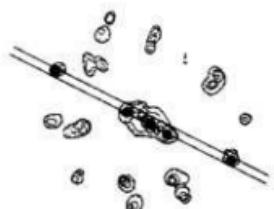
新田原6号住居址



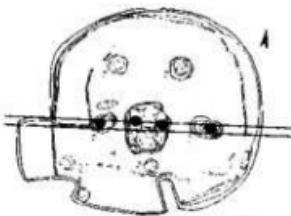
新山原8号住居址



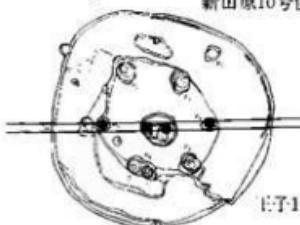
新田原9号住居址



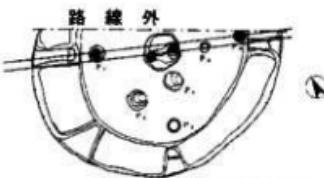
新田原10号住居址



王子9号住居址

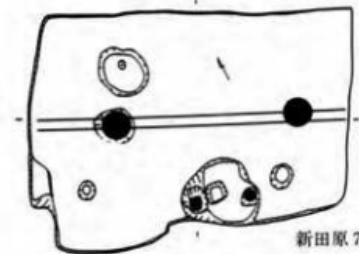


王子12号住居址

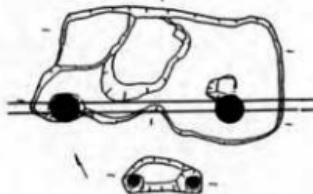


王子14号住居址

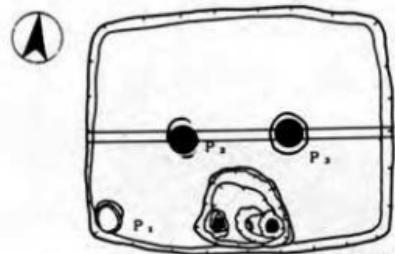
第41図 中央ピットと主柱穴の位置関係（縮尺不同）



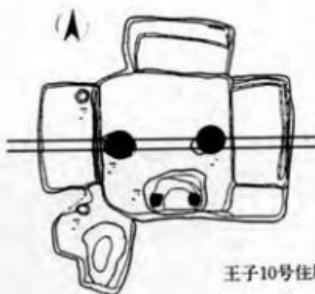
新田原7号住居址



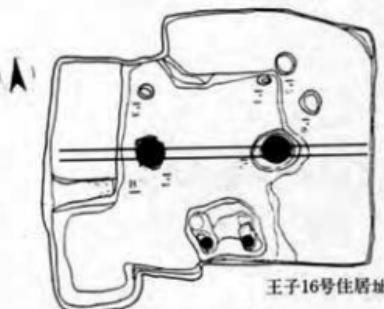
新田原11号住居址



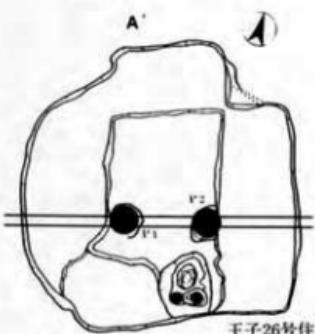
王子7号住居址



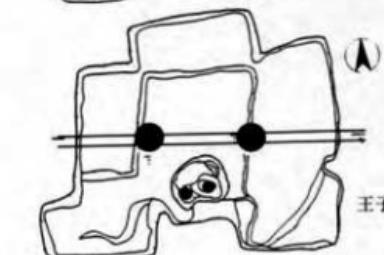
王子10号住居址



王子16号住居址



王子26号住居址



王子27号住居址

第42図 壁際の小ピット（縮尺不同）

おわりに

2、3のささいな点を指摘してお茶をにごしてきた。新田原遺跡の、あるいは住居址、土器などの評価は他日を期したいが、花弁状住居址が、その出現の当初から規格性の強いもので、瀬戸内系土器の流入と出現が密接に関係していること、初期の分布が、のちの地下式横穴の分布範囲に限られる点は非常に重要なことで、この時期、日向南半部では、大きな社会変動がおこっていることが確実であり、その一要素が瀬戸内系文化の流入であったことは見逃すべきではない。この社会変動を契機として、古墳時代の諸相が、じょじょに形成されてゆく時期がまさに日向における後期の始まりなのである。

註

- | | | |
|--------------|------------------------------|-------------|
| 1. 石川悦雄 | 「宮崎平野における弥生土器編年試案—素描(MK II)」 | |
| | | 『宮崎考古』 1983 |
| 2. 宮崎県教育委員会 | 『宮崎学園都市遺跡発掘調査報告書第2集』 | 1985 |
| 3. 鹿児島県教育委員会 | 『王子遺跡』 | 1985 |
| 4. 近藤義郎・小野 昭 | 「岡山県貝殻山遺跡」『高地性集落の研究』 | 1979 |
| 5. 註3に同じ | | |
| 6. 註3に同じ | | |

図 版



左から3号、2号、1号 住居址（西から）



上：4号土壤 下：3号土壤（東から）



上：2号住居址 下：1号住居址（南から）



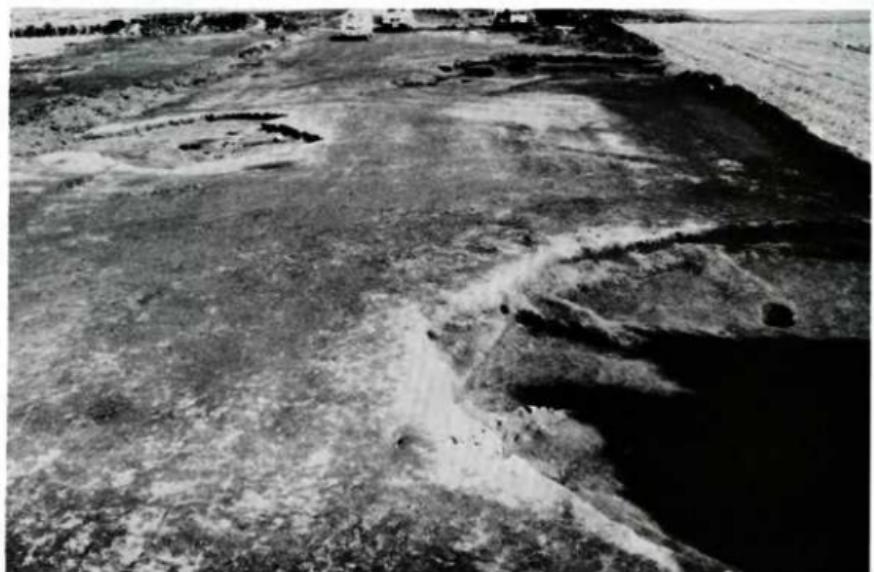
3号住居址（南から）



1. 遺跡全景（東から）



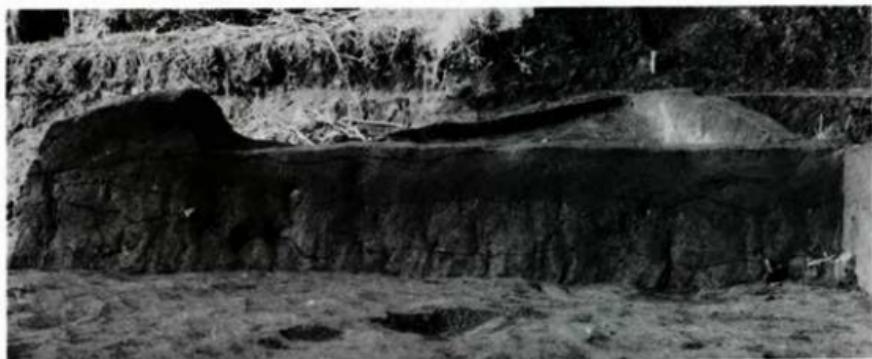
2. 4号、5号、6号住居址（東から）



1. 4号. 5号. 6号住居址（西から）



2. 4号住居址



1. 4号住居址埋土層位 (A—C 南半)



2. 4号住居址埋土層位 (A—C 北半)



3. 4号住居址埋土層位 (B—D 西半)



1. 5号住居址（南東から）



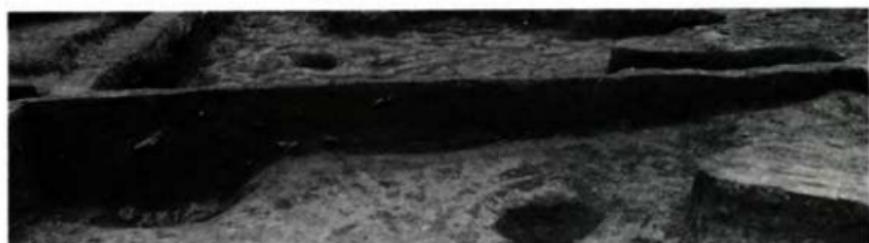
2. 6号住居址（北西から）



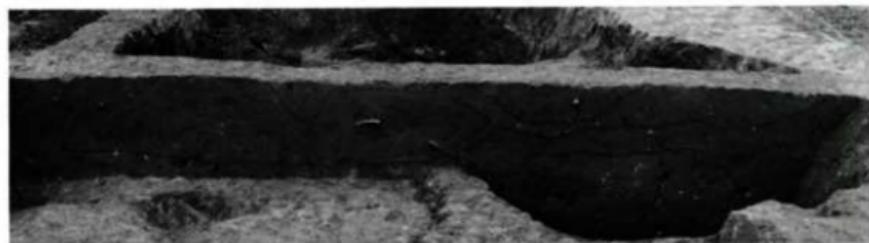
1. 6号住居址（南東から）



2. 6号住居址、住居内土壤Ⅰ（左）、土壤Ⅱ（右）（北東から）



1. 6号住居址埋土層位 (C-D 西半)



2. 6号住居址埋土層位 (C-D 東半)



3. 6号住居址埋土層位 (A-B 南半)



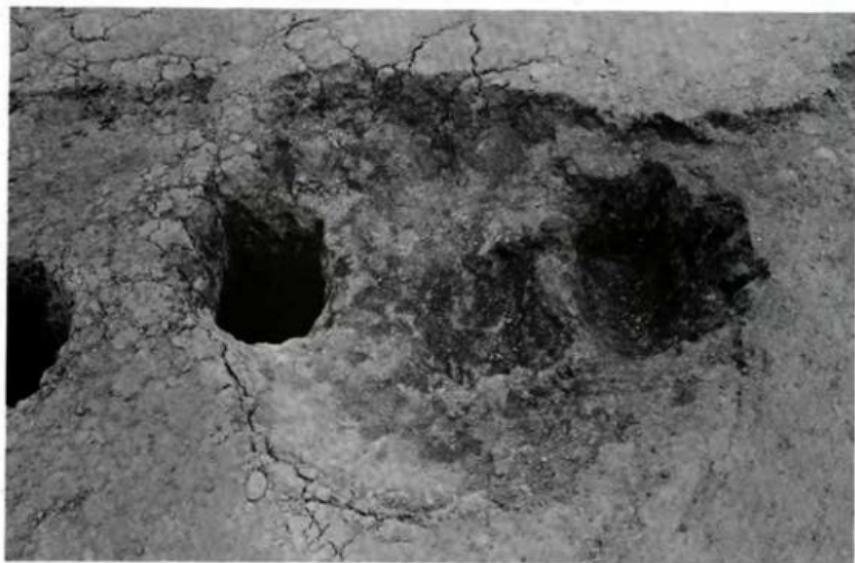
4. 6号住居址埋土層位 (A-B 北半)



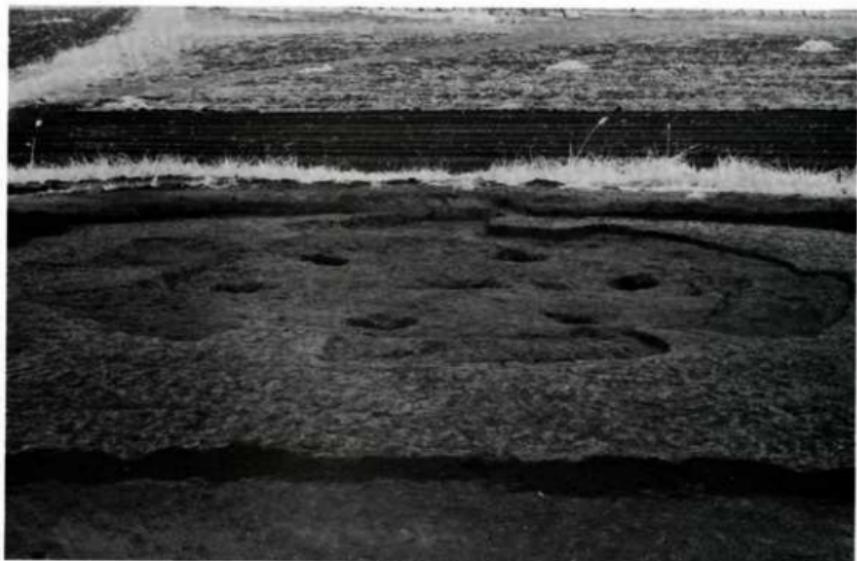
1. 6号住居址 土壌Ⅰ層位



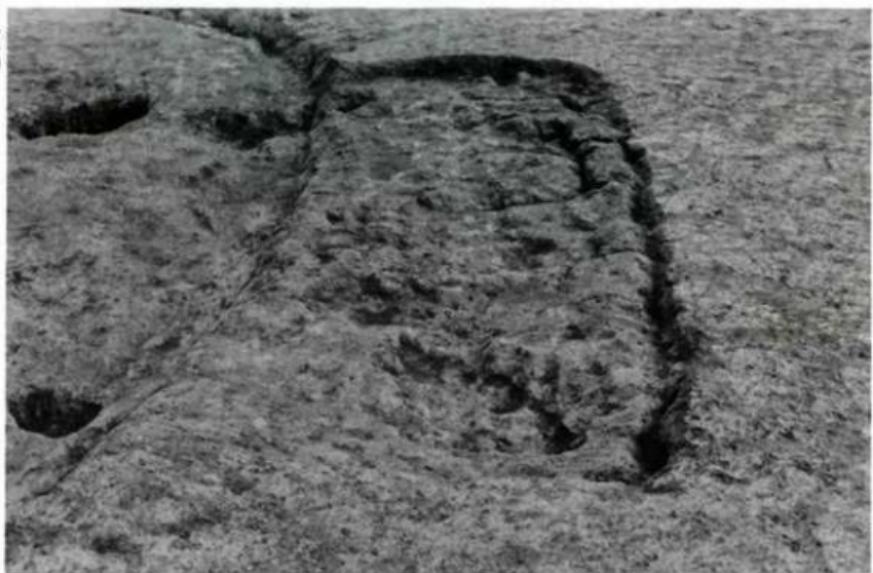
2. 7号住居址 (東から)



1. 7号住居址 壁際ピット（北から）



2. 9号住居址（西から）



1. 9号住居址 “花弁部”



2. 10号住居址 (東から)



1. 11号住居址（北から）



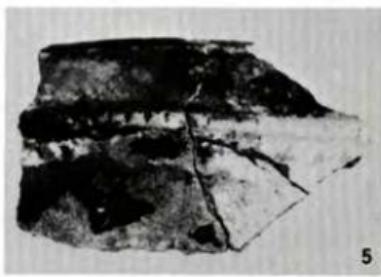
2. 12号住居址（東から）



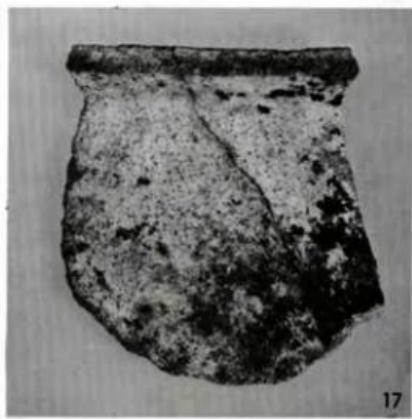
4



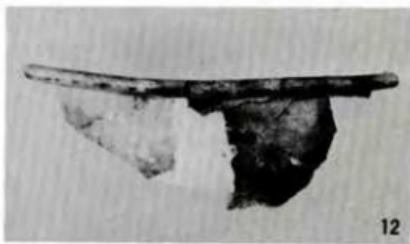
6



5



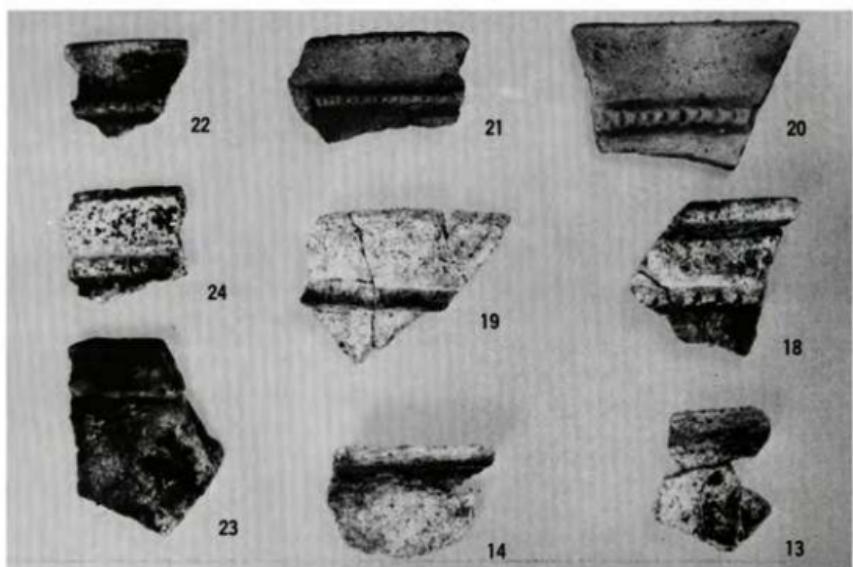
17



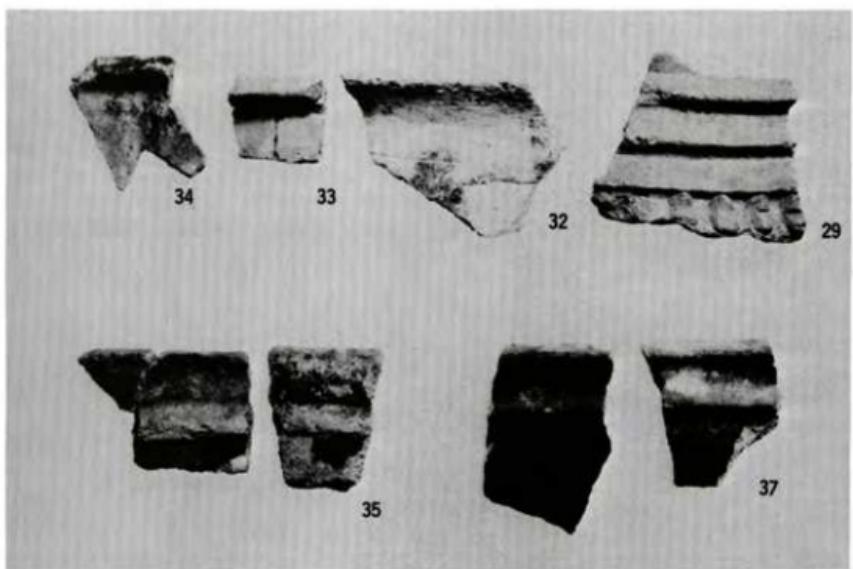
12

1号住居址出土土器（4.5.6）

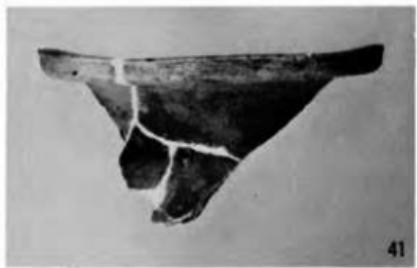
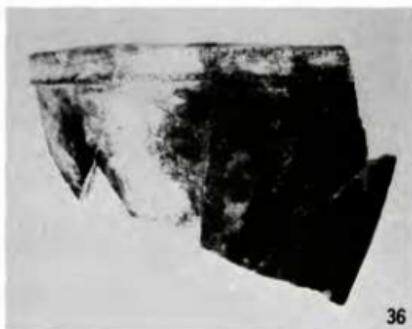
2号住居址出土土器（12.17）



1. 2号住居址出土土器

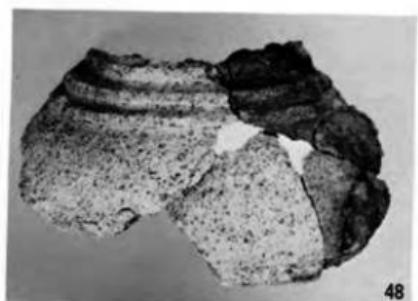


2. 3号住居址出土土器



3号住居址出土土器 (31,36,40)
4号住居址出土土器 (41,46,47)

- 98 -



48



53



59



54

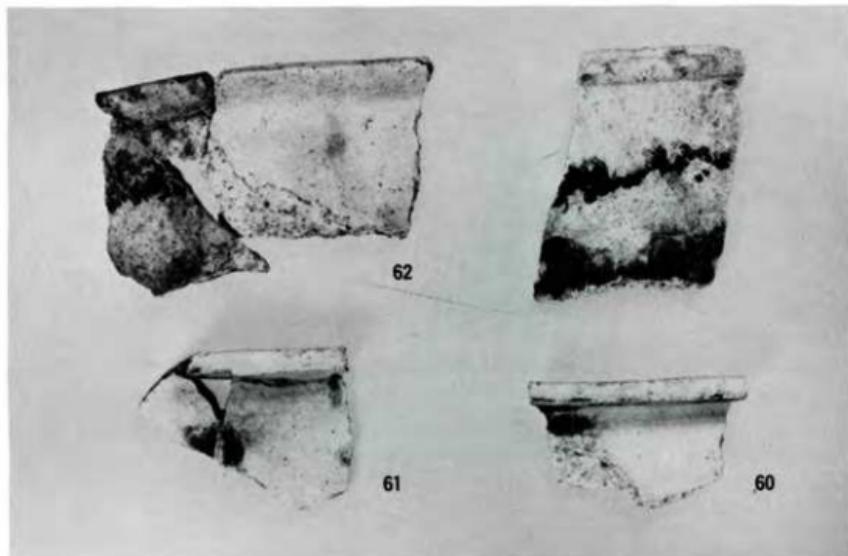


66



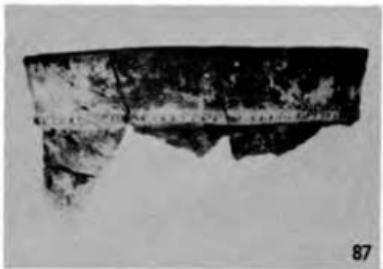
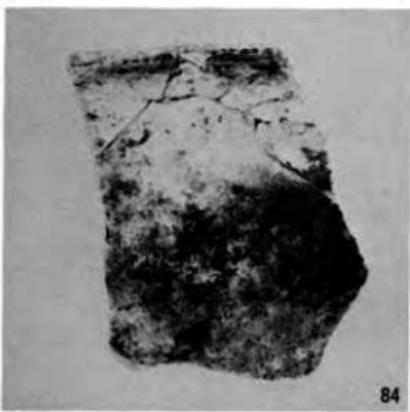
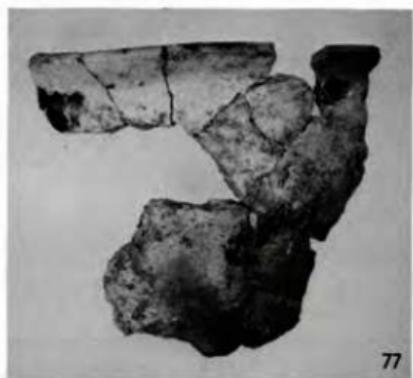
65

4号住居址出土土器

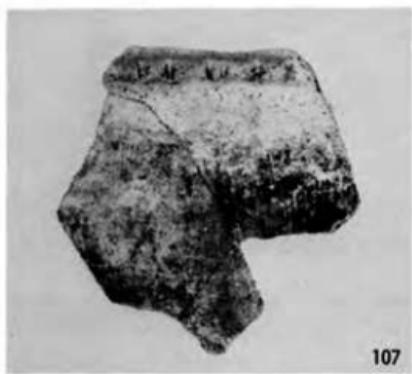
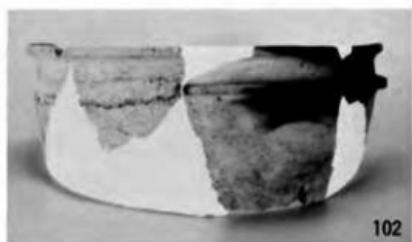
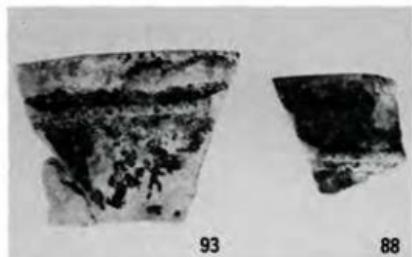


4號住居址出土土器

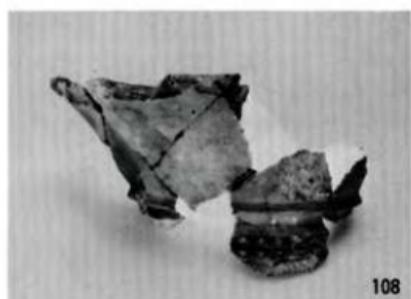




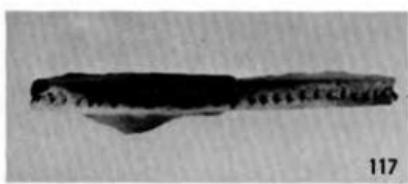
4號住居址出土土器



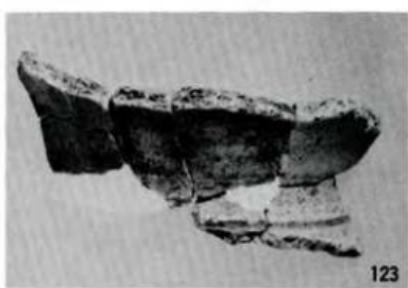
4 号住居址出土土器 (42.88.93.97.102.104)
5 号住居址出土土器 (106.107)



108



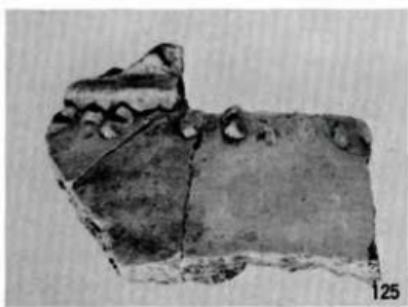
117



123



109



125

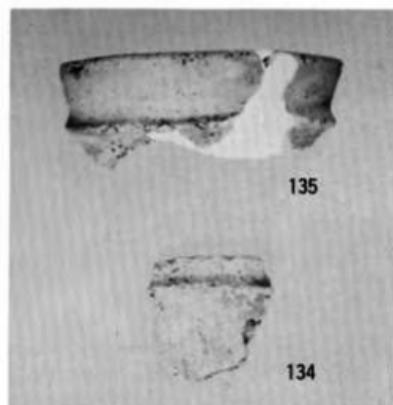


110



132

6號住居址出土土器



134



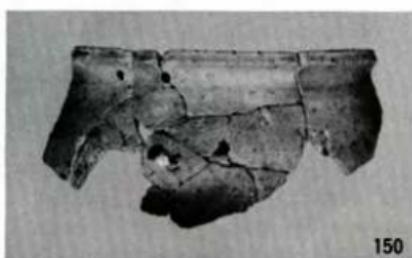
135



149



147



150

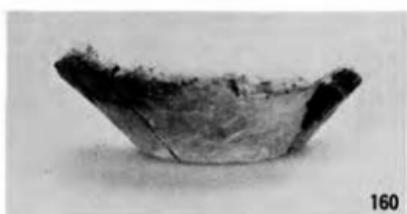


150



156

6号住居址出土土器



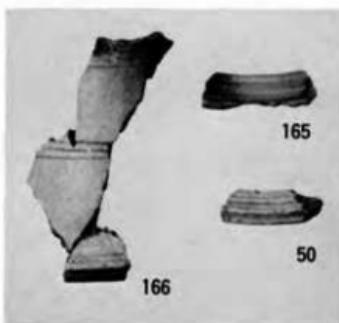
160



161



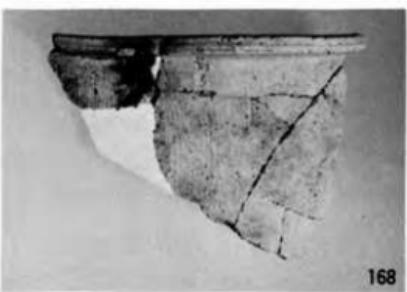
163



165

50

166



168



192

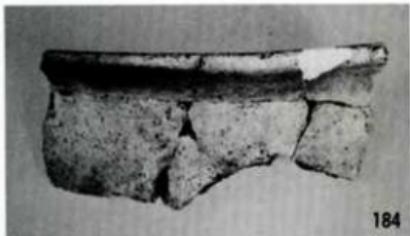


170

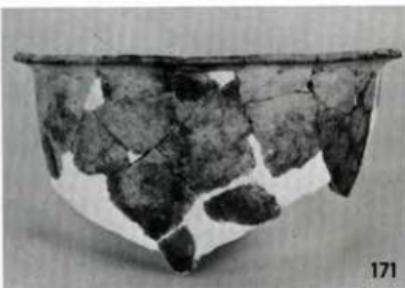
6號住居址出土土器



193



184



171



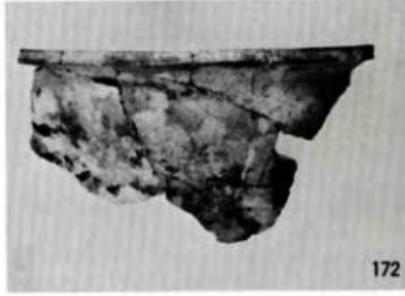
202



172



180



173

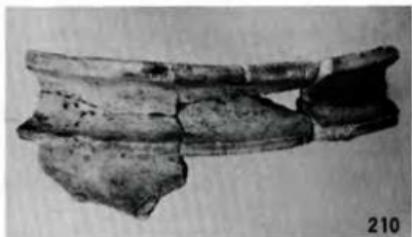
6號住居址出土土器



207



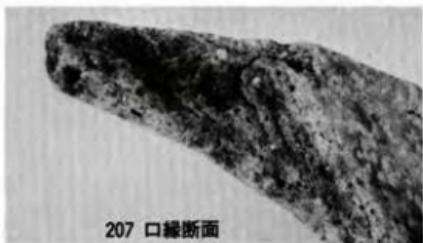
209



210



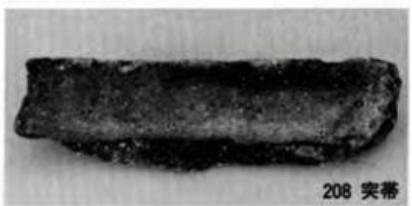
207



207 口緣斷面



208



208 突蒂

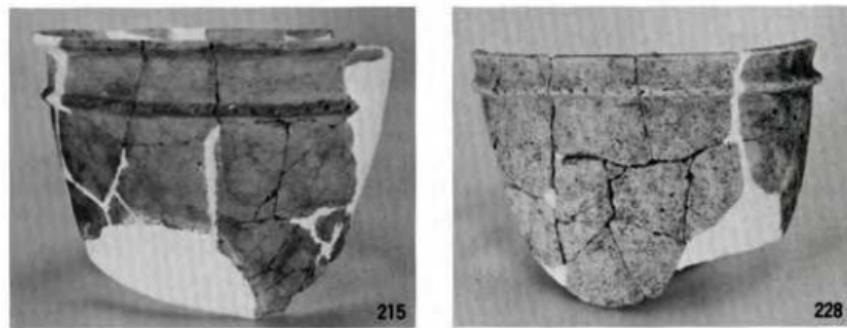
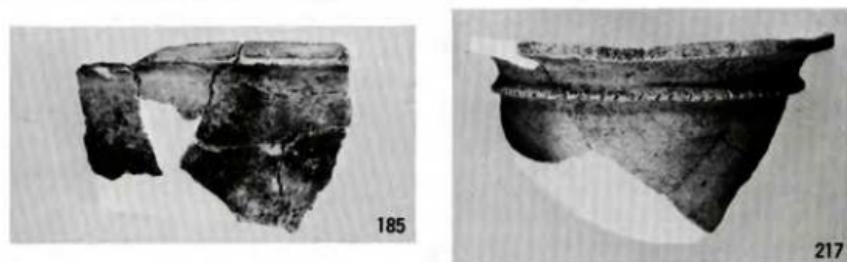
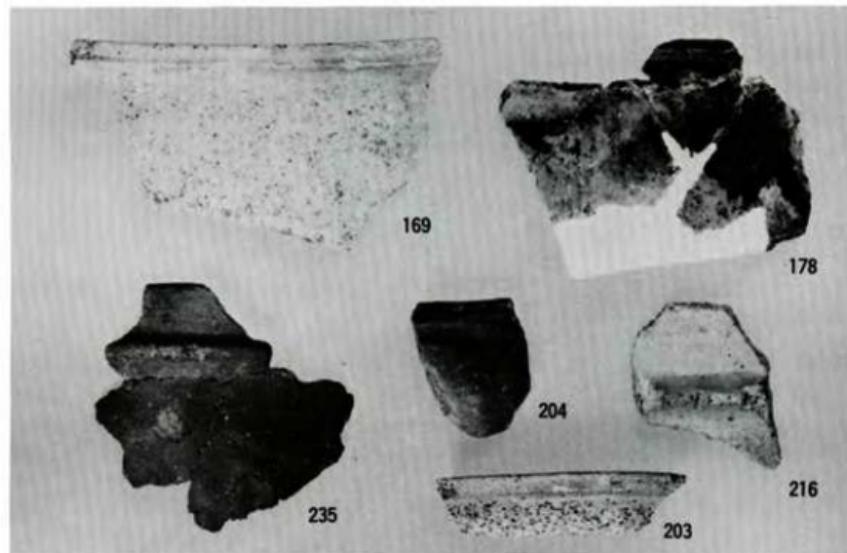


209 斷面

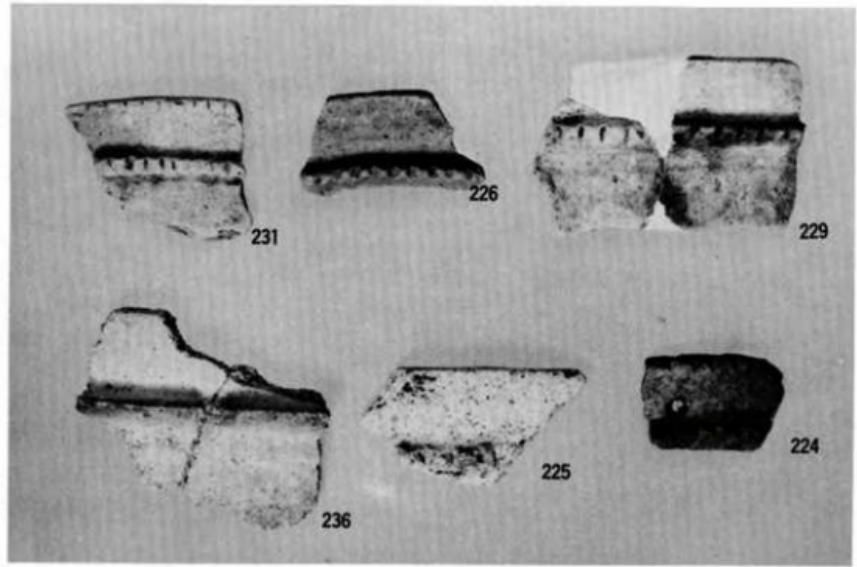
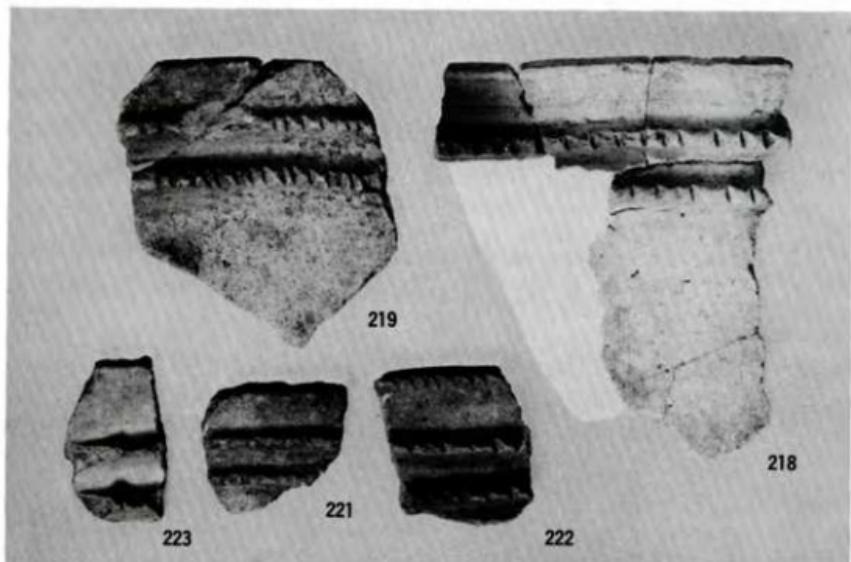


208 斷面

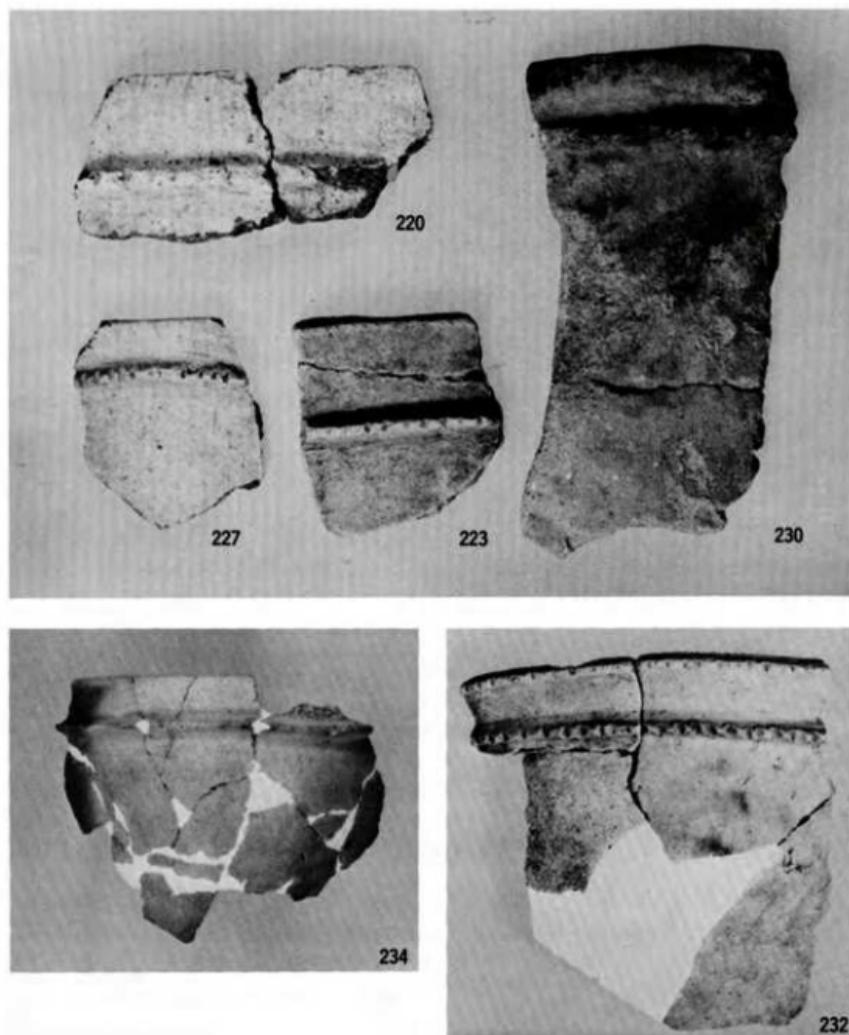
6号住居址出土土器



6号住居址出土土器



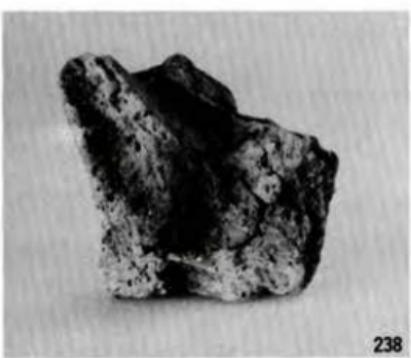
6號住居址出土土器



6號住居址出土土器



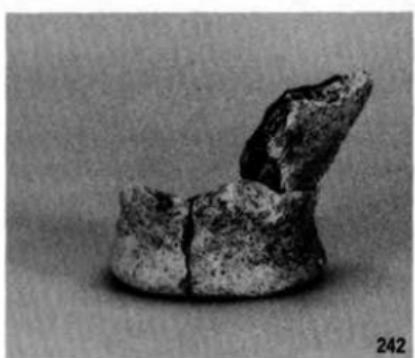
237



238



239



240



241

6號住居址出土土器



249



250



252



254



251

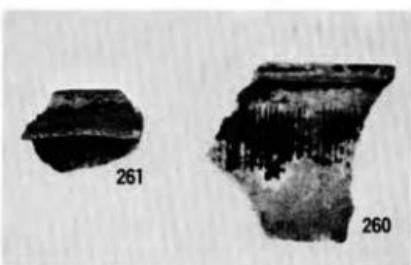


253

6號住居址出土土器



259



261

260



264



265



273

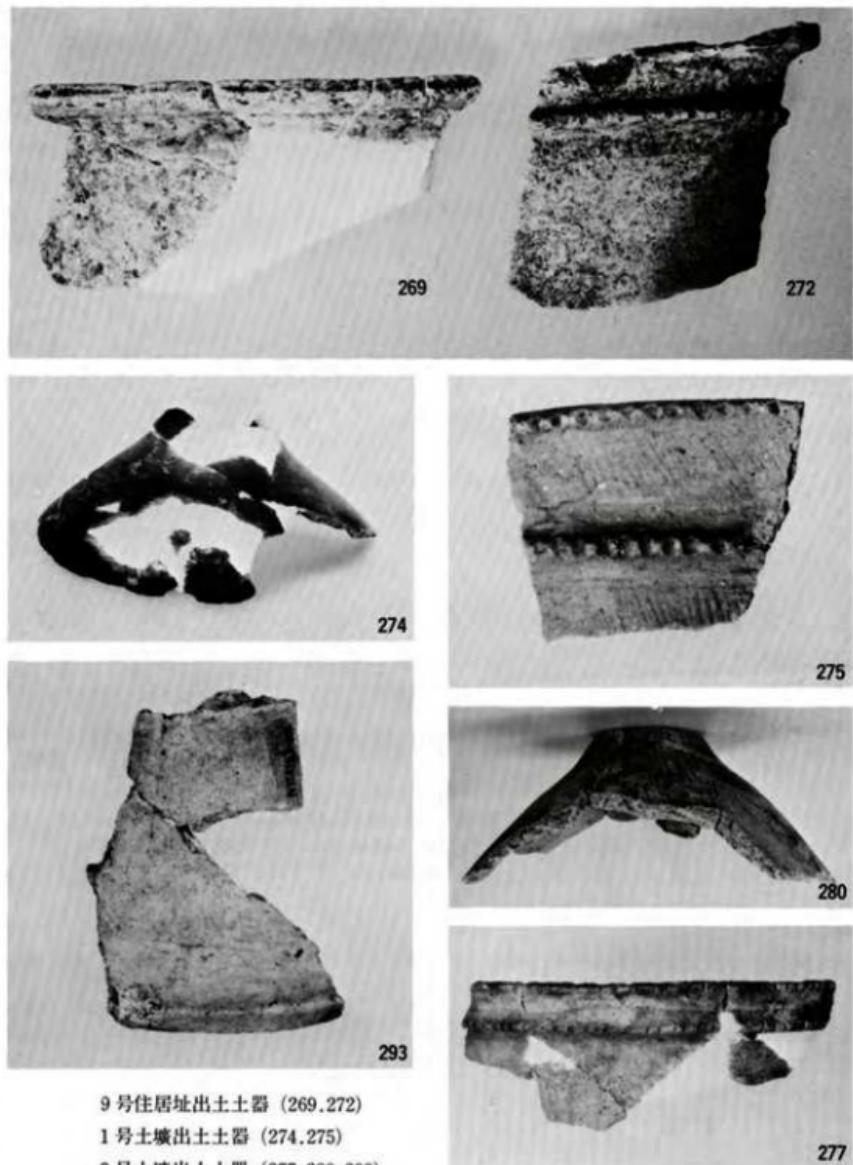


266

7号住居址出土土器 (259.260.261)

8号住居址出土土器 (264.265)

9号住居址出土土器 (266.273)



9号住居址出土土器 (269.272)

1号土壤出土土器 (274.275)

3号土壤出土土器 (277.280.293)



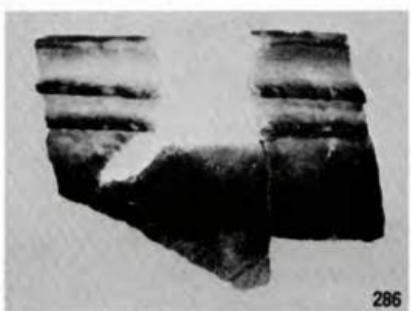
283



287



288



286



13

14

7

16

12

10

9

8

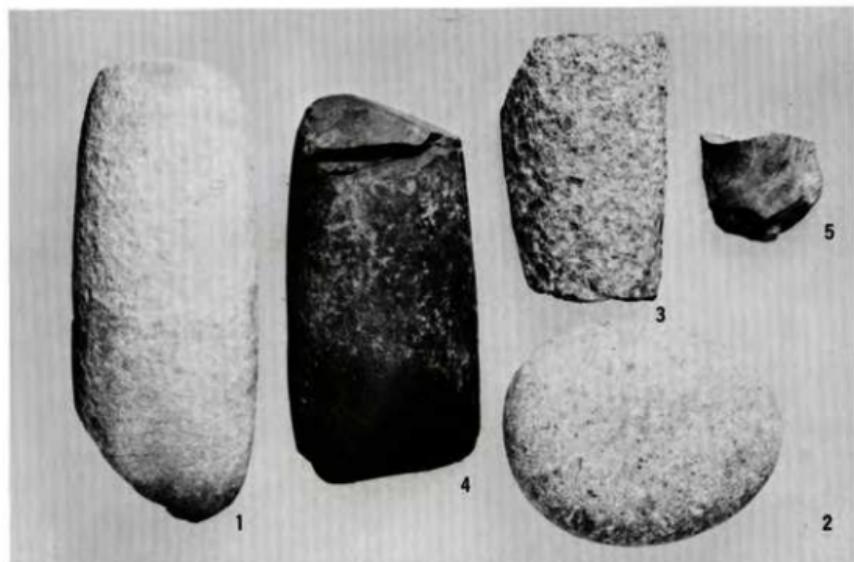
11

15



2

4號土壤出土土器、磨製石鑿、打製石鑿、台石



磨製石斧・刷石



上：4号住居址出土 フレイク
下：5号住居址出土 フレイク



6号住居址出土 フレイク・チップ

瀬 戸 口 遺 跡

例　　言

1. 本書は新富町大字新田字瀬戸口における土壤改善に伴う事前調査として新富町教育委員会が昭和59年2月13日から3月31日にかけて行った発掘調査の報告書である。
2. 調査体制は下記の通りである。

調査主体 新富町教育委員会

教育長	高松 昌波
社会教育課長	山本 繁幸
〃 課長補佐	山崎 達男
(文化財担当)	松原富美彦
調査員	日高 孝治(県文化課)
調査補助員	有田 辰美(現・新富町教育委員会) 茂山宏美(熊大)、前迫亮一、坪根伸也、吉本正典 栗畠光博、岩見典子(鹿大)

3. 本書の作成は県文化課及び埋蔵文化財センター職員の協力を得て行われた。
4. 本書の執筆・編集は日高が行った。
5. レベルは海拔絶対高である。
6. 本書では磁北を用いた。

本文目次

第1章 はじめに

1. 調査に至るまでの経緯	121
2. 遺跡の位置と環境	121
3. 調査の概要	123
4. 包含層の状態	123

第2章 遺構と遺物

1. 旧石器時代の遺構と遺物	124
2. 縄文時代の遺構と遺物	129
3. 古墳時代の遺構と遺物	155
第3章 まとめ	163

挿図目次

第1図 遺跡位置図	122
第2図 土層図	124
第3図 発掘区及び遺構分布図	125～126
第4図 第III層遺物出土分布図	127
第5図 S I 24実測図	127
第6図 石器実測図（旧石器時代）	128
第7図 集石遺構実測図(1)	133
第8図 " (2)	134
第9図 " (3)	135～136
第10図 " (4)	137
第11図 " (5)	138
第12図 " (6)	139
第13図 " (7)	140
第14図 土坑実測図	141

第15図 遺物出土分布図	143~144
第16図 繩文土器実測図・拓影(1)	146
第17図 " " (2)	147
第18図 " " (3)	148
第19図 " " (4)	149
第20図 " " (5)	150
第21図 " " (6)	151
第22図 " " (7)	152
第23図 繩文土器、土師器、須恵器実測図・拓影	153
第24図 石器実測図(1)	156
第25図 " (2)	157
第26図 " (3)	158
第27図 " (4)	159
第28図 " (5)	160
第29図 古墳周溝土層断面図	162
第30図 集石遺構分布図(形態別)	164

表 目 次

表 1. 土器観察表	170~178
表 2 石錐計測表	179
表 3 小形石器計測表(石錐以外)	179
表 4 石器計測表	179~180
表 5 細石器計測表	180

図版目次

図版 1 遺跡遠景(南から)・D-12区南壁土層断面	
図版 2 S I 1 (上部集石)・S I 1 (下部配石)	
図版 3 S I 3・4 (手前より)・S I 7	

- 図版4 S I 8・S I 9
- 図版5 D-12区散石状況（南より）・S I 16
- 図版6 S I 13・S I 13（下部配石）
- 図版7 S I 14（上部集石）・S I 14（下部配石）
- 図版8 S I 15（上部集石）・S I 15（下部集石）
- 図版9 S I 19（上部集石）・S I 19（下部配石）
- 図版10 S I 22・23（　　）・S I 24
- 図版11 第165号埴（南西より）・第165号埴周溝検出状況
- 図版12 出土土器
- 図版13 "
- 図版14 "
- 図版15 "
- 図版16 "
- 図版17 "
- 図版18 出土石器
- 図版19 "
- 図版20 "

第1章 はじめに

1、調査に至るまでの過緯

昭和59年1月6日土地所有者・松尾道明氏より土壤改善に伴う土木工事中多数の焼石が出土したので、町教育委員会に調査依頼の届出があった。これを受けて町教育委員会では現地調査を行った所、縄文土器を表採するとともに集石遺構の存在を確認したので、土地所有者に工事の中止を要請するとともに県教育委員会文化課へ連絡をとった。土地所有者・松尾道明氏は昭和59年1月25日発掘届を提出した。これを受けて宮崎県教育委員会より昭和59年2月4日付けで遺跡の取扱いについて通知がなされ、事前の発掘調査を行い記録保存を計ることとなった。この調査は所有者から依頼を受けて町教育委員会が調査主体となり昭和59年2月13日から同3月31日まで調査を行った。

2、遺跡の位置と環境

瀬戸口遺跡は児湯郡新富町大字新田字瀬戸口に所在する。遺跡の所在する新田原台地は児湯郡内に数ヶ所存在する－洪積世台地－いわゆる“原（ばる）”の一つである。これらの台地は上面では平坦面がかなり存在するが、長年に亘る開削で周辺部分はかなり複雑な谷部分を形成している。これらの谷部は台地上面部分とは違い水の便がよく古くから人々の生活の場として利用されていたと思われる。本遺跡はそれらの谷の1つである藤山川の支流によって開削された谷の最奥部に面する台地縁辺部に位置している。遺跡は南面しており、付近には湧水地点も存在する。標高は約70mで谷部からの比高は約20mである。

遺跡は新田原古墳群（国指定史跡）内に位置しており調査区内にも直径12mの円墳（第165号墳）が存在しており、周囲にも数基の円墳が存在している。また近年北へ1.2km離れた川床地区においては弥生後期～古墳時代の土坑墓・周溝墓群が確認され注目をあびている。また本報告書内において記載されている、弥生時代の集落である新田原A遺跡も東へ2kmの所に存在している。その他、台地縁辺部においては本遺跡同様、縄文時代早期～旧石器時代の遺跡が数多く確認されている。また本遺跡の西隣に位置する春日神社境内においては造成時に、突瘤土器や石器が表採されている。



第1図 遺跡位置図

3、調査の概要

調査区は本来牧場として使用されていた所であり、中央部には円墳（第165号墳）が存在し北から南へ緩やかな傾斜をなしており、南では人工的な削平により崖面を形成し、東側には谷部が存在する所である。調査前に表面観察を行ったところ、円墳の東側の部分においてかなりの焼礫の散布が見られたので、かなり削平は進んでいると思われた。そのため地形に沿って10m×10mのグリッドを設定し、西からA、B、C……北から11、12、13……と呼ぶこととし、それに沿ってトレンチを設け、遺構・遺物の状況に応じて随時拡張して行く方法で調査を開始した。

その結果、予想通りアカホヤ層は削平されていたが、遺構の残存状況は思ったより良好であり、表土層を除去すると直ちにD-E-11・12区においては広範囲な焼礫の散布が見られた。全体的には集石遺構が23基確認された。また土坑も2基検出された。これらの集石遺構に伴って押型文土器や貝殻条痕文土器を主体とした土器群が出土し、石器としては石鏃・石斧・磨石等が主に出土した。

またD-14区において溝状遺構が検出され、それに伴うと思われる深鉢・浅鉢等の磨研土器も出土している。その他、調査区内に所在する円墳（165号墳・169号墳）の周溝も確認されており、特に165号墳の周溝よりは須恵器片も出土している。

これらの調査と並行して、下層確認のトレンチを設定し掘り下げを行った所、D-12区において下層より集石遺構を確認したのでその周辺を拡張して掘り下げた所、細石核・細石刃をはじめとする石器と黒曜石の剝片等が出土した。

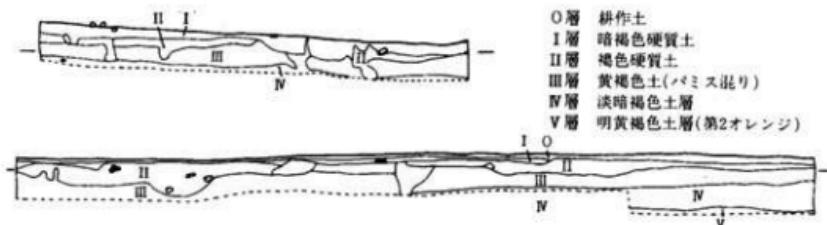
4、包含層の状態

本遺跡では、D-12区の東壁と南壁において土層観察を行った。（第2図）

その結果、基本層序はⅠ層～表土（耕作土）（約5cm）、Ⅱ層～暗褐色硬質土層（5～10cm）、Ⅲ層～褐所硬質土層（10～15cm）、Ⅳ層～黄褐色ローム層（20cm）、Ⅴ層～淡暗褐色土層（軟質）（25cm）、Ⅵ層～明黄褐色土層（第2オレンジ層）である。

Ⅰ・Ⅱ層の硬質土層が押型文や貝殻条痕文土器を主体とする縄文時代早期の包含層でありⅢ層のローム層に細石器を伴う旧石器時代の包含層が存在し、以下Ⅳ層の暗褐色のローム層第2オレンジ層（A、T）へと続くものである。アカホヤ層まで削平されていたが、牧場として使用されていたため、予想外に良好な包含層の状態であったと言える。

また調査区は北から南へ緩やかに傾斜しており、南の方へ行くに従って削平が進んでおり包含層が薄くなっていく状態であった。



第2図 土層図 (1/60)

註(1) 沢臣他「宮崎県児湯郡新富町紙面原表塚の遺物」『宮崎考古』第3号 昭和52年
 〈参考文献〉 新富町教育委員会「新富町の埋蔵文化財」1982

第2章 遺構と遺物

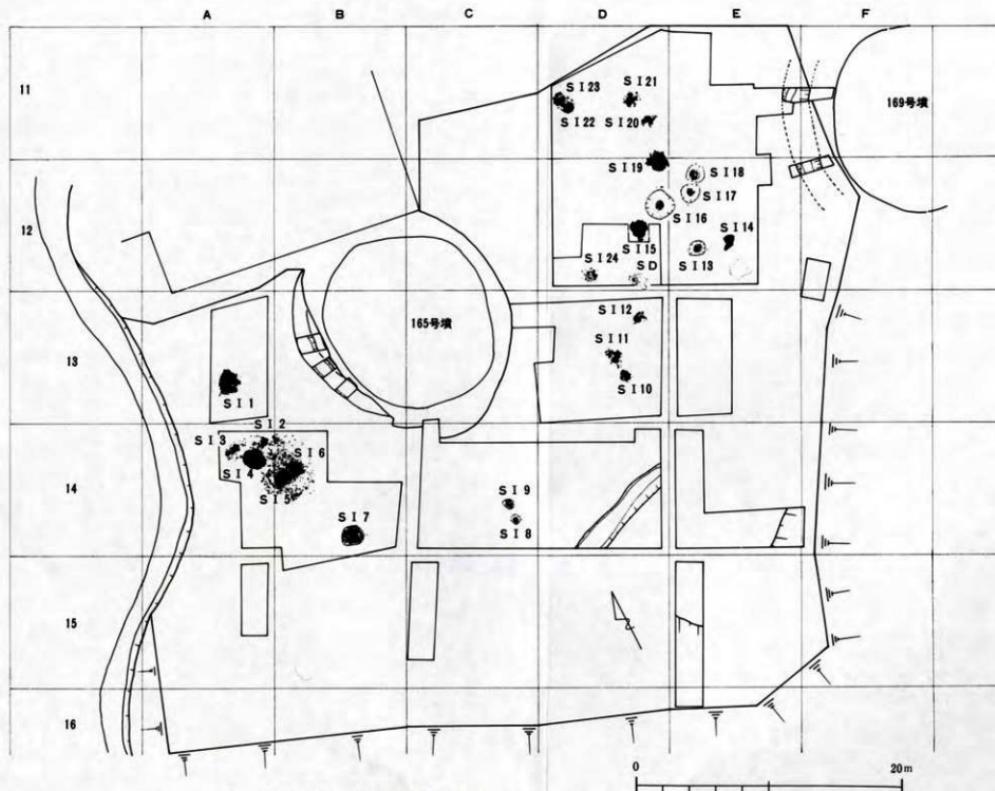
1、旧石器時代の遺構と遺物

縄文時代の調査と並行して 2m × 2m のトレンチを 3ヶ所に設定して掘り下げを行った所 D-12区の南側において第Ⅲ層（黄褐色ローム層）より集石遺構（S 124）が検出されたので、旧石器時代の包含層の存在が確認された。そのため上部の縄文時代の調査と並行して S 124の周辺を拡張して調査を行った。

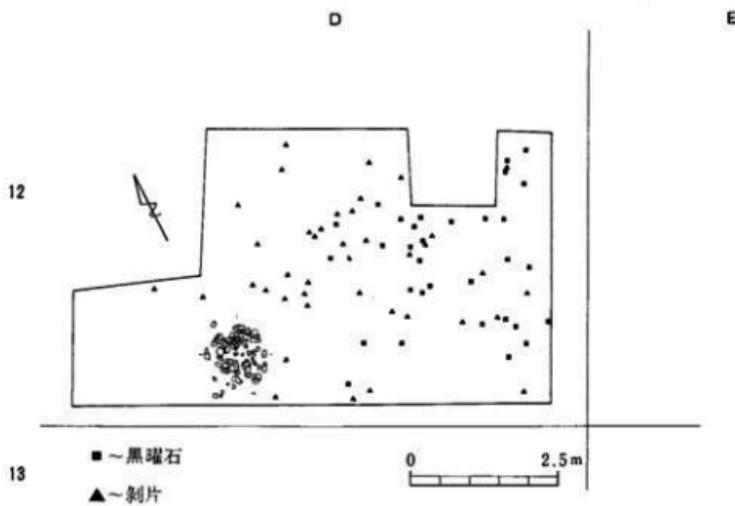
調査を行った範囲は狭かったが、集石遺構 1基とその周辺から黒曜石製の細石核・細石刃の石器をはじめとしてチップ・剝片等が出土した。

遺構

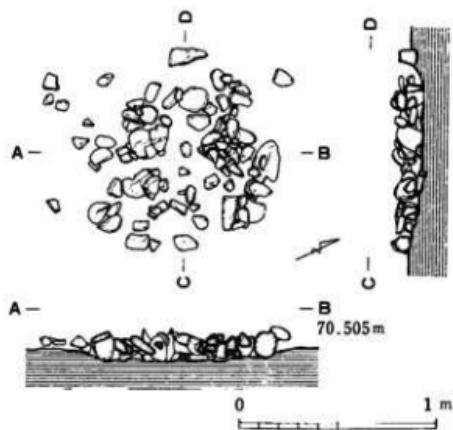
S 124 D-12区の南側に位置し縄文時代の集石とはレベル的に一段低く、層的には第Ⅲ層から検出されたもので、直径約 1m の円形を呈し、その中に円礫を中心に約 100個の礫の集中が見られた。掘り込み等は検出されず、焼土の痕跡も確認されなかった。構成礫は火を受けており赤化していた。礫同士の接合が 3 個体分確認できた。



第3図 発掘区及び造構分布図



第4図 第III層遺物出土分布図



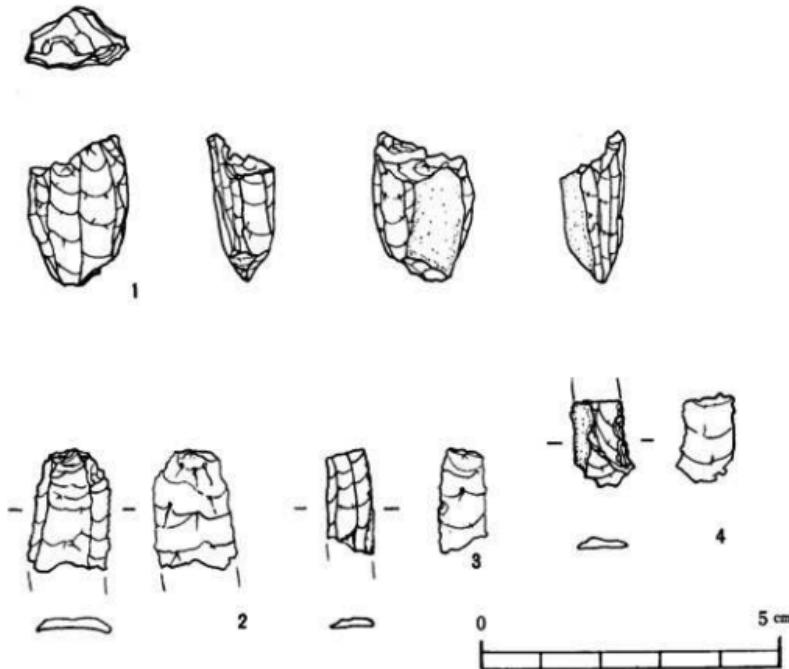
第5図 SI 24実測図

遺 物

S I 24の周辺より剥片、チップが出土しているが、黒曜石製の剥片は集石の北側にやや離れた状態で集中的に分布するようである。(第4図)

また、剥片の石材には黒曜石、チャート、流紋岩等が確認された。その中でも黒曜石は、良質で不純物を含まないもの(A)と気泡を多く含むもの(B)の2種類が確認できた。

1は小型の細石核である。自然面を1部に残しながら使用されている。石材は黒曜石A製である。2~4は細石刃である。2はやや幅広で、4は1側縁には2次加工が施されているものである。石材は3、4が黒曜石A製であるのに対して2は黒曜石B製である。



第6図 石器実測図（旧石器時代）

2、縄文時代の遺構と遺物

縄文時代の遺構と遺物は調査区全体に分布するが、地形が北から南へ緩やかに傾斜しており南の方が削平を受けているため、D・E-11、12区、A-13、14区に集中して分布した。特にD・E-12区では直径約8mの円形に焼礫が集中して散布しており、その面を1段掘り下げるとき土坑を有する集石遺構が存在するというものであった。集石遺構は全体で23基確認できたがその内土坑を有するものが15基存在した。分布はD・E-12区、D-14区、A・B-13・14区を中心に大きく3つに分かれて存在しているようである。またD・E-12区においては土坑も検出されている。なおこれらの礫はその大部分が火を受けたと思われ赤化していた。

これらの集石遺構に伴って焼礫群の間から土器・石器が出土している。土器は押型文土器や貝殻条痕文土器を中心に出土しており、また石器は石鏃・石斧・磨石等が出土している。

またD-14区においては浅い構状遺構が検出されており、縄文土器が出土している。集石遺構に伴う土器群とは異なり縄文時代晩期の深鉢や浅鉢である。

S I 1 (第6図) A-13区において検出された集石遺構である。南北に1.8m、東西に1.5mの階円形状に拳大の焼礫が集中しており、その下部に南北1.5m、東西1.3m、深さ30cmの土坑が存在した。土坑内にも礫が密集して詰っており、土坑の底面には人頭大の偏平な河原石が中央とその周辺に数個配列して存在していた。床面は硬くしまっており炭化物を含んでいた。

S I 2 (第8図) A-14区で検出されたもので、S I 4の西側に位置し、南北1m、東西0.5mの長階円形に拳大の礫が集中する小型の集石遺構である。下部には中央部がくびれ瓢丹型で深さ20cmの土坑があり、礫が詰った状態であった。床面には若干の炭化物が認められたが配石等は存在しなかった。

S I 3 (第8図) A-14区で検出された集石遺構でS I 4の北側に位置する。南北70cm、東西50cmの階円形に拳大よりやや小さめの礫が集中しており、下部には深さ5cm程度の浅い掘り込みが存在したが配石は見られなかった。床面には若干の炭化物が見られた。

S I 4 (第8図) A-14区で検出された集石遺構である。直径1.5mの範囲で拳大の礫が集積しており、下部には1.8m×1.3mで深さ30cmの階円形の土坑が存在した。土坑内は礫が詰っておりその中でも上部には角礫が多く、下部には円礫が多く存在する傾向が見られた。土坑内に配石は存在しなかった。礫中および埋土中より炭化物が出土したが、焼土の痕跡は認められなかった。

S I 5 (第8図) B-14区において検出された集石遺構である。直径1.2mの円形に拡大程度の礫が集中しており、下部には深さ30cmの土坑が存在しており、土坑内には礫が詰った状態であった。上部の礫はやや小さく下部に行くに従って大きな礫になる傾向が見られた。全体的に円礫が多い。最下面には石皿と思われる偏平な礫が存在したが意識的な礫の配列は見られなかった。また炭化物は見られたが、焼土等の痕跡は見られなかった。

S I 6 (第8図) B-14区で検出された集石遺構で、S I 5の東側に位置する。直径約1mの円形に礫が集中しており、下部にはS I 4・5より若干浅い、20cmの深さの土坑が存在した。

S I 7 (第6図) B-14区の南側部分において検出されたもので、褐色土層の中にやや黒味を帯びた埋土で直径1.5mの円形の土坑を有する集石遺構である。土坑の深さは30cm程度で上部に拡大かそれより小さめの礫が見られた。土坑の掘り込みは2段になっており、床面には長さ20cmの偏平な河原石を中央に置き、その周辺に同様の河原石を配列する配石遺構が存在した。炭化物は下層になるほど多く出土し、また配石の掘り込みの肩部には焼土の痕跡も認められた。

S I 8 (第7図) D-14区の南側で検出された集石遺構で、直径80cmの円形の土坑を有し、上部には若干の礫が見られたが、それを取り除くと中央に20cm×30cmの大形の河原石を置きその周囲に偏平な河原石を配置した配石が存在した。配石の中より炭化物が出土し、礫は最下部のものが最も赤化していた。

S I 9 (第7図) D-14区で検出されたもので、S I 8の北側に位置する集石遺構である。S I 8同様に直径80cm、深さ15cm程度の深い土坑を有し、土坑内には長さ20cm程度の偏平な河原石を中央に1個とその周囲に4個配列した配石遺構が存在した。配石内より炭化物が出土している。

S I 10 (第12図) D-13区において検出された集石遺構である。直径約70cmの円形に拡大程度の礫の集中が見られるもので、明確な掘り込みは存在しなかった。

S I 11 (第12図) D-13区でS I 10の北側に位置する集石遺構である。直径約80cmの円形に拡大程度の礫の集中が見られるもので、こまかく見ると3ヶ所に集中部分が存在する可能性もある。炭化物は若干出土している。明確な掘り込みは存在しなかった。

S I 12 (第12図) D-13区でS I 11の北側に位置する集石遺構である。南北50cm、東西90cmの階円形状に拡大程度の礫の集中が見られるもので、約100個の礫から構成されている小型の集石である。若干ではあるが炭化物の出土が見られたが、明確な掘り込みは存在しな

かった。

S I 13 (第9図) E-12区の南側で検出された集石遺構である。この集石はD・E-12区に存在した礫の集中散布内に位置しており、平面的には確認できなかった。E-12区内にトレンチを設定し掘り下げを行った所断面で確認されたものである。南北1m 東西1.3m、深さ40cm、の若干階円形の土坑を有し、土坑内には挙大程度の礫が詰った状態で存在した。(図版6) 土坑の床面には人頭大の偏平な河原石が配列された配石が存在した。この集石構成礫は円礫が多くかった。

S I 14 (第7図) E-12区の東側で検出されたもので、S I 13の北東側に位置する。この集石遺構もS I 13同様平面的に確認できず、上部の礫を取りはずした段階で直径60cm程度の円形の礫の集中が確認できたものである。深さ20cm程度の土坑を有し、その中には挙大程度の礫が密集しており、下面には人頭大の河原石を配列した配石遺構が存在した。構成礫は約400個ほどであった。

S I 15 (第11図) D-12区で検出された集石遺構である。D・E-12区の礫集中部分に位置しており、上部の礫を除去した段階で確認されたものである。直径1.2mの円形を呈し、下部には深さ50cmのすりばち状の土坑を有する。これは本遺跡内検出の土坑では最も深いものである。上部には挙大の礫が密集しており床面近くには大型の円礫が存在したが他の集石遺構で見られるように配石遺構ではなかった。集石内よりは土器・剥片等が出土し、床面では炭化物も認められた。

S I 16 (第9図) D・E-12区にまたがって検出された集石遺構である。この集石はD・E-12区の礫集中部分のはば中央に位置していたため平面的には確認できず、グリッド方向に沿って設定したトレンチの断面で確認されたものである。平面的には判明しにくいが断面観察の結果、直径約200cm、深さ25cm円形の偏平な土坑を有し、土坑内には挙大の礫が密集する本遺跡最大規模の集石遺構であると判明した。上部には挙大の礫が円礫を中心にしており、下部には人頭大の礫を配列した配石遺構が存在した。集石内よりは炭化物・土器片等が出土しており特に配石の直上においては細長い炭化物が検出された。

S I 17・18 (第10図) E-12区の北西部、すなわちS I 16の北東側に位置する集石遺構である。S I 16同様上部に礫の集中部があったため平面的には確認できず、掘り下げていく中で不定形な礫の集中を認め最初1つの集石遺構であろうと予想して掘り下げを行った所最終的には直径120cm、深さ50cm (S I 17) と直径120cm、深さ30cm (S I 18) の2つの土坑が検出され2基の集石遺構であることが判明した。どちらの集石遺構も土坑内には挙大の礫が

詰っており、床面には人頭大の偏平な河原石が配列された配石遺構が存在した。

S I 19 (第10図) D・E-11・12区のちょうど接点の所で検出された集石遺構である。土層観察用の土手にかかっていたため調査の最終段階で検出されたものである。上部に挙大の礫が集中しておりその下部には直径60cm、深さ15cmの円形の浅い土坑を有しており床面には大型礫の配石が検出された。配石の周辺からは炭化物が多く出土している。

S I 20 (第12図) D-12区の東部分、S I 19の北側で検出された集石遺構である。直径70~80cmの円形に挙大の角礫を中心にやや大型の円礫が混在して集中しているもので、構成礫は約150個ほどである。炭化物は少量検出されているが、掘り込みは存在しなかった。

S I 21 (第12図) D-12区で S I 20の北西側に位置する集石遺構である。規模や構成礫は S I 20とはほぼ同様で角礫を中心に構成され人頭大の円礫が数点混在していた。掘り込みは存在しなかった。

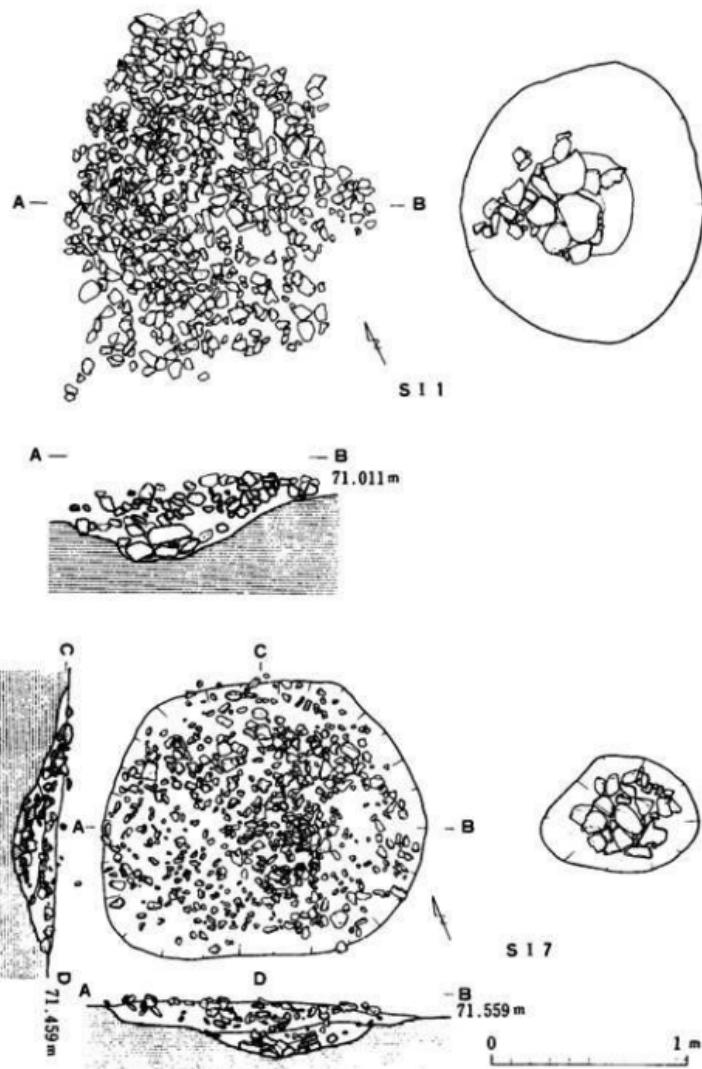
S I 22・23 (第11図) D-12区の西側に位置する2基の集石遺構で、近接するものであるが若干趣きを異にするものである。S I 22は直径80cm、深さ25cmの土坑を有し、土坑内には人頭大の円礫が密集して存在した。また土坑の床面には配合遺構は存在しなかった。一方 S I 23は人頭大の円礫と破碎された角礫が集中しているのみで下部に土坑等は存在しないものである。S I 22と S I 23はあまりにも近接しているので、その規模、構成からいって S I 23は S I 22に付随した集石遺構の感を与えるものである。

土 坑 (第14図)

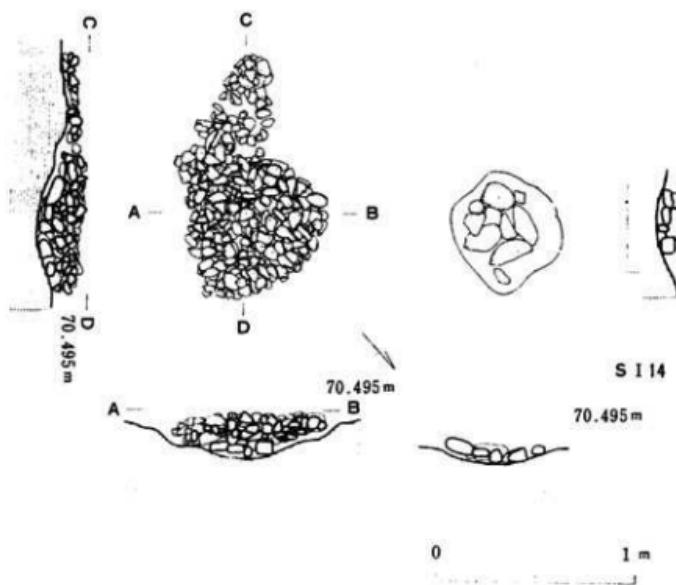
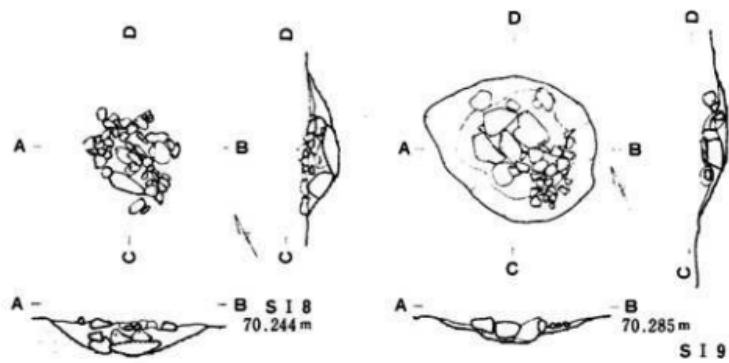
D-12区で検出されたもので、Ⅲ層の上面で検出されたものである。150cm×70cmの階円形を呈し検出面の深さは20cmを計る。土坑内よりは焼礫が出土しているが焼土等の痕跡は認められなかった。押型文土器・貝殻条痕文土器が数点出土している。

溝状遺構

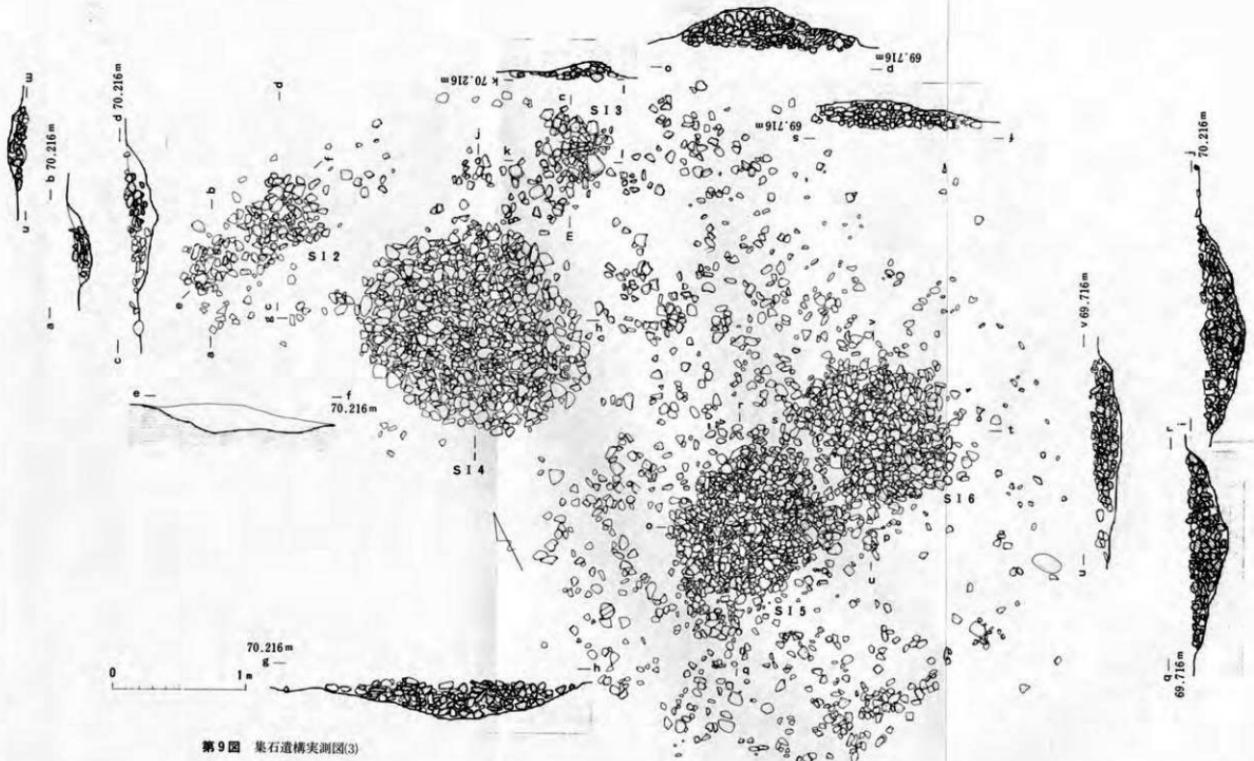
D-13区で検出されたもので幅1m、深さ20cmの極く浅いものである。溝内よりは磨研系の土器が集中して出土している。上部はかなり削平されていたと思われD-14区周辺では検出できなかった。



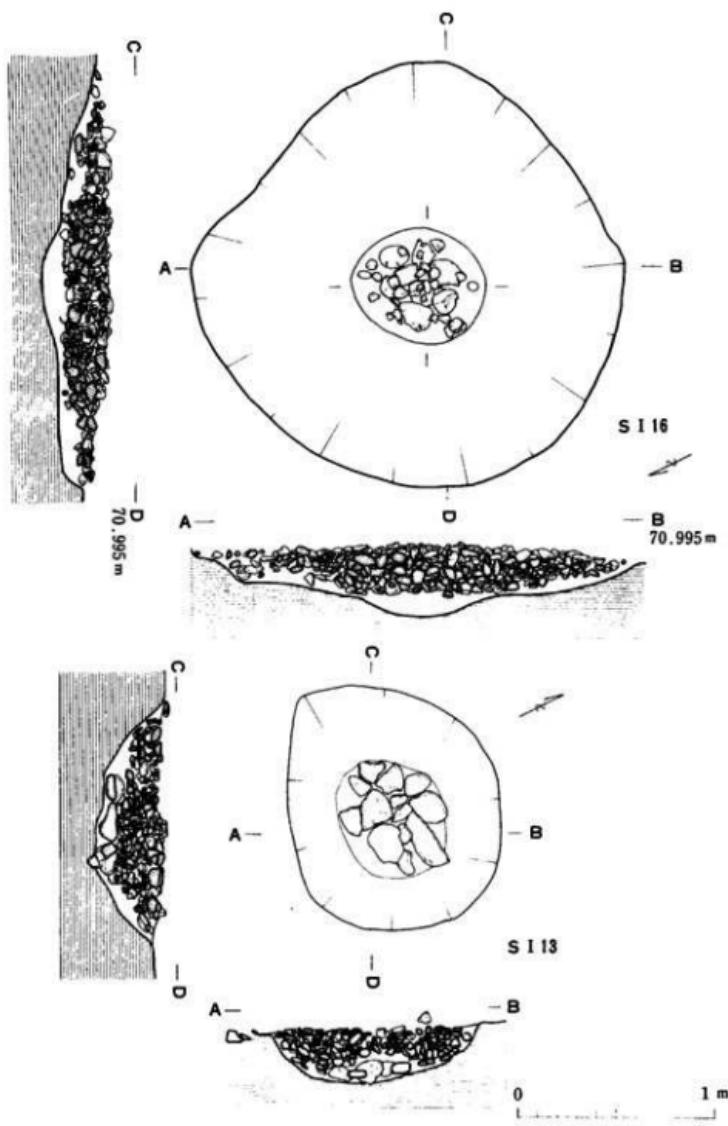
第7図 集石構造実測図(1)



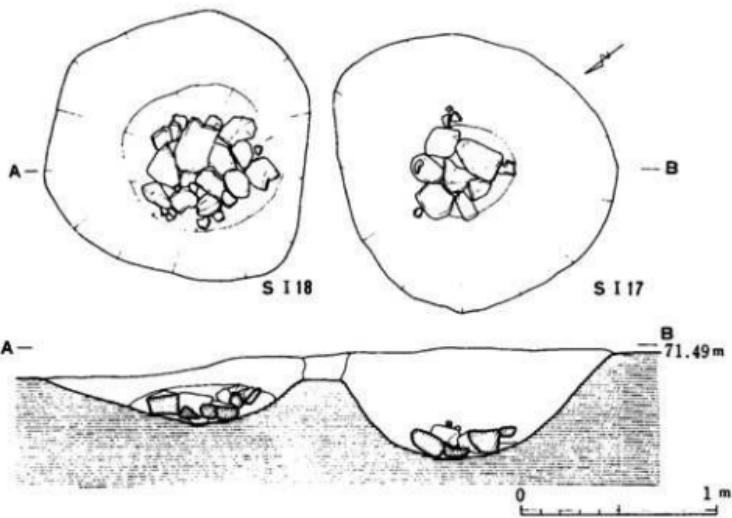
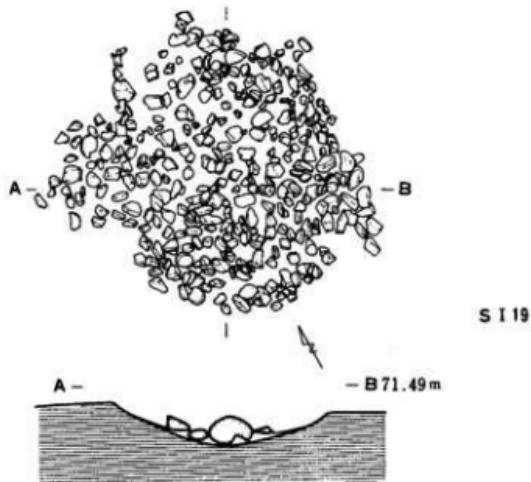
第8図 集石造構実測図(2)



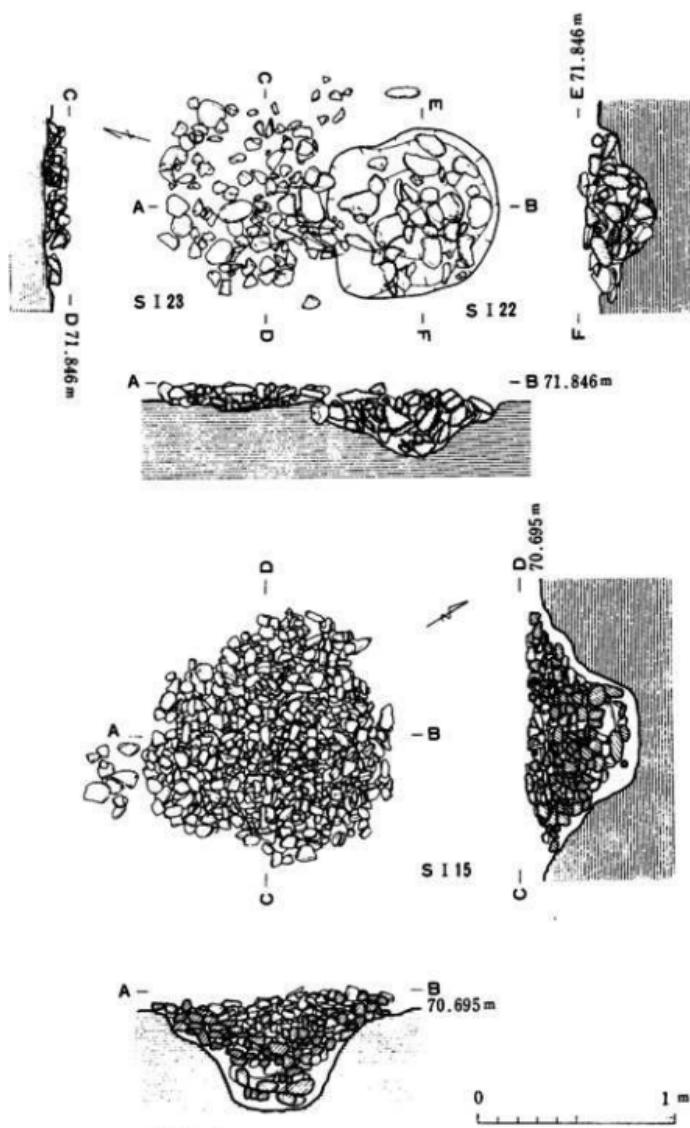
第9図 集石遺構実測図(3)



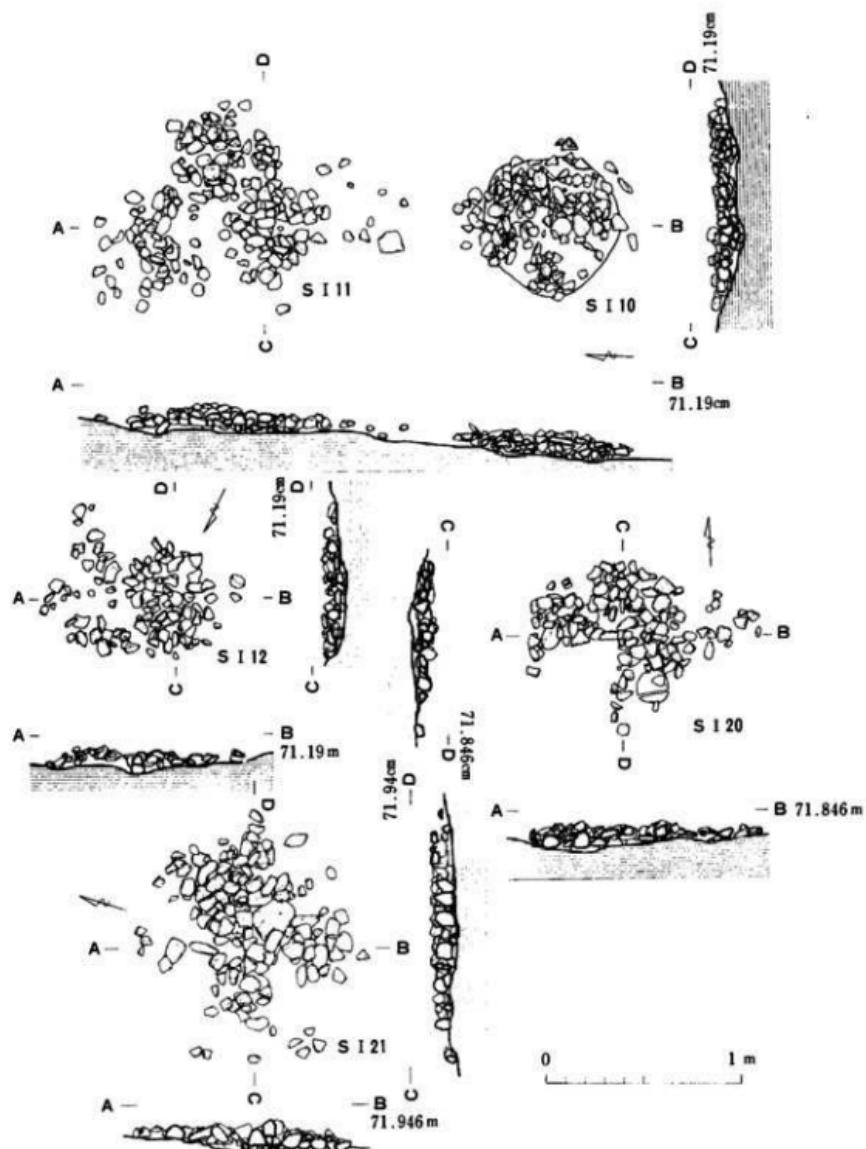
第10図 集石遺構実測図(4)



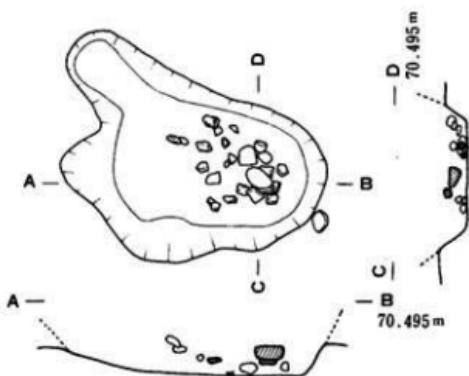
第11図 集石造構実測図(5)



第12図 集石遺構実測図(6)



第13図 集石遺構実測図(7)



第14図 土坑実測図

縄文土器

瀬戸口遺跡出土の縄文土器は押型文土器と貝殻文土器が主体を占めているが、前述の通りアカホヤ層がすでに削平されており集石も一部が露頭している状態であり、層的な遺物の把握はできなかった。すべての遺物は砾群とほぼ同じレベルより出土している。遺物の出土分布も砾部の散布とほぼ一致してD・E-11・12区、A-13・14区を中心に分布するようである。それゆえ土器については文様等により分類を行った。なお土器の個々の特徴については別に観察表を付した。

I類（第15図1～6）

口縁部外面に細隆起線文と思われる細い凸帯を數条指で貼り付けたものである。2・5で見られるように凸帯は4～5条程度であると思われる。1～3は口縁部であるが口唇部には爪形状の刻み目が施されている。また4～6で見られるように細隆起線の最下部にはやや大き目の爪形文を規則的に施している。

II類（第15～17図7～36）

貝殻文系の土器群である。文様構成や調整等により細分を行った。

II a類（第15図7～13）

口縁部外面に2条（7～10）または1条（11～12）の密な貝殻腹縁文を施すもので、胴部は貝殻条痕を施した後にナテ調整を行っている円筒土器である。

II b類（第15図13）

口縁部外面鋸歯状にヘラ描きの細線を施すもので胴部には貝殻条痕を施すものである。

II c類（第16図15～20）

口縁部外面にヘラまたは指頭によると思われる押圧連点文を2段に施すもので、胴部には荒い貝殻条痕を施す。

II d類（第16図21～27）

貝殻条痕を地文としてその上に貝殻腹縁文を施すものである。胴部片だけで口縁部片は出土していない。胎土から見ると21、22、25、26の1群と23、24、27の1群に分かれる。特に前者は本遺跡出土土器の内では角閃石を含まず、雲母を含む唯一の例である。

II e類（第16～17図28～36）

外面に貝殻条痕のみを施す土器である。この土器群は貝殻条痕の粗密や器形等によって細分することも可能であるが、個体数が少ないと文様自体に変化がないこと等により今回は貝殻条痕のみで他の文様を施さない土器として分類する。

III類（第17図37～44）

山形押型文を施す土器である。文様によって細分できる。大き目の山形押型文を施す厚手の土器（III a類）（37～39、41）、細かい山形押型文を施す土器（III b類）（40、42～44）がある。施文方向は横方向と縱方向が同一個体に存在し不規則である。

IV類（第17図45～48）

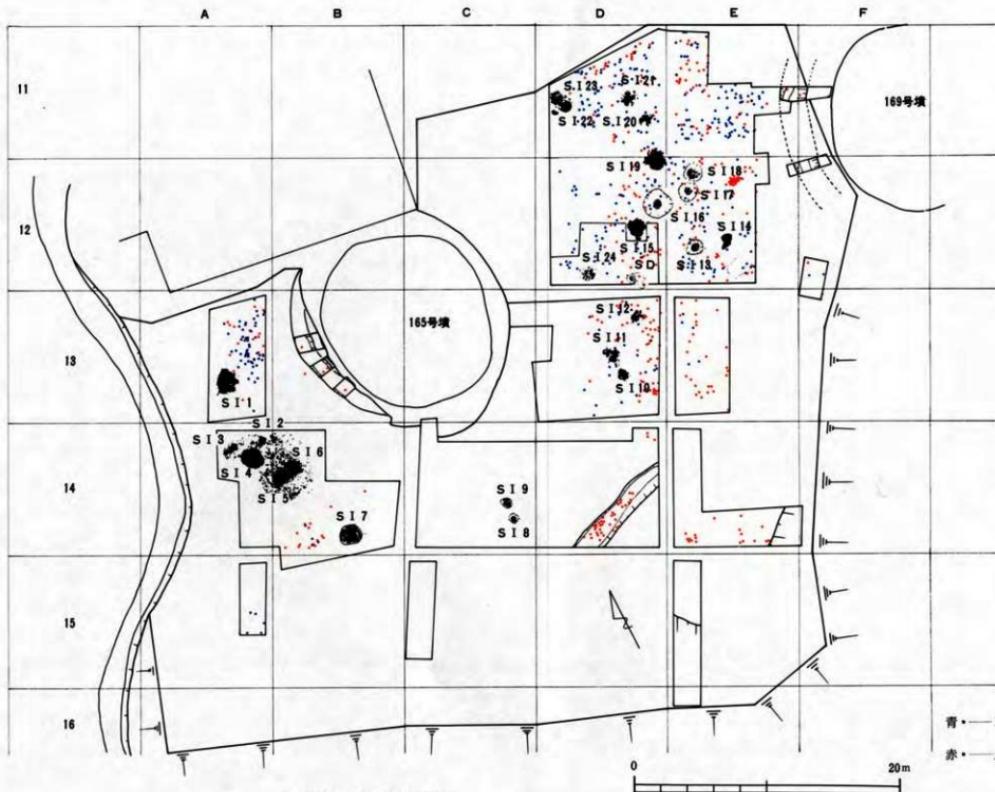
格子目押型文土器である。45で見られるように口縁部が若干外反し、口縁部外面には上部に無文帯を有し、内面には格子目押型文を施すものである。

V類（第18図～第21図49～99）

階円押型文を施す土器群である。文様や器形から3つに分類する。

V a類（第18～19図49～66）

大形の階円押型文を施すものである。口縁部は49～51の3点しか出土していないが、大き



第15図 遺物出土分布図

く外反し脣部は膨み底部はやや丸底を呈する尖底を成すもので、口縁部内面には長大な原体条痕を斜方向に施すものである。

V b類 (第19~20図67~80)

V a類より小型の隋円押型文を施すものである。口縁部(67)はV a類と異なり若干外反するもので底部(79)もV a類より定形化した尖底である。施文方向は不規則である。

V c類 (第20~21図84~99)

小形の隋円押型文を施すものである。口縁部は出土していないが口縁部付近と思われる破片(84・95)を見ると内面にも小形の隋円押型文を施すものである。底部(99)は破片であるが、平底の可能性があると思われる。

V d類 (第20図81~83)

隋円押型文の中で、隋円文が独立しておらず連続しているものである。

VI類 (第21図100~103)

平行文の原体を使った押型文土器である。口縁部は直線的に開き、口縁部内面にも外面同様の平行文を施しその後短い原体条痕を施すものである。102のように穿孔を有するものもある。

VII類 (第21図104)

棒状の工具に撚糸をX字状に連続して巻きつけたものを原体として回転施文したもので網目状の文様をもつ土器である。

VIII類 (第22図107~111)

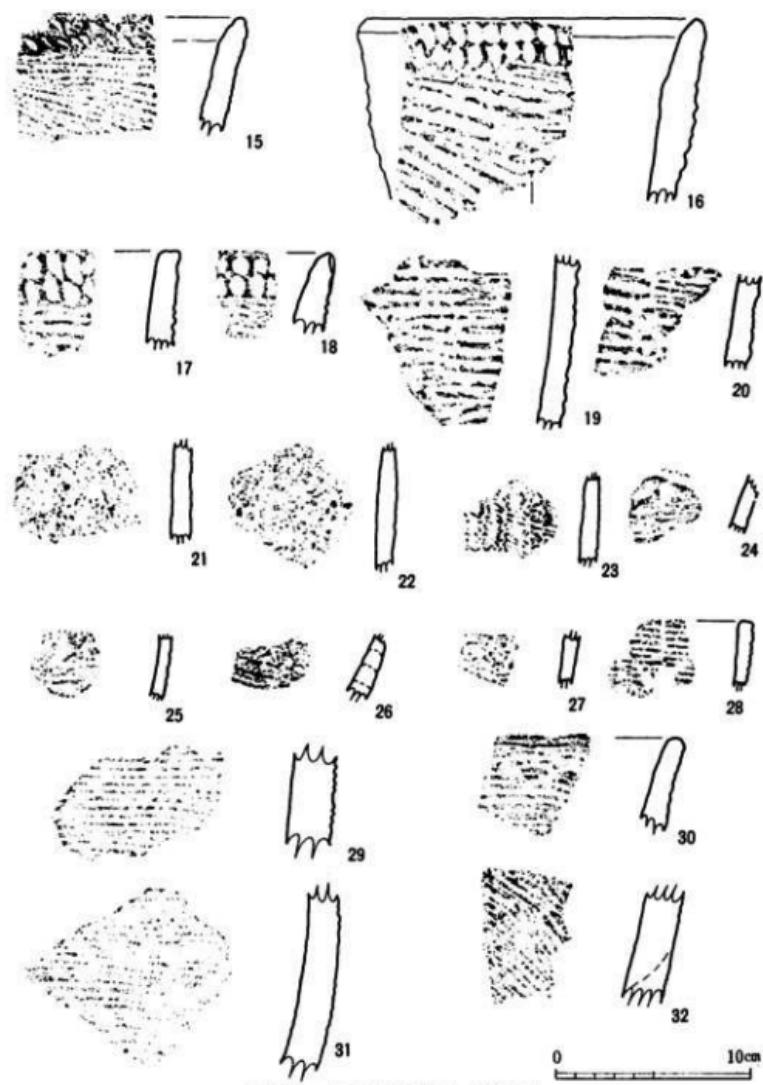
磨研系の土器群で深鉢のものである。107のように口縁部が外反して台形状の凸帯を有するものや低い三角形状の凸帯を有するものなどが存在する。脣部は111で見られるようにくの字状に膨るタイプも存在する。底部は119、120で見られるように上げ底である。

IX類 (第22図112~118)

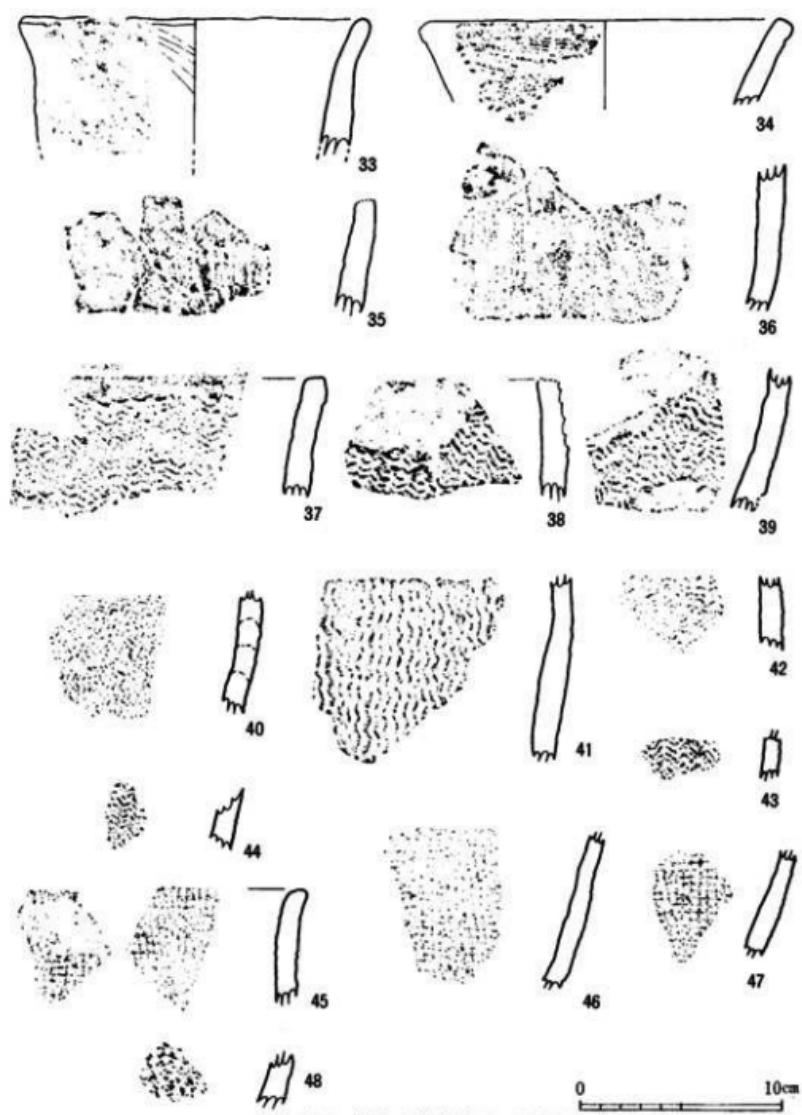
磨研系の土器群で浅鉢のものである。口縁部外面に凹線を施すもの(112)、沈線を有するもの(113、114)等各種存在するが個体数が少ないのでここでは細分は行わず一括して扱うものである。脣部は118で見られるようにくの字形に膨むタイプも存在する。



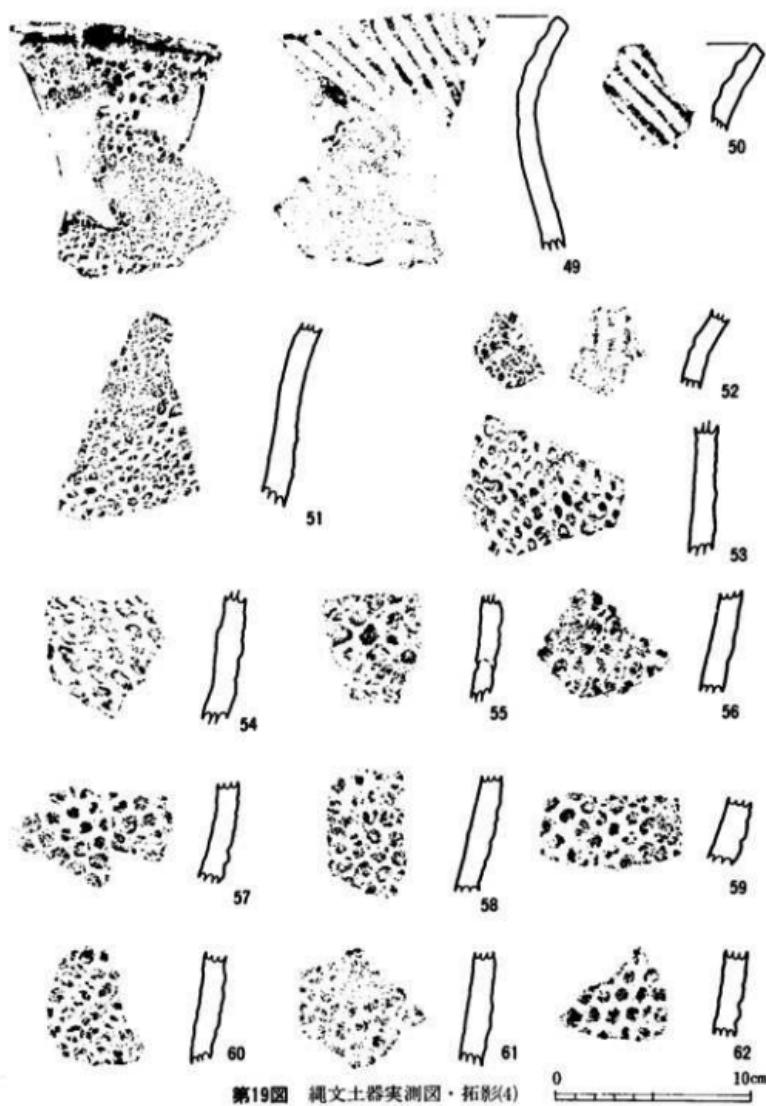
第16図 縄文土器実測図・拓影(1)



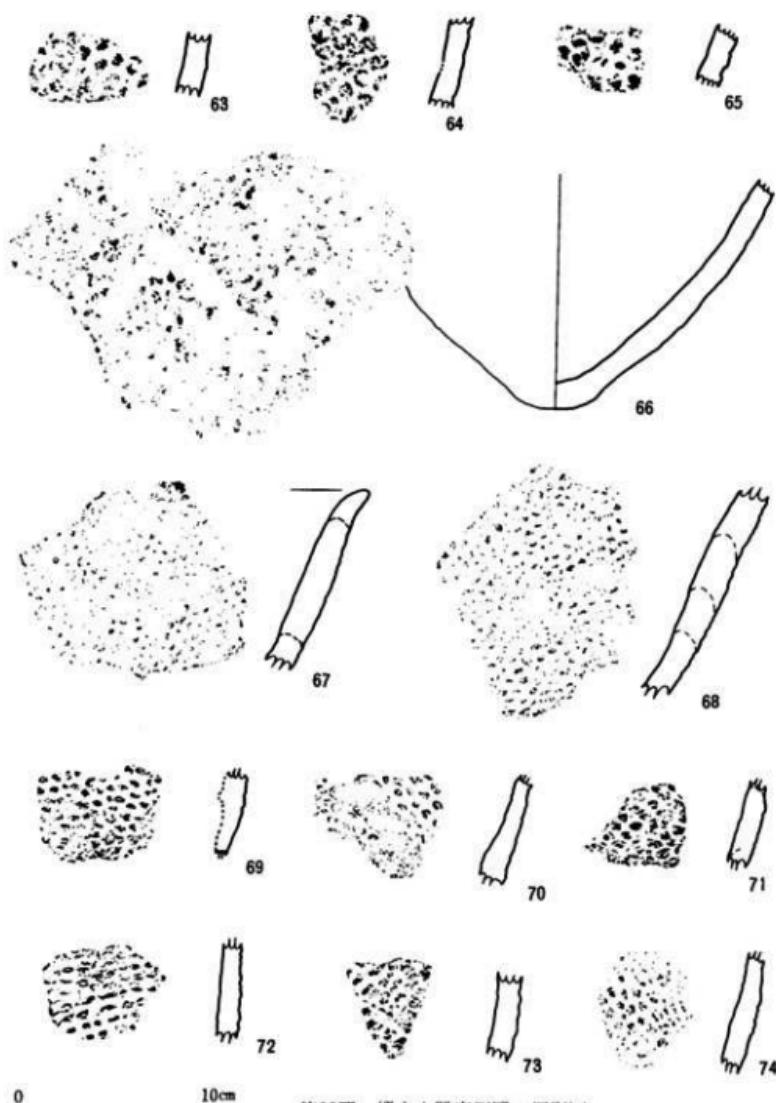
第17図 繩文土器実測図・拓影(2)



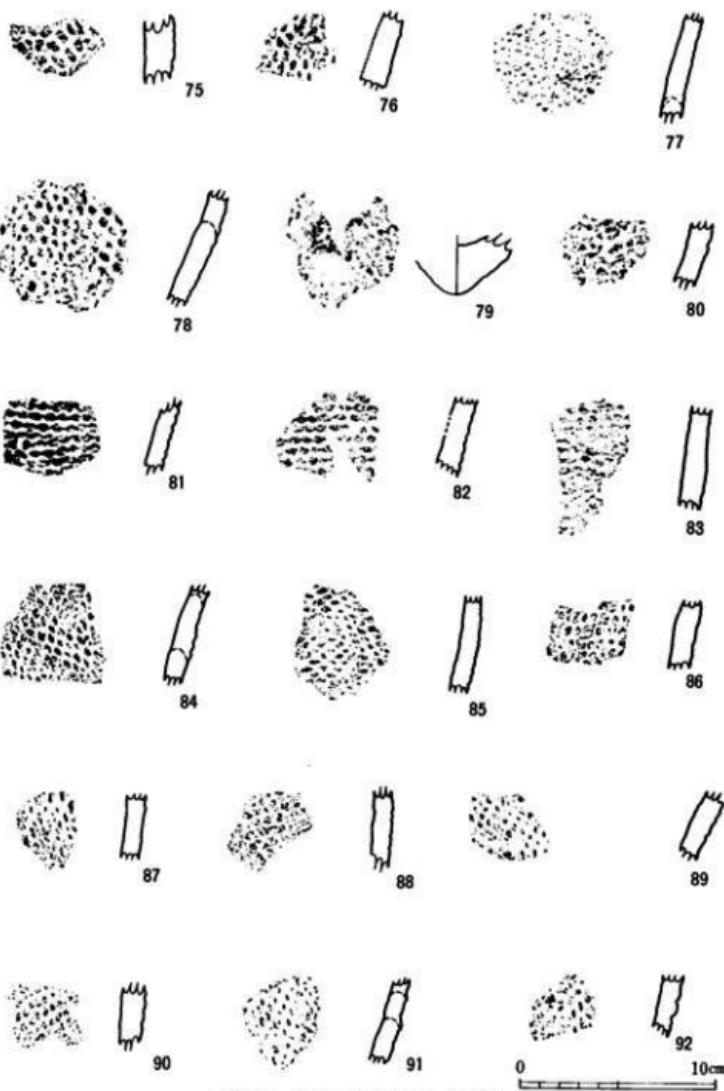
第18図 楽文土器実測図・拓影(3)



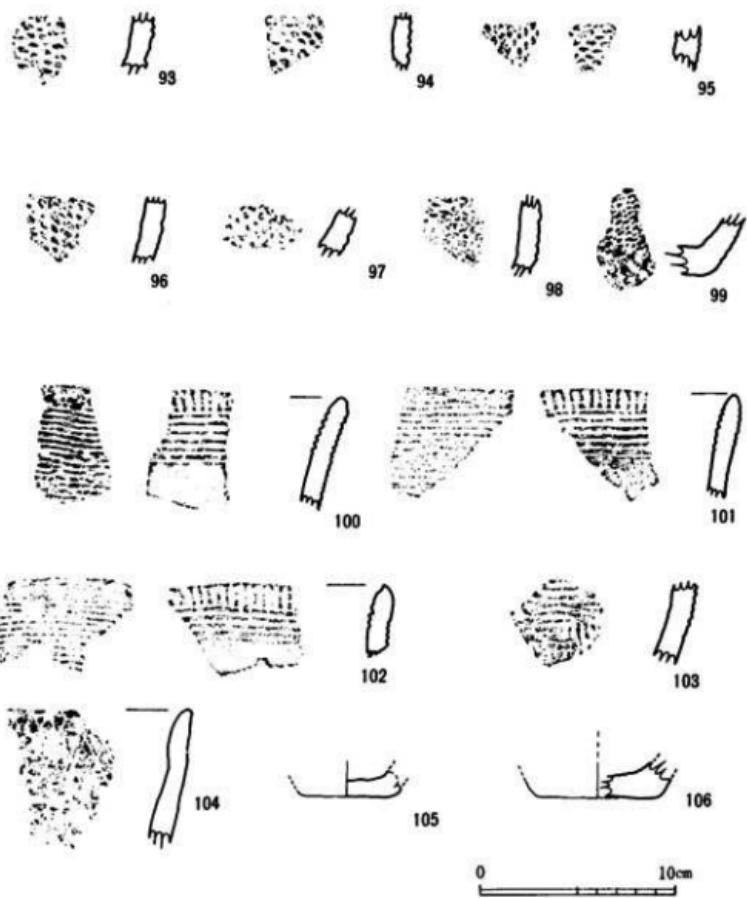
第19図 縄文土器実測図・拓影(4)



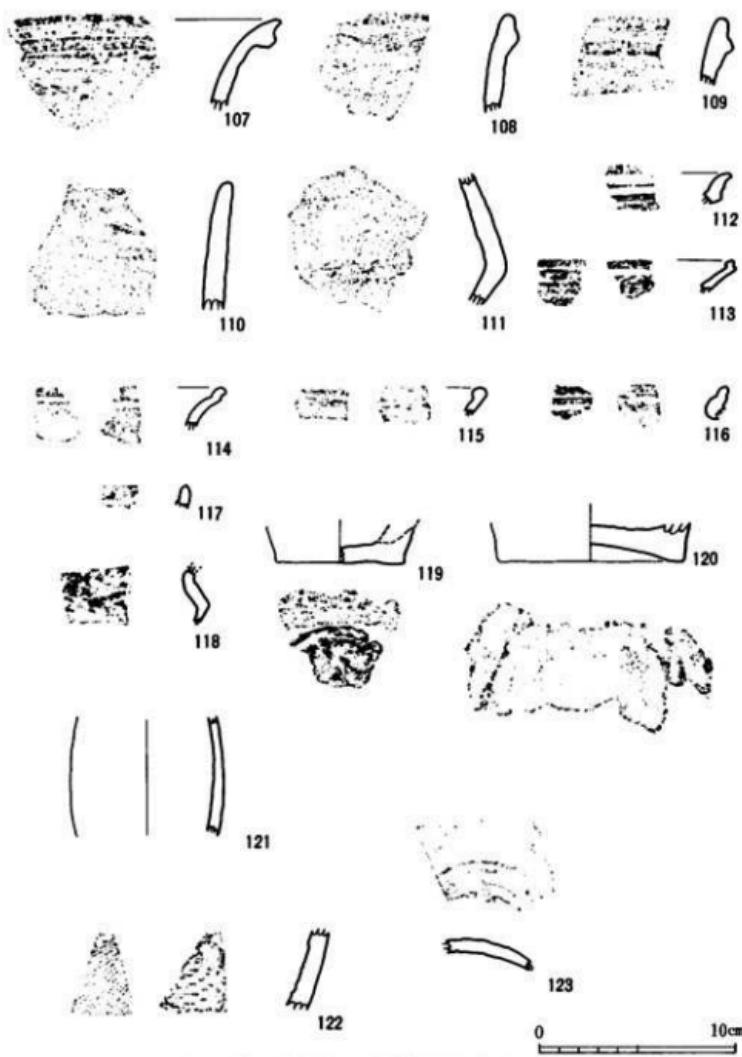
第20図 縄文土器実測図・拓影(5)



第21図 縄文土器実測図・拓影(6)



第22図 繩文土器実測図・拓影(7)



第23図 縄文土器、土師器、須恵器実測図・拓影

石 器 (第23図～第27図)

今回の調査で出土した石器は石鎚、打製石斧、磨石、凹石、石錘等である。この他に焼礫に混じってかなり多くの剥片も出土しておりその中には2次加工の施されたものや使用痕を有するものが存在した。これらの石器の出土分布は土器と同様な状況を示しており、包含層の残存状況が良好なD・E-11・12区やA-13区に集中する傾向が見られた。石材としては小型の石器(石鎚など)はチャートを多く使用しており、その中に少量ではあるが黒曜石も使用されている。大型の石器では砂岩、粘板岩、頁岩等各種使用されている。

石 鎚 (第23図1～15)

石鎚は形から分類すると正三角形を基調とするI類と二等辺三角形を基調とするII類があり、それぞれ抉りの程度により抉りの無いものa類、抉りの浅いものb類、抉りの深いものc類に分けることができる。

1～3はI-c類に属するもので抉り深い所謂「鍔形鎚」と称されるものである。チャート製である。

5～13はI-a類に属するもので、本遺跡出土石鎚の大半が属する。石材はチャート製が多いが、他に砂岩製のものも存在する。

14、15はII-b類に属するものである。14は黒曜石製である。15は出土石鎚中最大のものでA-13区より出土している。チャート製である。

小型石器 (第23図16～19)

16、17は異形局部磨製石器で、所謂「トロトロ石器」と称せられるものである。先端部と脚部が丸味を帯びている。16は中央部が若干磨かれており剥離痕の種がつぶれている程度であるが、17は剥離痕が完全につぶれる程磨かれている。両方ともチャート製である。

18、19は両端を尖らせた磨製石器である。断面を見ると表裏両面とも平坦に磨かれており側面は丸くつくられている。19は両側に刻みが施されている。石材は両者ともチャート・黒曜石の類ではなく、良質の砂岩と思われる石材を使用している。石鎚の一種か、装飾品に使用されたものと思われる。装飾品とすれば18は19の未製品とも考えられる。

打製石斧 (第24図20～25)

打製石斧は欠損品が多く完形品は21、25の2点のみである。20は大型品で浅い抉りを有す

るものである。22、23はやや小型で浅い抉りを有するものである。20、24は自然面を一部残している。21は小型品でノミ状の打製石斧である。25は偏平打製石斧といわれるものである。石材としては砂岩や粘板岩など堆積岩系のものや安山岩などの火成岩系のものなどと各種使用されている。

剥片（第25図26～32）

剥片も多数出土しておりその内には2次加工や使用痕を有するものが存在した。26～28、30、32は流紋岩製、29は砂岩製、31は黒曜石製の剥片である。26～30、32はいずれも、二次加工や使用痕を有するもので、スクレイバー的な使用をしたと思われるものである。各々自然面を残した剥片を使用しており、特に、26、29、30などは片面は全部自然面を残している。また31は刃部があまり鋭角ではなく、その厚さや剥離等から考えて何れかの石核の可能性も考えられる。

石錘（第25図33～35）

石錘は3点出土している。いずれも打ち欠きの礫石錘である。石材は砂岩を使用している。

凹石・敲石・磨石（第26・27図36～47）

凹石（36～41、48）は偏平な石の平坦面を両面使用しているものがほとんどであるが、41のように偏平な石の片面だけを若干使用したようなものもある。

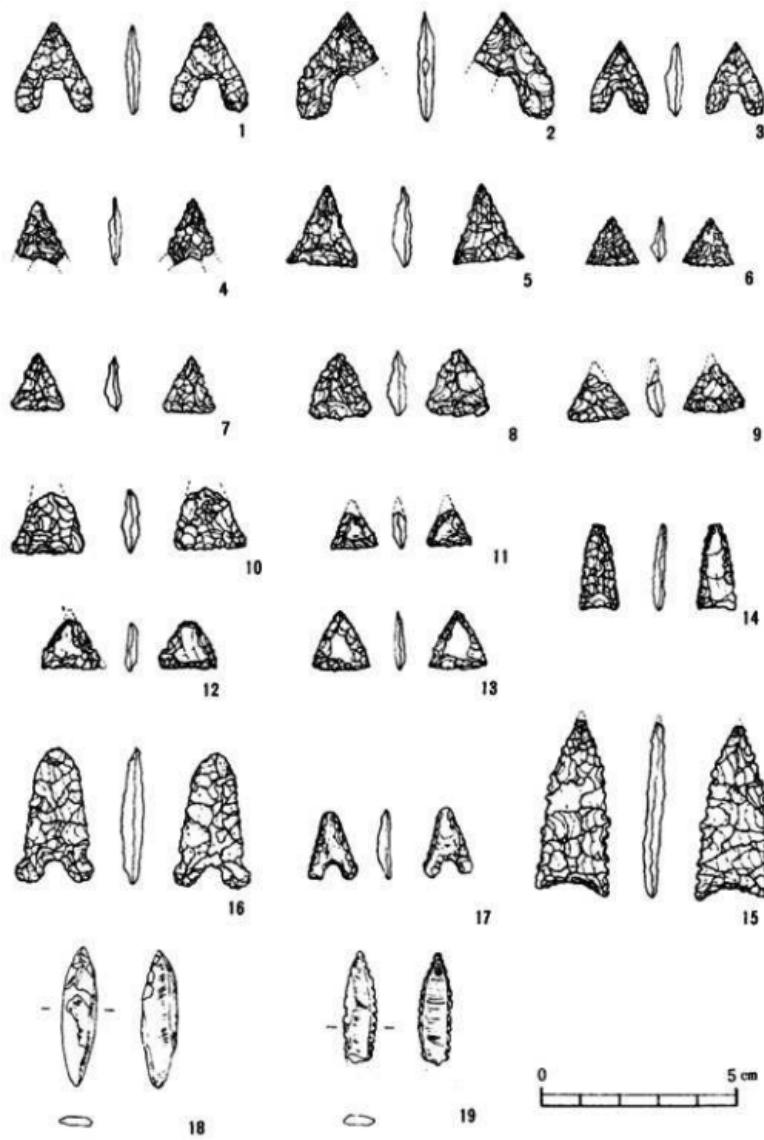
敲石は42のように顕著な例はすくないが、凹石・磨石等の1部を使用している例も多く、使用痕を有しているものが存在する。（36、37、39）

磨石は偏平で石の平坦面を利用しているようである。

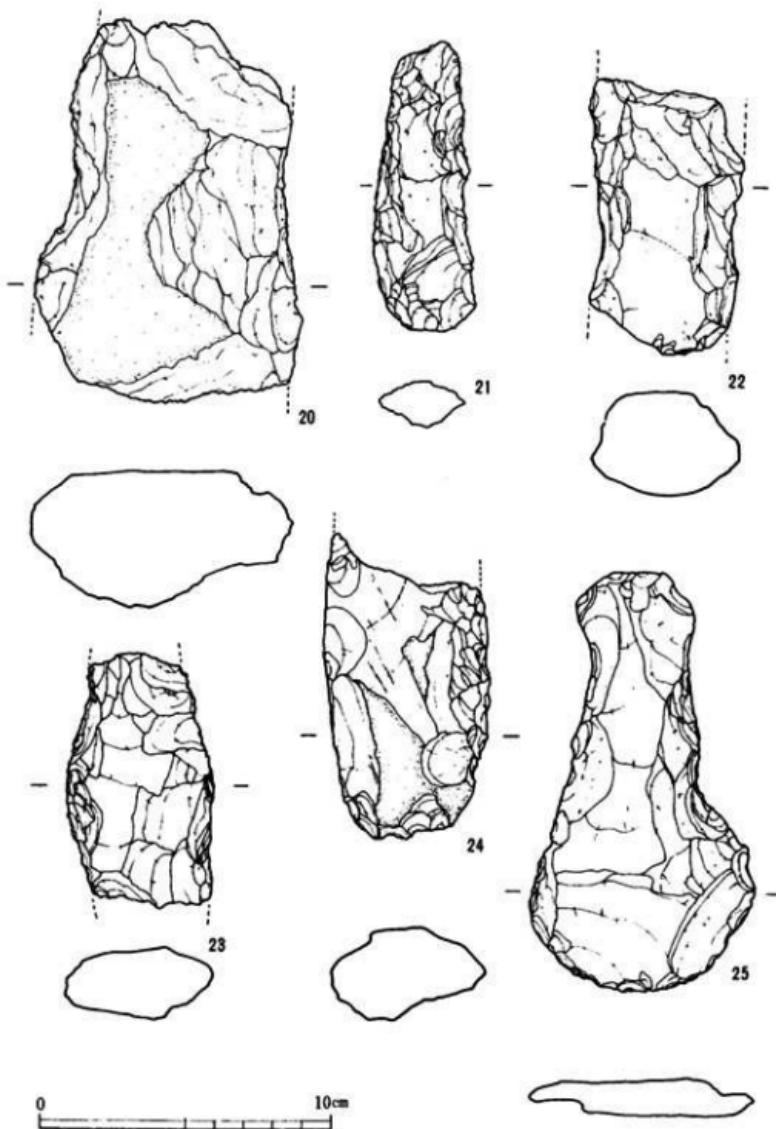
石材としては、砂岩が多いが46、47のように火成岩系の石材を使用しているものもある。

3、古墳時代の遺構と遺物

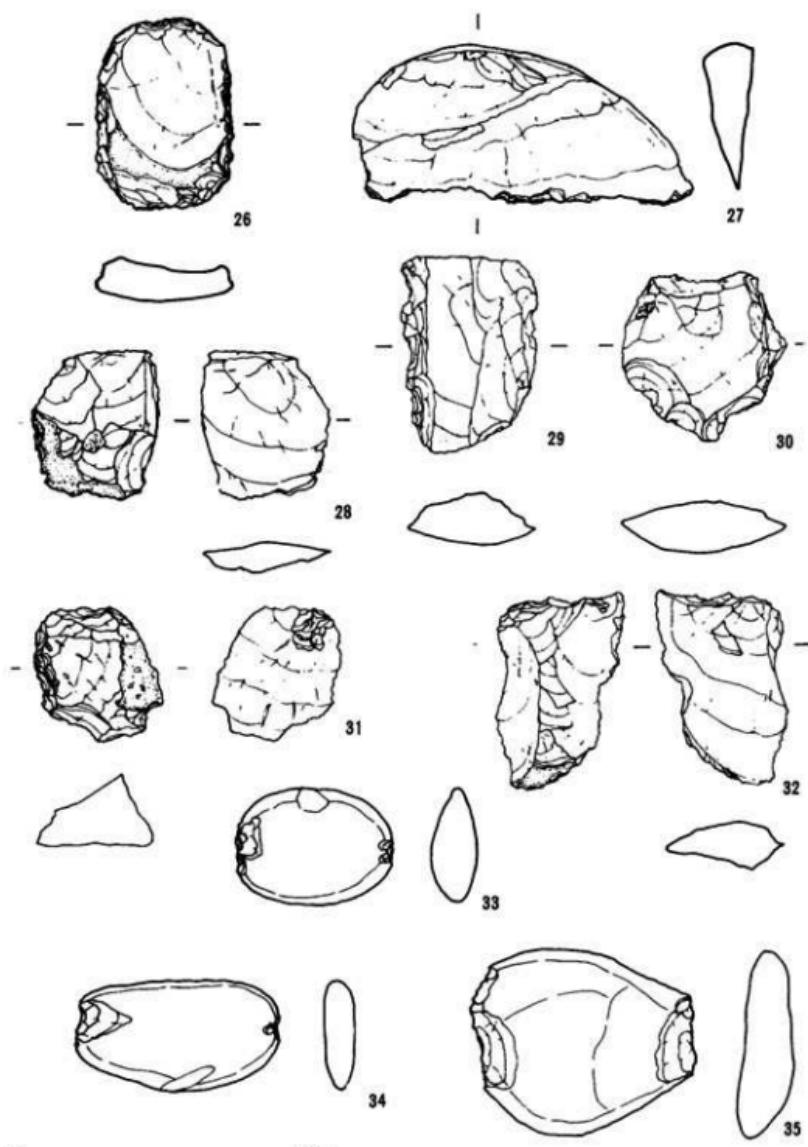
本遺跡は新田原古墳群（国指定史跡）内に位置しており、今回の調査区内には165号墳（円墳）が中央部に存在し、調査区の東端には169号墳（円墳）が隣接して存在しており、その周溝と思われる溝状遺構がそれぞれの古墳において確認されている。また調査区内において数点ではあるが土師器や須恵器片も出土している。



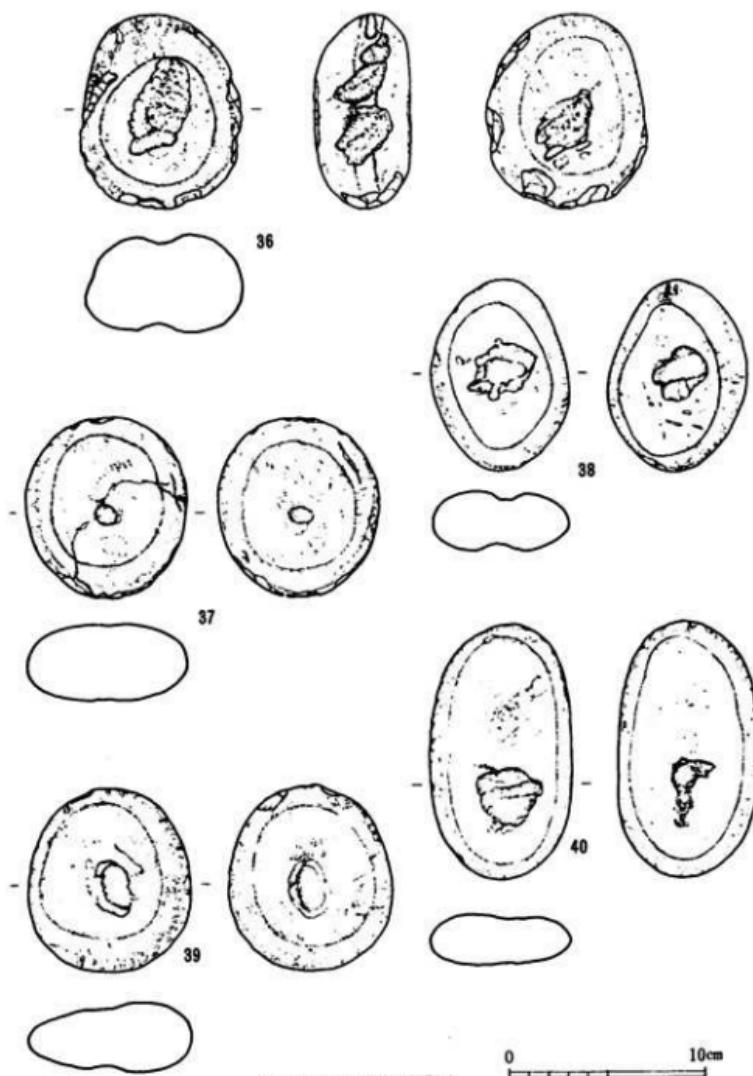
第24図 石器実測図(1)



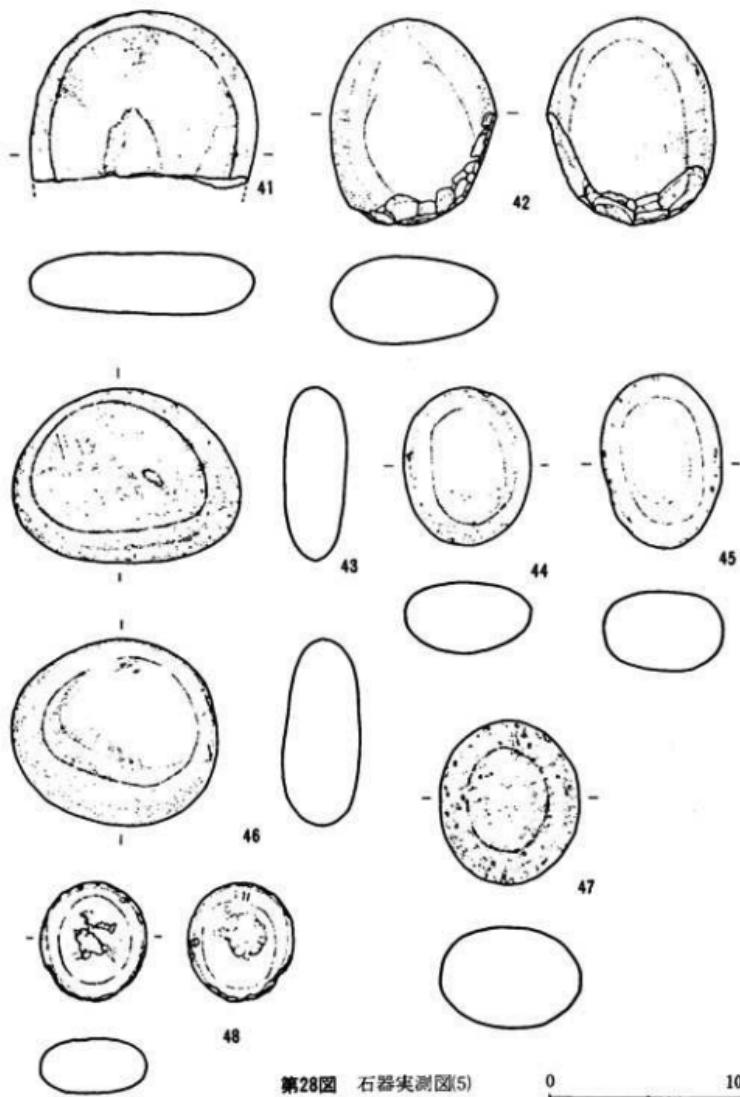
第25図 石器実測図(2)



第26図 石器実測図(3)



第27図 石器実測図(4)



第28図 石器実測図(5)

0 10cm

遺構

165号墳の周溝は当初東側と南側に設定したトレンチでは確認できず周溝は削平されたものと予想されたが、西側に設定したトレンチで溝状遺構が検出されたので拡張を行うと周溝が古墳に入り込む形で検出された。これは最初の墳形は現在のものよりやや小さいもので、それが長年の耕作や土砂の流出等により東側と南側の部分に拡張された形で現在の墳丘が形成されていったと考えられる。

周溝は幅1.3m、深さ35cmの規模をもち断面形はやや台形状を呈するものである。埋土は黒褐色軟質土である。

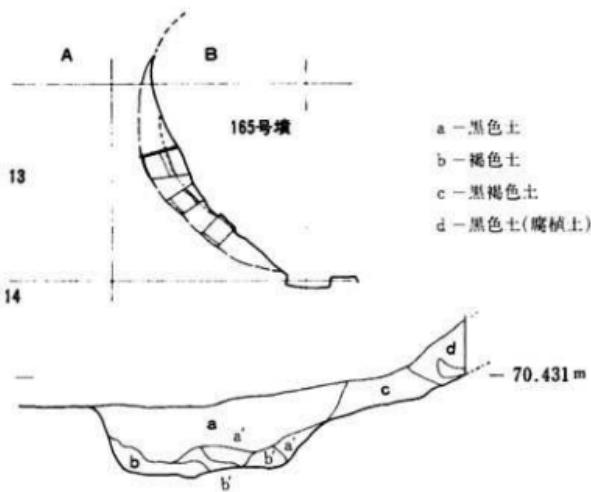
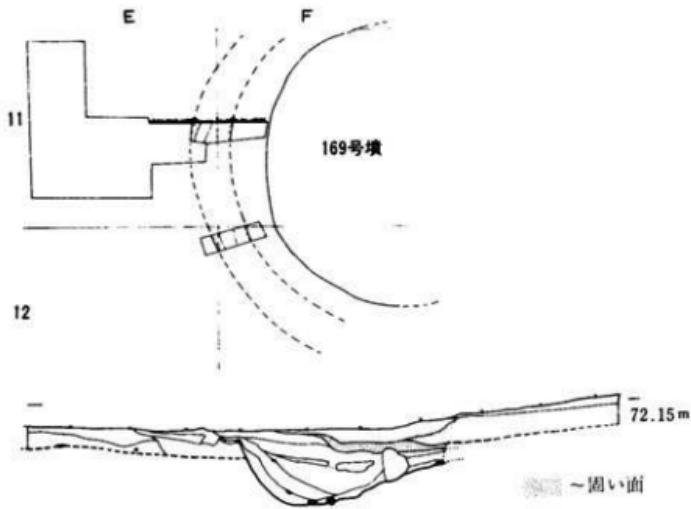
一方169号墳は調査区東端に隣接するもので、古墳付近までトレンチを延長して掘り下げた所、墳丘裾部より2mの所に溝状遺構を検出したので、それより南へ5mの地点に墳頂部へ向ってトレンチを設定した。この地点においても前者の延長と思われる溝状遺構が検出できたので古墳の周溝であると判明した。

この周溝は幅1.1m、深さ40cmで断面形はややU字状を呈する。溝内からは石が数点出土したが葺石であるかどうかは不明である。埋土は黒褐色土である。なお、第30図で圓い面としているのは古墳の裾を現在まで道としていた面の存在を示している。

遺物

古墳時代の遺物としては、土師器・須恵器片が数点出土している。

I21は土師器片である。高壇の脚部であり、エンタシス状に膨みを持つタイプである。I22、I23は須恵器片である。I22は甕の破片で外面は平行、内面は同心円文の叩きが施されている。I23は壺蓋の破片であろうと思われる。外面にはヘラ削りが施されている。なおI23は165号墳の周溝の上層から出土したものである。



第29図 古墳周溝土層断面図 (1/30)

第3章 まとめ

旧石器文化について

本遺跡においてはD-12区の第III層において、細石刃・細石核を伴う包含層が確認でき、それに伴う多くの剥片等と一緒にIII層下部において集石遺構が1基確認された。

県内ではこれまで旧石器時代の遺跡の調査例は出羽洞穴（日之影町）・岩土原遺跡（北方町）・船野遺跡（佐土原町）等を数えるほどであったが、近年特に宮崎学園都市遺跡群の発掘調査を契機として、堂地西遺跡・前原西遺跡（宮崎市）・芳ヶ迫第1遺跡・札ノ元遺跡（田野町）・赤木遺跡（延岡市）・新村遺跡（野尻町）など県内各地で相次いで調査されその資料も増加している所である。

これらの遺跡のうち集石遺構が検出されているのは、堂地西遺跡・芳ヶ迫第1遺跡・札ノ元遺跡・高山遺跡（野尻町）・船野遺跡である。構成疊等に若干の違いはあるがいずれも掘り込み等の下部施設を持たないものであり、この点は縄文時代早期に見られる集石遺構とは根本的に違う所である。これらの集石遺構については一般的に調理施設として考えられているが、調理法や調理対象・疊の使用頻度などもう一度検討してみる必要がありそうである。

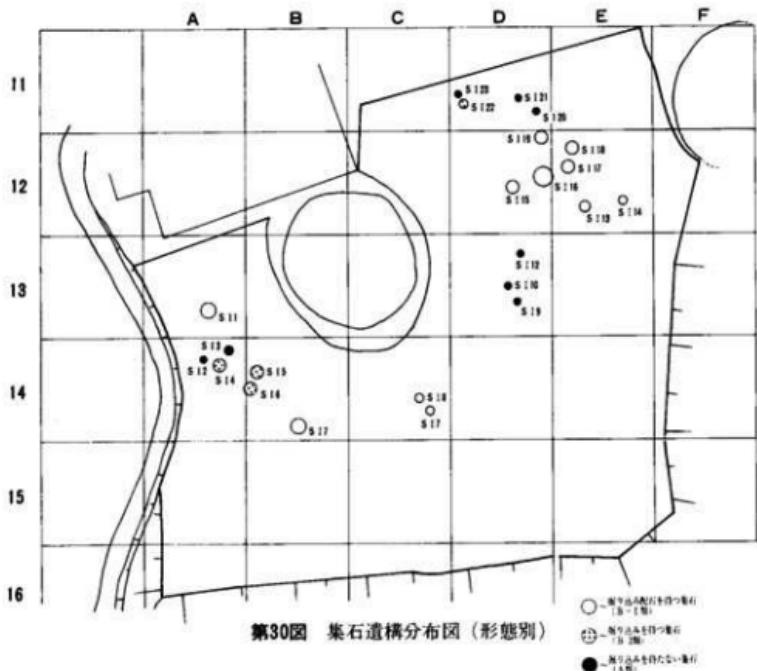
また、石器群であるが、細石器を主として出土しており、小型の黒曜石製の細石核の形態や、出土層が縄文時代早期の包含層であるI・II層より下層で土器を伴わないこと、またV層とした第2オレジ層（A・T）との間に間層を狭む点等から考えて、ナイフ形石器等は伴わないが、一つ瀬川を挟んで対岸部分に位置する船野遺跡の石器群に類似するものであろうと思われる。

また本遺跡の細石器の石材となる黒曜石は、気泡のはいらない良質のものと、気泡が多い量にはいるやや不良のものとの2種類があり、後者のものは鹿児島県大口市日東原産のものと類似している。現在、県内では黒曜石の原産地として明確なものは確認されておらず、この点とともに旧石器時代の流通を今後検討していく必要があると思われる。

集石遺構について（縄文時代）

瀬戸口遺跡においては、縄文時代早期の遺構として23基の集石遺構を検出した。これらの集石遺構は掘り込みを持たないもの（A類）、掘り込みを持つもの（B類）に大別され、B類はさらに配石を有するもの（B-1類）と配石を持たないもの（B-2類）に分けられる。

これによって集石遺構の分布を見ると第30図のようになり、その分布はD・E-11・12区（I グループ）とA・B-13・14区（II グループ）に中心が見られる。I グループにはB-1 類が中心部分に多く、その周辺に A 類が散在している位置関係にある。これは、I グループの集石遺構の上部に存在した礫群の周辺部に A 類が存在することになり、礫群との関係がより強いものと考えられる。従って本遺跡においては A 類は集石遺構として捉えられるかどうか検討の予地が残る所である。この現象は II グループにおいても同様なことが言える。また特徴的な事は本遺跡の構成礫は円礫が多く、掘り込み内に密集した状態で存在しており、県内の他遺跡特に田野町前平遺跡群は角礫中心との比較する上で単なる立地上の違いだけなのか問題になる所である。また I グループの上部に存在した礫群は集石遺構の廃棄のパターンなのか、または遺跡が埋没していく中で起りうる状態のものなのかは今後の検討課題であろう。



縄文土器について

本遺跡においては、アカホヤ下層と思われる I・II 層より焼砾と混在して縄文土器が出土した。これらの縄文土器は前述した通り I 類～細隆起線文土器・II 類～貝殻条痕文土器、III～VI 類～押型文土器、VII 類～燃系文土器、VIII 類～磨研土器に分類できる。

I 類土器は直口する口縁部外面に細い隆起線文を数条貼り付けたもので、隆起線文上には貼り付けた時に付いたと思われる爪形文が残るものである。これは宮崎学園都市遺跡群内の堂地西遺跡¹⁴で出土している隆起線文土器に類似したものであり、全国的に太形の隆起線文から細隆起線文—微隆起線文へという編年觀から考えれば、本遺跡のものは堂地西遺跡出土の土器より新しい時期に位置付けられるものであろう。また細隆起線文の下位に爪形連点文を施す所は爪形文土器との関連性も考えられる。また長崎県の泉福寺洞穴や鹿児島県の伊敷遺跡¹⁵で見られるような押し潰したような隆起線文を有する土器とは異った隆起線文土器の流れを汲むものとして、貴重な資料であり出土状態は他の土器と混在していたため層的な把握はできなかったが、草創期のものとして考えられると思われる。

II 類土器は南九州特有の貝殻条痕文を施すタイプの土器群である。文様によって口唇部に刻み目または押圧連点文を施し、胴部に貝殻条痕を施す円筒土器（II a、II b 類）、貝殻条痕文を地文とし貝殻腹縁文を有するタイプ（II c 類）、貝殻条痕文だけを有するタイプ（II d 類）に分類できる。

前者（II a・b 類）には貝殻条痕をナデ消す丁寧な調整を施すもの（II a 類）と荒い貝殻条痕を施すもの（II b 類）が存在し、この違いを時期差として捉えるか機能差として捉えるかは今後の検討課題である。また II c 類は少片であるが胎土によって雲母を多く含むものと含まないものとに明確に分かれ、土器の動きを知る上で他遺跡との比較検討を行う際の貴重な資料になるものと思われる。

これらの土器群は南九州一特に鹿児島県一を中心に分布している。いわゆる吉田、前平系の土器である。これらの土器の調査研究については、早くから河口貞徳氏¹⁶によって行なわれてきたが、近年、長野真一氏らによってその細分が試みられている所である。宮崎県内においても、鹿児島県ほどではないが各地で出土しており、特に県北などでは押型文土器との共伴関係による時期設定等の試みも今後行なわれなければならない問題であろう。

III 類～VI 類土器は、所謂押型文土器である。

押型文土器は縄文時代草期の土器群の中で西日本各地に広い分布をもつ土器であり、近畿以東の中部日本を中心にその発生について、ネガティブ押型文等の問題を中心に論議されて

いる所である。九州はこの分布圏の西端にあたり東九州—特に大分県—を中心に九州全域に分布している。これら押型文土器の分類・編年については大分県を中心に賀川光夫氏により早くから精力的にその作業が進められており「川原田—早水台—田村—ヤトコロ—手向山式」の編年が提唱されている。またその後、調査例の増加等に伴って早水台式に先行する稻荷山式や早水台式に後出する下管生B式等の存在が確認され、その細分作業も進んでいる所である。

また、これらの編年作業を骨子として、それに対応する編年作業が周辺地域である福岡県や熊本県において進められている。近年では文様構成のみに注目した検討も行なわれている所である。

ここでは、これまでの編年を中心にして本遺跡出土の土器群の位置付けを行ってみたい。それぞれの型式の諸特徴は大分県史によると次の示す通りである。

ベルト状施文で小型の押型文を施す「川原田式」→外面と口縁部内面に横方向の整然とした押型文を施すもので器形は尖底で口縁部は直線的に開くタイプの「稻荷山式」→外面と口縁部内面に整然とした横方向の押型文を施し、その上口縁部内面に短い原体条痕を施すもので器形は尖底で口縁部は直線的に開くタイプの「早水台式」→底部尖底で口縁部がゆるく外反し、早水台式までの様方向の施文から縱方向の施文へと転換する「下管生B式」→口縁部が大きく外反し、胴部の張りが目立ち、底部はゆるい尖底から丸底を呈する。口縁部内面に長大な斜方向の原体条痕を施すもので、外面の押型文が大形化している「田村式」→口縁部内面の原体条痕が消え底部が平底となる「ヤトコロ式」→口縁部が大きく外反し胴部は棱を生じて屈曲し底部は平底を呈し外面文様はバラエティーに富み口縁部内面に押型文を施す「手向山式」で最終段階を向える。

本遺跡出土の押型文土器を見てみると隋円押型文土器が多く出土しており、その中でも大形の押型文を施し口縁部内面に斜方向の長大な原体条痕を施すタイプ（V a類）が主体を占めており、前述の編年の中の田村式の時期に相当するものである。しかし同じ隋円押型文土器の中でもV b類やV c類のように小型の押型文を外面及び口縁部内面にも施し、底部が尖底を有するものも存在しており若干の時期差を考える必要もありそうである。また近年、「田村式」の実態の不明瞭な点に対して典型的な田村式と並行して少量ながらその他の文様構成をもつものが存在しながら次のヤトコロ式へと継続されるのではないかという考えも出されており今後検討を要する問題である。

またVI類とした平行押型文は熊本県上ノ原遺跡で出土しているものに類似しており、これは西九州地域からの影響を考えるか、押型文土器文化圏の周辺地域における同一の様相なの

かは今後の検討課題である。

またこれらの縄文時代早期の土器群とは時期が違うが、Ⅷ類土器とした磨研系土器群が出土している。これはD-14区の溝状遺構内を中心にその他碟に混じって少量出土した。深鉢と浅鉢があるが、深鉢の口縁部外面に凸帯を有するものや浅鉢の口縁形態から見て松添貝塚（宮崎市）出土の土器に類似するものが多く出土しているようである。これより古い様相を持つものも若干存在するので概ね晩期前葉～中葉頃に位置付けられるものである。

石器について

本遺跡においては、焼碟群に混って石鎌・石斧・石錐・磨石・凹石等の各種石器が出土している。石鎌は縄文時代早期の特に押型文土器と共に伴るとされる抉りの深い鍬形鎌をはじめとして抉りのない三角鎌が主体を占めており、石材の大部分はチャートを使用している。これは石鎌以外に出土しているチップ等の小剥片においてもチャートが優位を占めており、下層の旧石器時代の細石器が黒曜石を主体としているのに対して縄文時代の小形石器の特徴ともいえる。

また特徴的な所では通称“トロトロ石器”と呼ばれる異形局部磨製石器の出土があげられる。この種の石器は近年岡本東三氏により分類等が行われているが、それによると西日本を中心にしており主に押型文土器と共に伴する例が多く、石材にはチャートが多く使用されているといわれ、本遺跡の例も同様に押型文土器群に伴うものであると言える。また本遺跡出土のものは岡本氏分類のI c類（16）とII c類（17）に相当するものであり、県内では発掘調査の出土品としては初めてであり貴重な資料である。また18・19のように両端の尖った磨製石器も出土しており、用途・機能等については類例の増加を待つて検討を行いたい。

石斧は全て打製であり概ね縄文時代早期のものと思われるが、25の偏平打製石斧は縄文時代晩期の土器群に共伴するものと思われる。

またこれらの定形的な石器に混ってかなりの量の剥片が出土しておりその中には第26図に示したような2次加工や使用痕を有した剥片が存在していた。これらの剥片についてはその接合等の作業により剥片剥離技術等の復元作業も行なわれている所であり、この点については今後の検討課題としたい。

古墳について

瀬戸口遺跡は新田原古墳群内に位置しており調査区内にも円墳（165号、169号）が2基存在している。今回の調査で各々の円墳について周溝を確認することができた。

特に165号墳の周溝については現墳丘の中に東半分は潜り込んでおり、墳丘自体が長年の流

第3章 まとめ

土や耕作等によりかなり変形していることが確認された。これらの資料は今後古墳の周辺の開発行為等に対処していく上でも貴重な資料である。

また165号墳の周溝上部からの須恵器壺蓋と思われる破片が出土している。これは外面にヘラ削りを施している点や推定口徑から見て須恵器編年の中 b 期（6 C. 後半）から新しくても IV a 期（6 C. 末）に相当すると思われ、165号墳の時期を考える上で貴重な資料である。

以上のように本遺跡は、アカホヤ以上が削平されていた関係上縄文時代早期の遺構・遺物が主体を占めたものの、旧石器時代から縄文時代の長期間に亘って人間の生活の場として連続として使用されていることが判明した。今後縄文時代以前の遺跡立地等生活の場を考えていく上で良好な資料となるものであると思われる。

〈註〉

- (1) 鈴木重治 「出羽洞穴」『日本の洞穴遺跡』平凡社 1967
(2) 鈴木重治 「宮崎県岩土原遺跡の調査」『石器時代第10号』 1973
(3) 橋 昌信 「宮崎県船野遺跡における細石器文化」『考古学論叢3』 1975
(4) 永友良典他「堂地西遺跡」『宮崎学園都市遺跡発掘調査報告書第2集』
宮崎県教育委員会 1985
面高哲郎他「宮崎学園都市遺跡発掘調査概報III」宮崎県教育委員会 1982
(5) 寺師雄二 「芳ヶ迫第2・3遺跡・札ノ元遺跡」田野町教育委員会 昭和60年
(6) 未報告であるが調査者の御教示による。
(7) 日高孝治 「新村・高山遺跡」野尻町教育委員会 1986
(8) (4)に同じ
(9) (5)に同じ
(10) (7)に同じ
(11) (3)に同じ
(12) (3)に同じ
(13) (5)・面高哲郎 「芳ヶ迫第1遺跡」田野町教育委員会 昭和59年
(14) (4)に同じ
(15) 白石浩之 「縄文文化の起源をめぐる問題」『歴史手帖14-4』 昭和61年
(16) 麻生優編 「泉福寺洞穴の発掘記録」佐世保市教育委員会 1984

第3章　まとめ

- (7) 長野真一他「鹿児島県埋蔵文化財調査報告書25、大隅地区文化財分布調査概報」
鹿児島県教育委員会 1983
- (8) 河口貞徳「鹿児島県における貝殻条痕文土器について」
『鹿児島県考古学会紀要第4号』 1955
- (9) 長野真一他「〈上祓川遺跡群〉上楠原遺跡・水ノ谷遺跡・丸岡遺跡」
『鹿屋市埋蔵文化財調査報告書(1)』鹿屋市教育委員会 1984
- (10) 松永幸男「押型文土器にみられる様相の変化について」「古文化談叢13」 1984
- (11) 賀川光夫「早水台遺跡」「探訪縄文遺跡」有斐閣 昭和60年
- (12) 後藤一重「下菅生B遺跡」「菅生台地と周辺の遺跡VI」竹田市教育委員会 1981
- (13) 山崎純雄他「柏原遺跡群I」福岡市教育委員会 1983
- (14) 野田拓治他「上ノ原遺跡I」熊本県教育委員会 1983
- (15) 多々良友博「九州の押型文土器」「金立開拓遺跡」佐賀県教育委員会 1985
- (16) 大分県「大分県史」 1983
- (17) 後藤一重「寺の前遺跡縄文早期土器について」「荻台地の遺跡」荻町教育委員会 1983
- (18) (16)と同じ
- (19) 鈴木重治「松添貝塚発掘調査報告書」宮崎市教育委員会 1974
- (20) 北郷泰道他「平畠遺跡」「宮崎学園都市遺跡群発掘調査報告書第2集」
宮崎県教育委員会 1985
- (21) 岡本東三「トロトロ石器考」「人間・遺跡・遺物」文献出版 昭和58年
- (22) 山田昌久「縄文時代における石器研究序説」「日本原史」吉川弘文館 昭和60年
- (23) 小田富士雄他「八女古窯跡群調査報告」I～V
小田富士雄「九州の須恵器序説」(『九州考古学』第22号) 1969～1972年
1964年

表1 土器觀察表

輪土は
A. 花崗石・石英を多く含むタイプ(花崗岩系)
B. 鹿児島石・輝石等を含むタイプ(火山灰系)
C. その他

図面 番号	クリッフ 名	器 部	器 面			調 整			文			様			外 器 面			内 器 面			胎 土			外 器 面			内 器 面			調 整			成 備		
			外 器 面	内 器 面	外 器 面	内 器 面	外 器 面	内 器 面	外 器 面	内 器 面	外 器 面	内 器 面	外 器 面	内 器 面	外 器 面	内 器 面	外 器 面	内 器 面	外 器 面	内 器 面	外 器 面	内 器 面	外 器 面	内 器 面	外 器 面	内 器 面	外 器 面	内 器 面	外 器 面	内 器 面	外 器 面	内 器 面	外 器 面	内 器 面	外 器 面
1	D-12	口 檜 部	-	+	テ	爪形文	隆起線文	口斜面に 爪形文	B	(7.5Y R3/1) 黒褐色	(7.5Y R5/3) 良	好																							
2	E-12	口 檜 部	-	+	テ	爪形文	隆起線文	-	B	(7.5Y R5/4) に、赤い褐色	(10Y R6/3) 良	好																							
3	D-14	口 檜 部	+	テ	+	テ	隆起線文	口斜面に 爪形文	B	(10Y R7/3) に、赤い黃褐色	(10Y R4/2) 良	好																							
4	D-11	胴 部	+	テ	+	テ	隆起線文	爪形文、通迄文	-	B	(5Y R5/1) 褐色	(7.5Y R6/3) に、赤い褐色	良	好																					
5	D-11	胴 部	+	テ	+	テ	隆起線文	爪形文	-	B	(7.5Y R7/6) 橙色	(5Y R5/3) に、赤い褐色	良	好																					
6	D-12	胴 部	+	テ	+	テ	隆起線文	爪形文	-	B	(7.5Y R4/2) 褐灰色	(7.5Y R5/1) 良	好																						
7	B-14	口 檜 部	ナ	テ	2段の貝殻 腹模文	-	2段の貝殻 腹模文	-	B	(7.5Y R7/6) に、赤い褐色	(7.5Y R7/6) 良	好	穿孔有り																						
8	B-14	口 檜 部	ナ	テ	2段の貝殻 腹模文	-	2段の貝殻 腹模文	-	B	(7.5Y R6/3) に、赤い褐色	(7.5Y R7/3) 良	好																							
9	E-11	口 檜 部	+	テ	刺 潤	-	2段の貝殻 腹模文	-	B	(7.5Y R4/2) 褐灰色	(7.5Y R6/3) に、赤い褐色	やや良																							
10	D-12	口 檜 部	ナ	テ	ナ	テ	2段の貝殻 腹模文	-	B	(7.5Y R5/3) に、赤い褐色	(7.5Y R6/1) 褐灰色	やや良																							
11	B-14	口 檜 部 - 刺 部	ナ	テ	貝殻条痕の後 ミガキ	-	貝殻条痕文	-	B	(5Y R5/2) 褐灰色	(5Y R5/6) 明赤褐色	良	好	スス付着																					
12	-	口 檜 部	ナ	テ	貝殻条痕文	-	貝殻条痕文	-	B	(5Y R6/2) 褐灰色	(5Y R7/3) に、赤い褐色	良	好	スス付着																					
13	D-12	口 檜 部	貝殻条痕	ミガキ	-	網状状の細縫文	-	B	(5Y R7/6) 褐色	(7.5Y R4/4) 良	好																								
14	D-11	底 部	貝殻条痕	ナ	テ	内底面 - 番號	-	-	B	(7.5Y R5/4) に、赤い褐色	(5Y R6/6) 褐色	良	好																						

図版 番号	グリッ ド名	器 部						文 様			胎 土			内 器 面			焼 成			備 考
		外 器 表	内 器 表	器 頭 面	内 器 曲	外 器 面	内 器 面	胎 土	外 器 表	内 器 表	内 器 面	内 器 面	内 器 面	内 器 面	内 器 面	内 器 面	内 器 面	内 器 面		
15	E-11 口 檜 部	貝殻条痕	ナ テ	2段の刺突文	-	B	(7.5Y R5/4) [2-3]い褐色	(7.5Y R5/4) [2-3]い褐色	良	好										
16	D-11 口 檜 部	あらい貝殻条痕	ナ テ	2段の刺突文	-	B	(7.5Y R5/6) 明褐色	(7.5Y R6/6) 褐色	良	好	19.20と同一									
17	C-13 口 檜 部	貝殻条痕	ケズリ↑	2段の刺突文	-	B	(7.5Y R7/4) [2-3]い褐色	(5Y R6/6) 褐色	良	好										
18	D-13 口 檜 部	貝殻条痕	ナ テ	2段の刺突文	-	B	(7.5Y R6/4) [2-3]い褐色	(7.5Y R7/4) [2-3]い褐色	良	好										
19	D-12 脚 部	貝殻条痕	ケズリ↑	-	-	B	(5Y R6/8) 褐色	(5Y R6/6) 褐色	良	好	16.20と同一									
20	D-11 脚 部	貝殻条痕	ケズリ↑	-	-	B	(5Y R6/6) 褐色	(5Y R6/6) 褐色	良	好	16.19と同一									
21	E-11 脚 部	ナ テ	ていねいなナデ	貝殻櫛模文	-	A	(7.5Y R6/4) [2-3]い褐色	(7.5Y R6/4) [2-3]い褐色	良	好	22と同一									
22	E-11 脚 部	ナ テ	貝殻櫛模文	-	A	(7.5Y R7/6) 褐色	(7.5Y R4/1) 褐色	良	好	21と同一										
23	E-12 脚 部	貝殻条痕	ケズリ	貝殻櫛模文	-	B	(5Y R6/6) 褐色	(5Y R6/6) 褐色	良	好	27と同一									
24	D-11 脚 部	貝殻条痕	ナ テ	貝殻櫛模文	-	B	(7.5Y R6/6) 褐色	(7.5Y R3/2) 褐色	良	好										
25	D-12 脚 部	ナ テ	貝殻櫛模文	-	A	(7.5Y R5/4) [2-3]い褐色	(7.5Y R4/3) 褐色	良	好											
26	E-12 脚 部	ナ テ	貝殻櫛模文	-	A	(10Y R6/3) [2-3]い黄褐色	(10Y R6/3) [2-3]い黄褐色	良	好											
27	E-12 脚 部	貝殻条痕	ケズリ	貝殻櫛模文	-	B	(5Y R6/6) 褐色	(5Y R6/6) 褐色	良	好	23と同一									
28	E-11 口 檜 部	貝殻条痕	ナ テ	-	-	B	(10Y R7/4) 明褐色	(7.5Y R4/2) 灰褐色	良	好										
29	E-11 口 檜 部	貝殻条痕	ていねいなナデ	-	-	B	(7.5Y R5/3) [2-3]い褐色	(7.5Y R6/4) [2-3]い褐色	良	好										

図面番号	器名	器部	器面				調整文				土様		内器面	外器面	土色	焼成度	備考
			外器面	内器面	外器面	内器面	内器面	外器面	内器面	外器面	内器面	外器面					
30	D-13	胴 部	貝殻条板	ミガキ	-	-	-	B	(10YR4/1)	(10YR4/1)	灰白色	灰白色	(10YR8/2)	(10YR8/3)	良 好		
31	E-11	胴 部	貝殻条板	ていねいなナナヂ	-	-	-	B	(10YR8/3)	(10YR8/3)	浅黄色	浅黄色	(10YR8/3)	(10YR8/3)	良 好		
32	E-13	胴 部	貝殻条板	ていねいなナナヂ	-	-	-	B	(10YR8/3)	(10YR8/3)	浅黄褐色	浅黄褐色	(10YR8/3)	(10YR8/3)	良 好		
33	D-13	口 檜 部	貝殻条板の後 ナ テ	ていねいなナナヂ	-	-	-	B	(10YR8/2)	(10YR8/3)	灰白色	灰白色	(10YR8/3)	(10YR8/3)	良 好		
34	D-12	口 檜 部	貝殻条板	ていねいなナナヂ	-	-	-	B	(2.5YR7/3)	(2.5YR7/3)	浅黄色	浅黄色	(2.5YR8/4)	(2.5YR8/4)	良 好		
35	D-14	口 檜 部	ナ テ	ていねいなナナヂ	-	-	-	B	(10YR6/2)	(10YR6/1)	灰白色	灰白色	(10YR6/2)	(10YR6/1)	良 好		
36	D-14	口 檜 部	ナ テ	ていねいなナナヂ	-	-	-	B	(10YR7/4)	(10YR7/3)	にざい黄褐色	にざい黄褐色	(10YR7/4)	(10YR7/3)	良 好	同一個体	
37	E-14	口 檜 部	ナ テ	ナ テ	山形押型文	-	-	B	(7.5YR6/6)	(7.5YR6/8)	褐色	褐色	(7.5YR6/6)	(7.5YR6/8)	良 好		
38	E-14	胴 部	-	ナ テ	山形押型文	-	-	B	(7.5YR7/4)	(7.5YR6/4)	にざい黄褐色	にざい黄褐色	(7.5YR7/4)	(7.5YR6/4)	良 好		
39	E-14	胴 部	-	ナ テ	山形押型文	-	-	B	(10YR7/4)	(7.5YR6/6)	褐色	褐色	(10YR7/4)	(7.5YR6/6)	良 好		
40	E-12	胴 部	-	ナ テ	山形押型文	-	-	B	(2.5YR5/6)	(2.5YR5/6)	明赤褐色	明赤褐色	(2.5YR5/6)	(2.5YR5/6)	良 好		
41	D-11	胴 部	-	ケズリ →	山形押型文	-	-	B	(5YR4/3)	(5YR6/3)	にざい赤褐色	にざい赤褐色	(5YR4/3)	(5YR6/3)	良 好		
42	D-13	胴 部	-	ナ テ	山形押型文	-	-	B	(5YR5/4)	(5YR5/4)	にざい赤褐色	にざい赤褐色	(5YR5/4)	(5YR5/4)	良 好		
43	D-13	胴 部	-	ナ テ	山形押型文	-	-	B	(2.5YR5/6)	(2.5YR5/4)	明赤褐色	明赤褐色	(2.5YR5/6)	(2.5YR5/4)	良 好		
44	D-11	胴 部	-	ナ テ	山形押型文	-	-	C	(5YR4/6)	(5YR3/6)	赤褐色	赤褐色	(5YR4/6)	(5YR3/6)	良 好		

圓函 番号	フリツ 名	器 部	器 面	外 器 面	内 器 面	文 様	調 繁	土 胎	外 器 面	内 器 面	色 調	地 成 備 考
45	D-13	口縁部	十 テ	十 テ	格子目押型文	格子目押型文	—	B	(7.5Y R4/3) 褐色	(7.5Y R4/3) 褐色	良 好	
46	E-13	脚 部	—	十 テ	格子目押型文	—	—	B	(5Y R5/4) [ニ:シ:赤褐色	(5Y R5/4) [ニ:シ:赤褐色	良 好	
47	E-13	脚 部	—	十 テ	格子目押型文	—	—	B	(5Y R5/4) [ニ:シ:赤褐色	(5Y R5/6) 明赤褐色	良 好	
48	C-13	脚 部	—	十 テ	格子目押型文	—	—	C	(5Y R6/6) 褐色	(5Y R6/6) 褐色	良 好	
49	D-12	口縁部	—	十 テ	隋円押型文	原体条纹	B	(5Y R3/2) 暗赤褐色	(5Y R3/2) 暗赤褐色	良 好		
50	D-12	口縁部	十 テ	—	—	原体条纹	B	(5Y R4/4) [ニ:シ:赤褐色	(5Y R4/4) [ニ:シ:赤褐色	良 好		
51	D-12	脚 部	—	—	隋円押型文	原体条纹	B	(5Y R4/3) [ニ:シ:赤褐色	(5Y R4/3) [ニ:シ:赤褐色	良 好		
52	D-12	脚 部	—	十 テ	隋円押型文	—	—	B	(2.5Y R4/6) 赤褐色	(5Y R5/6) 明赤褐色	良 好	
53	F-13	脚 部	—	十 テ	隋円押型文	—	—	B	(5Y R4/2) 灰褐色	(5Y R5/6) 明赤褐色	良 好	
54	E-11	脚 部	—	不 明	隋円押型文	—	—	B	(5Y R6/4) [ニ:シ:橙色	(5Y R7/6) 橙色	良 好	
55	E-12	脚 部	—	十 テ	隋円押型文	—	—	B	(5Y R7/6) 褐色	(5Y R7/6) 褐色	良 好	
56	D-11	脚 部	—	十 テ	隋円押型文	—	—	B	(7.5Y R6/6) 褐色	(7.5Y R4/3) 褐色	良 好	
57	D-11	脚 部	—	十 テ	隋円押型文	—	—	B	(7.5Y R6/6) 褐色	(7.5Y R4/3) 褐色	良 好	
58	D-11	脚 部	—	十 テ	隋円押型文	—	—	B	(7.5Y R6/6) 褐色	(7.5Y R4/3) 褐色	良 好	
59	D-11	脚 部	—	十 テ	隋円押型文	—	—	B	(7.5Y R6/6) 褐色	(7.5Y R4/3) 褐色	良 好	

図面 番号	グリッド名	器 形	底	器 面		調 整		文		燒 成		備 考		
				外 器 面	内 器 面	外 器 面	内 器 面	胎 土	外 器 面	内 器 面	焼 成			
60	D-11	胴 部	-	+	テ	隋円押型文	-	B	(5Y R5/4) [2.5Y R5/6] 明赤褐色	(5Y R5/6) 明赤褐色	良 好			
61	D-11	胴 部	-	+	テ	隋円押型文	-	B	(7.5Y R6/6)	(7.5Y R4/3)	良 好	56~65±℃		
62	D-11	胴 部	-	+	テ	隋円押型文	-	B	(5Y R6/6)	(7.5Y R5/3)	良 好	同一側体		
63	D-11	胴 部	-	+	テ	隋円押型文	-	B	(7.5Y R6/6)	(7.5Y R4/2)	良 好			
64	D-11	胴 部	-	+	テ	隋円押型文	-	B	(5Y R6/6)	(7.5Y R5/4)	良 好			
65	D-11	胴 部	-	+	テ	隋円押型文	-	B	(7.5Y R5/3)	(5Y R6/6)	良 好			
66	D-13	胴部~底部	-	+	テ	隋円押型文	-	B	(5Y R5/8)	(5Y R5/4)	良 好			
67	E-12	口 棚 部	-	+	テ	隋円押型文	-	B	(7.5Y R6/3)	(7.5Y R6/3)	良 好			
68	E-13	胴 部	-	て	い	い	い	テ	隋円押型文	-	B	(7.5Y R7/4)	(7.5Y R6/2)	良 好
69	E-13	胴 部	-	刺	落	隋円押型文	-	B	(7.5Y R7/4)	(7.5Y R6/3)	良 好			
70	E-12	胴 部	-	て	い	い	い	テ	隋円押型文	-	B	(7.5Y R6/4)	(5Y R5/8)	良 好
71	E-13	胴 部	-	て	い	い	い	テ	隋円押型文	-	B	(5Y R6/6)	(5Y R4/4)	良 好
72	B-13	胴 部	-	+	テ	隋円押型文	-	B	(7.5Y R7/3)	(7.5Y R4/2)	良 好			
73	D-12	胴 部	-	+	テ	隋円押型文	-	B	(5Y R5/4)	(7.5Y R4/3)	良 好			
74	E-13	胴 部	-	+	テ	隋円押型文	-	B	(5Y R5/6)	(5Y R5/6)	良 好			

図面 番号	グリフ 名	器 部	器 面 調 整			文 様			輪 土	外 器 面	内 器 面	焼 成 度 考 査
			外 器 面	内 器 面	外 器 面	内 器 面	外 器 面	内 器 面				
75	D-13	脚 部	-	+	テ	隋円押型文	-	B	(5Y R5/6) 明赤褐色 [2.5-3.5]赤褐色	(5Y R4/3)	良 好	
76	E-12	脚 部	-	刺 溝		隋円押型文	-	B	(7.5Y R7/6) 橙色 [2.5-3.5]褐色	(7.5Y R5/3)	良 好	
77	E-11	脚 部	-	+	テ	隋円押型文	-	B	(7.5Y R5/3) 橙色 [2.5-3.5]褐色	(7.5Y R5/3)	良 好	
78	E-12	脚 部	-	+	テ	隋円押型文	-	B	(5Y R5/8) 明赤褐色 [2.5-3.5]褐色	(5Y R4/2)	良 好	
79	A-13	底 部	+	テ		隋円押型文	-	B	(5Y R7/4) 褐色 [2.5-3.5]褐色	(7.5Y R6/3)	良 好	
80	E-11	脚 部	-	+	テ	隋円押型文	-	C	(5Y R5/4) 褐色 [2.5-3.5]褐色	(5Y R4/4)	良 好	
81	E-12	脚 部	-	+	テ	隋円押型文	-	B	(7.5Y R7/6) 橙色 [2.5-3.5]褐色	(10Y R8/4)	良 好	
82	D-11	脚 部	-	て	いわいざな字	隋円押型文	-	B	(7.5Y R6/8) 褐色 [2.5-3.5]褐色	(10Y R7/6)	良 好	
83	D-11	脚 部	-	+	テ	隋円押型文	-	B	(7.5Y R7/4) 褐色 [2.5-3.5]褐色	(7.5Y R6/3)	良 好	
84	E-12	脚 部	-	て	いわいざな字	隋円押型文	-	B	(5Y R5/6) 明赤褐色 [2.5-3.5]褐色	(7.5Y R6/3)	良 好	
85	D-12	脚 部	-	て	いわいざな字	隋円押型文	-	B	(5Y R5/4) 褐色 [2.5-3.5]褐色	(7.5Y R7/6)	良 好	
86	D-12	脚 部	-	+	テ	隋円押型文	-	B	(5Y R5/6) 明赤褐色 [2.5-3.5]褐色	(7.5Y R5/3)	良 好	
87	D-12	脚 部	-	+	テ	隋円押型文	-	B	(5Y R5/4) 褐色 [2.5-3.5]褐色	(7.5Y R7/4)	良 好	
88	D-13	脚 部	-	+	テ	隋円押型文	-	C	(5Y R6/6) 橙色 [2.5-3.5]褐色	(7.5Y R6/6)	良 好	
89	E-12	脚 部	-	+	テ	隋円押型文	隋 円 押型文	B	(5Y R5/8) 明赤褐色 [2.5-3.5]赤褐色	(5Y R4/4)	良 好	

図版 番号	グリフ 名	器 面		調 燃		文 様		土 器 面		外 器 面		内 器 面		色	調	施	成	備	考
		外 器 面	内 器 面	外 器 面	内 器 面	外 器 面	内 器 面	外 器 面	内 器 面	外 器 面	内 器 面	外 器 面	内 器 面						
90	E-13 脚 部	-	+	テ	階円押型文	-	B	(2.5Y R5/6) 明赤褐色	(5Y R4/3) [レ:ジ:赤]褐色	良	好								
91	E-12 脚 部	-	+	テ	階円押型文	-	B	(5Y R6/6)	(7.5Y R6/4) [レ:ジ:赤]褐色	良	好								
92	D-12 脚 部	-	+	テ	階円押型文	-	B	(5Y R6/6)	(7.5Y R6/4) [レ:ジ:赤]褐色	良	好								
93	A-13 脚 部	-	+	テ	階円押型文	-	B	(2.5Y R5/6)	(2.5Y R5/6) 明赤褐色	良	好								
94	A-13 脚 部	-	刺	落	階円押型文	-	B	(7.5Y R8/6)	浅黄褐色	-	良	好							
95	D-13 脚 部	-	-	-	階円押型文	円 押型文	C	(5Y R5/6)	(5Y R4/1) 明赤褐色	良	好								
96	D-12 脚 部	-	-	ていねいなナデ	階円押型文	-	C	(5Y R5/6)	(5Y R6/4) [レ:ジ:赤]褐色	良	好								
97	E-12 脚 部	-	-	ていねいなナデ	階円押型文	-	C	(5Y R5/8)	(7.5Y R5/4) [レ:ジ:赤]褐色	良	好								
98	D-12 脚 部	-	-	ていねいなナデ	階円押型文	-	B	(5Y R5/6)	(7.5Y R6/4) 明赤褐色	良	好								
99	D-13 底 部	ていねいなナデ	+	テ	階円押型文	-	B	(5Y R5/6)	(7.5Y R5/3) 明赤褐色	良	好								
100	D-12 口 檻 部	-	ていねいなナデ	燃糸文?	原体柔軟 +燃糸文	B	(7.5Y R5/3) [レ:ジ:赤]褐色	(10Y R8/3) 浅黄褐色	良	好									
101	D-13 口 檻 部	-	ていねいなナデ	燃糸文?	原体柔軟 +燃糸文	B	(7.5Y R7/4) [レ:ジ:赤]褐色	(7.5Y R6/4) [レ:ジ:赤]褐色	良	好									同一個体 穿孔有
102	D-12 口 檻 部	-	ていねいなナデ	燃糸文?	原体柔軟 +燃糸文	B	(7.5Y R7/6)	(7.5Y R4/2)	良	好									
103	D-12 脚 部	-	+	テ	燃糸文?	-	B	(7.5Y R5/4) [レ:ジ:赤]褐色	(7.5Y R3/1) 黑色	良	好								
104	D-11 口 檻 部	+	テ	+	テ	縦目文	-	B	(2.5Y R5/6) 明赤褐色	(2.5Y R5/6) 明赤褐色	良	好							

団面 番号	グリッ ド名	器 部	器 面		調 整		文 器 面		外 器 面		内 器 面		胎 土		調		成 備 考	
			外 器 面	内 器 面	内 器 面	外 器 面	内 器 面	内 器 面	胎 土	色	外 器 面	内 器 面	胎 土	色	外 器 面	内 器 面	胎 土	色
105	E-11	底 部	ナ テ	ナ テ	ナ テ	ナ テ	ナ テ	ナ テ	B	(10YR5/2) 灰黒色	(7.5YR5/3) にいい褐色	良 好						
106	D-13	底 部	ナ テ	ナ テ	ナ テ	ナ テ	ナ テ	ナ テ	B	(7.5YR8/4) 浅黄褐色	(7.5YR8/4) 浅黄褐色	良 好						
107	E-11	口 檜 部	ナ テ	ナ テ	ナ テ	ナ テ	ナ テ	ナ テ	B	(2.5YR5/6) 明赤褐色	(2.5YR5/6) 明赤褐色	良 好						
108	D-14	口 檜 部	ナ テ	ナ テ	ナ テ	ナ テ	ナ テ	ナ テ	B	(10YR8/3) 浅黄褐色	(10YR8/3) 浅黄褐色	良 好						
109	D-14	口 檜 部	ナ テ	ナ テ	ナ テ	ナ テ	ナ テ	ナ テ	C	(7.5YR7/6) 棕色	(10YR8/4) 浅黄褐色	良 好						
110	D-14	口 檜 部	ナ テ	ナ テ	ナ テ	ナ テ	ナ テ	ナ テ	C	(7.5YR5/4) にいい褐色	(5YR7/6) 棕色	良 好						
111	D-14	口 檜 部	ナ テ	ナ テ	ナ テ	ナ テ	ナ テ	ナ テ	B	(7.5YR6/4) にいい褐色	(7.5YR6/4) にいい褐色	良 好						
112	E-11	口 檜 部	ナ テ	ナ テ	ナ テ	ナ テ	ナ テ	ナ テ	C	(7.5YR7/4) にいい褐色	(7.5YR7/4) にいい褐色	良 好						
113	E-12	口 檜 部	研 磨	研 磨	研 磨	研 磨	研 磨	研 磨	B	(7.5YR4/2) 灰褐色	(7.5YR4/2) 灰褐色	良 好						
114	B-13	口 檜 部	研 磨	研 磨	研 磨	研 磨	研 磨	研 磨	C	(7.5YR6/3) にいい褐色	(7.5YR6/3) にいい褐色	良 好						
115	D-14	口 檜 部	研 磨	研 磨	研 磨	研 磨	研 磨	研 磨	B	(5YR6/4) にいい褐色	(5YR7/4) にいい褐色	良 好						
116	D-14	口 檜 部	研 磨	研 磨	研 磨	研 磨	研 磨	研 磨	C	(5YR7/4) にいい褐色	(5YR7/4) にいい褐色	良 好						
117	D-12	口 檜 部	研 磨	研 磨	研 磨	研 磨	研 磨	研 磨	B	(7.5YR4/2) 灰褐色	(7.5YR7/4) にいい褐色	良 好						
118	E-12	胴 部	研 磨	研 磨	研 磨	研 磨	研 磨	研 磨	A	(5YR6/4) にいい褐色	(7.5YR4/1) 褐色	良 好						
119	E-12	底 部	ナ テ	ナ テ	ナ テ	ナ テ	ナ テ	ナ テ	A	(5YR6/4) にいい褐色	(5YR6/4) にいい褐色	良 好						

図面番号	グリッピング部名	器部	器表面	内器表面	外器表面	内器面	外器面	土色	裏面	内器面	外器面	成績	参考
120	D-14	底	ナ テ	ナ テ	-	-	B	(7.5Y R6/4) [にいえ色]	(7.5Y R6/3) [にいえ色]	良	好		
121	E-13	脚 部	研 磨 :	研 磨 :	-	-	B	(5Y R6/6)	(7.5Y R4/1)	良	好	坏	
122	D-11	脚 部	平行叩キ	同心円叩き	-	-	褐色	(2.5Y R6/1)	(2.5Y R6/1)	良	好	須磨器	
123	B-13	銅 部	ケタリ	ナ テ	-	-	褐色	(5Y R5/2)	(7.5Y R6/1)	良	好	須磨器-环玉	

表2 石鎚計測表

No.	出土区	型式	全長mm	幅mm	厚みmm	抉り		先端角度(°)	重さ(g)	石材	備考
						幅mm	深さmm				
1	D-12	I-C	2.3	2.97	0.39	0.8	0.9	60	1.1	チャート	
2	E-11	I-C	2.84	—	0.405	—	1.05	70.5	1.6	チャート	欠損
3	D-12	II-C	1.85	1.5	0.36	0.65	0.6	57	0.75	チャート	
4	E-12	II-C	(1.67)	1.21	0.33	—	—	49.5	0.5		
5	E-11	II-a	2.98	2.79	0.4	—	—	49	1.05	チャート	
6	E-11	I-a	2.25	2.3	0.33	—	—	61	0.3	チャート	
7	D-11	I-a	1.45	1.4	0.36	—	—	51	0.5	チャート	
8	D-12	I-a	1.66	1.64	0.46	—	—	56	1.1	チャート	
9	D-11	I-a	(1.22)	1.58	0.38	—	—	—	0.55	チャート	
10	E-11	—	(1.61)	1.85	0.48	—	—	—	1.2	チャート	
11	D-11	I-a	(8.5)	1.13	0.33	—	—	—	0.35	頁岩	
12	E-11	I-a	(1.21)	1.52	0.26	—	—	—	0.5	チャート	
13	D-11	I-a	1.53	1.45	0.25	—	—	58	0.45	砂岩	
14	D-12	II-b	2.19	1.02	0.24	0.8	0.1	30	0.5	黒曜石	
15	A-13	II-b	4.42	2.92	0.37	1.6	0.25	39	3.7	チャート	

注) I…正三角形 II…二等辺三角形 抜り・a…なし b…浅い c…深い

表3 小形石器計測表(石鎚以外)

No.	出土区	型式	全長mm	幅mm	厚みmm	抉り		先端角度(°)	重さ(g)	石材	備考
						幅mm	深さmm				
16	E-13		3.45	2.04	0.52	1.0	0.6	—	3.35	チャート	
17	D-13		1.73	1.3	0.33	0.55	0.4	—	0.65	チャート	
18	A-13		4.55	0.91	0.27	—	—	—	1.1	砂岩	
19	A-14		(2.82)	0.84	0.26	—	—	—	0.85	砂岩	

表4 石器計測表

No.	出土区	器種	全長mm	幅mm	厚みmm	重さ(g)	備考
20	D-11	打製石斧	13.08	9.02	5.74	730	欠損
21	D-11	打製石斧	9.73	3.36	2.77	55	
22	D-12	打製石斧	9.15	5.06	4.75	222	欠損
23	D-13	打製石斧	8.76	5.09	2.4	122	欠損
24	B-14	打製石斧	9.29	5.65	3.15	234	欠損
25	E-12	打製石斧	14.46	7.52	1.66	166	

No	出土区	器種	全長	幅	厚み	重さ(g)	備考
26	E - 12	剥片	6.6	4.71	1.42	61	
27	E - 11	剥片	11.27	5.05	1.43	86	
28	D - 12	剥片	5.0	4.33	1.0	28	
29	E - 13	剥片	6.77	4.55	1.73	66	
30	E - 13	剥片	5.26	5.78	1.84	63	
31	D - 12	剥片	5.1	4.05	3.59	51	黒曜石
32	A - 15	剥片	6.53	3.39	2.82	45	
33	E - 12	石錐	5.43	4.02	2.65	58	
34	A - 13	石錐	6.92	4.79	1.05	45	
35	B - 13	石錐	7.3	6.5	1.8	120	
36	E - 14	凹石	9.91	7.98	5.93	604	敲石としても使用
37	D - 13	凹石	9.27	8.36	4.03	416	敲石としても使用
38	D - 13	凹石	9.84	7.05	3.15	281	
39	E - 11	凹石	9.48	8.35	3.62	367	敲石としても使用
40	D - 11	凹石	13.08	7.79	2.55	380	敲石としても使用
41	D - 12	凹石	(8.61)	11.4	3.21	550	半欠損
42	D - 13	敲石	10.58	8.6	5.53	554	
43	E - 11	磨石	11.67	9.04	3.23	513	一部凹石としても使用
44	D - 12	磨石	8.15	6.6	3.72	261	敲石としても使用
45	D - 12	磨石	8.91	6.18	3.96	320	
46	D - 13	磨石	9.55	9.55	4.12	624	
47	D - 12	磨石	8.43	7.27	5.31	433	
48	A - 13	凹石	6.09	5.5	2.78	124	

表5 細石器計測表

No	出土区	器種	全長	幅	厚み	重さ(g)	備考
1	D - 12	細石核	2.42	1.69	1.03	4.1	黒曜石
2	D - 12	細石刃	1.93	1.35	0.23	0.65	黒曜石・欠損
3	D - 12	細石刃	2.72	0.77	0.14	0.25	黒曜石・欠損
4	D - 12	細石刃	1.38	0.81	0.18	0.3	黒曜石・欠損

図 版



遺跡全景（南から）



D-12区 南壁土層断面

図版2



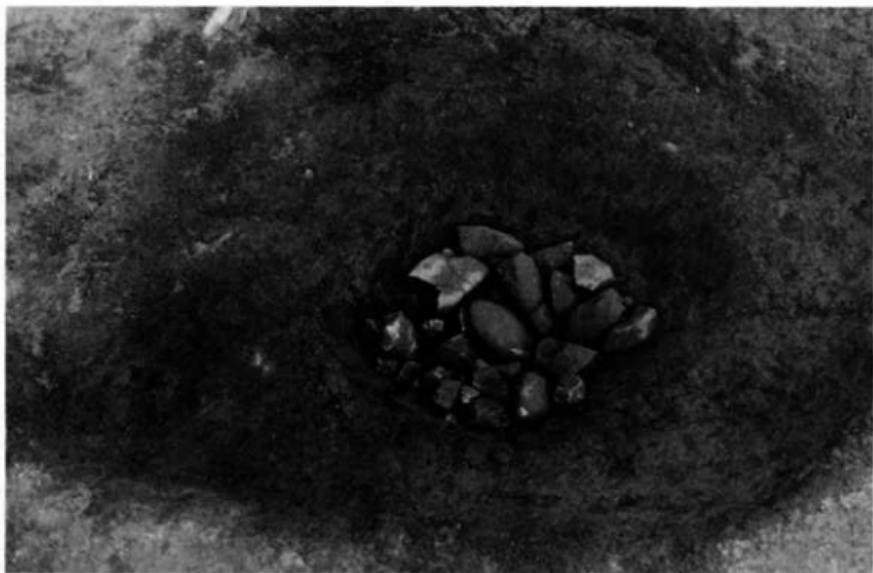
S I 1 (上部集石)



S I 1 (下部配石)



S I 3. 4 (手前より)



S I 7

圖版4



S I 8



S I 9



D・E-12区 散石状況（南より）



S I 16

图版 6



S I 13



S I 13 (下部配石)



S I 14 (上部集石)



S I 14 (下部配石)

図版 8



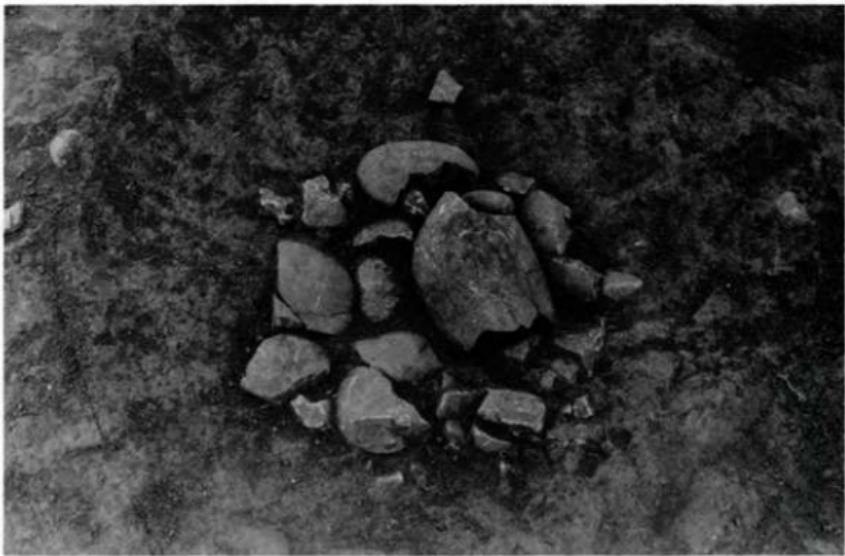
S I 15 (上部集石)



S I 15 (下部集石)



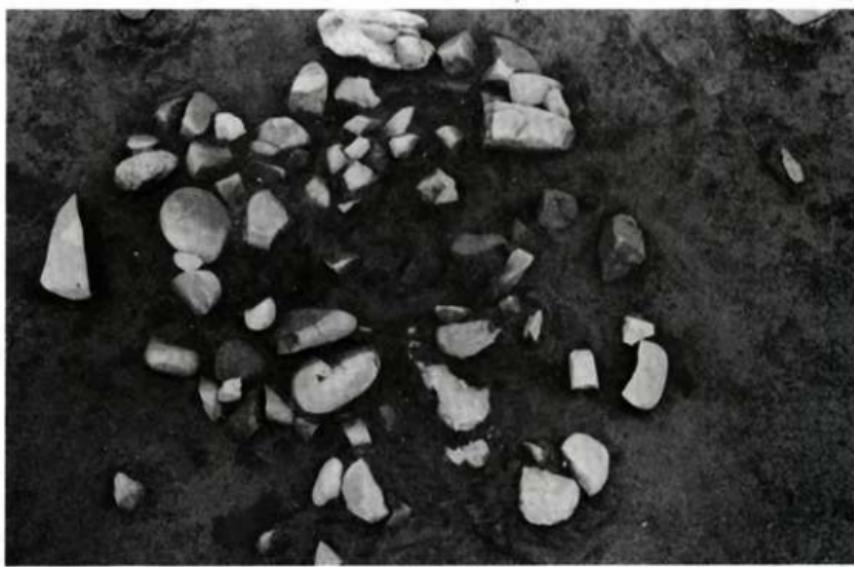
S I 19 (上部集石)



S I 19 (下部配石)



S I 22. 23



S I 24

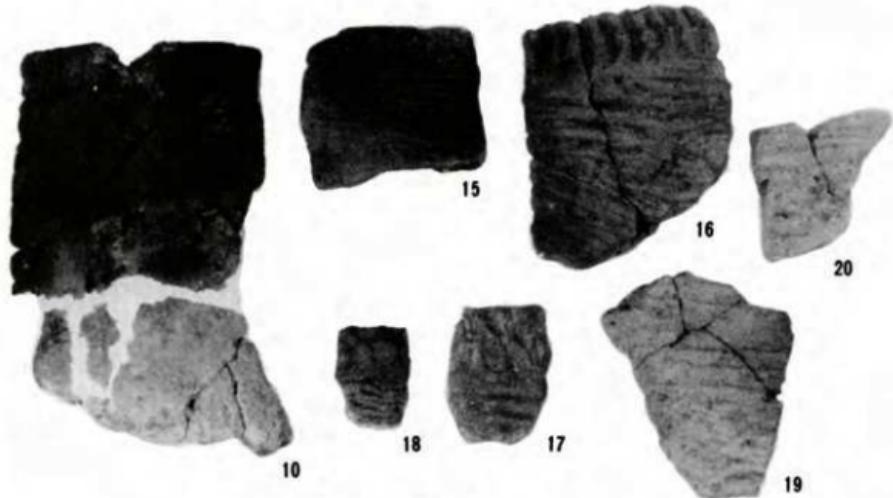
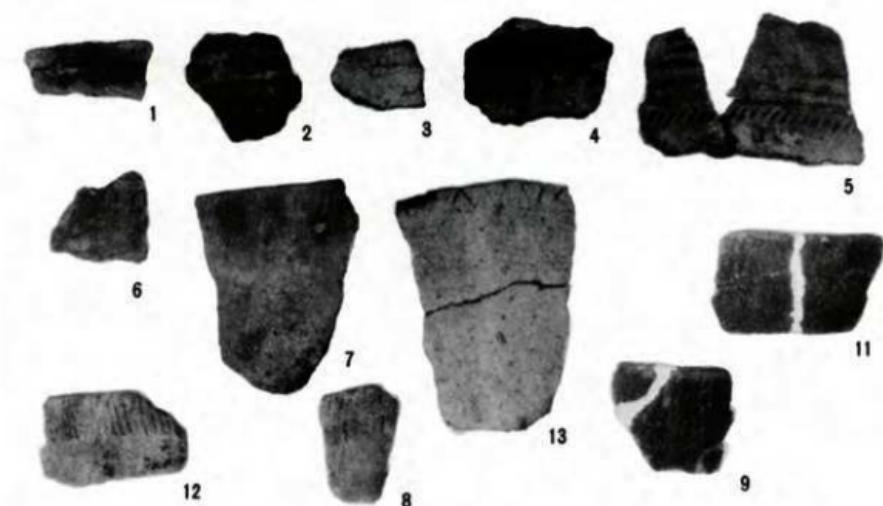


第165号墳（南西より）



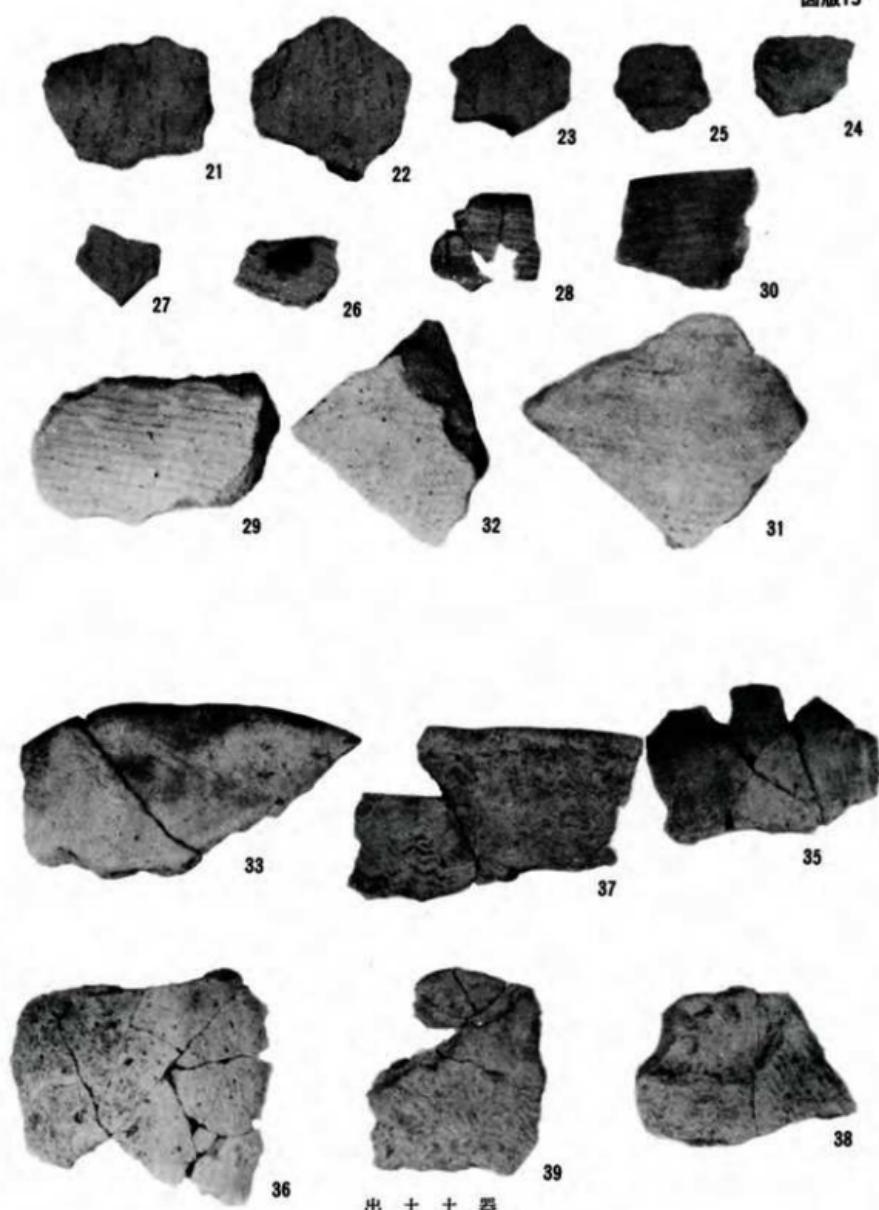
第165号集 周溝検出状況

圖版12



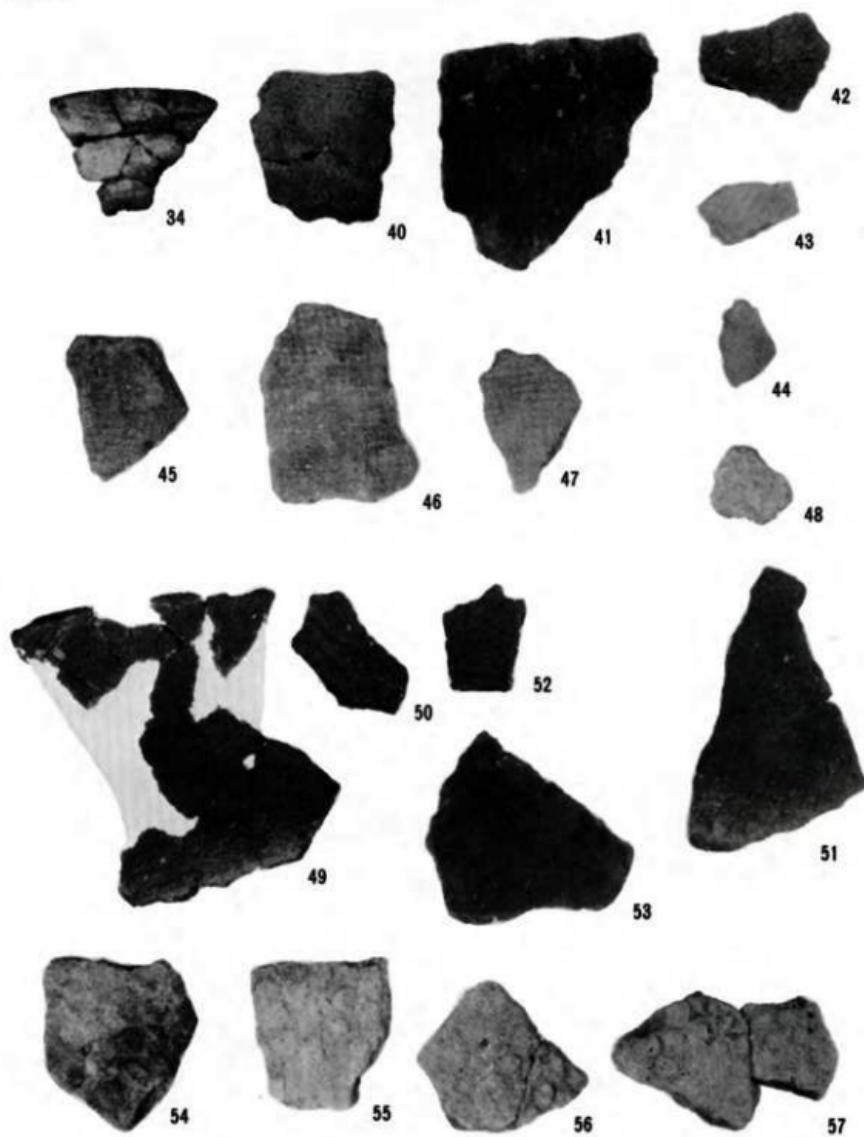
出土土器

図版13

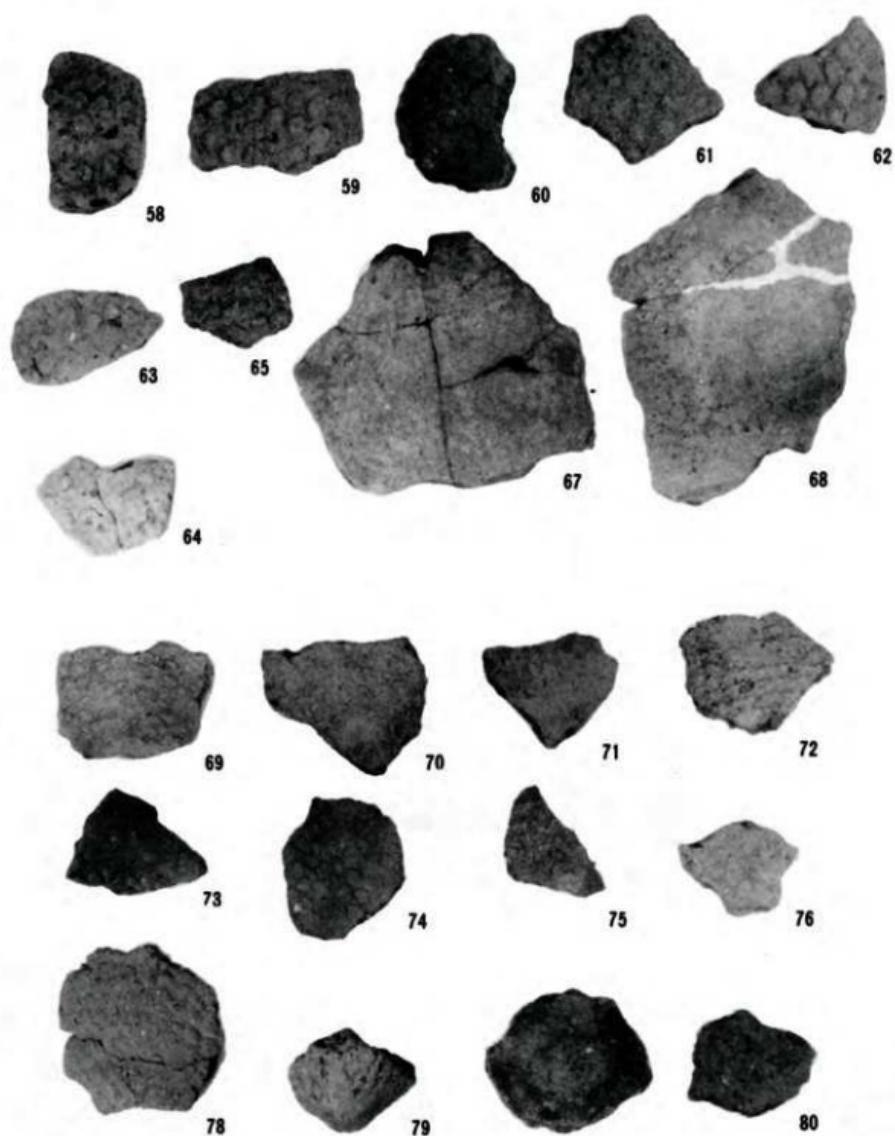


出土土器

圖版14

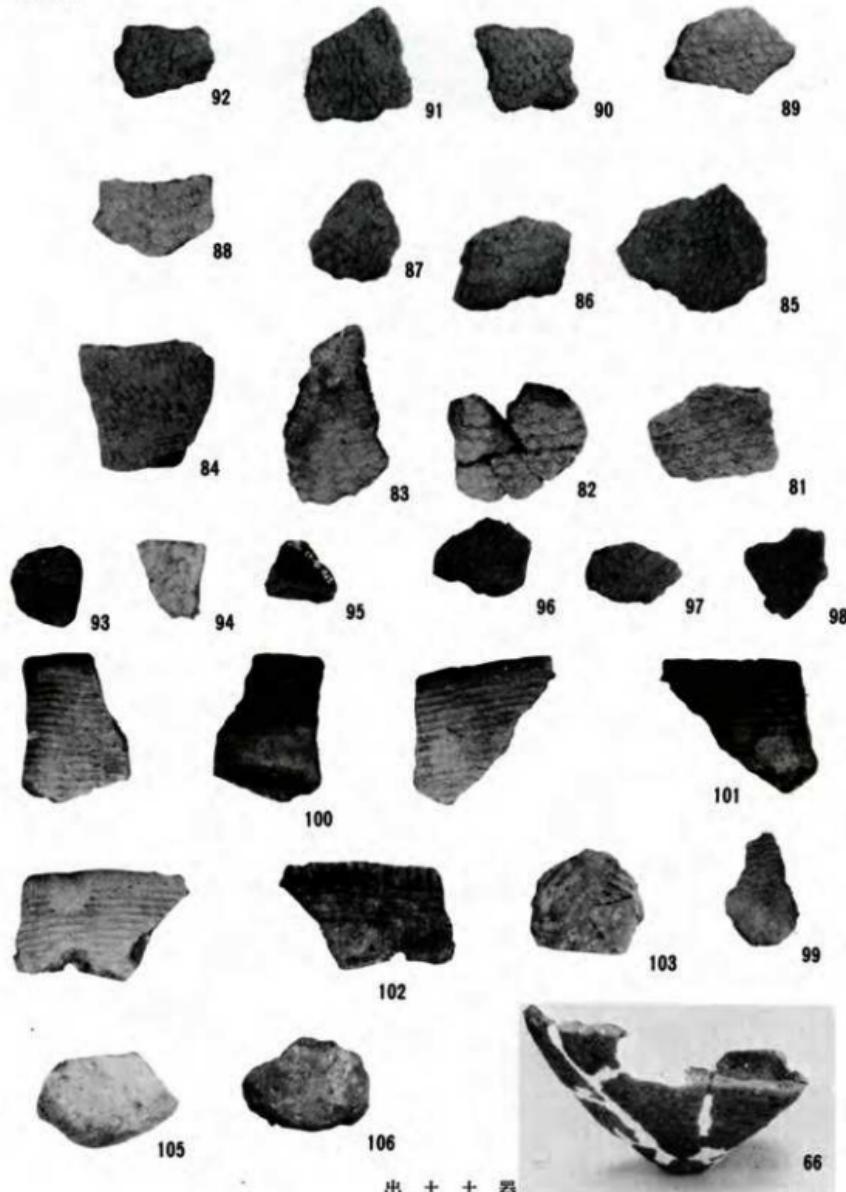


出土土器



出土土器

圖版16

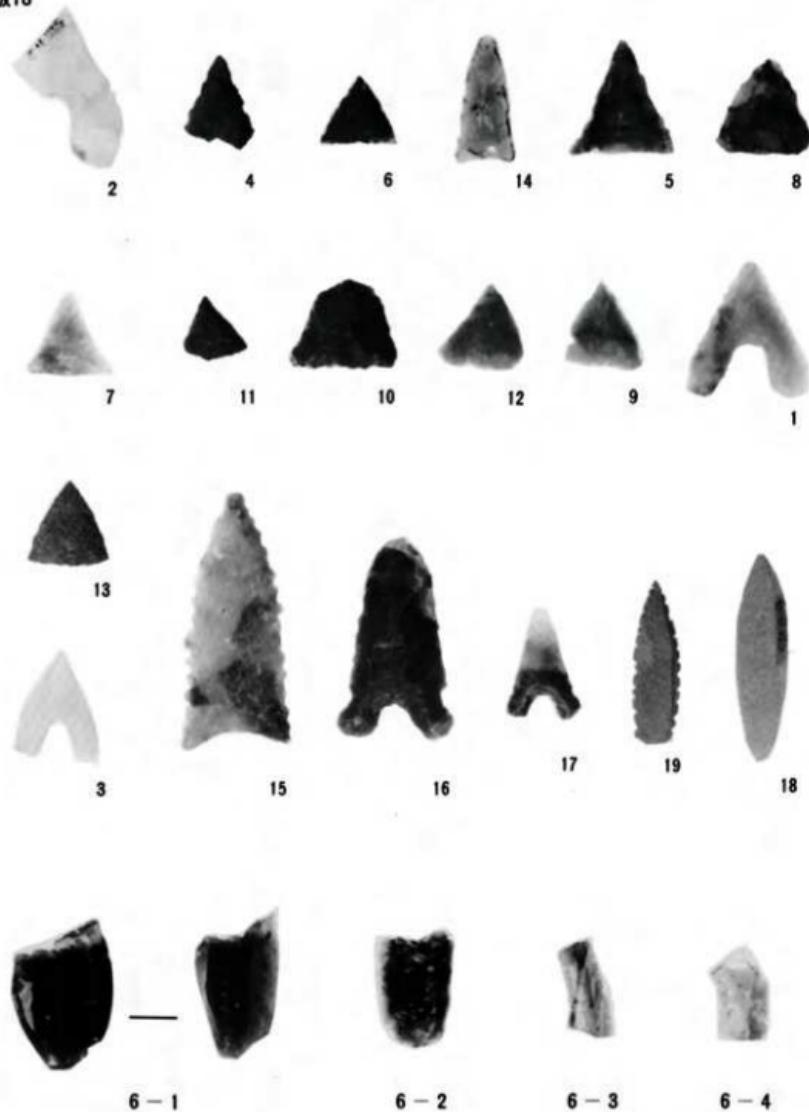


出土土器

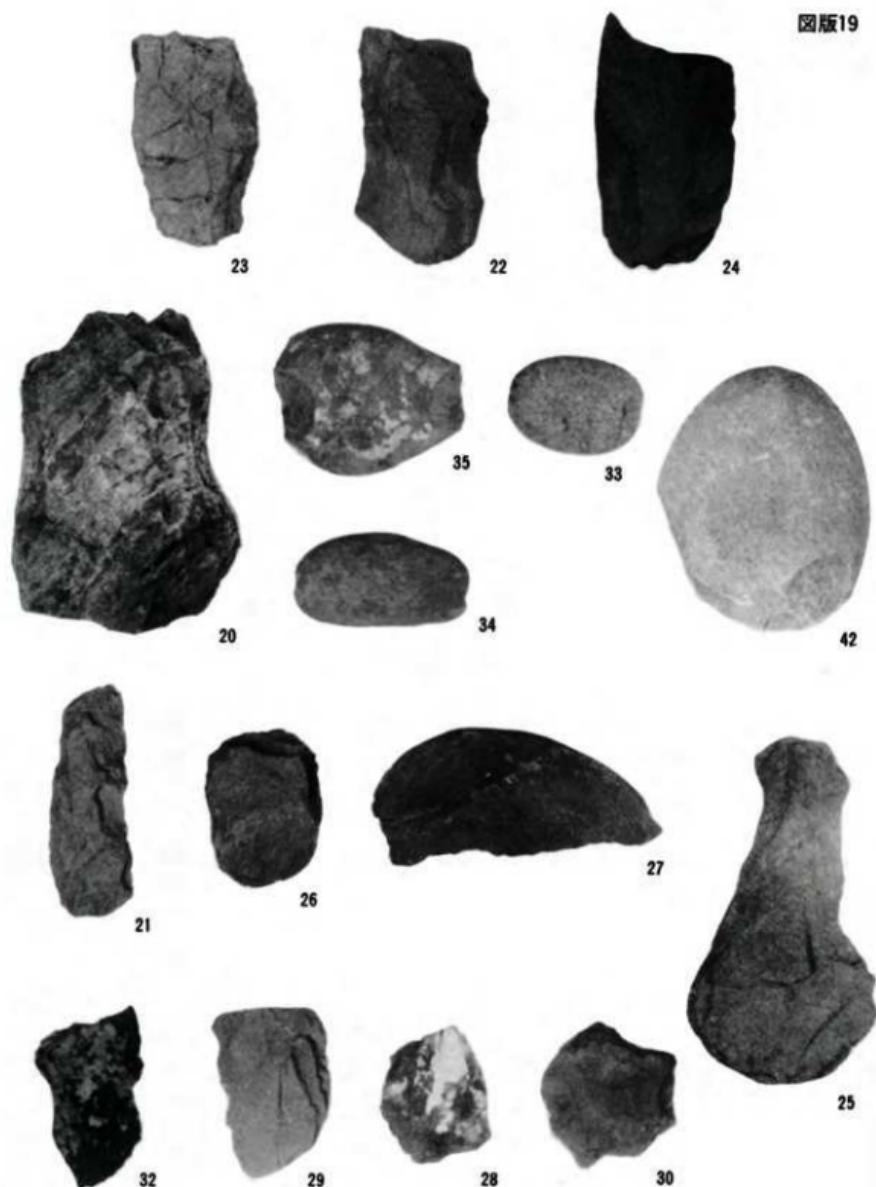


出土土器

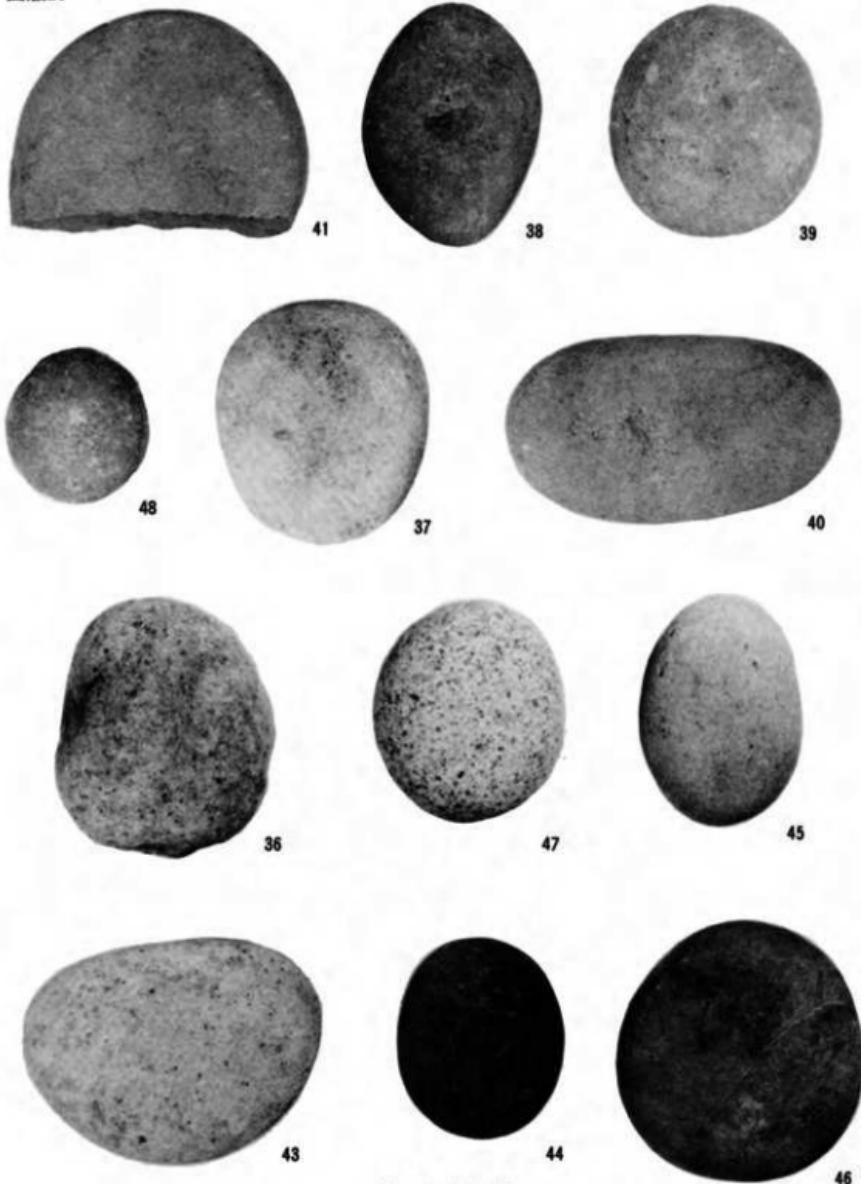
図版18



出土石器



図版20



出土石器

藏園地下式横穴墓

本文目次

1. 調査の経緯	201
2. 調査の結果	202
3. 蔵闇地下式横穴墓の歴史的意義	202

挿図目次

第1図 蔵闇地下式横穴墓位置図	201
第2図 蔵闇地下式横穴墓周辺図	202
第3図 蔵闇地下式横穴墓実測図	203
第4図 表採須恵器実測図	204
第5図 蔵闇遺跡表採須恵器実測図	204

藏園地下式横穴墓

1. 調査の経緯

10年に一度あるかないかの、雪模様の一日であった。午前中から降りはじめた雪は午後にはうっすらと積もり、地下式横穴墓の北限を確實に塗りかえた始めての地下式横穴墓は千数百年の眠りから覚めたその日、南国の雪に埋もれた。

昭和58年の暮れ、新富町三納代字藏園の畠地において、地下式横穴墓らしい地表の陥没が生じたとの連絡が新富町教育委員会から県教育委員会にもたらされた。そして、翌59年1月14日に発掘調査通知が提出され、1月18日から県教育委員会文化課主事北郷泰道の担当で調査に着手することになった。調査は、天井部が一部陥没していたが、地下式横穴墓北限についての貴重な調査例でもあり、天井部のそれ以上の開口を避け、竪坑入り口の検出を並行して急ぎつつ、玄室内の崩壊土の除去を進めた。



藏園地下式横穴墓

その結果、副葬品は見られなかつたが、被葬者の臼歯1本をようやく検出することができた。また、墳丘及び周溝など可能性のある施設の検出のためトレンチを設定したが、それらしき造構は検出できなかつた。

2. 調査の結果

検出されたのは、小規模な平入り左片袖の地下式横穴墓であった。豊坑は隅丸を呈し、東壁隅には幅20cm、高さ15cmの大きさの足掛け用の掘り込みがある。豊坑の床面は100cm×110cmを計る。豊坑から玄室へは、高く約20cmの段が付けられる。羨門部の幅は70cm、段上から玄室奥壁まで200cm、玄室の南北の幅175cm、東西の幅150cmをそれぞれ計る。また、天井部の高さは約80cmである。

玄室～豊坑の方向は、わずかにずれるが、西～東を示している。

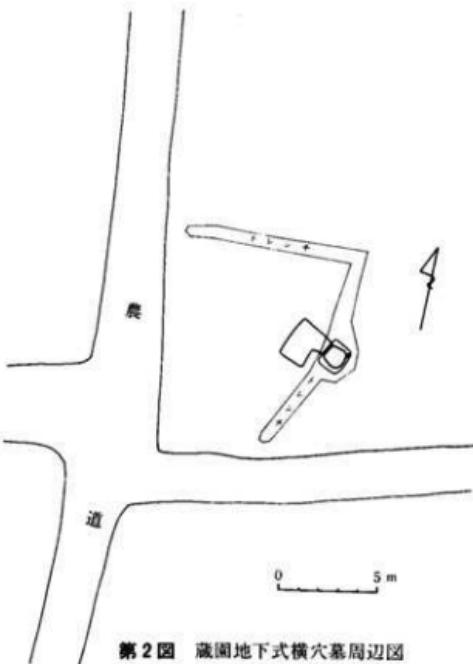
一方、壁面の調整はすべてU字形
鍬先で行われている。

副葬品は検出されず、ようやく玄
室の東隅で被葬者の臼歯が残存した
に留まる。

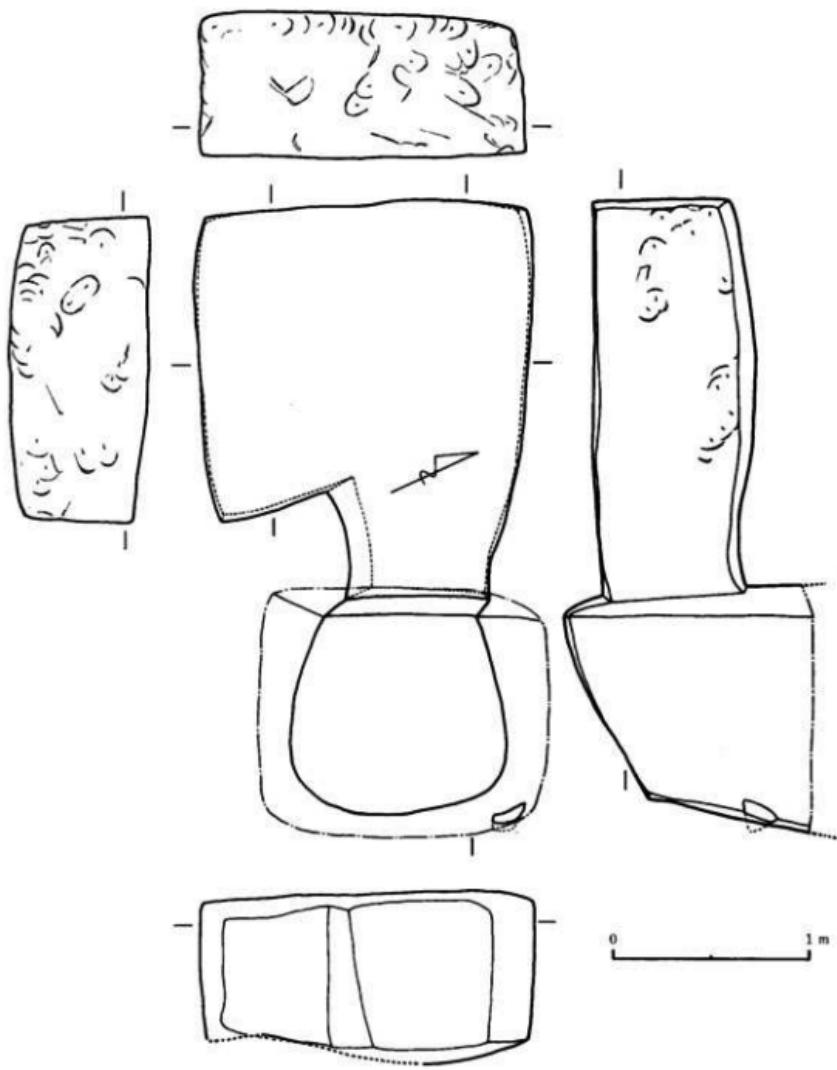
3. 藏園地下式横穴 墓の歴史的意義

(1) 時期論

藏園地下式横穴墓の時期を明確に
判断出来る遺物は存在しない。ただ、
周辺および隣接する上園遺跡から表
採された須恵器は、おおむね小田富
士雄編年による第Ⅳ期に相当するも
のである。それらが、間接的にであ
れ藏園地下式横穴墓の築造時期ない
しは影響下にあったであろう時期の



第2図 藏園地下式横穴墓周辺図



第3図 藏聞地下式横穴墓実測図

藏圓地下式横穴墓

ある時点を示すものである事は、間違いない。

一方、内部構造からは、幾つかの判断を導きだすことができる。平入り型の地下式横穴墓が、平野部において出現するのは六世紀のことである。ただし、ここに見る構造はこれまで見ることのなかったものである。



第4図 表採須恵器実測図

片袖のそれは、おおくは内陸部を中心に分布するもの

で、すぐに想起される類似例は野尻町・高原町など西諸県郡に独特な地下式横穴墓の構造である。とはいって、豊坑の壁に足掛けを掘り込む例は、西都市の元地原地下式横穴墓に求めることができる。

それらのことからすれば、六世紀代に平野部に広がり始めた平入り地下式横穴墓が、一つ瀬川右岸からようやく川越えをした姿が藏圓であり、それは六世紀後半のことと考えられる。

(2) 北限論

地下式横穴墓の分布図を従来、一つ瀬川以南に分布し、その北限は西都原古墳群としてきたが、『全国遺跡地図』の持田古墳群の一角に地下式横穴墓の存在が示されているし、石川恒太郎氏の『地下式古墳の研究』では新富町所在として五墓の地下式横穴墓が上げられている。新富町所在の地下式横穴墓については、古文書のなかで日置に四基の地下式横穴墓と思われる記載があることも指摘されている。

しかし、いずれも地下式横穴墓そのものについての明確な資料を指摘、あるいは提示することができないでいた。したがって、確実な北限例は西都原4号地下式横穴墓ということができた。それゆえ、今回の藏圓地下式横穴墓の確認は、一つ瀬川を越えた確実な北限の塗り替えて評価されようし、またこれまで不明であった新富町および高鍋町所在の地下式横



第5図 藏圓遺跡表採須恵器実測図

穴墓についても再検討が必要となったといえる。

では、この北限の地下式横穴墓は何を意味するのだろうか。一つは、時期的には六世紀後半代に下るものでありながら、対岸の西都原古墳群中に所在するほぼ同時期の西都原9号地下式横穴墓と構造上大きな差が見られることである。9号が両袖の礎床をもつタイプであるのに対し、藏圓はむしろ内陸部の地下式横穴墓に近い形式

畿内地下式横穴墓

をもつことである。二つには、新田原古墳群のなかにはではなく、それから東に遠く離れた地に位置することである。西都原のように何故混在し得なかったのだろうか。その意味から、西都原における地下式横穴墓の存在意義と微妙に違う背景が考えられないであろうか。

宮崎県児湯郡新富町文化財調査報告書 4

新田原遺跡
瀬戸口遺跡
蔵園地下式横穴墓

1986年3月31日 発行

発行 新富町教育委員会

新富町大字上富田 7491

印刷 (有) 黒田謙写堂

